
プリンセスオーケション！

檜山英

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
プリンセスオーラクション！

【Zコード】
Z3591P

【作者名】
檜山英

【あらすじ】

未曾有の大不況に陥った近未来の日本、性風俗規制が大幅に緩和された街に帰ってきた一人の青年が風変わりな風俗店を経営する、様々な女の子達が集まり、泣き笑い、時には反目しながらもふれあいと何気ない日々を大切にして、精一杯生きていきます。

第1話「街で編み物」（前書き）

本作品はリアルな風俗業界の描写はありません（作者がしりません）
、あくまでも創作です。

第1話「街に帰る」

0

都内某所

「納得のいかない話だつたよな」

様々な会話が喧騒と言つてもよい勢いで交わされている居酒屋チ
ーン店のカウンター席で、とある総合商社に務める松永は後輩の
肩を優しく叩く。

後輩は入社一年目の真面目な男だが、今日は酷く落ち込んでいる。
その原因は簡単だ。

仕事での失敗、あきらかに彼に落ち度のない事柄なのだが、普段
から頭の上がらない取引先がいちゃもんに近い文句をつけてきて、
失敗が彼の責任になつてしまつたからであった。

「やつていけやつさうにあつません」

頭を垂れて、くやしそうにしている後輩。

松永としても表向きだけでなく、心底同情していたので見てられ
ない。

「……仕事はつらう事もある、そつだな～」

松永はそこまで言つて、間を置き、財布の中身を思ひ浮べ、

『大丈夫だな』

後輩に悟られないように勘定すると、

「よし！ カワイイ女の子に元気をもらいに、新大空町に繰り出すか！」

と、ニンマリ笑い、切り出したのである。

「新大空町ですか？」

後輩が赤面するのは酒のせいだけではない。

「そう、知ってるだろ？ お上公認の風俗街、ちょっと相場が高いが、怖いに一ちゃんが出てくる事はないし、カワイイ女の子もいる！ さあ、半額奢つてやるから行こうぜ」

松永が立ち上ると、

「半額つてのがなんですけど……喜んで行きます、ありがとうございます」

後輩も笑い、彼についていくのであった。

「坊っちゃん……突然に、姿を見せた事は謝らせて頂きます」

アパートの一室。

片付けられてはいるが、くたびれた部屋に不似合いな、ピシッと
スーツに身を包んだ美人が正座して頭を下げる。

「坊っちゃん……つて、その呼び方は止めてくれませんか、高音さん
困った、といつた風に頭を搔くトレーナーにジーパン姿の青
年。
彼の名は御神本幸四郎、年齢は23歳。
職業はフリーター。

百七十?半ばの身長に中肉中背、顔立ちは優しげで、よく言われる言葉を借りてしまえば、見た日草食男子である。

「坊っちゃんは坊っちゃんでしかありませんが……私にとつては幼
い頃より面倒もたくさん見ましたし、それを変えるというのは難し
い注文です」

「丁寧だが、目の前の美人は眼鏡をクイッと中指で上げて答えた。
彼女は原高音、33歳。

後頭部でお団子にまとめ、両方のもみあげを綺麗に伸ばした髪型
は、幸四郎の幼い頃からの記憶からほとんど変わっていない。

変わったのは、丸く少しだけつり目がちだつた瞳が美しく細長になつたのと、視力が落ちたらしく、眼鏡をかけたくらいである。

「もう相変わらずキツいなあ……で、一年も家に帰つてないオレを急に高音さんが訪ねてきたのは、なんですか？」

幸四郎が苦笑してから訊くと、

「そうですね……坊っちゃんが会長と喧嘩をされて家を出て、もう、一年も経つのですか……」

高音は細い息をふう、と吐く。

「会長が、偉そうな肩書きだよねえ……そりや新大空町にいくつも店を経営してれば、儲かるよな」

幸四郎は肩を竦めた。

皮肉っぽくなつたが、別に父親を恨んではないし、新大空町という土地で父親が営んでいる風俗業に嫌悪感がある訳ではない、ただ単に、その年頃にある一人暮らしへの憧れと父親への程度の低い反抗心である事は今は気付いていた。

201×年。

未曾有の不況の中で、困窮しきつた政府はある政策を打ち出す、それが隠れた税収の見込める風俗営業の規制の大幅緩和だ。

しかし、それは全面的な物ではなく、あくまでもテストケースとして、政府の管理する地域に限り、その地域は今、日本に六ヶ所し

かない。

風俗営業に付き物の背後の暴力団への流れを政府の管理により断ち切り、違法就労等も厳しく警戒されている、それだけに経営者も許可制でかなり突っ込んだ経歴をも調べられ、暴力団との繋がりなどが見つかれば、即座にその地域での営業の資格を失うなど、罰則は厳しい。

新大空町は小さな商店街が中心で昔からの下町であったが、それと同時に、夜の繁華街の活気も昔からあり、商店街とは仕入れなどで、常に持ちつ持たれつの関係で、今は政府の風俗管理法による公認の営業街として指定されているのである。

幸四郎の父親は、その新大空町で風俗の店を幾つも経営しているトップクラスの実力者であった。

「会長の事……そんなにお嫌いではないでしょ?」 優しげな笑みの高音。

「……どうかな? 少なくとも、昔から高音さんみたいな美人を秘書にしてるのは羨ましかったし、悔しくもあつたよ」

幸四郎はすまして答えるが、

「こんな所に同棲する彼女がいるわけでもなく、1人で暮らしてるくせに……生意気ですよ」

と、切り返されてしまい、返答が出来ない。

「おひつべ幸四郎、高音はわずかに口元を弛ませ、

「当たりましたか……まあ、良いでしょう、私はそんな話に坊っちゃんを訪ねた訳ではないのです」

と、神妙な口調で再び佇まいを直し、いきなりその場で、スッと土下座をしたのである。

「高音ちゃん…？」

田の前の女性は少なくとも冗談や醉狂でそういう事はしない、幼い頃より高校生の高音、そして社会人になり父親の秘書の役割を有可能にこなしてきた彼女のプライドが高いのを幸四郎は知っているのだ。

「坊っちゃん、お願いします……どうか、どうか新大空町に戻られて下さい、そして……そして会長を、父上をお助け下さい！」

切なる訴え。

幸四郎は由々しき事態の到来を感じると、苦笑していた顔を引き締め、土下座していた高音の両肩をつかんで、顔を上げさせた。

「坊っちゃん……」

その強気さを感じさせつつも整つた瞳には、涙が溢れている。

「高音さん……何か大変な事があつたんだな!? 家を出ちやつた意氣地なしの俺だけど……高音さんが泣いちゃうよつた事態に逃げられる程にはなつちゃいなによ……さあ、話してみてよ」「ありがとうございます」

涙を拭つて礼を述べると、高音は唇を噛み締めながら、幸四郎を見つめ、

「実は一年前から会長の体調が思わしくなく……そして、ついに先日お倒れになつたのです」

と、告げてきたのだ。

「親父が!? あれで結構元気だつたのに?」

「一年間ほどんどう連絡は取らなかつたが、父親を忘れるほど親不孝ではない。」

母親は病弱で、幸四郎が小学生の時に病死していたが、父親は剛毅な性格で、身体も丈夫なイメージが幸四郎にはあるのである。

「やはり坊っちゃんが家を出られてからは少し寂しげな様子もありました……体調を崩されてからも、傘下の店の管理などはしつかりしていたのですが、実は数ヶ月前、一大風俗会社を名乗る風俗大王チヨーンという会社が、かなり強引な手口と豊富な資金をバックに、各店舗に圧力をかけてきていたのです、その対応もお体に障り、倒れられてしまったのです」

「風俗大王！？ な、何だ、そりや？」

「変わった名前です、まだ新興なのですが、人気の女の子や有能なスタッフ引き抜き等にかなりの額を使ってきて、会長が倒れられて入院してしまった事も大きく……」

そこまで話すと、高音は俯く。

「店舗はどうなったたんですか？」

幸四郎が訊くと、高音は答えにくそうに、

「相手の採算度外視の資金攻勢に一つ一つの店が苦しくなり、ちょうど新店舗準備の資金繰りをしていた悪い時期に重なって……」「重なつて？」

「未完成の新店舗を残してすべて手放す羽目になつてしましましたあ！」

いきなり、高音は堰を切った様に、泣きださんばかりの情けない声を上げると、その場で伏して、まるで漫画の登場人物よろしく、泣きだしてしまったのである。

「た、高音さん！ 落ち着いて、落ち着いて…」

高音を慰めないといけないのは当然だが、アルバイト生活でどうにか暮らしている安普請のアパートだ。おいおい、と泣き出した女性の声は、周りの住民による聞こえ方に違いない、どう誤解を受けるか、まったくわからない。

「これが落ち着いていられますかあ～、あんなあんな下世話な相手に、街の皆様と一人三脚でやってきた御神本グループがあ～」

「だ、だつて、さっきまでは、あんなに毅然としたいつもの中音さんだつたじやないかよ！？」

「我慢していたんですつ、でもでも、やはり我慢できませんつ！」

高音はやう叫ぶと、再びワンワンと泣く。

「高音さん、でも俺の所に来たのなら何か頼みたい事があるんだろ？だから親父の所、新大空町に戻つてこいなんて、土下座してまで頼んだんだよね？」

幸四郎がどうにか高音を落ち着かせようと尋ねると、彼女はハッとして、思い出した様に顔を上げる。「そうです、今のこの事態をどうにかする為にも、坊っちゃんには新大空町に戻つて来てほしいのです

す

「でもさ、俺が戻つても何も出来ないよ！？」

バツの悪そうに頭を搔く幸四郎。
だが高音は首を振つて、

「会長はそつは思われていません、私は病床の会長から、未完成の

新店舗のオーナー「あなたがなるよつて頼んでおいでくれ、と話されたのですから」

と、切り出しあきたのである。

「な、なんだつてえ！」

幸四郎は驚愕する。

しかし、口ではそう答えていたが、頭の中では断る口実でなく、どうやつたら、それを上手く出来るのかを思案しあじめていたのであつた。

今の出口の見えない家出と変わらない生活を送り続けるくらいなら、親を助ける為に生まれ育つた街に帰るつ。そう即決していた。

3

三日後。

幸四郎は高音とある建物の中に立っていた。
壁はコンクリートが丸出しで、窓にもガラスも付いてない、いわゆる建設途中の建物だ。

「レイアウトはまだ変更できるよね？」

「平気です、なるべく坊っちゃんの好きにして欲しい、ところのが会長のお言葉ですか？」

スーツ姿の高音は眼鏡を直す仕草をする。

「じゃあ、細かいところは任せるナビ……一階には舞台と二階のホールが欲しいんだけどな、あとは厨房もね」

「え!? まさかショーネ形式の店を考えていますか?」 キャトンとする高音。

「違うよ、今どきショーネ劇場もないでしょ? あと一階と二階は部屋、それも個室みたいな狭い部屋じゃなくて、少なくともビジネスホテルくらいの広さが良いんだけど」

幸四郎はそう言つて、にっこり笑つた。

「わかりました」

頷く高音。

経営について助言は求められたらしく、気がついた事は指摘すると彼女は言つたが、根本的には幸四郎の自由にさせてくれる。

「坊っちゃん……聞かせてもらつてもいいですか?」

「なに!?」

「ショーネ形式でなくして、舞台があるなんて……一体、どういう形態のお店にするつもりですか?」

高音の問い。

対して、幸四郎は悪戯っぽく笑い、

「女の子と部屋で過ごす権利の値段を、お客様が決める、実はオーケーション形式をとりたいんですよ」

と、答えた。

「オークション！？」

「そう、オークション」

驚く高音に頷く幸四郎。

「こ」の新大空町に限つては、近年キツくなるばかりの風俗条例や方が一斉に緩和されてるでしょ？」

「ええ……性風俗に限ればこの新大空町は治外法権といつてもいい、確かにこの街には、今までの風俗街には無かつたタイプの店もたくさんありますが……」

高音が眼鏡をツイと上げると、

「だつたら……こんなのも有りじゃないかな？ とかちょっと前から考えていたんです、今回の事を割と早く引き受けたのは、もちろん親父の事もあるけど、前から考えていた、それが通用するのか試してみたかったんですよ、舞台に登つた女の子、その子とお部屋で過ごす権利をお客様同士がオークションしてもらう訳です、普通の営業形態じや、俺みたいな素人がこの街で店が出来る訳ないのは、火を見るより明らかですからね」

高音にどう？ と聞きたげな顔を見せる幸四郎。

「なるほど」

高音はそれだけ答えると口元に手を当て、その突拍子もない考えに思案を巡らせたが、その答えはすぐには出なかつたのだった。

4

夢。

叶わぬ、と思いだけで終わる者もいる。

努力して叶わず、諦める者もいる。

努力が実り、それを実現した者もいる。

そして……それを実現したが、夢の世界の現実を味わい、その中途で退場を余儀なくされる者もまたいるのであつた。

「ちくしょーつー」「

えんどう
遠藤知世

は、駅前のファーストフード店の一階で一人、周りをは

ばかる事無く怒鳴り散らした。

「許さねえ……あいつら」

ワナワナと震え、ハンバーガーとコーラの置かれたテーブルを叩く。

ポテトはいかがですか、と聞かれた0円スマイルは黙つて睨み返したので、ポテトがテーブルから宙を舞う事は無かつた。

染めた栗色のセミロング、両方の側頭部に赤いリボンを結び、そこから真横にちょっと、アクセントに垂らした髪型。

年齢よりも幼く見える輪郭に、丸い瞳。

高くはないが、均整の取れた鼻筋から薄い唇。

身長はやつと百五十？を越えたくらいで、体付きも細身の幼児体形なのが、外身で分かる。

なりは小さいが、誰が観ても十分な美少女だ、しかし今日の彼女は、それを搔き消すくらいに荒れていたのであった。

「まさか解雇されちまつとは……」

ひとしきり暴れた後で知世はべたべた、と顔をテーブルにつけて呟く。

「この世界……解雇なんてされたら滅多な人気者でもなきや、他の事務所は相手してくれないだろうな、こんな事態は想定外だ」

すっかり常温に馴染んでしまったコーラ。

知世はそれをそのままの体勢で力無げに見つめ、

「……でも、これは身から出たなんとかかなあ」

と、息をついた。

彼女はある弱小芸能プロダクションに所属している、いや数時間前まで所属していたアイドルだった。

数年前にスカウトされて、同期の同じ年齢の少女とデュオを組んでデビュー、その少女も知世とはタイプの違う正真正銘の美少女で事務所も期待していたが、世の中は甘くなく、二人の美少女は泣かず翔ばずの時期を過ごした。

そんなある時、知世のパートナーの少女の歌の才能が偶然、注目される。

彼女は元々、ギターも弾けシンガーソングライターとしての才能もあり、ソロで発表した曲がオリコンにトップ10に入ると、知世はデュオのじやない方として扱われてしまう。

じやない方として扱われているうちは良いが、パートナーとしての役割が果たせない知世をそのうち邪魔者にも扱う関係者があらわれ、知世は仕事場に呼ばれない日々が続く。

パートナーであつた筈の少女とのいつの間にか構築された厚い壁。それを越えられない自分の能力。

期待もしない周囲の者達の目線。

結果、知世は乱れた。

素行のよくない三流アイドルの男子と遊びまわり、払いは事務所にまわして、無駄遣いを繰り返す。

そして……ついに素行不良を理由に、デュオは解散、そして知世は解雇されてしまったのである。

「自業自得……か」

ポツリと答えを出す。

誰かに腹を立て荒れたが、そつ思えは許せないのは周りでなく、自分だ。

「明日からどうしようかなぁ……でも……」

しばしの間を置く。

「生きていかなきゃいけないからな……」

と、席を立ち上ると都会の雑踏に一人、歩き出して行くのだった。

第2話に続く

幸四郎が新大空町に帰ってきて、一週間が経過していた、新規店舗は高音の知り合いの地元の業者が請け負い、幸四郎の提案通りのレイアウトに完成する様に急ピッチの作業が続いている。

幸四郎もそれを待つていてるだけでは気が済まず、昼間は業者の工事の終えた部分で、自分の出来る限りの事をしようとした。

「資金が潤沢じゃないんだからね、出来る所は自分でやらないとな」と、完成した部屋の内装作業として、壁紙を貼りつと店にやってきていた。

しかし、幸四郎は全くの素人。

やり方は調べたものの、慣れない作業に悪戦苦闘している。

「坊っちゃん、オレ達はこれから昼メシに行つてきますんで」

他の部分に手をかけていた50代くらいの業者の職人が、笑顔で丁寧に断りを入れてくる。

「はい、どうぞ」

幸四郎は振り返る。

「壁紙張りですかい？ 御神本の坊っちゃんがそんな事しなくてもいいですよ、後でオレ達がついでにやりますよ、綺麗に部屋の四方に貼るには、簡単そうで技がいるんですよ」

愛想よく笑う職人。

「いや、その……なるべく自分でやらないとなかなか予算が潤沢でないもんで」

幸四郎は素直に白状したが、

「何をみずくせい、その辺りは高音さんと話して、いくらでも相談に乗ります、工事を請け負つて、壁紙貼りを坊っちゃんにやらせたとあつては、先代に受けた恩を仇で返す事になつちまう、坊っちゃんの一国一城なんですから、ドカツと構えていて下さい」

職人は笑顔ながらも引かない。

「……でも」

やはり自分でも何かをしないと、といつ思にが口から出かけるが

……

「相良さん、では壁紙の方も宜しくお願ひします、追加料金の方は、また相談させてください」

幸四郎の面葉を遮るよつに背後から声が聞こえる。 壁面であつた。

相良さがらと呼ばれて職人は、

「ひれせ高音たかおとねさん、任せてくれだせ、坊ぼうちやんもやつこつ事ことでー。」

と、高音と幸四郎に笑顔を見せて現場を出でこべ。

「坊ぼうちやんもお面おもてでしょひへ。 お弁当を買つてきましたよ」

高音は何かの弁当の入つたビニールを持ち上げ、幸四郎に笑いかけてきた。

* * *

高音の買つてきたのは、近くの弁当屋のしょりが焼き弁当。工事途中の廊下部分にシートを敷いて、そこに座つての面食だ。

「はい、坊ぼうちやん、お茶おちゃですよ」

「ありがとうございます、でもこいんですか?」

「何がですか?」

ペットボトルからお茶を紙コップに注がれながら、幸四郎が訊くと、首をかしげる高音。

「いや……壁紙貼りくらこは自分達でやらないといけないかな……」

と

「お客様をお迎えする場所なんですから窗口にお任せしましょひ、

それに彼等は坊っちゃんを少しでも助けたいんですよ

「俺を?」

「そうです、彼等は会長には大変世話をなつてゐるんですよ、それで坊っちゃんに肩入れしてゐるんです、恩を返したいんですよ」「なるほど……」

複雑な表情で、しうが焼きを口に入れる幸四郎、高音は少し笑い、

「親の恩に報いよつとする人の親切を受けるのはお嫌ですか?」

と、訊く。

「そりかもしれませんね」

ため息をついて答えた幸四郎に高音は言った。

「生意氣です」「…………ですよね」

幸四郎は素直にそれを認めざるを得なかつた。

職人達が毎から戻ると、幸四郎は高音と一階部分のレイアウトなどを確認する、まだまだ内装なども全くの状態だが、どこに何を置くかの完成したイメージを打合せるのは重要だ。

「舞台横の壁が気になりますよね」

「なるほど……何か大きな絵でも飾りますか?」

「高音とそんな事を話していると……」

「幸ちゃん、お帰りなさい、やっぱり帰つてたんだね!」

不意に元気な声が響いて、背中に感じる衝撃と柔らかな感触。

「……く、くるみー?」

驚きながら幸四郎が振り返ると、ニッコリ笑つ少女が抱きついてきていたのであった。

「えへへへ……お久しぶりだね、幸ちゃん!」

少女は顔を上げてくる。

知らない顔ではない、彼女は幼い頃から一緒に界隈を走り回つた、幼なじみであった。

入来くるみ。
いりき

年齢は19歳。

切りそろえた前髪、短めのツインテール。
童顔で丸めの瞳、鼻筋から頬ともに特に高いとか薄いとかはない
が、可愛いらしく整っている。

身長は160?に届かないくらいだ。

「幸ちゃんが帰ってきたのを教えてもらひって、飛んできたんだよお

」
「そりが……そりが……お前に連絡しておかなかつたのは良くなかつたな、スマンスマン」

頬を餌を頬張るハムスターの様に膨らませたくるみに謝りながら、
ポンポンと頭を叩く。

「おそらく坊っちゃんの事ですから、新規店舗で頭が一杯で、くるみさんには伝えていないと思いまして私が昨日、電話しました」

「ありがとね、高音さん」

頭を下げる高音に、くるみは礼を言つて笑う。

幼なじみのくるみと昔から家にいた高音は、もちろん知り合いで、
どれくらいの頻度かはわからないが、連絡を取り合っているのだろう。

「坊っちゃんもくるみさんには、どうやらこゝ無沙汰でしたか？」
「そうだな……家を出てから会ってないから、一年だよ、あんまり
変わつてないけどな」

高音に訊かれたのでくるみを見ながら答える幸四郎だが、少し目
線が止まつてしまつ。

「あんまり……かわつてない……ナゾ」

反芻した言葉の後半が疑問型になりかけてしまつ。

「ん……ー？」

首をかしげるくるみ。

「まあ、少しさは大人っぽい印象にはなつたかもしぬないな、もう一
十歳になるんだから当然だ」

幸四郎は早口になりながら、くるみの髪をくしゃくしゃと搔く。

「てへへへ……」

小学生の頃と変わらない笑顔。

だが、それを向けられた幸四郎は……

『くるみの奴つて、こんなにプロポーション良かつたか？ 特に胸
なんか……昔から小ちくはなかつたし、あるとは思つていたけど』

などと、思いながら赤面を必死に我慢する自分に気付いてしまつ。

「ふふふつ……」

高音が笑つた。

「どうしたの？　いきなり笑つたりしてや」

ぐるみは目をパチクリさせるが、幸四郎は高音には何か見透かされた様な気がして、顔をしかめたのだった。

3

それから工事は着々と進んでいき、内装なども形になつてきていった。

一階はホールに舞台、厨房に支配人室と事務所があり、二階、三階にはそれぞれの女の子の部屋だ。

最上階の四階は今は区画割りもされていない空白階で屋上に続いている。

「形としては一階でお客様に女の子と部屋で過ごす権利を競り落として頂き……一階の女の子の部屋に行つてもうつ」

「そういう事

一階の事務室。

高音の確認に頷く幸四郎は、

「部屋で、どう過ごすかなんて事は女の子とお客様の個人的な事、

女の子への時給はオークション参加の報酬、そして時給の他に、女の子にはオークションの値段の四割を支給する」

と、続ける。

「時給は風俗店からみればこし安いですが、オークションの値段が上がれば、女の子の取り分が増える、いわゆる歩合制ですか」「うん、女の子の評判が良くなれば、店の評判も良くなると思つ」「……わかりました、それで決定しましょう」

少しの沈黙の後で高音は頷く、彼女的には意見があるのだろうが、父親の幸四郎の好きにやらせることにつけを守つてているのだろう。

「問題は女の子の質です、かなり見かけでハイレベルな女の子を揃える必要がありますし、お部屋でのやりとりは素人の娘ではどうにもならないでしょ」

そう問題を提起する高音は、

「ルックスは、まあ可愛い娘が募集に来てくれるのを祈るしかありません、けどお部屋でのやりとりは、逆に素人さんの方が人気が出る確率も高いかも……そういう所もあるでしょ？」

そう幸四郎が答えると、

「ぐるみさんみたいな女の子ですか？ 会わない間に凄く色っぽく成長したでしょ？ 坊っちゃん、目線が泳いでましたよ」

と、突つ込まれてしまい、返す言葉がなかつた。

それから一週間が経過し、御神本幸四郎がオーナーを務める、御神本グループ最後の皆ともいえる店舗が完成する。

その名は……「プリンセスオーラクション」と名付けられていた。

第3話に続く

第3話「スカウトー！」

1

「『』からが問題なんですけどね……」

高音は外観は完成して、後は内装の一部と必要な物を運び入れるだけとなつた店舗を見上げる。

「そうですね、『』までは誰でも出来ますからね、要は『』から……先ずは人をどうにかしないと、働いてくれる女の子ですね」

「その通りです」

高音は眼鏡を中指で直しながら、

「募集広告は任せ下さい、昔からの知り合いがいますから……あとは『』の街で働きたい女の子向けの紹介所も在るので、そちらにも当たりますよ」

と、答える。

「紹介所！？ そんなのあるんですか？」

驚く幸四郎。

「ありますよ、言わば風俗のハローワークとでも言えれば良いのでしょうか、大不況ですからね、様々な場所から、右も左も判別のつかない女の子が来ます、そういう娘が、かなりの確率で訪れますよ」

「へえ、知りませんでしたよ、風俗のハローワークがねえ」

高音の説明に幸四郎は妙に感心し、

「なるほど……」

腕を組んで見せてから、少し考えて顔を上げて高音を見つめ、「高音さんは」の界隈では顔が広そうですね？ やつぱりもしかしたら、そのハローワークにも知り合ひが居たりします？」

と、訊いたのであった。

2

「へえ、外から見ても普通のハローワークの事務所みたい、中も広くは無いけど、ちゃんと検索用のパソコンまであるし……」

「あくまでもみたいですが、ここは国の補助を受けてますが、新大空町の風俗営業店組合がやつてるんです、あまりキヨロキヨロしないでくださいね」

声を上げる幸四郎を高音は注意した。

新大空町駅から徒歩数分の所にその建物はあった、新大空町風俗営業店協会雇用相談所という長い正式名のその場所は、鉄筋二階建

のまさに新大空町風俗店のハローワークだ。

何人かの紹介所職員が、一人ずつ女性達と面談しながら、仕事を探している姿は見た目は何も普通のハローワークと違はない。

ただ単に言えば、探している側が女性ばかりなのが特徴である。

「この街はホスト系の店は殆ど無いですからね、裏方の男性の募集は広告で済んでしまうので、ここには女の子ばかり、だから坊っちゃんは目立つてます」

「別に悪い事している訳じゃ無いですからね、目立つ分にはいいですよ」

幸四郎はあまり気にしていない様に笑いながらも、真剣な眼差しで事務所内を見渡す。

「坊っちゃん!? ここでどうなさるんですか? 別に来るだけならば、知り合いの職員の方にわざわざ知らせる必要はなかったと思いますが……」

高音が訊くと、事務所内の女の子を一人ずつ見るような視線は外さずに、

「いえ、募集はかけていても待つてるだけじゃ、店に必要な女の子なんて揃わないと思いましてね、ここで一日見てて、気に入った娘をスカウトしちゃおうかと……わざわざ職員の人に断りを入れたのは、目立つ男が一日中、事務所を眺めていたら怪しそうなからですよ」

と、答えた。

「！」でスカウトですか！？　見た目だけで？」

「そうです、でもこの街で働く意志があって、第一印象を観てから、様子や仕草を観察して、さらにその中から選んで自由に話を出来る環境なんて中々無いですからね……始めは見た目で十分です」

そう腕を組む幸四郎。

真剣な横顔。

高音はそれをみて思わず息を呑む。

『坊っちゃん……いや、この御神本幸四郎という青年はもしかしたら……もしかするかもしれない』

幸四郎は別段、凄い事を思い付き、行動している訳ではない。だが、身体は久しぶりの感覚に捉われる。

『この緊張感、まるで健在な時の会長に従っている時のよつな……』

高音は僅かに身体を震わせた。

「よし、あの娘だ」

30分ほど事務所全体を隅から隅まで観ていた幸四郎は咳き、

人の女の子に歩きだす。

検索用のパソコンの前に座つて、黒髪の首が隠れる位のショートカットの女の子である。

「ちょっと」「めんね？」

「は……は、はいっ？」

幸四郎に話しかけられると、その女の子は少し驚いた様に振り返つた。

白いトレーナーにジーパン姿、足元には大きなスポーツバック。柔らかな曲線の綺麗な輪郭、パツチリした可愛らしい瞳が印象的な娘だ。

「さっきから検索用のパソコンに苦戦しているみたいだけど……」「は、はい……パソコンとかって、苦手なんです、使い方がわからなくつて」

笑いかける幸四郎に苦笑を返す娘。

「そつなんだ？ この街で仕事を探すの初めてかな？ 僕はこの街で店を新しく開く者なんだけど、良ければ、そこで少し話を聞かせてもらえない？ この街で働く意志があるなら、ちょっと僕、君の第一印象が気に入っちゃって」

そう言つて幸四郎は、事務所の壁ぎわに並んだ椅子を指差した。

* * *

「崎原みなみ、ちゃんかあ、なんだか可愛い名前だね？」

「あ……あらがとうござります」

椅子に座っている先程、声をかけた女の子、崎原みなみは、幸四郎にそう言わながら差し出されたカップのコーヒーを緊張気味に受け取る。

「ルックスは垢抜けない感じが可愛いですね、都会っ子な感じがしないのがかえっていいです」

高音が微笑を見せると、

「い、田舎から出て来ますんで……」

みなみはそう答えてから「コーヒーに口をつけた。

「さっき言った様に、俺は新しく開く店の女の子をスカウトして、ここに直接来てたんだよ」

「それで……私に!? でも周りには、私よりもずっと綺麗な女子もたくさんいるけど」

「『悪いを隠さないみなみに、幸四郎は首を振る。

「いやいや、この中でもみなみちゃんはトップクラスの可愛いんだけど思つよ、だから俺は声をかけたんだからね」

「そ、そんな事を言つて……田舎から出て来て、パソコンも使えない、ケータイも持つてない私を騙そうとしているんじや……」

みなみはスポーツバッグを抱える様にして、幸四郎と高音を交互に見る。

「まあ、警戒するのも当然ですが……」Jの街はお上の管理がしっかりとしているので、女の子を騙す様な事は出来ませんよ、もし疑われるなら、坊っちゃんの免許証でも見せてもらつてからでも、その職員さんに名前を訊いてみてみたらどうですか？」

高畠が笑いながら肩を竦めると、

「わかった……じゃあ、免許証見せて下やー」

みなみは幸四郎にジッと視線を向けてきたので、

「うん、いいよ」

と、財布から免許証を抜き取り、みなみに見せる。

「み、みかみも……みかみもとみゆき、じゅ」

「みかもと……みかもとこうしろうだよ、もし何だつたら、職員さんに頼んでパソコンで検索もしてもらえば、まだ開いてないけどちゃんと、認可済みの店舗がこの街にあるのもわかると思つよ」

「わ、わかった」

身分を疑われたが、気持ちはよく分かる、幸四郎が笑顔で「うん」と、みなみは「うん」と頷き、近くの職員の座る対面式のカウンター席の走つていく。

「田舎の娘ですね、でもルックスもプロポーションも良いですよ、磨けば、垢抜けた人気が出そうです」

席に座り職員と話す、後ろ姿で高く高音に、

「いやあ、あの娘は垢抜けない可愛らしさが良いかもしれませんよ、そういう所が気に入ったので……」

と、幸四郎は頭を搔く。

「坊っちゃんはそういう娘が好みですか？」

ジロと視線を送る高音。

だが、幸四郎は首を振りながら答える。

「個人的にも好きだけど、お店の事ですからね、綺麗でも似たようなタイプの美人ばかりいてもしょうがないから、まずは第一印象でいろんなタイプに声をかけてみますよ……でも、その後はある事だけは、気にする様にしてね」

「ある事？ それは何ですか！？」

「簡単な事です、お客様は一人だけで、その娘と部屋で過ごす権利をお金を出して競り落とす訳じゃないですか？だから一緒に過ごして楽しそうな娘、優しそうな娘、思いやりがありそうな娘を誘いたいです」

その幸四郎の返事に高音は、

「滅茶苦茶に難しい事を簡単に言つ所も余儀ござりませんよ……」

と、ため息をつく。

視線の先には、職員に確認を終えた、みなみが笑顔で走り寄つて
きていた。

第4話に続く

「案外広い、私はもつと風俗の店つて狭くて暗いイメージがあつたから……」

崎原みなみが、ホールと舞台のある、一階を見ながら口を開けると、

「わ、私もですぅ、舞台に上がって、お客様に見てもうりつのかな？」

みなみの隣でもう一人の女の子が緊張した表情で、舞台を見た。

斑鳩恋音。

ほわつとした感じの肩にかかるくらいの、わずかに茶色い髪。レベルの高い可愛らしさの童顔。

背も162？のみなみよりも10？は低く、プロポーションが良い、みなみに対して幼児体型。彼女もみなみをスカウトした数時間後、事務所の業務終了時間直前に幸四郎が声をかけた娘だった。恋音の童顔は可愛らしさとしては、まったく問題ないのだが、就業年齢に達しているか、幸四郎としては不安を覚えた程だ。

「一人とも……まずは面接しましょ」

高音が事務室に向かつて歩きだしたので、

「そうだな、まずは色々と話してからだな……じゃあ、行こうか？」

みなみと恋音を促し、幸四郎も高音に続いた。

事務室は広くはないが、応接用のテーブルとソファーがあり、恋音とみなみが並び、テーブルを挟んで高音と幸四郎が対面する。

「まずは、一人とも身分を証明できる物を提示して頂きます、あと履歴書も一緒にお願ひします」

「はい」

高音の求めにみなみは大きなスボーツバッグから、恋音は小さなピンクのバックから、履歴書とみなみは車の、恋音は原付バイクの免許証を出した。

「坊っちゃんもよく確認をお願いします」

高音に言われ、幸四郎も履歴書と免許証をみなみ、恋音ともじよくよく確認する。

就業年齢に達していない女の子を雇つてなどいたら、小細工は通用しない、一度と新大空町で店を開くのは不可能となつてしまひ。

「同じ歳にま……」

履歴書を見てから一人を比べ、次へ高音。

「はははは……」

みなみと恋音はお互に見合に、苦笑し合つ、みなみは年相応だが、恋音が幼々さるので。

「まあ、そういう需要はかなり見込めます……問題は一人とも年齢からして、風俗で働いた経験は、なさそうですね？」
「すいません、ないです」

高音の言葉に恋音はぱくぱくと頭を下げ、みなみの方は、

「ん~、まあ……なによね？ 田舎だったし

と、頬を搔ぐ。

「男性の方の経験はまだのべてありますか？」

「高音さんー？」

続けての高音の直球ストレートな質問に、幸四郎は声を上げる。

「参考までにです、我々の店には決まったサービスはありますからね、あくまでも参考です、答えてくれなくていいのです

高音が、そう前置きしてから一人を見ると、

「だ、大丈夫です……慣れてるとか、どうだかは解りないです」

恋音は頬を赤らめ、

「まったく無ければ、いひこつ仕事つてなかなか選べないと想ひ」

みなみは、少し不機嫌そうに上田遣いで答えた。

「なるほど……わかりました、プリンセスオーネクションでは、お客様はあなた方と一緒に一時間過ごす権利を競り落とします、そのお客様を満足させてあげられたら良いんですよ」

「あのおー、じゃあ……部屋では何を～」

高音の言葉に迷いを見せる恋音。

「何でもどうい？ 逆に何もしなくてもいいですよ、一緒に一時間過ごせば、基本的には問題無しです、もしお客様の期待に添えなくても一度、競り落としたお金は戻せません……」

高音は微笑む。

「でも、お客様を満足させらない事を続けたら、恋音ひやんの人気が無くなつて、オークションされる金額が安くなつちやひ、そして結局は恋音ひやんが貰える金額が少なくなるよね」

みなみは呟いた。

「……お密様を満足させて帰らせてあげる」

揃えた膝に置いた手を、ギュッと握る恋音。

「恋音ちゃん、やう考える事ないよ……どんな事を君に求めているかは、お密様」とに違う、君の優しさでそれを感じ取つて上げたら良いんだよ、マーカルなんてないから、難しい事は確かになんだけど、逆に幾らで何だ、とかいうサービスじゃ君達の良さが消えちゃう気がする」

幸四郎が、不安そうな恋音に微笑むと、

「あ、ありがと」「やれこますー、精一杯がんばりせてもうこまます」

恋音は顔を上げて、健気な笑顔を返し、

「色々と頑張らなくちゃいけないねー」

みなみも、グッと両手を握り締めた。

『一人とも可愛いなあ……何の苦労があつて、この街で働く事にしたのかはわからないし、訊かないのがこの世界の礼儀つて物だけど、俺自身も頑張つて彼女達を盛り立てる様にしていきたいよな』

思ひ幸四郎。

「じゃあ、一人とも……もしよろしければですが、殿方を悦ばせる初步的な幾らかの技を教えてあげられますか……どうします？」

いきなり高音が一人にそう切り出す。

「な……技……？」

声を上げる幸四郎だが、高音はそれをまったく気にしない様子で、恋音とみなみに笑みを見せる。

「いえ、強制はしませんし識らなくとも良いかもせんよ、でも識つておいて損は無いかもしね、男性諸君が大好きな技の事ですよ」

「」、言葉をオブラーートに包むのはな、何かと大変なんですね」

高音に恋音はアハハハと苦笑いした後、

「ぜ、是非お願ひします！ お客様を悦ばせる技なら識つておきた
いですっ」

と、赤面しながらも頭を下げ、

「うふ……識つておかないと困るもんね」

みなみも意を決した様に頷いたのだった。

『まあ、まつたくの素人つて、訳にもいかないか』

声を上げた幸四郎自身も一人を見ながら、そんな事を思つてゐる
と、

「坊っちゃん」

幸四郎を呼ぶ高音。

「どうしました?」

「せつそく一人一度に一階の部屋で始めますから、一緒に来て下さ
い」

高音はそう告げると、スタスターと一階への階段を上がり始めたの
で、

「あの……俺がついていつたら経験があまりない一人は緊張しちゃ
うから」

と、幸四郎としては氣を使つた台詞を返す。
だが、高音は眉をしかめて、こう言つたのである。

「はあ? 坊っちゃんがいなければ始まりませんよ、男性を悦ばせ
るテクニックの実践練習を女三人でどうしろと! ? 坊っちゃんが
練習台に決まつてゐるじゃないですか? 頑張つてもういますからね」

第5話に続く

第5話「呆れた笑顔」

1

「坊っちゃん……起きていますか？ ビツです？ 満足いただけましたか？」

「あ……は、いつ……まあ、す……『』」

幸四郎は、朦朧としかけた意識の中で、聞こえてくる高音の問いかけに情けない返事をした。

「そのようでしたね」

そう言って腕を組み、幸四郎を見下ろす高音の視線。

「あ、あの一人は？」

「あれだけやれば二人とも、坊っちゃん同様にお疲れです、横を見る余裕もありませんか？」

「えつ……？」

横をみると、そこにはみなみと恋音が、仲良くシーツにくわまり、スヤスヤと寝息をたてていた。

「坊っちゃんがスッカリ果てた後で、お一人でお風呂に入つてましたよ」

「そ、そうですか……」

みなみも恋音も下着姿である。

「二人とも可愛かったでしょ？ みなさんはあんまり場馴れしてない感じがかえつて良かつたですし、案外、恋音ちゃんが積極的で巧かったのもいいんじゃないですか？」

「……一人とも凄く可愛かつたし、高音さんの言つ通りです、正直

言つて役得とか思いながら、本当に心地よく一人の実験台になつていましたか……少しだけ納得のいかない点が

仰向けになりながら、見下ろしてくる高音に苦笑する幸四郎。

「納得のいかない!? それは気になります、後々の参考までに聞かせてもらえますか?」

意外そうに首を傾げる高音に、

「いや、高音さんはずっと部屋の隅で腕を組みながら、一人に色々と指導をして観てただけでしょ? それが気になつて……いつその事、手本を見せながら、してくれた方が……」

幸四郎が答えに、高音はあつという間に耳まで真っ赤にして、
「ち、調子に乗るんじゃありません! もう今日は家にかえりなさいつ!」

と、踵を返して部屋を出ていったのだった。

「あらり……高音さんも何と言つたか、よいしょ」

幸四郎は苦笑して見送り、倦怠感を振り切り上半身を起こす。

「んんっ……」
「ん~っ」

下着姿でシーツにくるまる、みなみと恋音。

幸四郎と高音のやり取りで、少しだけ目を覚ました様だが、お互
いに猫の様な可愛らしい声を上げると、また眠り続けている。

『本当に可愛いよね』

幸四郎は肩を竦めて微笑み、自分にかかっていたシーツを一人に
かけると、周りに脱ぎ散らかされた衣服の中から自分の物を探し出
してそれを着た。

「一人とも店にまだ居るんですか？」

「ええ……まあ、高音さんが出ていった後、起きた一人にタクシーでも呼ぼうか、って話をしたらどうやら一人とも、これから泊まるところを探さないといけないって話をしてきたから、それなら、いつも店で寝ていいちゃいな、って話したんです……一人とも、あんまりお金を持つてないらしくて……」

翌日の朝。

新大空町の商店街を歩く高音と幸四郎。

「まったく……もしかしたら例の練習の続き、なんてしていないでしょうね？」

高音は細田になるが、

「しょうにとも、出来ない状態だったのは高音さんも知ってるでしょ？」

と、幸四郎は眉をしかめて答える。

「フフッ、そうでした」

高音はクスッと、意味深な笑いを見せると、商店街のパン屋に足を向けた。

「お昼ですか？」

幸四郎が訊くと、

「それもありますが、まあ、ついてきてください」

高音は先に店内に入していく。

店内は広くはないが、小綺麗だつた。

手書きの値札の付いたトレイに、種類ごとのパンが乗せられてい

る。

かなりの種類だ。

「高音ちゃん、いらっしゃい！」

小太りで愛嬌のある感じの中年女性が笑顔を向けてくる。

「どうも、ピーグルトパンはまだあります？」

「あと二つ！」

高音が訊くと、中年女性は指でVサイン。

「では二つとも頂きます」

満足気な笑顔で、高音は入口近くのトレイを手に取る。

そして、

「おば様、こちらは幸四郎坊っちゃんです、新しく近くで、また店をするので宜しくお願ひします」

と、中年女性に幸四郎を紹介する。

「おやまあ……懐かしいね、坊っちゃんも昔は高音ちゃんに連れられて、よくうちに来ていたんだよ」

「覚えています」

中年女性に、幸四郎は愛想笑いを浮かべる。
覚えていると言つても、言われてみて、そう言えばそんな記憶も頭の片隅にあるぞ、という程度。

幸四郎は長年、この街に住んでいたが、風俗街と呼ばれる街と父親が街の有力者で、歩けば注目されてしまうという状態を小学校の高学年の辺りで嫌い始め、遊びに行くのも、買い物に行くのも、大きな隣街に出かけていたので商店街などは殆ど記憶がなかった。
「高音さん、良かつたねえ、会長さんが具合が悪くなつた、と聞いた時には本当に心配になつたけど、これで安泰だよ！」

中年女性は嬉しそうに言いながら、重い腰を上げ、トレイを取つて、

「坊っちゃんが久方ぶりに帰ってきた祝いだ！ うちのパンをたくさん食べてもらひよ！」
と、豪快に笑った。

「たくさん貰えたのは良いですけど、あのおばさんには氣を使わせちやつた気がして……」

紙袋一杯の様々なパンを抱えて歩く幸四郎。

「美味しいですよ、それにあの一人にあげれば喜びます、お金がないなら、尚更でしょう？」

「そりやそうですけど、何だか気が引けます、俺はハツキリ言えれば、高音さんに連れられて行つた事もほとんど覚えてません、それなのにこんなに貰つて」

「良いでしょ！？ 別に催促した訳じゃありませんしね」

好物らしいヨーグルトパンが入つた紙袋を持ち、高音はフフッと笑う。

「俺が何をしたからじゃありませんよな！？ 親父が街の人には何か色々としてあげていたからでしょ」

「嫌ですか？」

「前にも言いましたが……俺としては……」

「前にも言いましたが、生意氣です」

高音の鋭い口調が幸四郎を遮る。

「高音さん……」

「坊っちゃん、それを言つなら店を立派に盛りたててからです、こ

の街で会長の息子以上にならなくては、それに……」

「それに！？」

言葉に間が空く、高音は軽く息をつき、

「会長がここまでこの街で頑張つてこられたのは必ずしも、街の人や自らの為だけではないのかもしれないのですからね」と、見つめてくる。

「……微妙ですが、反論できません」

そんな答えしか出来なかつた幸四郎に、高音は口元を少しだけ緩め、呆れた様にも取れる笑顔を見せたのであつた。

第6話に続く

「嘘でしょ、うー？」

「ですよねー？」

高音と幸四郎はそう言って、顔を見合せてから、応接用のソファーで苦笑する女性を見つめた。

彼女の名前は、織田百合乃。

腰の辺りまで伸び、そこでリボンで留められた黒髪と首筋の横できつちりと切り揃えられた両方のもみあげがまるで、温室育ちのお嬢様か神社の巫女か、といった感じだ。

みなみや恋音とは異なり、幼くは見えないが可愛らしさを残しながらも、大人の女の綺麗さのある顔立ち。

身長は百六十？の半ばくらいで、女性らしいふくよかな体付き、異性を引き付けてきたであろう、ボリュームのある胸元。

言つてしまえば、キレイで可愛いお嬢様。

「すつごい美人ですね」

「そうだね、なんで女優にならないの？ グラビアアイドルでも良いじゃないのよー」

そんな不満を言いながら、許可もなく事務所を覗き込んでくる恋音とみなみがいるのは承知だが、履歴書と免許証を持った幸四郎と高音は、それを注意する方に気が回らない程に驚いている。

「何をあんなに一人は驚いてるんですかね？」
「胸がおつかれかねとか、じゃないよね？」

あんまり覗いているのも高音に怒られそつなので、みなみと恋音はホールに出て話す。

店舗内は大体のレイアウトも終えていて、やる気になればすぐにも営業できそうだ。

ホールには幾つかテーブルが置かれていて、まるで立食パーティーの会場を思わせる。

舞台がホールの中央まで細く伸びているのは、ファッションショーの様でよくあるキャットウォークと呼ばれる部分だ。

「でも何があるにしても、あれだけの美人さんなら採用ですよね？ 私なんかでもよかつたんだから……でも私、本当にやつていけるか不安です」

恋音は自信無げな苦笑を浮かべながら、肩にかかる髪を指すいた、ストレートに下ろしているのではなく、ほわっと柔らかく少し茶がかつた髪。

「もう……恋音ちゃんも凄く可愛いくてばー、自身持りなよ、やる」と決めたんだからさー。」

舞台上に腰を下ろして、みなみは笑いかける。

「それに恋音ちゃんは、男子を悦ばせる技も凄かつたじやない、オナーモすつかり立場忘れて男の子になっちゃって声を上げてたも

ん！ きっと売れっ子間違いなしだって」

「みなみさん！ そ、そんな事、言つちゃダメですよ……ほ、本
来は人前でするような事じやないんですからあ……！」

恋音が顔面を真っ赤にして首を振ると、

「失礼します」

事務室から先程まで面接を受けていた織田百合乃がバックを肩か
ら下げ、二人にペコリと会釈をしながら通り過ぎていく。

「ここにちわ～」

一人も頭を下げて答えると、百合乃は少しはかなげな笑顔を見せ、
出口のドアに歩いていく。

「ち、ちょっと待つてください……」

呼び止めるみなみ。

「はい？」

百合乃は振り返る。

「もちろん、採用されたんですね？」

みなみが訊くと、百合乃は首をかしげ、

「うーん、どうなんでしょうか？　お返事を待つ事になりましたけど……無理みたいな感じです、やっぱり難しいのかなあ、じゃ」

と、ため息をついてから、また会釈をして歩き出す。

本人の手応えはかなり悪いのだらう。

やや俯き加減の百合乃が出ていき、パタンと閉じるドア。

「あんな美人なのに不採用なの！？」

恋音とみなみは見合い、声を合わせた。

* * *

幸四郎と高音は、まだ事務室から出て来ない。

「訊いてみましょつか？」

「無理じゃない！？　あのお堅い高音さんが採用するにもしないにも、やうこうの答えてくれるとは思えないけど」

事務所のドアを指差す恋音に、みなみは首を振る。

「ですよね……でもさつきの人、不採用だつたらかわいそうですね」「うだね……店はとにかく女の子が居なくちゃ始まらないし、始まらなくちゃ私達もお金稼げないんだからね、やっぱり訊いてみよつか！」

不安げな恋音に、みなみはそう言って事務室のドアをノックする。

「みなみちゃん、どうしたのーー?」

ドアを開けると、幸四郎が顔を上げて見てくる。

高音と並んで応接ソファーに座っているのは、さつきまで面接をしていたからだ、他にも面接や紹介所からの応募があつた様子で何枚かの履歴書等が机の上には乗っていた。

「あのや、さつきまで面接していたあの人や、凄い美人で可愛くてプロポーションも凄かつたでしょ? もちろん採用だよねーー?」

みなみが切り出すと、

「答えられませんね」

冷たく即答したのは高音であった。
顔も上げずに書類を見ながらである。

「なつ……別に高音さんには訊いてないんだけど……」

ムツと、目を細めるみなみ。

「あなたの立場から人事についてオーナーに『やすやす尋ねる権利なんてあると思つてますか!?』

高音はやつと顔を上げ、一瞥した。

「いや、みなみちゃんに高音さん、一緒に働く仲間なんだしさ、実はすぐに採用したいのは山々なんだけど引っ掛かる部分が……」

「坊っちゃん！」

雰囲気の雲行きを案じた幸四郎がそこまで答えかけたが、それを高音が一喝に近い調子で名前を呼び制した後で、

「まだ採用もしていない人の情報を店の女の子に話すなんて軽率です！」

と、幸四郎を睨む。

「そ、それもそうだ、と言つ訳だからさ、みなみちゃん、悪いけどまだあの人については話せないよ」

「な……私はただ採用になるか気になつただけで、なれば仲間になるんだからさ、と思つただけのに！」

高音に圧された形で、苦笑して後ろ頭を搔く幸四郎を、みなみは睨み付けて、事務所のドアを強く閉めたのだった。

「なに！？ オーナーの癖に秘書に怒鳴られてんじやないわよ！」

「……うーん、高音さんが実質的な仕切りをしてますからね」

不愉快そうな声を上げるみなみと、返答できない幸四郎の心中を

察した様な複雑な笑みを見せる恋音。

二人は昼食をとる為、店を出て商店街を歩いていた、風俗街として栄える新大空町では夜には働く女の子や客を日当てに朝までやっている飲食店が結構開いているが、その分昼間に営業している店が少ない。

「またハンバーガーにしようか？ 恋音ちゃん大好きだもんね」「はい、大好きですっ！ ハンバーガーでいきましょう！」

怒りはひとまず抑えて、昼食を提案したみなみに恋音は嬉しそうに頷いた。

「ハンバーガー三個に照り焼きバーガー三個、タマゴバーガー三個にビッグバーガー一個、そしてコーラの一一番大きなサイズを一つ下さい！」

「か、かしこまりました、少々お待ちください」

普段の控え目な美少女の殻を躊躇なく突き破り、怒濤の注文をする恋音、店員は明らかに一瞬引いた表情を見せてから番号札を差し出した。

「人が変わるわね」

ハンバーガーセットを乗せたトレイを持ってみなみは二階に上がる。

店の自分専用の部屋に転がり込んで二日。

すでに初日で恋音の異常な大食いは思い知っているのだ、まさか厨房を借りて料理までするのには抵抗を覚えた、みなみが近くのコンビニに行くと、弁当類が棚から消え去っていた。

時間が悪かったかと思い、カツブヌードルを買って店に戻り、恋音と一緒に食事をしようとした部屋を尋ね、たくさん積まれた弁当を平らげる彼女を見て、その理由を知ったのである。

それからは色々と話をしながら、一緒に昼と夜は食べているが、彼女の食欲には驚くや呆れるを通り越して、何か敬畏の念すら覚えはじめていた。

「 いただきます！」

山ほどに積まれたハンバーガーは非常に目立ち、注目され、普段の彼女の性格ならオドオドしそうな物だが、食が絡むと大胆になれるようで、嬉しそうに手を合わせると一つずつモクモクと可愛らしい素振りで食べていく。

食べるスピードは早くない、普通の女の子のペースであるが、それが永久機関の如く、いつまでも続くのである。

「 ポテトは？」 一瞬もポテトは頼んでなかつたわよね？」

さしたる興味が沸いた訳ではないが、ふと氣づいたので訊くと、

「 ポテトはたくさん食べると胸やけしちゃいますね」

恋音は答えて笑う。

「そんだけ食べりや、何を食べても胸やけすると思ひなごぢね……別に誰の迷惑でもないから止めないけど、太らなーのは本当にひりやましいよ」

ため息まじりで、みなみは首を振った。

「でも……あの人、やつぱり採用されないんですかね？ どうしてなんでしょうね！？」

みなみがハンバーガーセットを片付けた頃に、恋音はやつと二個目になる照り焼きバーガーをモフモフと食べながら呟く。

「わからんない、条件で揉めたかと……って、タイプにも見えないしねえ」

セットのスプライトの容器から抜いたストローをくわえてピヨコピヨコ動かし、みなみは外を見ながら頬杖をつく。

「「」「めんなさい」、早く食べちゃいますから、スマスマセン、スマスマセン」

「気にしないでよ、どうせ仕事が始まるまではお互に暇なんだしね、せかしてなんかないよ」

頭を下げながらもハンバーガーを離さない恋音、みなみはそのままの姿勢で答えた。

「何だかみなさんが退屈になっちゃつてますう、どれか食べます！？」

「平気だつて……第一、食べらんないし、ソレから外を観てるのも面白いくのよ」

みなみは笑つた。

「田舎じゃあね、こんなに客観的にたくさんの知らない人が歩いてるのを、ゆつたりと眺めていた事なんてなかつたからわ」

「どういう事ですか？」

恋音はやつ訊き、ビッグバーガーにハムツと噛み付いた。

「田舎はみんな知り合い、ジツと観てれば向こうから気がついて寄つてくるし、たくさん集まつた時は何かしら自分にもやらなきやいけない役目があつて、とても客観的にみんなを観るなんて出来なかつたしね」

「なるほど……都會は他人に無関心でいるのが面倒にならない、つて感じですかからね」

「そつか、無関心か……無関心が面倒にならないか」

恋音の答えにみなみは肩を竦めた。

「早く食べますね、でも早食いは苦手で友達に無理やりに出でられた女子大食い選手権でも、バツサリ予選で落ちたくらいですが」「ホントにいってば、楽しみなんでしょう！？ ゆつくりと食べな

……

逆に恋音に氣を使つよ、こなつてしまい、複雑な笑みを浮かべる
みなみの返事が途中で止まる。

「みなみさん！？」

可愛らしく子首を傾げる恋音。

「早く食べてー。」

「へつー。」

こきなりのみなみの言葉に、恋音はビクッと背筋を伸ばした。

「つて、無理ね！ でも買つたんだからお持ち帰りにしても文句はないわね、行くわよ恋音ちゃん」

みなみはまだ紙包みに包まれたハンバーガーを持つて立ち上がる。

「ビ、ビ、ビしたんですかあ、せ……説明を……」
「モ、モ、うえー

慌てて、咽喉にハンバーガーが詰まつたのか、むせながらコーラをストローで必死に吸う恋音に、

「今、話していたあの女の人がいたよ、氣がしたのよ、なんで採用されないかを気にならない！？ 場合によつてはオーナーに頼み込めるかも

と、みなみは告げたのである。

「そ、そなんですか！？ でも追いかけてどうにかなるんですか？ オーナーも問題がある、って話していたじゃないですか、そつとしてあげた方が良いんじゃないですか？」

「そつとしてどうなるのよ、なるようにしかならないじゃないのよ」「でも……」

「行くわよ」

躊躇する恋音だが、みなみはハンバーガーを持って歩き出してしまつ。

「ああっ……はい」

恋音はせめてジュースは飲みきりひとつストローを吸つたが、それがまだかなり残っているのを見ると、

「これから仲間になつてくれる人かもしけませんからね……無関心ではいけませんよね、だからごめんなさいコーラさん！」

そう言つて、残つたコーラの密器に手を含ませ、席を立ち上がつたのだった。

「おかしいなあ……確かにあの人だつたんだよな」

ファーストフード店を駆け足で出て、みなみは周りを見渡すが、百合乃（みなみ達は名前すら知らないのだが）の姿は見当たらなかつた。

新大空町駅前。

それほど大きくはないが、一応駅ビルもある駅だけに、なりに人通りもあり、見失つた人間を見つけるのは容易ではない。その上、田舎出身のみなみは人混みが慣れていないのである。

「えへつと……」

「あ……あの人じゃないですか！？」

迷うみなみよりも、先に百合乃の後ろ姿を見つけた恋音が指差す。かなり遠くだが、視力の良いみなみは、その後ろ姿の黒髪のロングヘアの先を結ぶ赤いリボンを確認できた。

「間違いないね、追いかけるわよ」

そう恋音に告げて、みなみは走り出した。

「はあっ、はあっ、ちえっ……どこかに入っちゃったかな？」

三十秒程全力で駆けた息の乱れを整え、みなみは表通りから一本入った道で立ち止まる。

「こっちに入ったと思つんだけどなあ……

周囲を見渡していると、

「はあ、はあ、はあ……いられ……ましたかあ？」

かなり遅れ、息たえだえで、恋音が追いついてくる。

「いよいよ、こっちの道だと思つたんだけどなあ、どこかに入ったのかなあ？」

首を振るみなみ。

「ふう……へえ……ど、どこかです、かあ？」

必死に息を整えつつ、周りを恋音は見回す。
そこはさすがは新大空町といった様子であった、表通りから一本入ればもう風俗店が目に入る。

「安心の大王チエーン！？ 泡の大王！？ ええと、妄想ロ
スプレ大王！？ 口リツ娘大王？ ニューハーフさん大王？」

恋音が疑問符をつけて周りの店の名前を読む。

「大王ばかり……なんなの」」はー?..」

「安心の大王チヨーンって書いてありますから……やっぱり風俗のチヨーン展開していいる店なんぢやないでしょつか?」

「」」がそななんだ、まったくコンビニじやあるまいし……」

みなみが声を上げると、

「君達、ちょっと可愛過ぎないかあー!?..」

背後から路地に響き渡るハイテンションな男の声が聞こえてきたのである。

みなみと恋音が振り返ると、そこにはノーネクタイでスーツを着た男がニタニタ笑つて立つていた。

二十代半ばで髪を染めた三枚目風の男。

「なに!? 忙しいんだから、詐欺とか騙しには乗らないけど」

みなみが目を細めると、男はオーバーアクションに手を振りながら、

「違うよ、君達みたいな可愛らしい娘がこんな界隈を歩いてるからさ、てっきり職探しかと思ってね……俺はそこに見えるいくつかの店のスカウトマネージャー、大王チヨーンっていう、この街で最大の風俗グループなんだよ」

と、立ち並ぶ風俗店を指差した。

「だ……こねうーー」

おそれおそれ返答する恋音に、男は白艶げに胸を張つてみせる。

「そう大王チーンー、そいでもやーでもやーも大王チーンなんだぜ」「でも……私達はもう、つぐづぐ」

そこまで返答しかけた恋音の口を塞ぐみなみ。

「ん、私達はもう?」

「なんでもないわよ、私達はもうこの街で働くしか道がなくて来たのよー」

不思議がる男、みなみは恋音の口を抑えたまま、『まかし笑いを浮かべた。

「おおっ、やっぱりー、君達みたいな女の子なら、すぐにまともに働くのが馬鹿らしくくらいに稼げるよ、可愛いって財産だよね!」

男は嬉しそうに手を打つて、

「だったら大王チーン系列の店で稼げりよ、君はロリツ娘、君はコスプレ」

と、勝手に店の振り分けまで始めた。

「ちょ、もう少し考えたいのよ、それに紹介所では大王チーンなんて聞かなかつたけどな？ 騙して変な事させるつもり？」

怪訝な表情をみなみが見せると、男は、

「紹介所！？ あんなのは大王チーンに店の質で負けて、どうし ょうも無くなつた三流店が集まつて作った雑魚組合が何とか女の子を集めようと作ったのさ、あんな所の紹介で入つたら損するぜ」

と、せせら笑う。

「ま……とにかく考えさせてもらうわ、それよりも今髪が長くて先をリボンで束ねた女人の人来なかつた？ 胸が大きい綺麗な人」

「ん~、いなーな、今日は声をかけたのは君達だけだぜ、選りすぐりの可愛い娘にしか声はかけないよ」

みなみが訊くと、男は首を振り、

「じゃ、その気になつてくれたらここに来るか、この番号に電話ち ょうだい、うちのグループでスカウトされて働くなんて運がいいんだぜ」

と、言いながら男は名前と携帯番号の書かれた名刺をみなみと恋 音に差し出していった。

「行つちやこましたね」

あつとこう間に去つていつた男を見送る恋音。

「ふん、他人を貶めて自分を持ち上げる様な話し方をする男なんて口クなもんじやないわよ、一番聞きたかつた事は知らなかつたくせにさー」

みなみは、不愉快そつな顔をして歩き出す。

「驚いちゃいました、話を聞き始めたからみなさん、大王チューンの方にも興味があるのかと……」

「んな訳ないよ、この間、高音さんに聞いたんだ、詳しくは話してはもらえなかつたけど、どうやらかなり強引な手口でこの街で手を広げているらしいよ、だから試しに話をしてみたんだよね」

「そつだつたんですか、強引な手口ですか……風俗店街の組合にも登録してないのも、そういう背景があるのかもしれないですね」

まわりの大王チューーンの店を不安げに見る恋音に、みなみは、

「まあいいわよ、あの女人くらい美人でグラマーさんならあの男に声をかけられたかな？ とも思ったから話をしてみたんだけど違つたわね、さあ、あの女人を探しましょう」

と、更にもう一本奥に入つた路地に歩き始めたのであつた。

「あー、みなみさんー。」

それから三十分もウロウロとしだらうか、二人があの女人人、織田百合乃を見つけたのは新大空町公園といつかなり広めの緑地公園であった。

彼女は噴水の外周を囲う低いコンクリート壠に腰を下ろしていたのである。

「あの……」
「みなみさんー。」

歩み寄りつつあるみなみを恋音が呼び止めた。

「なにー? なにー?」
「いえ……オーナーも言つていた事情をいきなり訊くのはまずいのかな、と思いまして」
「どうしてー?」

「ここまで来て、といった顔をするみなみだが、

「いや、もしかしたら凄くあの女人人にコンプレックスになつてゐ事だつたりしたら、ほほ初対面の私達の訊いていい事じゃないし、それによだ面接の結果が出てないんですから……」

そう恋音に言われると、

「考えてみればそれもそつよね、無関心ではいたくないけど無節操も相手が困るか」

と、顎に手を当じて、数秒間考えると顔を上げた。

「じゃ、せつ氣なく会話して元氣づかると、その中で相手が話してくれたらいいって感じで！」

「はい、それならいいと思いますー！」

みなみの提案に恋音は頷いた。

「「こんにちは、さつき店に面接に来られていた方ですよね」

みなみが話しかけると、百合乃はあつ、といった表情を見せ、

「「こんにちは」

と、丁寧に頭を下げてくる。

「「こんにちは」

みなみと並んで緊張氣味に挨拶しながら恋音は百合乃を見る。

『幾つか歳上みたいですが、日本風お嬢様みたいで可愛いです、それにもみなさんもプロポーション抜群に見えましたけど、この人は凄いです……いったい何カップなんでしょう』

恋音は思わず百合乃の胸元に注視してしまつ。

「私は崎原みなみ、つていいます。……」Jっちが

「…………凄いです」

「恋音ちゃん！？」

「え！？ あう、いや、な……何カップですか？」

「何言つてんのよ！？」

「ゴスツ！」

みなみはから竹割りを恋音の脳天に見舞う。

「はう、あつ」

珍妙な声を発し、頭を抑える恋音を、

「「」、「」めんなさい、こっちがBカップの斑鳩恋音ちゃんです」

「酷いです」、当たつてますけれど」

みなみが苦笑いを浮かべて紹介し、恋音が情けない声を上げる。

「つふふふふ、面白いですね……私は織田百合乃といいます」

二人の掛け合いに百合乃は微笑む。

『「ひひひ……百合乃、名前も姿もお嬢様』

『可愛いです、～乃つてお嬢様の名前です』

みなみも恋音もその控え目で可憐な笑みに、偏見込みで感心して

しまつ。

「いかん、いかん……織田さん、隣に座つてもいいですか？」

ブンブンと首を振り、みなみが訊くと、

「どうぞ、あの……百合乃で良いですよ」

百合乃はそう言つて頷いたので、みなみと恋音は百合乃の隣に腰を下ります。

「お一人は……あなたのお店のあの……」

「ええ……一応は所属してますがまだお店が開いてませんしね」

百合乃の問いに、みなみは肩を竦めた。

「えと……百合乃さんみたいな綺麗な人が来てくれる嬉しいです
う」

「ありがとうございます、でもどうですかねー?」

恋音の言葉に百合乃は首をかしげる。

「いやあ、大丈夫ですっ！百合乃さんが採用されなかつたらオーナーを私と恋音ちゃんでいじめちゃいますからー。あの人の弱点知つてますんでー！」

みなみが胸を張ると、

「まあ……」

と、驚く百合乃。

「でも百合乃さんなり平氣ですよ」

恋音も笑顔を向けると、

「二人とも優しいですね」

そう百合乃は咳いてから大きく息を吐いた。

「いいですね……女の子って」

「……………？」

百合乃の言葉に瞳を細める恋音。

「もう言えれば百合乃さん、お腹空きませんかー！」

そんな恋音の様子には、気付かないみなみはニッコリ笑つて尋ねる。

「ちよつと座りこちまく」

百合乃が少し恥ずかしそうに答えると、

「じゃ、少し冷めでますけど、ハンバーガーありますから食べましょー!」

みなみはいつの間にか大きめのハンカチに包んでいたハンバーガーを百合乃に差し出した。

「まあ、ハンバーガーですか!? あんまり食べた事ないです!」

手を顔の前で合わせて喜ぶ百合乃。

「それは私のじゃないですかあー」

「恋音ちゃんはもう三個食べたでしょ? 過食は美少女の最大の敵だからね」

泣き声を上げた恋音にそう注意するみなみに、

「いえ、四個ですう……そうですね、残り七個仲良く分けましょうね」

と、赤面して恋音が答えたので、みなみと百合乃は顔を見合せ笑い、恋音もそれに続いた。

「『馳走になりました、本当に久方ぶりにハンバーガーを頂きました、外で食べるのも滅多にしなかつたので何だか新鮮でした』

手を合わせる百合乃。

食べたのはタマゴバー ガーヒト。

食事を済ましたみなみもハンバー ガーを一個もらつただけだつたので結局、恋音には五個のハンバー ガーが残り、恋音も一つ食べて残りは持ち帰る様子だ。

食べている間も色々と雑談をしたが、まだ面接の結果が出ていないのでその辺りの話は結局はしないままだつた。

「じゃ……本当に氣を遣つて声をかけて貰つて嬉しかつたです、そろそろホテルに帰りますね」

百合乃は腰を上げて、ポンポンとスカートを払うと頭を下げる。

「はい、じゃまた
「また」

手を振るみなみと、ペニンと頭を下げ返す恋音。

「はい……また会えるといいですね」

はかなげな笑顔を見せつつ、百合乃はいつのまき、肩を竦めたのだった。

「悲しがつても、そつ生まれたのは仕方がないですからね」

百合乃の後ろ姿を見送るみなみと恋音。

「帰ろつかー!?」

「ええ……」

促す、みなみに恋音はコクリと頷く。

「さつきの大王チヨーンの店が密集してた道は通りたくないな……なんで同じチヨーン店の店を並べてんのよ、バカじやないのー!?」

口を尖らせるみなみに、

「駅の近くはたくさん人通りもありますからね、それに男の人はいろいろ趣味が個人で変わりますからね……えつーー!?」

と、恋音は途中まで答えかけ、ハツと何かに気がついた様に、驚きの表情で自分の口元に手を当てた。

「どうしたのー!?」

不思議そうな顔をするみなみに恋音は振り返る。

「……わかりました……なんで百合乃さんが採用が難しいかが

「えええっ！？ 嘘でしょ、そんな訳ないない！」

ラーメンチーン店の店内に声が響く。

みなみは自分の上げた声が、予想以上に大きかった事に周りをキヨロキヨロしてから、正面に座り中華そば大盛りをする恋音に、

「そりゃない、そりゃないよ、飛躍しそぎだよ」

と、周りを気にしながら、口元に手を当て言つた。

「そりですかね？ 私はかなりあついつむと黙つんですけども、いや、そりじやない方が良いのは私もそうなんですが……」

箸を止めて顔を上げた恋音は、

「だつて……あの人、百合乃さん、女の子つていいですね、なんて言つてしまつたし帰りぎわにも生まれてきちやつたみたいな言い方してましたよ」

と、続けた。

「……確かに言っていた様な気がする」

みなみが店の高い天井を見上げて呟くと、

「そうですね、でもあれだけの美人さんです、採用されないのならそれ位の理由じゃないと有り得ないんじゃないですか？ まあ、私も百合乃さんの外見や態度からは全くイメージしていくんですけど」

恋音も複雑な表情。

「うーん」

みなみも思わず唸つてしまい、

「でも胸がすい」「……」

と、疑問を呈するが恋音は首を振る。

「手術で自由自在です、お金さえかければ、逆にそういう人の方がやたら大きくなしがるらしいですね、最近は本当に綺麗な人が多いですから、凄いんですよ、それにこの街は様々な人が働きに来ますからね」

「そうだよね……何だかそんな気がするよ」

恋音の言葉にみなみは半信半疑ながらも頷くと、頬杖をついてぼやく。

「百合乃さんが二コ一ハーフさんかあ……色々あるんだなあ」

帰り道。

夜も更けだして、周りにはこれから出勤なのだろう、なんとなくそれと判りやすい綺麗な女性達が沢山歩いている。

「どうやら、これからお仕事みたいですね」

「そうだね……私達もお店の開店準備が固まれば、この街で働く女の子になる訳だからね」

「つりのお店……」これからどうな女の子があつまるんでしょ?ね

期待半分不安半分な感じの恋音。

「うーん、それは分からないけど……恋音ちゃんみたいに仲良くなりやすい相手だといいな」

そうみみなみが答える。

「あ、ありがとうございます、私も初めての同じお店の人があつみみたいな人で良かったです」

赤面して頭をぺこりと下げる恋音。

「ねえ……恋音ちゃん」

「なんですかー!？」

美少女らしい控え目な笑顔で顔を覗かせる恋音に、みなみは「
といった感じの笑顔を浮かべ、

「私は百合乃さんとも上手くやつていけない」
と、告げる。

「みなみさん……」
「恋音ちゃんはめでたしー。」

みなみの問いに、

「はー、私も百合乃さんの印象、ずいぶん好きです」

恋音は答える。

みなみはよし、といった風に恋音の肩に手を置く。

「だつてさ、オーナーも高音さんも、私や恋音ちゃんに言つてたよ
ね！？ プリンセスオーディションでは決まったサービスはない、お
客様の求められていう事を優しくで感じ取ればいい、つてさ……」
「はい、言つてました」

恋音が「ククリと首を縦に振ると、

「なら……百合乃さんがダメな理由なんて何も無いじゃない、お客
様に喜んでもらうかなうさ」

みなみは自信満々にそう言い放つ。

「……そうですね、私も百合乃さんと一緒に働きたいです…」

「決まりだね」

明るい声で頷いた恋音にみなみはウインクした。

「あれっ！？ オーナーはどうにいったの？」

「坊っちゃんなら、町内会の宴会に連れていかれましたよ、今日は夜遅くになると思います」

幸四郎を探して事務所のドアを開けたみなみに事務机に座り、何かの書類を書きながら高音が答えた。

「そうかあ

「何かの言伝があれば言つておきますが……」

「いやあ……言伝つていう程じゃないけど、ほらさつき面接してた人の事、雇つてもうえたらなー、とか思つて」

みなみが苦笑しながら頬を搔くと、高音は万年筆で書類を書く手を止めずに、

「どちらともあなたに答える必要はありませんが、気になるなら答えてあげます、現時点では落とすつもりです」

と、酷く事務的で、冷たく感じる口調で答えたのである。

「なつ……」

みなみは唇を噛む。

落とすつもりの答えはある程度予想していた、それを何とか説得してみようとも思つてやつてきたのだが、力チン来たのは高音の返事の仕方であった。

「何で！？ 理由教えてくれませんか？」

「個人的な情報に関する事なので教える訳にはいきませんし、一契約者に過ぎないあなたに、これ以上答える必要もありません」

震える声のみなみの問いに対する高音のスタンスは一切変わらない。

「な、何よ……そんな事務的に！ 人だつて集まらなきやいつまでも営業できないし、百合乃さんの何処がいけないかくらい教えてよつ！ だいたい、こいつ観て返事しなさいよ！」

怒鳴るみなみ。

高音は椅子を少し引いて椅子ごとクルリと回り、足をスッと組むと顔を上げて言った。

「いいですか、崎原みなみさん、雇用契約した人、または契約検討中の人々の事をペラペラ喋る様な経営者の仕事場にはこの先、何があつても働かない事です、この業界ではプライバシーが他業種よりもひときわ大切に扱われるべきだ、と私は学んできましたから、それに入事について一部の契約者の意見を聞くような経営者も私はお薦めしませんね、わかりましたか？」

締まつた表情と締まつた口調だつた。

みなみは、この業界で長く働いてきた高音の大切なポリシーを侵そうとしていた事に気付き、

「……確かにそうだけど」

と、いつ捨て台詞を残し、事務所を去るのが精一杯だったのである。

3

「ダメでしたか……」

「うん……オーナーいなくつて、高音さんに言ってみたけど」

直談判に出て帰つてきたみなみが恋音に頷く。

「今度は一人でオーナーに言つてみましょうか？」

「ダメよ、オーナーは高音さんを信頼してゐみたいだから、結局は相談するだらうし、一契約者に過ぎない私達がオーナーに対して雇用に口を出すのが問題がある、つて言い方だったからね……そんな事をしたら余計に拗れそうだよ」

恋音の提案にみなみは首を振つた。

「そうですかあ……」

「多分ね」

しゅんとする彼女にみなみも倣つてしまつ。

会話の無い間が空く。

十数秒の間を終わらせたのは、恋音の部屋を叩くノックの音だつた。

「は、はこつー?」

店の一階の部屋だ、来客で思付くのは、みなみを覗くと一人だけだ。

恋音がドアを開けるとそこには顔を赤くして、笑顔を浮かべる幸四郎が立っていたのである。

「あははは……恋音ちゃん、宴会で残つたお寿司をこんなに貰つちやつたんだよ、みなみちゃん呼んで食べるといこよ、つてみなみちゃんいるし……」

ろれつが回らない程に酔つている訳でもなく、自分で自分に突つ込む幸四郎の腕を、

「あなたも付き合こなさいよー。」

と、みなみは引いて部屋に引きずり込んだ。

「美味しいぞうです」

恋音が手を合わせてニッコリ笑う。

「みんなが食べなかつた奴を集めただけだよ、喜んでもらえてよかつたよ……ところで俺はもう食べたからいらないんだけど……みんなちゃんは、何か？」

嬉しそうに寿司を食べ始めた恋音と、だが寿司には皿もくれずにジーッと注視してくる、みなみを幸四郎は見た。

「別におもお腹いっぱいだからいらない、全部、恋音ちゃんにあげる」

「や、そつかあ……で、なんでそんな目で俺を見る訳！？」

皿を細めて、訝しげなみなみの視線に幸四郎はたじろいた様子だ。

「織田百合乃さん……知ってるわよね？」

その名前に幸四郎はあつ、といった表情。

「ああ……面接に来てた人だろーー？」

「ええ……」

みなみはズイツと幸四郎に顔を近付ける。

「その百合乃さん、高音さんに聞いたら採用しない意向らしいのよね～、私達、百合乃さんとちょっと仲良くなつてしま……性格もいいし、綺麗だしプロポーションも凄い……」

セニまで黙つてみなみは間を空けて、更に幸四郎に顔を近づけた。

「ちょっとみなみちゃん、顔が近いってよ」

焦る幸四郎。

「何で雇わないかの理由を高音さんに聞いたら、答えられない」と張りだしさ……どうせオーナーに訊いても答えてくれないし、答えてもらつても高音さんが黙つてない

「みなみさん！？」

傍らの恋音が少しみなみの真意を計りかねた様な声を上げる。てつくり不採用の理由を訊くのだと思つていたのだらつ。

「わかつてゐね……多分、俺も答えられないよ

少しみなみに引きながらも幸四郎が言つと、

「じゃあ……代わりにひとつ教えてよ、百合乃さんのそれは、本当にこの店でお客さんの心や身体の疲れを癒してあげるのにそんなに致命的な事なの！？ あなたの考えだけで答えてくれていいわ、頼

むからそれだけ教えてくれる？ お願ひだから

やう訊きながら、みなみは微笑む。

「……もう、可愛い女の子は得だよね、かわりに、って笑われると
参るよ」

ため息をついて苦笑してから、幸四郎は、

「俺は違うと思うよ、それは仕方ないといえば仕方ない事だからね、
それに彼女の事について言えば、す
ぐに結果を出せないでいるのは、俺と高音さんの意見に相違が生ま
れてるからでもあるんだ」

と、笑う。

「意見の相違が！？ ああ……なるほど」
「そういう事、理由はもうりん話せないけど、みなみちゃんと恋音
ちゃんが百合乃さんを後押ししてくれるなら俺は歓迎するよ……な
るべく早くしないと今回の件は高音さんがかなり強硬で、明日にも
俺が押し切られそうなんだよ」

微笑み合つみなみと幸四郎。

「話してくれてありがと、協力するわ」

みなみは幸四郎に軽くキスをして立ち上がる。

「恋音ちゃん行くわよ」

「ええっ！？ もう夜ですよ、どうこですかあー！？」

驚く恋音に、

「もちろん、百合乃さんのいる場所に決まってる、明日までなんて待てるわけないでしょ」

即答するみなみ。

「百合乃さんの泊まってる場所知らないですよ」

「探すわっ、こちとら暇人、夜中までかかってもいいわよー」

みなみの簡単には引きそうもない表情で、

「……そうですね、探せばいいんですよね、恋音も百合乃さんを応援したいですから」

恋音も立ち上がる。

すると幸四郎は、

「美人が一人で安心して泊まるホテルと言えば、駅前のサンシャインホテルが思い付くかな～！？」

と、わざとらしく後ろ頭を搔いたのだった。

「みなみさんに恋愛せん、こんな時間に一体どうしたんですか！？」

駅前のサンシャインホテル。

フロントに呼び出してもうひとつ、驚いた表情で百合乃は寝間着に白いカーディガンを羽織り、ホールに降りてくる。

「百合乃さん」

みなみは百合乃に駆け寄り、

「百合乃さん……もしかしたら採用してもうかるかもしない！」

と、告げる。

「えっ！？ 採用してもらえるんですか？」

「うん、でもオーナーは賛成してくれてるけど……もう一人、面接にいた高音さんって、女人を説得しないといけない、それも急がないといけないの！」

みなみが百合乃を見つめると、彼女も一瞬は喜びの顔を見せたが、

「もう……いいんです、私は無理ですよ」

と、俯いた。

「何ですか！？」

問い質す恋音。

百合乃はみなみと恋音を見ながら呟く。

「私は貴女達とは違うんですよ、私みたいなのは私みたいなで働く場所もあるやうだからやうやうで……」

「バカッ！ 私は百合乃さんと働きたいのよ、オーナーだつてそんなの問題じゃない、って言つてくれてるのよー。」

みなみはホールに響くよくな声で怒鳴り、

「確かに……確かに……百合乃さんは私達とは違うかも知れない、違つかもしれませんが心の優しい可愛い女の子だと恋音は思います、あつとしつですー。」

恋音も声を上げる。

「みなみさん、恋音さん……」

涙目でみなみと恋音を見る百合乃。

「さあ、行いつよー。私達も一緒にお願ひにいへ……だから……だから」

「生まれがどうとか……どうか女の子を諦めないでトセー、百合乃さんはとても素敵ですー。」

みなみと恋音も百合乃にすが付くように嘆願する。

「なんですか、今日会つたばかりの私になんでこんなに優しくしてくれるんですか……」

涙を拭き、顔を上げた百合乃に、

「わかんない、わかんないけど優しくしたい、それにこの街に一人でやつてきて不安になる気持ちはよく解るんだ……それだけ」

みなみは照れ臭そうに答えたのだった。

ホテルからタクシーを使い3人は急いでプリンセスオーネクションに向かう、高音はいつも遅くまで書類などの仕事をしているし、幸四郎も待つていてくれる手筈になつている。

駅前から車に乗つてしまえば店までは十分もかからない、車内では緊張からあまり会話が出来ないでいると、あつという間に店に着いてしまう。

「……頑張ろい、百合乃さん!」

「はい、私この街で働くと決めました、もつ一度お願ひしてみます」

みなみの声援に百合乃は頷いてタクシーを降りた。

「なるほど……もつ一度お願ひにね……」

「はい……」

事務所に幸四郎といった高音は別段驚く様子もなく、頭を下げる百合乃を机に座つたまま見た。

「まだ面接の結果は出でないんですがね」

高音はそつ頬杖をついてから幸四郎を見る。

「坊っちゃん、困りましたね……そういう事に加担されでは」

「えつ……？」

焦りの表情の幸四郎。

「彼女にはあなたがオーナーで、私はあくまでもマネージャーと説明してあつたのに、何で私に彼女は頭を下げるんですか？　みなさんからオーナーは契約に前向きで私が反対している、って聞いていたからでしょ？、それをみなさんに話したのは坊っちゃん本人ですよね？」

高音の問いに幸四郎は罰の悪い表情を隠さず、

「ばれましたか、でも俺は百合乃さんの採用には前向きですから、だから加担するはある程度仕方のない事だと……」

と、開き直る。

「まつたく……」

「高音なつまらなそつこ茲くと、

「織田百合乃さん、私があなたの採用に反対する理由はわかりますねー？」

そう言つて席を立つ。

「はい……面接の時にも難しいと答えられた理由に挙げられました

唇を結ぶ百合乃。

「それを克服する自信がありますか！？ それも初めて働く風俗の場で？」

鋭く追い詰める様な高音の口調。

百合乃はその迫力に俯きそうになるが、ふと横に並んだみなみと恋音に視線をやると、

「やります！ 私は頑張ります、みなみさんや恋音ちゃんの様に人をやさしく慰めて勇気をあげられるような……そんな人になりたいですっ！」

そう言い放ち高音を直視したのである。

おしゃとやかで物静かなお嬢様という印象の百合乃の強い口調と眼差しに事務室は一瞬、時が止まる。

「……今日の昼の面接とはえらい違いです、あなたは私がその事と風俗未経験の部分を指摘されると、自信無げに俯き、それは自分にはどうにもならない事ですから……と、お答えになりました、どうちが本当の答えなんだか？」

高音は苦笑するが、その苦笑の表情には嘲笑はまったく感じられない、いい意味でのやれやれ、といった風であった。

「申し訳ありません……でも両方ともに嘘ではありません、素直な今の気持ちを答えました……そう生まれてしまつた事は変えられませんし、今は逆にそれを活かせないかな？　とか考えています」

高音に深々と頭を下げる百合乃。

「はあ～、私は綺麗でも自分に自信が持てない方がお客様の癒しになれる訳が無いと思い、未経験という部分も危惧して不採用の意見でしたが……」

高音は大きく息を吐いてから、

「そういう事みたいですし、オーナーの意見もありますからね……でも知りませんよ、素人さんばかりでは教育に手間がかかりすぎますよ」

と、幸四郎を見る。

それに対しても、幸四郎は一矢口り笑い、

「まあ、それは高瀬さんにも「教授願う」として……田舎乃さんも無いにやつてこそもしょう」と、直しくお願ひします

と、田舎乃に手を差し出す。

「ハイツー！」

田舎乃は可憐な微笑みを浮かべ、両手を添えてその手を握ったのだった。

「やつた！」

「やりましたねっ！ 田舎乃さんも一緒にす」

「みなみさん、恋音ちゃん、本当にありがと」「それこましたー！」

喜ぶみなみと恋音に、田舎乃が抱きつぐ。

「もう生まれなんて気にしけやダメだよーーー。」

「ハイツ、気にしません、みなみさんや恋音ちゃんと回りつもりでーーー！」

みなみの言葉に百合乃は頷いた。

「よかつたです、恋音は百合乃さんは、本当の女人以上に女人だと思いますです、笑顔なんてもう素敵ですっ！」

「そうよね！ 生まれが男なんて何だつていうのよー。崎原みなみが百合乃さんは女の子って花丸も一重丸も付けて……にんて～い！」

「はあーー？」

明らかに語尾に何言つてんだ的な響きの声を幸四郎と高音は上げて、百合乃は口元に手を当てる驚いている。

「何よー？ 私は百合乃さんは立派な女性として扱うわよー。なんだったら一緒にお風呂に入る」
「生まれてきた事は仕方がないですよ、もう氣にしない事にしたんじゃないですかーー？」

一瞬にして空気の変わった三人をみなみと恋音は訝しげに見る。チヨンチヨン。

百合乃が何とも言えない表情でみなみの肩を指でつっこいて言った。

「あのぉ、私は生まれてきた時から正真正銘の女ですが……」

「はあ～！？」

先程の幸四郎と高音の様な声を、今度はみなみと恋音がピッタリのタイミングで上げたのであった。

5

「すいませんですっ」

「うめんなさいー。」

平身低頭で深々と頭を下げる、恋音とみなみ。

「私こそすいませんでした、そんな思い違いをさせぬよつた事を言つていたなんて……どうか気にしないでね」

百合乃はあわわ、といった表情で一人を宥める。

「女の子つていいな、みたいな事を言われてましたし、しきりに生まれてしまった事は……とか言われてましたのでえ、それに百合乃さんみたいな美人がウチで働けない理由なんて相当な物だと、勝手に勘違いしちゃいましたあ～」

泣きだしそうになる恋音、傍で腕を組んだ高音が、

「まあ、百合乃さんはもう女の子と呼ぶにはですし……生まれてしまつたというのは、それも性別の事でなくて生まれた年代の事でしょうね、私が風俗未経験で危惧したのは百合乃さんの年齢の事なんです」

と、告げる。

「年齢いいつ！？」

みなみは眉をしかめて百合乃を見定める。

白い肌。

腰の辺りまで伸ばし、そこでリボンで結んだ黒髪。 切りそろえた前髪。

切れ長でも、何処か優しげな瞳。

高いわけではないが、整った鼻筋からの薄い唇。

綺麗な輪郭。

ほんのわずかに太めに見えるがグラマーさが遥かに上回り、抜群の色香を感じさせるプロポーション。

可憐な微笑み。

「恋音ちやん！？」

隣でそれの値踏みに本氣で入った恋音に回答権を振るが、

「……」

彼女は黙つて首を振るだけだった。

「お姉さまーっ！ 大変失礼に存じますが、 いつたいあなたはお幾つなのですかーー！」

妙なテンションになり、 回答権を放棄したみなみに百合乃は可憐らしい苦笑を見せながら、 頬を赤らめて答えた。

「はい、 織田百合乃…… 今年で三十四歳です」

「私より年上ですね、 これから宜しくお願ひします、 百合乃さん」

高音がペコリと頭を下げ、 みなみは店内に響くよくな声を上げる。

「う、嘘だ～！」

可憐すがれり、可憐すがれだらひーー？

三十四歳

「ーー」

第9話に続く

第9話「私達は共同体」

1

「あっ……幸四郎さん」

百合乃の艶のある声。

「くっ……ゅ、百合乃さん……す、すいませんっ……も、もひっ」

その声に反応するよつに、幸四郎は重ねた身体を細かく動かすと、百合乃も激しく身体をくねらせる。

「あふふうう」

「ゅ……百合乃さんっ……くっ……はああっ」

百合乃に胸元に抱き締められた幸四郎は声を上げ、ビクッビクッと身体を震わせると、一気に脱力して豊かな両方の胸の谷間に顔をうずめて、大きく息を吐いた。

「百合乃さん……凄く、凄く可愛かったです」

「はい、幸四郎さんも、とても素敵でした」

「大満足です、ホントに可愛くて……」

「はい、私も夢中になつちゃいました」

笑い合ひシーツに包まつた二人は、そつと唇を交わした。

「はい、じじいまでです、百合乃さん、練習の苦労でしたね
…………」

唐突にスーツ姿の高音が入ってくると、幸四郎と百合乃是真つ赤になり一人で一枚のシーツに包まりながら上半身を起こす。

「どうですか？ 坊っちゃん、お客様として百合乃さんはどうですか？」

一部始終を見ていたのだが、まったく気にしていない様子の高音は、幸四郎を見下ろしながら事の感想を訊いてくる。

「な、何がです！？」

「何がって、今訊くことなんて決まっていますよ、きちんと熟した大人の女は違つでしょ！？ 特に百合乃さんみたいな滅多にいない特別上等な女性は？」

「……そんな、特別上等だなんて……」

幸四郎と一枚のシーツに包まり恥ずかしがる百合乃。

「そういう事なら、凄く気持ちよかつたし最高でした、めちゃくちや可愛くて癖になりそうです」

幸四郎がそう素直に高音に答え、隣の百合乃に微笑むと、

「いえ、幸四郎さんも本当に素敵でした」

百合乃も微笑み、再び互いに唇を近付ける……が、その間にスッ

とファイルが挟み込まれる。

「坊っちゃん……練習の時間は終わりと言った筈です、早く服を来て下さい、互いに盛り上がったのは結構ですが、契約者とはあくまで公平にお願いします」

ファイル片手の高音の田つきにはまるで冗談や茶化した雰囲気がなかつた。

「あ……すいません、百合乃さんも俺、つい調子に乗っちゃって「私は」やめんなさい」

幸四郎と百合乃は互いに苦笑して謝り合い、そそくせと脱いだ服を着るのであつた。

* * *

「じゃあ、この部屋は百合乃さんが好きに使ってください、落札者のお客様も入るから掃除はキチンとしてもらいたいけど、汚なくならなければ個人の好きに部屋のレイアウトは任せますよ、百合乃さんのお部屋を再現するつもりでお願いします」

「わかりました」

高音と部屋を出していく前に幸四郎が告げる。

すると、百合乃は一寧にペコっと頭を下げてから言つてやうて、

「それと……あの、実は無いわけでは無いんですが、所持金に余裕があるとも言えないのでホテルを出で、良ければ、みなさん達み

たいにここに泊まりたいのですけれど……

と、両手を合わせてきたのである。

幸四郎としてはお給料を出せるまでは相手の経済状況も鑑みて、オッケーしたいが一人で決めてはいけないと想い、高音を見る。

「俺は仕方ないと思うけど高音さんは……？」

「私も構いませんが本当は店舗に泊まるのはダメなんですよ、今は仕方ないですが早急に何か対策を講じますよ」

腕を組んだ高音は言葉通り仕方がなそうな顔でそう答えた。

2

「いいアパートがあるんですか！？」

一日後の朝、事務所で百合乃の契約後に面接をした女の子達の履歴書を見ていると、出勤してきた高音がそう報告してきたのである。

「ええ、先代にはとても世話になつたから、と大家さんが信じられない程の格安で一棟丸ごと貸してくれるらしいです、知り合いの不動産屋さんに声をかけておいたのが幸いしました……その大家さん本人も私が知つてますので信用はできます」

「なるほど……親父に世話になつたからか、一体何人俺の顔も知らないそういう人出てくるんだろ？」

嬉しくない訳ではないが、複雑な表情が出てしまう幸四郎。

そんな幸四郎の態度に高音は腰に手を当てる。

「坊っちゃん……どうでもいいじゃないですか、今は会長の御威光に素直に感謝しましょう、みんなに格安のアパートを貸せるとなれば……」

「そう、みんなが喜ぶからね……ごめんなさい、また生意気言つたよ、これも働くみんなに良い事だから素直に感謝しなきゃ」

途中で言葉を遮り、皮肉つた態度を取つた事を謝り苦笑する幸四郎。

「そういう事です、経営者はプライドよりも、働く人達を取れなければそれをする資格はないと私は思いますよ……互いに支え合う共同体ですからね、さて連絡はしてありますしみんなでそのアパートを見に行きますか」

そんな幸四郎に高音は腰に当てた手を離し、眼鏡をスッと直す仕草を見せて微笑んだのだった。

「住所からすると歩いていけるんですけどね」

三十分後、メモを片手に歩く高音を先頭に幸四郎とみなみ、百合乃、恋音の五人は新大空町の通りを歩いている。

「どんなアパートなんですかあ！？ 出来るだけ新しくてネットワーク環境が始めからあれば良いんですけど……」

「ダメよ恋音ちゃん、それよりも家賃が気になるのよ、家賃が！？
だいたいアパートの価値なんて家賃聞けば判断つくれの！」

「やうなんですか？でも、お家賃は立地でもかわりますよ」

「うへん、そうかあ」

まるで女子高生の様に会話が弾むみなみと恋音の会話に高音が振り返った。

「お家賃はオーナーが決められます、まずはお部屋を見てからです
「やうなの？ じゃあオーナー女くじとよお」

みなみに肩をよせた、ワインクをされた幸四郎は笑顔を見せる。

「やうだね、お家賃がやつぱりみんなの生活に影響がおつき一からなるべく負担にならないようにするよ……君達から家賃をとつて儲けようなんて思わないから、だからみなみちゃんは変な色気遣わなくてもいいってば」

「変な色気とは何よ、変な色気とは……」この健康美溢れるあたしに対して！ 今の言葉傷ついた、家賃一ヶ月分くらい傷ついた、賠償請求するからね、家賃一ヶ月分！

「おいおい、堪忍してよ、みなみちゃん」

「雇つた女の子に変な色気なんて言つたんだから罪は深いわよ！」

困った顔を浮かべる幸四郎に背を向けたみなみはペロリと舌を出す。

「みなみちゃん、本当にたくましいですよね……見習わないと、お客様からああやつて色々な物をおねだりしていくんですね
「いや…… やうとあれは強請りに近いから」

本音で感心する田舎乃に恋音は苦笑した。

3

「……………これー?」

「「「」ですかー?」

「「「」ですか?」

みなみ、恋音、百合乃の声に幸四郎は何も答へず、高音を見た。

「やつですね、住所もあつてこやつです

高音は住所を書いたメモに田を落として答えた。

田の前にあるのは一階建のアパート。

部屋数は一階と二階合わせれば十一部屋。

「かなり広そうでしょう? これだけのアパートをあなた方に格安で貸してあけられるんです……何か文句ありますか?」

眼鏡を直す仕草の高音にみなみは眉をしかめた。

「「」のアパート……なんかぼろいんだけど」

「ストレート過激めますよつ……みなみさん

「じゃあ恋音ちゃんが上手く言つてよー」

「いや、その……年季が入つていてるところが、ネットワーク環境どろか電気が通つてているのかすら怪しいといつか……

「……………」

ストレートな、みなみの言い回しを注意した恋音もかなりキツい事をさり気なく言いつつ、不安げに古いアパートを見上げる。

そう、商店街から裏通りに入った場所にあったそのアパートは広さや店への立地は申し分無かつたのであるが、単純にかなり古い建物だったのだ。

「でも、みなみちゃんも恋音ちゃんもいつまでも店には泊まないし、かと言つてもこの辺りのアパートはなりには高いよ」不満げな態度が見えるみなみと不安そうな恋音に幸四郎が口を開く。

「うつ、それもそつか
「ですよね……」

二人は顔を合わせる。

「とりあえず中を見てみませんか！？」
「そうですね」

そう言つた百合乃に幸四郎が頷く、と一行は一階の目の前の部屋に立ち、高音が唄つてきついていた鍵でドアを開けた。

「あ……案外まとも」

部屋を見渡した、みなみの言葉は的確に一行の感想を現していた。八畳と六畳の和室が一部屋で立派とは言えないが、室内は小綺麗だ。

そして、八畳の部屋には申し訳程度だがキッキンがつっこむ。

「トイレは協同ですか？」管理人室と一緒に一ヶ所に洋式のがあります

「協同ですか……でも仕方ないか」

何かのメモを見ながら説明する高音に恋音が混ぐ。

「お風呂が見えません」

田舎乃が手を上げると高音が、

「ああ……お風呂ですか、お風呂はありませんね」

と、眼鏡を直しながらメモを見て言った。

「お風呂ないなんてムリ、絶対に無理ー！」

両手を広げるのみ。

「流石……おトイレはどうにかないますが、お風呂が無いのよ…」

「こやこや、おトイレひつよひつだね！」

同意しつつのボケか本氣か判断しかねる田舎乃に、みなみはツッコみを入れ、「ハリを入れ、

「とにかくお風呂が無いのは辛いわよー、高音をもがるでしょ？」

と、高音を見た。

「「」の建物にはないですが、「」安心くだせー」

笑みを浮かべる高音。

「実は近所には「」のアパートの大塚さんの経営するお風呂屋さんが
ありますで、「」利用者は半額で利用させてくれるとの事、それに
みなさんは店舗の自分の部屋にそれぞれ立派なお風呂があるじゃな
いですか、出勤してきた時、退勤する時に入られても構いません、
もちろんお仕事中にも入るでしょうけど……」

「うへん」

高音の返答にわずかに唸つて、数秒間腕を組んでから顔を上げた
みなみは、

「出勤してきた時は店のお風呂に入るって事ね……それに近くにお
風呂屋さんがあるんだ？ 私は家賃が安ければ構わないかな？ と
は思う、正直言えば、なんだけどお金持つてないから贅沢は言えな
いし」

と、恋音と百合乃の意見を聞く。

「ええ……値段によると思こますよ

「私もそう思います」

恋音に百合乃も頷き、三人は幸四郎に視線を集めてきた。

『要するに、多少の不自由は家賃の安さで我慢してくれる……って事か』

三人からの視線。

なるべく安くしてあげたい気持ちがある。

事情は訊いていないが、彼女達もお金が必要な生活の為にここにやってきたのだろう、それに余計な負担はかけたくない。

三人の魅力ある異性からの期待の込められた視線。 働いてくれる女性の為だ、多少の事はこちらも我慢しようと思つ。

思い切つて……

「じゃあ……い、」

そこまで声が出かけた時、もう一人の女性のわずかに冷たい視線が視界の端に映り、

「いやいや……」

ブンブンと何度も首を振つてから、

「やっぱ今すぐは無理だね、俺がここを見るのも初めてだし、ここを借り入れる値段も高音さんに聞いたばかりだしさ、正式な借り入れ契約をしてそれから後で検討した家賃は伝えるよ、なるべく互いに負担のない線を決めていい」

幸四郎は早口でそう答えていたのだった。

「よく言い止まりましたね、坊っちゃん」

店舗に帰った後で事務室で一人になると、高音は言った。

「正直、あの場でみなみちゃん達を喜ばせたい気持ちはありました、こちらが多少の支出をしてもと思いましたが、やっぱりお金の事ですからね、どう転ぶにせよ安易には……」

頭を搔きながら幸四郎は答える、視界の隅に入った彼女の視線が気になつたのは多分、白状しなくとも解つているだろう。

「ええ……私は自分の為に働く人間を切れる経営者は失格だと思いますが、働く人間の為に自分を切る経営者も失格だと思います」

自分の机の椅子を引いて座る高音。

「難しいですね」

息を吐きながら狭い事務所だが一応、一番奥に用意されたオーナー用の机に幸四郎も座る。

「いえいえ、」ぐぐぐく簡単な事……」

「そうですか?」

「ええ……結局は起業する人間は、他人を雇いたいと起業する変り者はそはいません」

「高音は口元をわずかに緩める。

「誰しも自分がやりたい事を実現する、多くの例で例えるなら、お金が欲しいと起業する訳です……そこで身銭を切つたら本末転倒じやないですか」

「でも会社の経営は苦しい時もありますよね?」「その通りです」

幸四郎の疑問に高音は頷く。

「何かの犠牲が必要な場合はあります、その時は経営者は被雇用者に犠牲を求めるなら、自分もその責任に応じて傷つるのが当然です、被雇用者の給料をカットするなら自らの給料もカットする、リストラするなら自らの進退も定めなければいけないと思います」

「なるほど」

「職場という者は働く人間全てで形成されるのです、経営不振ならばその責任はその立場に応じて背負わなければいけない、自分はペーぺーだから関係ないなどとのたまう人間はそこで働く資格はありませんし、現場の営業がいけないからと言つトップもその資格は互いに無いのです」

少し口調が強くなつてきた自分に気が付いたのだろう、

「まあ、少し脇道に話が逸れましたが……私の言いたい事は……」

「ホンと咳払いをする高音に幸四郎は答える。

「楽な時も辛い時も働く職場はみんな運命共同体って感じですかね? だから一方が利益を得て一方が不利を被る事はない、得る時も

失う時も立場による大小はありえど一緒にですか

「そうです、そしてそういう意識を皆が持つた会社は例外なく、強健なのです」

「そうだと思います、わかりました」

幸四郎は頷く。

「彼女達の住居の問題は切実で大変です、しかしあの娘達と私達はいまや共同体と考えるなら、適切な互いの妥協点を探さなければ経営者ではありません、あの場で道徳かつ贊同も呼べ魅力的な決定は経営者なら誰しも採算度外視するなら、口にしてみたい安易かつ素人的な事、ですが大抵は後で状況が苦しくなった時にその安易さに自らが悔いてしまうのです……ですから私は今回は坊っちゃんをほめます、さて……これから大家さんを訪ねませんか？ 中は平氣でしだか思つたよりも外觀はくたびれてましたし補修も必要でしょう、うちのお姫様達の要望もありましょうから大家さんともよく話しておかないと

高音はそう言って再び席を立つた。

誠実な人だ。

幸四郎は思う。

物心ついた時から、原高音という女性を見てきた幸四郎。

頭が良い人だ。

厳しくもあり、優しくもあり、強くもあり弱くもある、時には間

違えるし感情が先走る時もある。

今、言つた事にだつて言わせる人間によれば非現実的という人間もいるだろうし、理想論と罵る者もいるだろう。

だが、彼女は自分の信じる経営哲学に誠実なのだ。

そして、それに手を抜かない努力をして彼女は自分に手を貸してくれているのである。

意見の衝突は将来あるかも知れないが、彼女の誠実さだけは疑う事はしたくないと思う。

「 そうですね、親父からの関係があるから、安いからと安易に話を進めずにきちんと俺たちで話し合いましょうー。」

立ち上がる幸四郎に、彼女は幼い頃に自分を誉めてくれた頃の様な優しい笑みを見てくれたのだった。

第10話「ボクつ娘の女まゆつと恋音」

1

「ボク、小寺まゆつでこます！」

黒髪のショートカットの女の子は一ヶ口笑つて、頭を下げた。パツチリした一重の瞳に明るい笑顔、色白ではないが特に黒くもない。

髪型はボーアイッシュショウで、その顔立ちは可憐ひじく整つた立派な美女。

「スリーサイズを教えて下せー」「健康少女体型……つて返事じゃダメー？」

高音の問いかに、まゆりは頭を搔きながら上田遣いをするが、どうにも田の前の女史には通用しない事がわかつたのだろう、

「身長は一五四？で上から……七六、五八、七八だよつ

と、恥ずかしそうに白状する。

「だいたい恋音さんみみたいな感じですね」「身長も同じくらこですしねえ」

高音に話を振られた幸四郎は頷く。

「年齢は……これも恋音ちゃんと同じですが、この年齢では風俗店

で働いた経験はなさそうだね」

幸四郎が言つと、

「でもボク、頑張るよー。」

まゆりはウインクする。

恋音の守つてほし有的な美少女オーラはまゆりには感じない、むしろ対極的な健康元気な美少女だ。

「わかりました、結果は明日にでも連絡します、今日はまい苦労様でした」

高音は穏やかな様子で、書類をトントンと応接机で整えた。

「オーナーいるー?」

まゆりが帰つてほどなくして、事務所をみなみが覗き込んでくる。

「どうしたのさ?」

幸四郎が答えるとみなみは不思議そうな顔をしながら首を傾げた。

「さつきの面接の娘がさ……なんか恋音ちゃんをジロジロ見ながら帰つていもんだからね、何だか気になつたの」

「そりなんですか……会つたことない人にあんなに見られると、何

だか緊張しちゃこまゅう

みなみの背後から恋音がひょっこりと不安げな表情を見せてくる。

「ああ……まゆっちやんに面接の時に身長や体型が恋音ちゃんとほぼ一緒だ、って言ったから気にしたんじゃないかなー? 年齢も一緒なんだよ、性格は全然違うしそうだけど」

「へえー、じゃあ私も同じ歳だ、恋音ちゃんとはまた違う感じで可愛かったし、採用されたら、いいライバルになるかもよ」

幸四郎の返事にみなみはふーん、といつた感じで頷いてから恋音に笑うが、当の恋音が、

「まだお仕事もしてないうちにライバルなんて人に言えないですう……」

と、首を振る。

「それもそうだ」

その答えに、みなみも苦笑し、腕を組んだ。

「開店は近々しますよ、あと数人の女の子を入れたら開店です」

事務所の自分の机に座っていた高音が何か書き物をしながら言つた。

「あと数人！？ だつてさ、今いるの私と恋音ちゃんと百合乃さんと採用したとしても、さつきの女の子の4人じゃない、どうやってお店やるのーー？」

「そうですね……とても私は一度に何人もお相手は無理ですかー、せいぜい3人くらい……」

大仰な声を上げたみなみに、何だか聞き逃せない事を言つた恋音。

「それについては心配いりません、開店といつてもプレ開店みたいな感じです、前のお店の常連さんに声をかけておきました、だからお客様はほんの少数ですし、事情が解つている上ですから、多少の不始末は『理解願えます』

高音はよつやく顔を上げる。

「プレ開店、ですかーー？」

田を丸くする恋音

「そー、まずは試しにお客様を相手してもらつて、このやり方の問題点などをハツキリさせて、本格開店の前に修正したりするんだ、君達もお客様を相手する場合の経験も少しないと困るだろしね」

高音と話も通つている幸四郎が説明すると、

「なるほどね、私達もそれの方がいいな……正直、お客様で初めてだし」

「そうですね、いきなりまったく知らないお客様相手だと緊張します」

みなみも頷き、恋音も同意したのだった。

2

「お世話になります、ボク、……頑張るからねっ」

「うん、宜しく頼むよ、まゆりちゃん」

店の事務所。

ぐつと拳を握るまゆりに幸四郎が微笑む。

結局、まゆりの採用はすんなり決まり、幸四郎が電話でそれを伝えると彼女はわざわざ挨拶に店を訪れてきたのである。

「えっとオーナー、説明では格安の寮があるんだよね、ボクもそこに入りたいんだ……いいかな！？」

「もちろん、格安だけど古いアパートだよ」

幸四郎が答えるとまゆりは少しバツが悪そうな顔を浮かべた。

「うん、それには文句はないけど実は同居しているのが……あれつ、こないつ！？ いなくなってる」

「ちよ……同居って！？ 同居つてどういふ事？ いなくなつたつて、連れてきたの？」

こきなつのまゆりの同居の話に驚く幸四郎だが、まゆりはキヨロキヨロと周りを見渡している。

「あ～ん、タツノリー！ 出てきなよー。」

「タツノリー？」

嘆き気味のまゆりに幸四郎が眉をしかめると、廊下から黄色い恋音の声が聞こえてきたのである。

「恋音わやん！？」

廊下に出ると、には恋音と百合乃が立っていた。

「ああ、オーナー見てください、かわいいですう」

そう幸四郎に笑いかけてくる恋音の胸元に抱かれていたのは、一匹のまだ小さなイノシシの子供、いわゆるウリ坊だ。

「野生の子が山を降りてきたのね」

「いやかに恋音の胸元に抱かれたウリ坊を見て、笑顔を浮かべる百合乃。

「ち、違つよつ、それはボクが飼つてるのー、だいたい山を降りて風俗店にくるイノシシなんていなー」

まゆりはシッ ハリを入れてから、

「タツノリー！ 何やつてんだよ、知らない人に抱かれてんじゃない、おいで」

と、両手を広げるがタツノリと呼ばれたウリ坊はまったく反応せず、気持ちよさそうに恋音の胸元に納まっている。

「あれが同居人！？」

「そうだよ、タツノリって名前……ボクに懷いてるんだ」

「恋音ちゃんにもなついてますけどね」

幸四郎とまゆりのやつ取りに百合乃が一団一団して口を挟むと、

「タ～ツ～ノ～リ、誰がご主人様か忘れたのかつ、この恩知らずつ

まゆりは恋音の胸元に抱かれたタツノリの頭をペチリと叩く。

「かわいそうですぅ」

クルリとまゆりに恋音が背中を向けると、抱かれたタツノリが彼女に甘える様に鳴きながら胸元に擦り寄る。

「タ～ツ～ノ～リ……それに君ツ、恋音ちゃんだつけ！？ それはボクの飼つてるウリ坊なんだつ」

「でも怖がつてますう、小わい子に怒るのはいけないと思つまゆ

「ムーッ」

まゆりは自分の飼いイノシシを取るなどばかりに恋音をジーッと睨んだが、恋音が言ひ返されて頬を膨らませた。

「やれやれ……」

「何だか少しづつ騒がしくなつて、いい感じになつてきましたね

頭を搔いた幸四郎に微笑む丘乃。

「まあ、仲良くやつてくれたら良いですけどね、正直いって女の子同士のこざいさだけはね」

そんな彼女にさしつげなく本音を吐いて、幸四郎は肩を竦めたのだった。

第11話に続く

「今度の方は坊っちゃん一人で面接して頂けないでしょうか？」

不意の申し出に応接ソファーに座り、コンビニのたらこスペゲッティを昼食にしていた幸四郎は、デスクワークをしている高音に視線を移した。

「俺が一人で！？ 何か都合が悪いんですか？」
「違いますよ」

幸四郎の問いに対し、高音は首を横に振り眼鏡をツイと上げ、「今度の方は私の推薦だからです……まあ、素人ばかりでもこまりますからね、いわゆるプロです、今日の夕方にでも顔を出すように言つてあります、是非宜しくお願ひします」

と、何か意味ありげに微笑んだのだった。

「そつちもやるうか！？」
「そうですね」
「まゆりさん、こつちは掃いたのでモップをかけてください」
「はいはい、いこよ」

店舗内のまだ使われた事のない舞台、みなみと恋音は雑巾がけをしていた、舞台を降りたフロアには簞を持った百合乃に、モップを持つたまゆり。

四人はプレオーブンもある事だし、特にやる事もない、遊びに行くにも先立つ物もないという共通認識のもと、自主的に店舗内の掃除に来ていたのである。

「こここの何もない壁が気になるよね、落書きしちゃおうか、ボク、結構絵が上手いんだよ」「んな

「止めまじょうよ、高音さん怒りますよ

ホールの壁を見て悪さを思いついた子供のよつて笑ひまゆりを、苦笑混じりで百合乃が止める。

「まゆりちゃん百合乃さん、こここの舞台はそんなに高くないけど、どうー? ここに立った私は!~」「

そこにはファッションショーの様に、ホールにせり出したキャットウォークに立ったみなみが下の一人に向け、腰に手を当てたそれらしいポーズを決めてみせる。

「おーっ、いいねえ、いいねえ、みなみちゃん! まるで田里のファッショントレードよ!」

「隣で雑巾をかけている恋音さんも一緒にポーズお願いします、カーラマンも待つてますよ」

ヤンヤと手を叩くまゆり、百合乃は両手でフレームの四角を指で作り、ニッコリ笑顔を浮かべた。

「力……カメラですかあ～！？ 当店ではホール内での許力カメラや映像録画機器の使用は禁じてます、もちろんお部屋内では女の子の許可があればですけど、原則は禁止です～」

「ヨン一、お~り、さすが恋音ちゃん、オーラクション開演前の萌えナレーション

る。ポーズだけのカメラに恋音が首をフルフル振るとみなみが感心す

「じゃあ、恋姫ひやん、お客様がねえんとして、お部屋で一緒に過ごしたくなつちやつよつな可愛らしこヒポーズとつてー。」「じゃあ……恋姫とお部屋で樂しく遊びませんか？」

まゆつのコクヒストリ、恋姉妹舞はるか愛いのペタンを座り込み、首をかしげる。

「うわ、可愛い！」

「アイドルですね、あいとホークションも盛り上がりますよ」

みなみが声を上げ、百合乃も絶賛し、飼いイノシシのタツノリの件から何かと恋音を気にしている様子のまゆりはリクエストしたくせに悔しがつてている。

「やつぱりそういう決めポーズ欲しいかなあ？」

みなみが腕を組むと、

「舞台の上で魅せないとオーディションも盛り上がりがない、ボクは絶対に必要だと思うな……よつと」

恋音への対抗心に火が点いたまゆりはモップを床に放り出し、舞台によじ登る。

「じゃあ、恋音ちゃんみたいな男の子を誘つたやつ、やつしーオーラの出せるポーズを研究しちゃおう」

「解ッ！ ボクも異性を眼中に嵌めて値を釣り上げちゃうつた、やつしーオーラを出せる様に頑張る」

やつしーオーラを盛り上がる、みなみとまゆり。

「あのおー、ポーズ要求しておいて余りにも散々な言われよつだと……」

そんな一人に可愛らしげポーズのまま、恋音は顔だけしかめたのだった。

* * *

「こんな感じ！？ モテルさんの歩き方」

「いやだよ、いや」

「腰をくねらせすぎじゃなこですか？」

「みなさん、可愛らしげですよ、まるで集団下校みたいですよ」

舞台の上を歩くみなみとまゆり、恋音を舞台下から百合乃が拍手する。

「集団下校……つて」

「誉め言葉になつてないですか」

「そりだよ、ボクはまだ学生にみえる?」

「そうですね、もう、オトナですよ」

文句を言ひ資格があるのか微妙な見かけで、抗議する恋音とまゆりだが、

「ああ……そうでしたか!? 私は素直に集団下校する中学生みたいで可愛らしいと思いまますよ」

田舎乃はおつとりマイペースでそれに答える、

「それも中学生かい!」

みなみがツッコミをいれると、四人はお互に笑いあつた。

「今のウォーキングで人より高い舞台に立ちますの!? あんまりお客様に魅せる商売を舐めると、痛い目に遭いましてよ」

「えつ……」

不意に聞こえてきた声に、全員がホールの隅に視線を移す。

一人の女がいつの間にか背中を壁につけて、腕を組んでいた。

赤茶色に染めた腰の近くまで届く位のボリュームのあるボニーール。

黒地のハイネックに、ノースリーブに薄手のカーディガン、短め

のスカートにロングブーツ。

服装で判る身体のラインは、胸元がほどよく出て、キチンと腰が締まり、スカートから見える脚は細く長い。

輪郭線は無駄がなく綺麗に通つており、鼻は細く整つてやや高め、薄いピンク色の唇、だが瞳は黒いサングラスをかけている為に判らない。

目元が判らなくても、相当な美人と判断できてしまつゝうな女性だ。

「何よ、こきなり来て失礼じゃない！？」

唇を噛んで、舞台から飛び降りるみなみ。

「みなみさん……」

降りた先の百合乃が止めようとするが、みなみはツカツカとポーテールの女に近づいていく。

「あら！？ わたくしは別に失礼な事を言つたつもりは無くてよ、そのみずぼらしい歩き方じや舞台で人に觀せて価値を決めていただくような事には難しい、と素直に評価しただけですわ」

「へえ、余計なご評価ありがとうござります！ そんなあなたは一体どなたですかね！？」

壁に背をかけたままのサングラスの女に腰に手を当て顔を近付けるみなみ、女が口を開きかけたが、その答えはまったく違つ舞台袖から聞こえてくる。

「その方は御堂楓さんといいます、私がスカウトしてこのお店にと

オーナーに推薦しました

舞台袖から、そう言つてまるで新たな登場人物の様に高音が姿を現したのであった。

ちなみと言つてはなんだが、幸四郎も後ろにいる。

「えつ……」

「高音さん推薦!-?」

驚く恋音に百合乃。

「あんたが高音さんの推薦で……」

御堂楓と紹介された女を、みなみは睨む。そんなみなみを嘲笑うように笑い、楓は、

「」紹介に預かりました御堂楓です、宜しくお願ひしますわ……でも高音さん、心配ですわね、女の子もオーナーも素人ばかりでやつていますの?」

と、サングラスを外して高音の後ろにいる幸四郎を見て、ため息をつく。

「な、私達だけじゃなく、オーナーまで馬鹿にしてつー」

さりにムツとするみなみ、幸四郎は舞台から飛び降りて楓に歩み寄る。

「なんですよ」

幸四郎を睨む楓。

一触即発と思われたが、幸四郎は肩をすくめて楓に笑いかける。

「高音さんに聞いたよ楓ちゃん、俺がオーナーの御神本幸四郎だよ……見た時は美人タイプと思つたけど、サングラス外すと可愛らしけれ、まだみなみちゃんとかと歳は変わらないかな！？ 確かに俺は素人だから、楓ちゃんから見て気がつく事があれば遠慮なく言ってね、でもやっぱり流石に高音さんの推薦だよねえ、可愛いなあ……採用しない理由ないよね」

右手を差し出す幸四郎。

幸四郎の言う通りサングラスを外すと、楓の瞳は可愛らしい丸みのあり、その印象を美人から美少女に変えてしまう。

「あ、当たり前ですわよ、わたくしをあなたが採用、不採用なんて決められる訳ないでしょ！」と……とにかく宜しくお願ひしますわ」

開けっ広げな幸四郎の挨拶に楓は、赤面してフイと横を向きながらも、組んでいた腕を解き、差し出された右手を握ったのだった。

「ふん……何よ、高音さんからの推薦だからって」

幸四郎と握手を交わした楓から、みなみが腕を組んで背を向けると、態度の差はあれ恋音もまゆりも俯く。

楓のルックスやプロポーションはまるでファッショングラビア、細い所は細く、出る所はしっかりと出て、みなみと年端が変わらないというのに、そこから感じさせる魅力は異性なら引き付けられない方がおかしい程で高音の推薦も頷ける。

しかし、それぞれのベクトルは色々だが、みなみや恋音達も決してその外見的な異性を惹き付ける魅力において大きく劣るとは思えない、あくまでも幸四郎の推察であるが、みなみや恋音、まゆりや百合乃も自分の魅力には内心、自信が無い訳がない程のルックスなのだ、それだけに楓の美貌を認めながらも態度や言動から受け入れにくいのかも知れなかつた。

何かと評価の辛い高音の推薦。

その真意を見せてもらおうという態度がみなみからはありありと見える。

「宜しいですわ、では私が舞台に上がりましょ」

それを察知したのだろう、楓は不敵な笑みを浮かべると舞台に歩み寄り、脇の階段から舞台に登ると黒いノースリーブの上に着てい

たカーディガンを脱いでから幸四郎に投げ、腰に手を当てて直立する。

楓は腰に手を当てて舞台に立つただけだ。

しかし……彼女は一層に輝きを増した、まるで写真家に要求されたポーズを一度でバシッと決めたモデルの様である。

自信満々の表情。

さつきまで、のじかに舞台上に上がって、照れ笑いなどを浮かべていた少女達とは明らかに御堂楓は一線を画していたのだ。

黒のノースリーブから判る身体の隆起はひどく魅惑的で、幸四郎は息を呑む。

くびれた腰からスッと膨らんだヒップライン、そして引き締まつた腿。

足先はロングブーツの為に判らないがここまで来て完璧でない筈がないと勝手に想像させてしまつ。

「うわ……」

同じ舞台上にいた恋音が声を上げる、理由は幸四郎と同じだ。

「あなた、一緒にウォーキングしてみます?」「い……いえつ、見せせてもらいますっ!」

楓は余裕の笑みに、恋音はビクツと背筋を震わせ舞台から飛び降りて、幸四郎の横にいそいそ並んでくる。

「そうっ!」

誘つたくせに恋音の反応は解つてたかのよつた返事をしてから、

楓はうなじに両手を回してからバツと薄い赤茶色のポニー テールを宙に舞わせると、ホールに突き出したキャットウォークを歩きだしたのだった。

「違います……やつぱり違います」

「……くつ」

恋音は咳き、みなみはそれを認めたくない様に顔を舞台から逸らした。

「見事でしょ！？」あなた達も舞台上でお客様に見せる為に練習していたのだろうけれど、人に女の魅力を一目で魅せてしまう事にしては、プロの楓とは素人が見てもハッキリと差がついてしまうのよ」

高音はまるで結果が知れていた様に腕を組む。

「高音さん……彼女はファッショニモデルか何かをしてるんですか？」それでプロだと！？」

「その辺りは彼女に聞いたらいいでしょ！」

幸四郎が訊くと高音は腕を組んだまま意味深な笑みを浮かべた。

「こんな感じですか、どうですか！？」

キャットウォークの先端でロターンして舞台に戻り、振り返る楓。

「……まあ、私達とは違つわね、プロのモデル出身かしらね」

憮然とした表情だが、歩いただけで素人の練習中の舞台を本物のファッションショニショニに変えてしまったのは認めざる得ないみなみが楓を見る。

「まあ、モデルもやりましたけれども……オーナーありがとうございました」

楓は舞台を降りると幸四郎に歩み寄り、投げ渡していたカーディガンを受け取つて、肩から羽織り感心する全員を見渡してから、

「わたくしは超のつぐくヒロの方専門のその手の『相手を最近までしてましたわ、誰を相手にしたかはわたくしもプロでしたから名前は言いませんけど、あなた方も知っているような著名な方々ですわよ、じゃあ、また後日」

と、サラリと大胆な告白しクルリと踵を返し歩き去つてしまつたのであつた。

楓の歩き去つた後を見つめる幸四郎。

「そうです、彼女はモデルでもかなりの売れっ子だったのですが、本業といった所は様々な業界のVIPの男性の相手を契約でしているんです、男性の方は可愛くて見事なプロポーションの女性なんて何人も知つていて、どうにでもなる様な身分の方々にもかかわらず彼女は抜群の人気でした、当然報酬の方も桁外れで、確度の高い噂によると彼女の魅力の虜になつた大御所男性ミュージシャンなどは八千万円のマンションを彼女に与えて自分だけの愛人にしようとして断られた事もあるらしいです」

「は……八千万円！？ ボクなんて八千円も奢つてもうつた事もないよ！」

腕を組んだ高音が頷くと、まゆりがどうしようもない対比をする。

「そんな人がなんでまたウチみたいなまだ開店もしてない店に！？ 即戦力が欲しいのはそうですが、そんな桁外れな報酬なんて出せないでしょう！？」

当然の疑問を幸四郎が口にすると高音は、

「それなんです、まあ経験者扱いで素人からのみなみさん達よりは少しは上のお給料で始まりますが、基本はそんなに変わりません……それに私から推薦はしましたが、元はと言えば彼女の方からこのお店の募集を聞きつけて知り合いだつた私に連絡をしてきたんですからね、あちらの普段の収入を考えればとてもこちらからなんて話は出来ませんよ」

と、自分でも解りませんよ、そう言いたげに口元を緩め、首を振つた。

「……むー」

難しい顔をしているのは、みなみである。

「まあまあ、みなみちゃん、同じお店の仲間同士仲良くなつたよ……初対面からキツい事を言われたとは思うけどね」

幸四郎が苦笑して声をかけるとみなみは幸四郎を睨んで、

「何よ、そんな美人で凄い娘が店に入つてくれてラッキー、とか思つた癖に、そなんでしょ！？」

と、頬を膨らませ人差し指を指していく。

「確かに……」

後ろ頭を搔いて素直に笑う幸四郎。

素直な気持ちだ。

楓の持つ異性を惹きつける華は新規開店する店に客を惹きつける即戦力となる公算が高いからだ。

みなみも素材としては十分であるし、プロポーションももう少し意識して造れば楓に劣らないと幸四郎は思うが、磨かれた美貌の経験値が桁違いに違いかつた。

「あのや……みなみちゃん、俺は……」

その事をみなみの機嫌を損ねずにつぶやいてから、

「今はどいつもなんないでしょ、相手は超一流芸能人すら虜にしちゃうんだからさ、舞台に上がってポーズとつて歩いただけで私との差は凄くあるのはわかったわよ」

「今はどいつもなんないでしょ、相手は超一流芸能人すら虜にしちゃうんだからさ、舞台に上がってポーズとつて歩いただけで私との差は凄くあるのはわかったわよ」

そうみなみは唇を噛んだのである。

「みなみちゃん！？」

「でもね！」

意氣消沈したと思い、声をかけたのだが、みなみは不意に顔を上げ、

「でもね……私はいつまでもあいつに大きな顔はさせないわよ、私にだって頑張らないといけない訳、がありますし、女の子の意地もあるからね！」

力強くそう言い放つと、グッと握りこぶしを幸四郎に向けて笑顔を浮かべてきたのである。

楓の凄さは認めつつも、いつかは追い抜く。

そんな気持ちの表れた勝ち気な少女らしい強気ない笑顔。

「応援してる、みなみちゃんは楓ちゃんに負けない物をきっと持つ

てる、これも正直な気持ちだよ」

幸四郎も笑い、突き出された握りこぶしに自分のこぶしをコシンと当てた。

「ありがと……ねえみんな、いい目標が出来てこれ幸いよね！？」

みなみは幸四郎に頷いて恋音達に振り返る。

「はいっ！ わ、私も頑張ります、せめて同じくらいの歳と判断もらえるくらいには！」

「そうだね、ボクも八千万円のマンション貰えるくらいになるつー！」

「そうですね、私もみなさんを見倣つて今度、楓さんをジーッと睨んでみますよ！」

楓の話に圧倒されていた様子だった恋音、まゆり、百合乃も三人揃つて活気づいたのであった。

その日の夜。

「楓ちゃん、いい刺激になつてくれますよね？」

事務所で幸四郎は書類を整理しながら、そつ高音に話を振ると、

「さあ……まだどうだかはわかりません、彼女のプライドと美貌は諸刃の剣ですからね、きちんと坊っちゃんがその辺りを調整してあげないといけないと大変な事になりますよ、行き過ぎたナンバーワンは店には良くないですからね」

高音は顎に手を当てながら答えた。

「行き過ぎたナンバーワンか、いくら楓りやんでも俺はそこまではならないと思いますよ」

「みなみさん達ですか？ 隨分、かつてますね！？」

高音が笑みまじりに肩を竦める。

「ええ……もちろん」

幸四郎は強く頷いた。

プルルルルツ

その時、事務所の備え付けの電話が鳴った。

「女の子の面接希望でしようかーー？」

「だと良いですね」

時間は遅いが、こちらは夜の仕事だし、そういう業界に勤めている女の子ならば夜にかけてくるのもあり得る事だ。

「はい、もしもし」プリンセスオーディションですが」

幸四郎は受話器をとらずにハンドフリーボタンを押した、面接希

望なら高音にも初めの会話の印象が解るよつてである。
だがその電話は予想外の物だった。

「フフフフッ、明日……面接にお昼頃に訪れる美少女は将来、新大空町の風俗の神と呼ばれる女の子なのです、いや、なのだ、絶対に採用するのですなのだ、……そして採用した暁には厚遇をも……」
「ホッ、ホッ、むせたのです、さらばなのです」

非常に可愛らしい声を無理矢理にかすれさせた声、途中で無理がたたつた様でもせるとその電話は勝手に切れたのであった。

「……」

無言で高音を見る。

彼女はぽつりと言つた。

「この娘、正氣ですか？」

第13話に続く

第1-3話「巫女服、幼なじみ」

1

「どうも遅くなりましたのです、ボクは天城佐久耶と申しますので

す」

「はあ……」

「お待ちしていました」

応接室。

入ってくるなり、ペコリと一寧に頭を下げ、名乗った佐久耶という少女に幸四郎も高音も一瞬、思考が止まりかけた。

「じゃ……私はもうこきますね」

「ありがとうございます」

微妙な様子で案内してきた恋音に笑顔で礼を述べ、手を振った佐久耶は再び幸四郎と高音に振り返り、

「宜しくお願ひしますなのです」

と、ニッコリと笑顔を見せたのだった。

「天城さん……こつもその格好で！？」

正面に女の子を置いて、幸四郎と並ぶいつもの態勢でソファーに座った高音は眼鏡を直しながら訊く。

「はい、ボクは巫女なので当然の如く、巫女服となります」

「巫女さん……って他で仕事してるとか？」

「いえいえ、ボクは神洋島といつ邊鄙な島の出身です、巫女さんは精神的な事なのです」

佐久耶は笑う。

巫女服を着ているくせに、染めたセミロングがよく似合つ笑顔で、他の女の子達と遜色ない可愛らしさだし、プロポーションにしても、みなみ位のグラマーさが有りそうで、田立ちにくい巫女服の割には胸元はしっかりと豊かな膨らみを主張している。

「どうかお願ひしますのと、島では仕事が無く、有り金をはたいて新大空町にやつてきたのです」

有り金をはたくとは穏やかではないが、明るさを崩さずに佐久耶はまた頭を下げる。

「それで……あんな……いちいち……風俗の神になるとかなんとか」「あ……あ？ イヤイヤイヤ……ボクは知りません、電話なんてしてません」

高音の言葉を慌てて否定する佐久耶。

「私……電話なんて言つてませんよ

「はうあつ

しかし、案の定、簡単な罠に引っ掛かる。

「まあ……電話の件はいじとして」

高音は幸四郎に視線を向けてくる。

人事の最終決定権は当然オーナーに在るのだ。

「まあ……普段着が巫女服でも構わないか……かえつて人気が出るかも、ルックス、プロポーションは申し分ないし……」

幸四郎がそう呟きながら見つめると、

「恥ずかしいのです！」

昨夜はキヤー、と頬を押されて身体を振る。

「参考までに……」の業界以外で面接の時、これを訊かれたら、その会社はオススメしないですけど、佐久耶さん、男性経験はどうですか？」

高音が訊くと、佐久耶は更に激しく身体を振り、

「うわあっ、凄い質問がきたのです！ 結構、たくさんとしか答えようがないのですっ！」

田をつぶりながら、答えたのだった。

＊＊＊

「見かけもプロポーションも抜群ですし、あの性格も面白いですか
らね、僕は雇おうと考えていますよ」

「ですね、彼女はやる気もあるみたいですし、雇ひ価値は十分にあり
ます」

天城佐久耶の採用について話す幸四郎と高音、採用はすんなりと
決まる。

「さてと……では彼女には後日、連絡するとして、他に探さな
いといけない人材もいますね」

「他……ですか？」

「ええ、バックアップスタッフですよ、当面は坊っちゃんも私もや
るとして、もう一人くらいは雇わないといけませんね」

「そうかあ、ホールに出す料理や女の子の部屋からの注文に対応し
ないといけないですよね？」

幸四郎は手を叩く。

「他にも、女の子のお部屋のメイキングとかもあるんで、なかなか
大変な事になりますけどね、始めのうちは知り合いでヘルプに来て
もらいますよ」

「お願ひします」

「じゃあ、調理兼雑用スタッフは一人、心当たりがあるので声をか
けておきますよ、任せてくれますか？」

「ええ、もちろん」

異論などあらひはない、高音はこの業界のプロだ、彼女の連れ
てくるスタッフならば間違ひはないだろう、幸四郎は素直に頷いた。

「じゃあ、紹介します……わが店の新しいプリンセスとして入店していただく、天城佐久耶さん、スタッフとして皆さんを支えてくださる、入来くるみさんのお一人です」

翌日の夜。

プレオーブンの打ち合せといつ事で、店に集合した面々に高音は二人を紹介した。

「よろしくお願いします、一人とも可愛いです」

「ホント、よろしくね」

恋音とみなみが挨拶すると、

「宜しくなのです！」

「てへへ……よろしくね」

佐久耶とくるみはそれぞれ笑顔で挨拶を返す。

「くるみちゃんは可愛いのにスタッフなんだ!? ボクはもつたいない、と思つなん~」

ウリ坊を抱いたまゆりが言つと、

「やつですね、でも支えてくださる方もいないといけないですか

同意して笑ひ田口乃。

「スタッフにしては可愛らしいには同意ですか……」

楓も腕を組んで素直にではないが、くるみの姿勢は認めている。

「いやあ……くるみは無理だよ、そりゃあ顔は幼いしアイドルっぽいし、胸とかもおつかくなつたけど、男と経験が……」

幸四郎は苦笑いを浮かべて、みんなに笑つが、

「……つてなんで、くるみなんだよー?」

と、ノコッタ口ノコッタをしてから高畠とくるみを見る。

「だつて、坊っちゃんは私に任すつて言つたじゃないですか?」「くるみ、料理も出来るんだよー。幸四郎ちゃん、くるみの胸とか興味あるんだ、恥ずかしいな」

高畠は「」と冷静に答え、くるみは恥ずかしがる。

「くるみつー、おまえな、」「」がビリビリ……」

くるみに顔を近づける幸四郎、だが唇にピッヒと人差し指を当たりてしまつ。

「んっ……」

「くぬみは幸四郎ひやんを手伝いたいもんね」

ペロシと舌を出すべる。

『か……かわいいつー?』

思わず浮かんてしまつた感情を押し殺しながら、

「か、勝手にしひつてー。でも幼なじみだからつて容赦はしないからなー。」

と、幸四郎くぬみに顔を向け叫んだのだった。

続く

第14話「ぐるみ、ねずみが来る」

1

「よつとつー」

軽快なかけ声と共にフライパンの上で、チキンライスが踊る。

「はい、できたあ！」

会心の笑顔を浮かべながら、ぐるみは皿に盛ったチキンライスを幸四郎の前に出した。

「お前……そんなに料理出来たっけかー!？」

「てへへ……調理師免許取つたんだ」

驚く幸四郎に照れ笑いのくるみ。

「見かけは合格ですね、問題は味……ですよね？」 ぐるみと並んでいる高音がどうぞ、と挑発的に促してくる。

「もちろん! いくら料理がメインじゃないとはいって、女の子との楽しい時間に料理はアリ! それが不味かつたら……あら?」

幸四郎が手に取ろうとしたスプーンが無くなっている。

「ん……いけますわね、あくまでも、チキンライスが持つ、素朴なケチャップベースの味わいを失わせずにチキンの量、柔かみもいいですわ」

「楓ちゃん! ?」

そこには幸四郎のスプーンを奪つて先に試食し、感想までも終える楓。

「美味しい! ?」

褒められた子供のように皿を輝かすくるみに、

「ええ……わたくしも身体の管理もあって、美食を呑くす、という訳ではありませんが、高級レストランには慣れっこ、いくらか舌には自信がござります、そのわたくしが合格と言つてゐるんだから合格ですわ」

楓は微笑む。

「楓ちゃん、俺が試食しようと……」

「はい、どうぞ」

「んぐ……」

「しようがないな、といった風に抗議をしようとした幸四郎の口に、すかさず楓はチキンライスをとつたスプーンを入れてくる。

「むぐ……むぐ……ん、美味しい！」

「でしょうーー？」

パアッ、と顔を輝かす幸四郎にも、楓は肩をすくめて微笑んだ。

「やだ、幸四郎ちゃんつたら、間接キッス！」

そう声をあげて勝手に盛り上がるくるみを横田に、幸四郎は案外にフランクな楓に内心、意外さを感じていたのだった

結局、くるみはメニューに載せようとthoughtいた料理はすべてこなしてみせた、すべてがチキンライス程の出来ではなかつたが、料理をメインにする訳ではない営業形態の店の味としては上等だつたので、主には調理係としての採用が決まる。

ふつうは家があるので自宅通いだが、当人は専用のアパートに來たがつた、しかし高くはないが家賃もかかるわけだし、これから採用する女の子の部屋も確保したい幸四郎が説得し、どうにか納得させる。

佐久耶の方は、なんとか島とかいう辺鄙な島の出身らしいので、部屋を見るなり、

「いい部屋なのです」

と、スンナリ入居が決まったのであった。

「住ませてもらえないから、遊びに来たよ
「早っ、採用したの昨日の話だろ！？」

翌日、アパートの軒先でニッコリ笑うくるみ。

幸四郎は呆れ顔で眉をしかめると、

「えへへ……だって、みんなと早く知り合いになりたかったんだも
ん、くるみはスタッフだけど、みんなの仲間なのは変わらないんだ
しね！」

くるみは短いツインテールの後ろ頭を搔く。

「しゃあないな……引っ越しをしてる娘でも手伝ってあげなよ、二
階のまゆつりちゃんや百合乃ちゃん、まだ引っ越し終わってないらし
いからな」

「はーい！ 後で幸四郎ちゃんの部屋でも、くるみを遊ばしてね！」
幸四郎が一階を親指を立てて差すと、くるみは手を上げて走りだ
す。

「一階への階段は走るなよ、今度直してもいいから、古いからなー！
「あいあーー」

一階への階段を上がる年下の幼なじみの後ろ姿。

「……まったく」

一見、変わっていないが、くるみも子供っぽさが前面に出ていた
昔とは上手く言えないが、何かが違う。「可愛く……なったよな」
幸四郎はもぢりさん、直接聞こえない声で呟いた。

「手伝うよっ！」

くるみは元気良べつ言いながら、ドアが開けられたままの一室を覗き込む。「ああ……ええと、入来さんでしたっけ！？」

そこは百合乃の部屋。

狭い玄関、たくさんの段ボールの置かれた部屋に彼女は座っていた。

「百合乃さん、段ボールすげっ！ 部屋が埋まってるよ！？」

「ええ…… そうなの、八畳と六畳で何とかなるかな、って思つたんだけど、何だか持つてきすぎたみたいで、何処から手をつけていいかもわからないの」

声を上げたくるみに百合乃は苦笑する。

「よし、じゃあ手伝うからぞ、先ずはどつちかの部屋に段ボールを集めだから、残った部屋のレイアウトを決めよっか！？ 入つて手伝つてもいいよね！？」

くるみはトレーナーの袖を捲る。

「えっ！？ いいんですか、悪いですよ」

「いいから、いいから…… 入つてもいいよね！？」

屈託のない笑顔を見せ、スニーカーを脱ぐくるみに、いったんは遠慮した百合乃も、

「ありがとうございます、お願ひしますね」と、笑顔を浮かべた。

「百合乃さん、大事っぽいね、手伝おうか？」

そこに姿を見せたのは、みなみだ。

「あつ、みなみちゃん、幸四郎ちゃんがいつもお世話になつてゐるね

「あつ……くるみちゃんだよね？ 百合乃さんを手伝つてくれてん

のー?」

挨拶をするくるみに、みなみが明るい顔を見せる。「やつなんだー。」

「へえー、じゃあた、恋音ちゅあんや、まゆりも連れてくるから皆でやうづか?」「やつた、みんなと一度に知り合いになれるよ、早く終わるしいね」

みなみの提案にくるみは嬉しそうに笑つた。

百合乃の部屋から時折、笑い声や何かに驚く声が、階下の幸四郎の部屋にも聞こえてくる。

安普請のせいもあるが、どうやら皆で百合乃の部屋の片付けの手伝いをしながら、色々としている話が盛り上がりしている様だ。

「まつたく、話ばかりではかどつてるのかよ?」

プレオープンへの様々な資料を読み書きしながら、幸四郎は苦笑する。

「でも、これでくるみも慣れてくれそうだな、元々人懐っこいしな」「くるみが自分の元で働くつもりでいたのは、正直に驚いたが、上手くやっていけそうなのに安心する。

「さて……先ずはオーナーの俺がしっかり勉強して、店をきちんとしないと、みんなに逆に迷惑をかけかねないな」

幸四郎は一人呟き、再び資料に目を落とすが……自分の部屋のドアが軽くノックされた。

「くるみかー? いや、降りてくる気配はなかつたもんな……はい、

はーい」

上はまだ騒がしい。

立ち上がり、ドアを開ける幸四郎。

「あ……」

意外な人物に幸四郎は一瞬、対応に迷う。

「今日はオーナー、失礼しますわ」

そこに立っていたのは、この安普請のアパートが全然、似合わない御堂楓だったのである。

続く

第15話「アメトトモニキタル」

1

「一体……どうし

楓に突然の来訪の訳を尋ねようとした幸四郎は、楓の足元に視線を下げていき、言葉を止める。

黒のブーツの足元には、明らかにキャパシティーを越えて膨れたキャスター付きの旅行鞄。

「何しに来たか、わかります？ 私には説明頂けませんでしたわよね？」

楓は後ろ頭にアップにした、赤茶色の髪をスッと搔き上げる。

「説明つて……まさか、このボロアパートの事？」

「そうですわ」

「いや……楓ちゃんに説明する必要は無いんじやないかと……」「職務の怠慢です」

苦笑いを浮かべる幸四郎に対し、楓はビシッと言い放った。

確かにそうだ。

福利厚生の一環（なのだろうか？）である寮を新しく雇い入れた使用資格のある人間に説明しなかったのは、楓の言う通り、幸四郎の職務の怠慢だ。

それは正論。

しかし、超のつく有名人達を相手に人気を得て、さらにウン千万のマンションのプレゼントを断るような楓に、この内装は外観ほどくたびれてはいないのが、幸いなだけのアパートを紹介できようか、と思つのも正論ではないだろうか、などと幸四郎は自己弁護してしまつ。

「いや、『ermenね、だつてさ、楓ちゃんみたいな娘にこのアパートは……』

「紹介できない？ 勝手に決めますわね、わたくしはこんな感じのアパート、好きですわよ」

「え！？ まさか……」

「遊びに来たように見えます？ このカバン一杯にオモチャでも入れでいるとも？」

判らない人ね？ 楓の瞳はそう言つてゐる。

「いや……もちろん、そつは思わないけど」

「なら、部屋を案内して下さる？ といひで部屋は一階がいいですわね」

「わかつた、一階はあんまり好きじゃない？」

「いゝえ」

楓は肩を竦めてから、自分の足元を指差す。

「氣を使つたつもりなんですわ、結構重たいですわよ、あとそこで停めたレンタカーの荷台にも、荷物が載つていましてよ」

「あんたが何でくるのよ？ どこかの有名人に買つてもうつた高級マンションにでも、住まわせてもらつてるんじゃないの？」
「そんな事、言いませんでしたわ……それに、後が拗れる不動産は貰わない方が吉ですわ、あとその段ボール割れ物ですので、お気をつけあそばせ！」

段ボールを抱えたみなみに、楓が腰に手を当てて答えた。

「何よつ、偉そうに！ まだ百合乃さんの所も片付け終わつてないんだから、生意氣言うと、そつち優先するわよ！？」
「そちらで役に立たないから、追に出されたんじやありませんの？」
「んな訳あるかつ！？」
「まあまあ……楓ちゃんもせつかく、みなみちゃんが手伝いに来てくれたんだからさ」

そんな二人のやり取りを仲裁する幸四郎。

結局、楓の荷物は表に停めていたレンタカーの荷台一杯にあり、百合乃の部屋を片付けていた面々のうちで、重い荷物に対応できそうな、みなみを幸四郎が呼んだのだが、どうにも二人は相性が合わなそうなのである。

『喧嘩するレベルじゃないにしても、恋音ちゃんとまゆりちゃんも微妙だし、やっぱり可愛い女の子つていうのはみんな仲良しつて訳にはいかないよな……でも、それを上手く妥協してやっていくのもオーナーの仕事かもな……』

車の荷台から段ボールを降ろす手を止めて、幸四郎は一人を見る。何やら言い合いを続けながらも、段ボールを運び込む楓とみなみ。『でも陰険にならないだけまだマシか……開店したらライバル心がみなみちゃんを上手く刺激してくれるといいけど……』

そう考えていると、

「何、ボサツと……」
「しますのよつー」

と、幸四郎は一人に同時に怒鳴られてしまつのであった。

2

「崎原みなみ」
「斑鳩恋音」
「織田百合乃」
「御堂楓」
「小寺まゆり」
「天城佐久耶」

事務所の応接机の上に一人一人の名前を呼びながら、『写真を並べる高音。』

「非常に高いレベルのルックスの女の子達です、素人の割合が気になりますが……かなりの物です、それぞれの女の子が、一流店でもルックスだけに限つて評価させて頂ければ、トップクラスです……

だが、「

正面に座る幸四郎を、見据える高音。

「風俗は数です」

「……」

それに幸四郎は何も答えなかつた。

「募集広告や知り合いに声をかけて、面接した女の子はかなりいるのに、契約に至った娘は……まだ六人ですよ、数が足りません」

「高音さんなら、十分に合格なんだけどなあ」

「ふざけないで下さいつ、面接で切り過ぎだと言つてるんです！
プレオープンは人数はそつはいらないですが、本開店ともなれば数
が要ります、少しは妥協して下さい！」

高音は机を強く叩き、幸四郎に顔を近づけた。

「しません」

幸四郎は笑う。

「少なくとも、女の子の質では絶対に譲りません、お客様も馬鹿じ
やない、万単位のお金を出して、部屋で一緒に過ごす女の子は可愛
くて、お客様を大切にする娘が良いに決まつてます、そうじやなき
や、この街のレベルでは他の店に流れていぐ、満足しなきや一度と
は来てくれない」

「坊っちゃん……」

「高音さん……」

幸四郎はソファーから立ち上がる。

「もちろん、商売だから赤字にするつもりは無いけど、俺は大王チーンを逆に潰してやるとは思つてないんですよ、親父は出来たかもしれないけど……俺は親父じやないし、大王チーンと戦う為に、お客様や女の子を利用するつもりはありませんからね」

そう言つと、幸四郎は頬を搔き、

「高音さんの意見を聞かなくて、申し訳ないですけど……俺は俺なりの精一杯、理想を叶えるためにやるだけです、じゃ今日は先に上がります」

と、事務所を出ていく。

事務所に一人残る高音。

「理想か……」

歓楽街の灯りが星空の様に見える窓際に立つ。いつの間にか、ガラスに水滴が付いていた。弱い霧の様な雨。

「理想……それは容されるか、容されないか……」

高音は呟いた。

「雨かよ……」

暗い空を見上げた。

「だめだ……」

力尽きたよつと少女は、降りたシャッターの前に座り込む。閑散とした裏通り。

「金もない、雨宿りする場所もない……そして」

「頼る者がいない……」

遠藤知世は膝を抱えた。華やかな芸能界時代の友人はみんな留守番電話。

一番、迷惑をかけた少女には連絡を取りたくない、相手からの電話にも出でていない。

「結局はあの世界は……私には……ただの蜃気楼みたいなもんだつたんだ」

アイドル時代のトレードマークだった、両方の側頭部から短く伸びたツインテールに手を触れる。

「濡れた方がいいか……なんせ、四田風呂に入つてないからな……」

「田口ちを確認しようとした携帯電話はバッテリー切れをしていた。飯は何田……二田食べてないな……電池切れで、」

「死ぬかあ……いや……死んじまつへりこなら」

空腹と疲れでつぶりかけた瞳を薄く開けた。
次に通った男でいいや。誰でもいいや。

……どうでもいいや。

男が通りかかった。

シャッターに座り込む知世の前で、足音が止まる。

「よう、兄ちゃん……」

知世は顔を上げた。
若い男だ。

「タダでいいよ、ホテル連れてって、風呂に入ってくれて……最近はラブホだつて、カラオケレストランくらいのはあるから……飯を喰わせてくれたら、後は一晩中、好きにして、多少変態プレイも相手してあげるから」

知世は薄笑いを浮かべて、そつ告げる。

「わかった」

男は領さ、シャッターに座り込む知世をそっと、抱き上げたのだった。

第16話に続く

1

「気になるんなら、まずはお風呂だね」「えっ！？」

耳元で囁く声で、知世は目覚めた。
行き倒れかけて、通りかかった男に声をかけ、抱き上げられた所
で、空腹と緊張の糸が切れて気を失ったのかもしれない。
どこのホテルのバスルームっぽい。
まだ、男は知世を抱きかかえていた。

「あたし臭い！？」
「平気だよ、服はどうか？……洗濯しておこうか？」一応、
代えはあるけど……」「全部洗濯して！ 上がつたら、食べ物だから、くれないとしな
いっ！」
「はいはい、中華は嫌いじゃないよね？」

男は苦笑する。

「なんでもいいつ、何！？ 一緒に風呂入るの？ 観たいなら、観
せて上げるけど食べ物くんなないと……」「一人で入つてね、上がるまでには御飯、用意しておくからや……
じゃあ服はその籠に入れておいてね」 知世は小さめの脱衣場に
降ろされ、男は出していく。

「なんか、掴み所のない奴だなあ！？」

知世はため息をつき、服を脱いで籠に全部放り込み、浴室に入る。真新しい浴室だ。

あくまでなりにだが、湯の張られたバスタブもなかなか広い。

「また何日、入れるか分かんないんだ」

知世は念入りに身体と髪を洗い、バスタブに身を沈める。

「ふいー」

生き返る感覚。

「脱衣場に少し入るよー」

そこを見計らつたのか、脱衣場から、さつきの男の声が聞こえる。

「着替え……下着が無いんだ、服はちょっと変わったデザインばかりで……それでも君の服洗う？」

「変わった服でもいいよ、洗ってくれつ、下着なんかどうせ……」

知世が返答すると、

「じゃ……置いておくからね」

男は知世の服を入れた籠を持って、外に出ていく。

「変な奴……でも、悪い奴じゃなさそうだ」

知世は鼻で笑うと、湯を両手ですくい、バシャッと顔を洗った。

＊＊＊

「待たせたな……つて、なんじゃこいつやー！？」

脱衣場から出た知世は、思わずノリツシ「///」。

「だからさ、変わった服しかない、つて……」

脱衣場を出ると、そこはベッドルームだ。

ダブルベッドが置いてあり、男はそこに座つて苦笑している。

「変わったつて、これはセーラー服ではないかい？」

知世は男を睨む。

「多分……でも、スカート短くない服で君のサイズに合ひそうなのが、今は無くてさ……チャイナドレスあつたけど、スリットが入つてたし、君はノーパンだしさ」

男は頭を搔いた。

「それでセーラーかい！」

知世は怒鳴るが、鼻腔をくすぐる匂いに、その勢いは衰える。

「ああ……近くの中華料理店から出前取つたよ、ラーメンはさつき
来たばかりだけど、麺が伸びないうちに食べた方が……」

知世の興味がそちらに移つたのが、わかつたのだろう、男は小さなテーブルに置かれたラーメンとチャーハンを指差した。

「いただきます！」

とりあえず、格好なんてどうでもいい、知世はテーブルに向かい膝立ちになり、箸を手にとり、ラーメンを啜る。

煮干しの風味の強い醤油ラーメンだ。

麺はちぢれ細麺。

空腹に染みる。

「ううう……」

セーラー服姿の自分が、ホテルの部屋で小さなテーブルに向かい、膝立ちでラーメンを啜る。

ラーメンに浸かっていたレンゲで、チャーハンをすくい口に入れ
る。

チャーハンの塩氣に混じる、煮干しスープの味。

「ううう」

ラーメンとチャーハンを交互に口に運ぶ。

知世の手は止まらなかつた、自分でも意地汚い食べ方だと思つ。良いんだ、これくらい貪るくらいで。

『なにせ……私は風呂といのメシで、これから……』の男に一晩中好きに抱かれるのを血の選んだ女なんだから……』

風呂上がりの汗でない物が知世の頬を伝つた。

2

「『』馳走様ッ！」

知世は両手を合わせると男を見て、

「あと5分……いや、7分我慢して！」

と、断り脱衣場にかけ戻り、洗面台の鏡に自分の姿を映す。先ずは髪だ。

少し栗色に染めたセミロングの両方の側頭部をリボンで縛り、短めのツインテールにする。

顔には薄い化粧。

口紅は付けない。

髪の毛にブラシをかけながら、顔の向きを変えて、あらゆる方向から自分をチェックする。

可愛いか！？

うん、カワイイ！

ベスト！？

ベストだつ！

ハミガキもある。

そして、知世はもう一度、鏡をよく見てから、脱衣場を出る。

「ハイ、おまたせ」

知世は笑顔で、男にウインクした。

「可愛いよ……えつと、お前はーー？」

「ち……せ」

男の座るベッドに、寄り添つ。

「好きにしていいよ」

「知世ちゃんか……」

男は知世の両肩を掴み、見つめてくる。

「じゃあ……好きにさせてもいいよ」

「う……ん」

知世は目を閉じる。

「じゃあさ、話を聞いてもらひつよ……俺は御神本幸四郎つて言ひつん
だけど……この店のオーナーなんだよ、知世ちゃんがもし行く所無
くて、行き倒れてたのならウチで働くかない！？」

「いー?」

知世は片目を開いた。

「お風呂と出前で、君みたいなカワいい娘を好きになんて勿体ないよ、だけどこの話を朝まで真面目に考えてみてくれる? 嫌だつたら朝まで寝て、出でていってくれていいよ。……これがお風呂と御飯の分」

幸四郎は知世に笑いかけた。

「じゃあさ、お店って事は? もしかして、ここは風俗店! ?」「オープン前だけどね……じゃあさ、出るなら一階の裏のドアから頼むね」

驚く知世に頷いて、幸四郎は部屋を出でていく。

「何なんだ……」

一人になつた部屋で、知世はポソリ呟く。
何だか脱力感。
ダブルベッドに身体を投げ出す。
柔らかい。
久しぶりの感触。

「寝ちまおつ……」

知世は身体の欲求に逆らわずに口を開じた。

続く

1

「遠藤知世」

翌朝。

セーラー服姿で、事務所のソファーに座った知世は、対面する幸四郎と高音に名乗った。

「遠藤知世！？」

「そう、遠藤知世以上でも、以下でもない」

田を細める高音を、知世は少し睨んでから頷く。

「高音さん……何か？」

「ちょっと待ってくださいね」

高音と知世のやり取りに首を傾げる幸四郎。

立ち上がり、高音はデスクの上のノートパソコンを持ってきて座り、膝の上で少し操作してから、幸四郎にも知世にも、画面が見える様に応接机の上に置く。

「えつ！？」

そこには、まさにアイドルといったステージ衣裳に身を包んだ知世が、舞台で歌う姿が映し出されていたのだ。

「まさか知世ちゃんはアイドル歌手!-?」「まあね……ほとんど元気には出なかつたけど」

驚く幸四郎、知世はつまらなそつて答へ、脚を組み頬杖をつく。

「どうりで……可愛いからなあ」

「首になつたよ、半年も前に」……

「なるほど……」

高音はいつの間にか、ノートパソコンを膝の上に戻していた。

「ネットじや、妊娠したとか、相方や事務所に内緒で借錢した、とかあるけど、ウソつぱちー、借錢した覚えはないし、妊娠もした覚えはないー!」

知世は怒鳴つた。

「あなたの名前で検索した記事も、ほとんどがその手の記事です」

高音が検索した記事には、アイドルデュオを組んでいた少女が、ソロで躍進すると、取り残された孤独と悩みから乱れた知世の素行が事務所の逆鱗に触れ、デュオを解散、解雇されたとある。

「IJの記事はー!?」

幸四郎がノートパソコンの画面を指差すと、

「それはマジ、相方の才能が凄くてさ、着いていけなくて自暴自棄、相方の稼ぎで遊びまくつて……本当に悪かったと思つ、首になつたのは当然だよ」

知世は俯き、罰の悪そつに答える。

「そりかあ……解雇されたのかあ」

息をつく幸四郎。

知世は顔を完全に伏せてしまつが、

「顔上げて

「えつ！？」

そう幸四郎から声をかけられて、再び顔を上げる。

幸四郎はジッと、セーラー服の知世を見据えて、言つた。

「素性は聞いたよ、知世ちゃん……では改めて頼むよ、君がその気になつたのなら、ウチの店で働いてみない？」

「オーナー……」

高音が声をかけるが、それは戒めの響きではなかつた。

「な……なんで！？」

自暴自棄に遊びまくり、事務所をクビになつた素性がばれたのに

……知世は驚く。

「……知世ちゃんのした事は良くないし、反省すべきだと思つ、けど……知世ちゃんの可愛さが、十分な合格点にあるのはもちろんだし、ウチに来るお客様は中には、精神的に疲れ果てて、何か慰めや叱咤激励されたい人もきっといる……その年齢で競争社会の芸能界を生きて、苦労して、失敗したかも知れないけど、キチンと後悔して反省したなら、君はそんな人達のチカラになれるかも知れないと思つんだ」

幸四郎は笑う。

「もちろん風俗だからね……芸能界にいた知世ちゃんには抵抗があるのも解るから……あくまでも君が良ければ、つて事」「あんたさあ……変わつてるよ」

知世が苦笑すると、

「結構、言われる」

幸四郎は肩を竦め、二人は微笑み合つた。

2

「ウチの新しいプリンセス遠藤知世さんです、店では知世ちゃんです」

高音が紹介すると、

「宜しく」

知世は腕を組みながら、軽く挨拶する。

結局は、知世がアイドルであった事は隠す訳ではないが、幸四郎と高音の胸の内にしまう事にする。

当人は気づかれたら、気づかれたらだよ、と知世は言つてくる。

「仲間だ！ 胸が無い」

「で、ですね！ 幼い方でよかったです」

顔を見合わせるまゆつと恋音にて、

「おこおこねい」

と、知世は目を細めたのだった。

知世は挨拶の後、一階の部屋に案内される。
プリンセスオーフショーンでは、この部屋は汚くしない、ダブルベッドを置く等の条件を守り、自分で自由にしてアウトする事になつている。

「迷うなあ……あたしは部屋は殺風景なんだよ」

知世は案内した幸四郎の前で、ベッドに寝転ぶ。

「じゃあ、そうすればいいよ、知世ちゃんの生活感があれば良いんだ、住んでた部屋を思い浮べて」

「えー！？ テレビにゲーム機が一種類あつたなあ、結構ゲームはやつた」

「じゃあ、それでいいよ、ゲーム機置いて、知世ちゃんの部屋らしく、してくれればいいよ」

「置くのにゲーム機買ひのかよ？」

知世が眉をしかめると、幸四郎は頷く。

「買つていいよ、領収書を切つてくれていい、ある程度までなら、経費で出せるからや、とにかく知世ちゃんらしい部屋にしてー。」

その答えに、

「お前、本当に変わつてんなあ……」

知世は寝転んだままで、幸四郎に笑つた。

「まあ、とにかく宜しく……知世ちゃん、お店のHース期待してるのであるから！」

「期待してもらひるのは嬉しいよ」

知世は寝転んだままで、幸四郎を見つめる。
意味ありげな瞳。

「知世ちゃん！？」

ベッドに座る幸四郎が首を傾げると、知世は、

「オーナー、あたしのあつちも試さないと、いけないんじやないの

？」

クスリと笑つて、両手を広げる。

「知世ちゃん……」

「き……て……」

優しい囁き。

思わず息を呑む。

幸四郎の知らなかつた知世の色氣が本能を駆りました。

続く

第1-8話「ホームページを作りついで」

1

「はあ……はあ、知世ちゃん……やつぱは知世ちゃん、もの凄く可愛かつた、最高だつたよ……んつ」

「ふう……ふう、幸四郎……んんつ」

裸の幸四郎と知世は、互いの荒い息を整える間もなく、キスをする。

既に、時間は夜の10時を過ぎている。

「知世ちゃんが、可愛くて時間忘れちゃつたよ」

「三回もするから……あんなに激しく……」

身体を起にしてベッドに座る幸四郎に、知世はシーツを手元に寄せて上半身を起こし、乱れた両サイドのツインテールを気にしながら、苦笑する。

「知世ちゃん、お風呂入れば？」

「お前もね」

「一緒に入るうか？　この間、入れそびれちゃったしね」

バスルームを指差す幸四郎。

「つたぐ、でも一緒にお風呂に入るのも練習？」

知世が首をかしげて訊ねる。

「ん~、個人的なお願ひ……だね
「お願いなら、しゃあないかな?」

幸四郎が頬を搔きながら答えると、知世は笑顔でベッドから降り立ち、胸元から巻いたシーツをストンと落としたのだった。

「事務所でアパートの部屋の鍵を渡すかい」

「うん」

風呂から上がった一人は店内の廊下を歩く。
知世は髪の毛をバスタオルで拭きながら、幸四郎についていった。

「知世ちゃん、もう十一時近いから、今日せいいに泊まつていった
ら?」

「風呂でも、誰かさんが我慢できない、とか言に出すから、こんな
時間になつたんだと思うけど……」

「じめんね……」

知世に眉をしかめられると、笑いながらドアを開けた幸四郎。

「」とばんわ、幸四郎ちゃん!」

予想外の笑顔。

そこには、高音と一緒に応接机の上のノートパソコンに向かう、くるみがいたのである。

「な……なんで、こんな時間に？　高音さんも帰ってないんですか？」

驚く幸四郎。

「坊っちゃん、『苦勞様でしたね……知世さんに部屋を案内するのに、随分と時間をかけられた様で』」

高音の手は細い。

後ろにいた知世もバスタオルをパツと隠すが、時すでに遅し。

「幸四郎ちゃん、くるみは今日は畠中さんとお店のホームページを立ち上げようつてね、色々とアイデア出しながら、頑張っていたんだよ」

くるみも流石に、知世との事が解らない訳では無いだろうが、それには触れずノートパソコンの画面を指差した。

「悪いな……遅くまで」

「平気、平気、だから画面を見て！」

覗き込みながら謝る幸四郎に、くるみは屈託のない笑顔を浮かべる。

「プリンセスオーラ・ショウの公式サイトか、お店の場所に……女の子の情報、イベントのお知らせか、アイドルみたい、結構上手く出

来てるな

ほり、といった感じで幸四郎が感心すると、
「そういうイメージで造りました、まだまだですが、女の子の情報
等は、お客様が最も知りたい情報だと思しますから、充実させたい
ですね」

高畠が答える。

「くるみと高畠さんも裏方日記書いて、つて話してたんだ！」

くるみは声を弾ませる。

「女の子の情報は綺麗に画像をアップさせて、それぞれの女の子につぶやきとか日記とか書かせると良くなーい？」

知世も画面を覗き込むと、

「やうだねえ！ メイン画面も週！」と女の子を表紙みたいにした
いね、知世ちゃんメイン画面飾る？ 近くに『真館あるから、撮つ
てもうおつよ」

くるみは知世に笑顔で振り返る。

「え……初っぱなから真打しが出たやつと、後に悪いからなあ

「じゃあ、くるみが表紙やうつかな？」

「あんたがやつてびうする、他にも女の子はいるだろ？ がよへ」

「いやあ、可愛すぎる裏方とか……」

「自分で言つなつ！」

「てへへ……知世ちゃんより、明らかに胸はおつきこんだよ？」

「見りや判るわッ、女は胸じゅないつ！」

軽妙にやり合ひ、知世とくるみ。

何となく、一人は合ひそうな気が幸四郎にはした。

結局、四人は明け方までノートパソコンの画面に向かい、ああでもない、こつでもないを繰り返していたのだった。

2

「まあ、正解ですわね……極めて正確な判断力をオーナーが持つて
いられたのには、安心しましたわ」

「あ、ありがとう」

楓の言葉に頭を搔く幸四郎。

昼下がり、二人はアパートを出て、商店街を並んで歩いていた。
向かう先は写真館だ。

紹介してくれた、くるみも先に行つて、待つていてくれる予定である。

楓を連れているのは、公式ホームページの扉のモデルとしてだ。
くるみや高音と話し合つた結果である。

月替わりなどにするにしても、やはり始めはルックスを魅せる事に関して他から抜けてる、知世か楓か、という話になり、その場にいた知世が、乗り気でない様子だったので、楓に頼む事になつたのだ。

翌日、幸四郎がそれを楓に話すと、彼女は非常に乗り気で、顔馴染みであるくるみに写真館に事情を話して、協力してもらつ事になつたのである。

「お~い

岡林写真館と書かれた商店街の一角にあるフォトスタジオの前で、待つていたくるみが幸四郎と楓に手を振つてきた。

「悪いなぐるみ、じゃあ、入るつか?」

「ダメだよ、まだ来てないもん」

幸四郎が声をかけるが、くるみは首を振る。

「来てない? 高音さんは今田は役所に用事があつて来ないぜ」「違うもん」

幸四郎が怪訝な顔をすると、くるみはまた首を振つた。

「カメラマンですわね? わたくしを撮ること、一流のカメラマンが必要だと、手配されたのですか?」

「違うって」

「じゃあ、なんで……ふあああつ!?」

少し自信過剰気味な問いかけを否定されて、怒りかけた楓だが、突如、妙な声を上げた。

「ん～つ、良い尻だ」

「な、なんなんですかよつ？　いきなり人のお尻を触るなんてつー」

そこには、一人のスッカリ白くなつた髪をかんざしで後頭部に纏めた老婆が立つていたのである。

「な……ま、まるで、角のタバコ屋さんのお婆ちゃんみたいな、あなたが何で、わたくしにこんな事を突如、しますのよつ？」

「ふえ、ふえ、ふえ」

楓が、妙に的確な言い回しで老婆を指差すと、老婆は愉快そうに笑い、くるみが声を上げる。

「待つてたよ、コスプレ婆ちゃん！」

「コスプレ婆ちゃん！？」

くるみの口から出た驚愕の言葉を、楓と幸四郎は互いの顔を見合ひ、声を合わせて、思わず復唱してしまつのであった。

第1-9話「たまたまじゃないの？」

1

「よひ、あんたが御神本の後継ぎかい？」

老婆がジトリと、幸四郎を見る。

「え？　はい、御神本幸四郎です、はじめまして宣しくお願ひします
す」

「おひや、ワシは……」

「コスプレ婆ちゃんー！」

くぬみが割り込む。

「おー、くぬみつ」

「ええ、ええ……「コスプレ婆でええよ」

幸四郎がくぬみを睨むが老婆は笑った。

「コスプレ……するお婆ちゃんですのーーー！」

何だか憐れみの視線を送る楓に、

「違つッ！　ワシは様々な衣裳の貸し出しをこの街で仕切るババア
だ

と、コスプレ婆さんは怒鳴り返したのだった。

「ナウなんだ」

へぬみは両手を後ろ手に組み笑つ。

「なるほど……風俗の貸衣装屋さんですか？」

「平たく云ふばな、様々な衣装を用意できる——」

頷く幸四郎に皿詰満々に答えるコスプレ嬢。

「それ」……長年、貸衣装屋をやつてゐる……

コスプレ嬢は、ジーツとくらみを見つめる。

「なに?」

「身長156?、バスト89、ウエスト61……」

「つるああああ、やめてよ」

これなじ口走つたコスプレ嬢は赤面する、へぬみ。

「当たつてゐの?」

幸四郎が詫へと、

「……うそ」

へぬみは恥ずかしそうに口をつとめ頭こいたのだった。

「……それより、今日のモデルは楓ちゃん、そつち、そつちの女の子ー。」

「おへ、そつちかー。」

くみが楓を指差すと、コスプレ婆は楓に振り返り、ジトリと見る。

「宜しくお願ひしますわ」

楓は腰に右手を当て、軽く挨拶して直立。
くみと違い、まるで照れない、身体を注視されるのに躊躇がないのだ。

「はー……」

「コスプレ婆は一矢口と笑い、

「オーナー、いいオンナじゃのー……」

と、しみじみと呟く。

「でしょう、衣裳の方、宜しくお願ひします」

幸四郎がニッコ微笑むと、

「まかせこつ、格安で立つ衣裳を用意してやるわー。」

コスプレ婆は親指を立てたのだった。

「うとううん、色っぽい、可愛いね」

パシャ……パシャ

フラッシュショウが煌めく。

五十代前半の白髪混じりの紳士風の男が楓にカメラを向ける。

岡林写真館の主人、岡林武雄だ。

まるでグラビア雑誌のカメラマンである。

楓の格好は胸元の開いたドレスにティアラをつけた中世のお姫様。アップにした髪をストレートに下ろすと、イメージはまた変わり、

高貴な姫の雰囲気が漂つ。

「プリンセスオーラショントーク店名じゅから」の、始めはベタじゅが、お姫様じゅ? 着こなすには抜群のプロポーションが必要だが、あの娘なら問題は無いわい」

「可愛いですね、店のイメージにも合います、ホームページだけでなく、宣伝用のポスターとかにも使いたいですよ」

満足気なコスプレ婆、それは幸四郎も同じだ。

「そうじゅり?」

「ええ、いい衣裳を選んでくれました」

「わしの店の服は特殊な加工で、不自然な光沢など出来ず汚れに強い、ミルクをこぼしても拭けば、平気じゃー」

「ミルクをね……」

苦笑する幸四郎。

「先代にも世話になつたからな、サービス価格で貸し出すから、コスプレフェアとかをせい！」

「シシマリ笑い、提案をしてくるコスプレ婆に、

「良いですね、開店して店がこなれたら、コスプレフェア……是非とも、ご協力を」

と、幸四郎は笑顔を浮かべた。

2

「はい、終わりつ！ 楓ちゃん、ホントに最強」

岡林は力強く頷き、撮影が終了する。

「岡林さんもう苦労様ですわ」

愛想よくニッコリ笑い、ポーズを解く楓。

「今の撮影データ届けますから、お気に入りのを坊っちゃんが選んで、ホームページにお使い下さい」

「はい、ありがとうございました」

岡林に幸四郎は、丁寧に頭を下げた。

「今はこうこうのモデジカメかあ～」

「ホームページに載せるならデータがある方がいいからね」

妙に感心するぐるみに岡林は笑った。

「楓ちゃん、ご苦労様」

幸四郎は一旦、コスプレ婆と一緒に裏に下がり、ドレスから着替えてきた楓に声をかける。

「ええ……ああいう服は人を選びますわね」

「似合つてたよ、本当にお姫様みたいだつた、楓ちゃんを連れてきて、大正解」

そう言つて、幸四郎はジュースを差し出す。パックの小さなサイズのオレンジジュース。撮影はスポットもあつたし、汗もかいていた様子だつたので、合間を見て買つてきた物だ。

「……」

それを見つめる楓。

「オレンジジュース、嫌いだつた！？」

「そ、そんな事ありませんわ……いただきますわ」

幸四郎がその様子に首を傾げると、楓はそつ答えてから、ジュースにストローをさして飲み始めた。

「岡林さんにコスプレ婆さん、じゃあ……お世話になりました」

「また、今度」

「コスプレフェアを忘れるなよ」

「また、じゃ～ね、幸四郎ちゃん」

「ぐるみも世話になつたな、ありがとう」

帰り支度をした楓と並んで、幸四郎は岡林やコスプレ婆さん、くるみに挨拶をして歩き出すが……

「待て……」

「コスプレ婆さん幸四郎だけ、呼び戻され、耳打ちされる。

「ぐるみもええ女になつとるナビ……楓もいこ女じやのう」「そんな事を言つのに、呼び戻したんですか？」

幸四郎が怪訝な表情を見せる。

すると、コスプレ婆はニヤリと笑い、

「あの娘……撮影が終わった時に、裏で岡林に差し出されたジュースを、自分は身体の管理があるからジースト類は飲まない、と断つてたんじやぞ」

と、告げてくれる。

「え……でも……」

「おぬし……脈があるんじゃないのか？ 職業上のシバリもあるが、

しょせんは男と女、あんな美人に脈があるなら……男ならいってしまえつ！」

コスプレ婆は幸四郎の背中をバシッと叩いた。

「何をコソコソしますのよつ？ オーナー、早く帰りますわよ
「ああ……つふ」

つまらない事だ、たまたまじやないか？
そつは思いながらも、幸四郎は悪くない気分で、楓に返事をした。

続く

第20話「幼馴染み」

1

「こんな感じだけど、どうかな？」

事務所の隅に新たに設けられた、デスクトップパソコンのスペース。

その隅に集まる、みなみと恋音、知世に向かって完成まじかのホームページを開き、くるみは笑顔で振り返る。

「うわあっ、楓さん、可愛いですうー。」

「ふむ、まあ……トップページを飾るのを譲つてやつたんだから、これくらいはしてもらわんと」

「恋音ちゃん、そんなに驚かなくてもいいわよ、恋音ちゃんだつて、こんな可愛いお姫様衣装着れば、楓なんかに負けないし、パソコンの画像は修正できるから、つて誰かに聞いた事あるもの」

トップページの楓のお姫様姿にそれぞれが素直に、また勝手な感想を述べているが、不評はない。

何か突っ込んで、藪を突くのも得策では無いと、幸四郎は、自分のデスクで仕事をしている。

「オーナー」

妙に抑揚のない、みなみの呼び声。
無視してしまいたいが、それは出来ない。

「何だい？」

「なんで……楓？」

やはり、幸四郎の予感は的中した。

「それは……やつぱ楓ちゃんが、写り方とか撮影とかにも慣れてるからね、それにトップページは週替わりにしてもいいと、高音さんとも話したから、近づいてる時に恋音ちゃんや、みなみちゃんの番もあるよ」

「わづなんだあ」

田を細める、みなみ。

絶対に訊かれる、踏んでいただけに用意していた答えた。

「まあ…… そうこうなら、仕方ないか……」

みなみも出来上がった物の良さを認めていない訳では無かったので、それ以上は突つ込めないのだろう。案外、素直に引いてくれたので幸四郎は一安心したのだった。

「ほらあ、みなみちゃんも幸四郎ちゃんに絡んでないで、話を聞いて！ それでね、それでね、女の子みんなの「一erner」もあるから、そこにつぶやいたり、田記を書き込んだりすると、ファンのお客さんが喜ぶかもしないー」

くぬみが楽しそうに説明して、マウスを操作すると、みなみ達の名前が並んだ画面が映る。

「携帯の写真とかも添付出来ますよね?」

「もちろん!」

恋音の質問に、くるみはウインクを返す。

「まるで、芸能事務所のファンサイトだな、細部はこれからだらつけど、よく出来るよ」

知世も感心するが、

「でも……携帯も口クに扱えないし、ましてパソコンなんて無理」

と、みなみは難しそうに眉をしかめる。
しかし、くるみはそんな、みなみに対しても、

「くるみが教えてあげるし、携帯からでも簡単にアップ出来るから
平氣」

と、笑顔を絶やさずガッツポーズを見せるのであった。

「後は……高音さんがもうつてくる書類があればオッケーだな……」

みなみ達が帰宅した後も仕事を続けていた幸四郎は、一段落が着いた事を確認すると、目をしばたき、オフィスチェアで背筋を伸ばす。

新大空町での風俗営業は、特別に規制が緩く、自由度は高いが、お役所の管理があるだけに、申請や許可など書類が多い、この街での経験の長い高音がいなければ、とっくに挫折していただろう。しかし、いつまでも高音に頼る訳にはいかない、と幸四郎自身もかなりの量の書類とこれまで、格闘してきたのである。

「何か……出前でもどるかな？ 何でもいい屋に頼むかなあ……」

幸四郎は近くの店の名前を呟くが、ドアが開き、空腹をくすぐる匂いが漂ってきたのである。

「幸四郎ちゃん、お腹すいてるよね？」

笑顔のくるみ。

手に持ったトレイの上には、スペゲッティが乗せられている。

「くるみ……何で？ 帰ったんじゃないのか？」

「帰つてほしかったの……厨房でメニューを研究してたら、まだ幸四郎ちゃんが残ってるから、お腹空ってるかな、と思つて作ったのにい！ この明太子スペゲッティは、くるみが自分で食べちゃうつ！」

「待つた、待つたあ……わるい、わるい！」

背中を向けるくるみを慌てて、幸四郎は止める。

「こ～やー。」

「“めん、”めん……食べたい、くるみの作ったアルデンテ食べたいい！」

「い！」

頼み込む幸四郎に、

「仕方ないなあ、じゃ……くるみが食べさせたあげるから、感謝して食べるんだぞ?」

と、くるみはニッコリ笑つた。

「はい、あ～ん」

「あ、うん……」

応接用のソファーに座る、幸四郎の口にフォークに巻かれたスペゲッティが運ばれる。

明太子スパゲッティ。
程よい辛味。

「美味しい?」

「うん、凄くな

「うれしい」

隣に座るくるみは、素直に喜ぶ。

「客にも出せるな」

そう幸四郎が褒めるが、

「う～ん、お客さんに出すのは無理かな?」

と、笑う。

「何で？ そこまでコストかかるつてないだろ？」

幸四郎が首を傾げると、くるみは悪戯っぽくウインクしながら、「お腹すかした幸四郎ちゃんへ、くるみの愛が入つてますからー。お密せんにも出せないんです」

そう、Hツヘンといつた感じで答える。

「へるみ……」

無性に嬉しくなり、微笑む幸四郎。

「色々ありがとな……」

愛しい幼なじみへの素直な感謝。

その言葉にくるみは、何も言わず、ただ嬉しそうに口元を緩め、「クリと頼いたのであつた。

続く

1

「いよいよ、プレオープン真近ですね」

「ええ……女の子にも、さっと基本的な作法は教えました、お客様にお酒も作って上げられないのも情けないですから……」

高音は風俗雑誌を応接机を隔て、向かい合つ幸四郎に見せる。

「これは…？」

風俗雑誌を覗き込む幸四郎に、

「月刊トップガール、新大空町の風俗情報ならば、ダントツの読者からの信頼度と言われて、これを読まずに新大空町には来るな、とまで巷のファンに言われている、風俗雑誌です、載っている情報はほぼ新大空町の物です」

と、高音は答える。

月刊トップガール。

大きさも薄さも、雑誌と言つよりはテレビ情報誌のようだ。カラー表紙は可愛らしい系の女の子が笑顔を浮かべている。

「一見、アイドル雑誌だ」
「ですね」

幸四郎の素直な感想に高音は同意した。

「ちょっと失礼します」

手に取り、ページをめぐると、表紙に出ていた女の子が、「今月のトップガール」として、数ページのカラーで特集されていた。写真は何かのコスプレした物から、ほとんど全裸の物まで様々だ。店の名前も明記され、女の子が紹介されている。

「月一のその特集を組まれた女の子は、指名もつなぎ盛りらしいです」

「可愛い女の子ですもんね、こんな風に雑誌に載つてたら、指名しあくなっちゃいますよね、一躍売れっ子つて感じで」

「しかし、この街で働く女の子はたくさんいます、月刊の雑誌の特集ページどころか、この雑誌のオススメの女の子コーナーに載る事態が大変なんです、お店で人気があるのはもちろん、雑誌記者のお眼鏡にかなわないといけません」

「なるほど……」

高音の言葉に頷いて、ページをペラペラめくつてから、

「じゃ……フレオーブンに、その雑誌記者を招待しちゃいます?」

と、顔を上げる幸四郎。

「察しが良くて、助かりますね」

高音はフツと笑った。

「お風呂こきましょ」

胸元に洗面器を持つ百合乃に部屋を訪ねられ、

「ちよつと待つて」

みなみはちよつと答え、ドアを一回閉めてから、大急ぎで支度を整える。

「恋音ちゃんは？」

「まゆりちゃん達と先に行つてますよ」

「酷いなあ……あたしを置いていくとは、こつもよつ早い気がするんだけど」

「そうですか？」

安普請のアパートだ、鏡を観て、色々とチックをしながら、ドアの向こうで待つ百合乃と会話できるのが、少ない長所の一つかもしれない。

「お待たせ」

「はい」

みなみが外に出ると、百合乃が壁に背をかけて待っていた。

切り揃えた前髪。

長い黒髪を腰の辺りで束ねている。

優しい顔立ちの美人で若々しく、言われなければ彼女の事を三十四歳と思う物はないだろう。

気にならない程度にふくよかな体つき。
豊か、という表現では足りない胸。

「どうしました？」

「いやあ……百合乃さんと銭湯行くと、みんなが百合乃さんの身体
見てるから、面白いんだよね、女の子同士でも見ちゃうよ」

みなみが笑うと、

「もう……同性でも視線があると、結構恥ずかしいんですよ」

百合乃は困った様に首をかしげた。

すっかり陽の落ち、街灯の点く商店街を、みなみと百合乃は歩く。
商店街の店のシャッターは閉まり始め、それと入れ替わる様に出
勤を始める女性達。

新大空町、夜の部の開演と言つていいだろ？

「プレオープン……近づきましたね」

「そうだね……」

女性達を見て眩く百合乃、みなみはそのまま答えて、

「やるからには……売れっ子になつてやる」

と、下唇を噛んだ。

「本日……ボイラーカー故障の為、休業させていただきます」

店頭に張り出された、それはスーパーのチラシの裏に書かれ、セロハンテープ一枚で張られたにもかかわらず、毛筆で達筆だ。

「なああああつ！」

絶句するみなみ。

プリンセスオーラの女性寮となつてアパートは風呂が無いので、この銭湯を皆が利用しているのである。

「「めんね～、いつもみてくれる業者さんがたまたま休みで……旅行先から明日帰つてくるんだって」

既に馴染みとなつて、みなみと歳の変わらない銭湯の娘がひよい、と顔を出して謝つてくる。

「タイミングわる……恋音ちゃんとか来た？」

みなみがうなだれながら訊く。

「あのね、恋音ちゃん達はお店のお風呂に入るからいよ、つて……本当に「めんなさい」

「まあ、しようがないよ」

謝る銭湯の娘に、みなみはそつ答えて、ジーパンのポケットから携帯を出す。

見れば、恋音から件名、銭湯休みです、と書かれたメールが着ており、内容には仕方がないから、店舗の自分の部屋に備え付けの風呂を借ります、と締め括られている。

「気づかなかつたあ、どうにも携帯には慣れない、メール着信音くらい鳴つても気づかないな」

頭を搔ぐみなみに、

「私達もそうしますか？」

百合乃が肩を竦める。

だが、みなみは首を縦に振りながらも、

「そうだね……でも、今日はオーナー、アパートにいたんだよなあ

と、呴き……慣れない手つきで携帯を操作して、電話をかける。

「あ～、オーナー？ 今、家にいるの？ 実はね、ご指定の銭湯が今日は臨時休業なんだ、だからさ、今からオーナーも店にお風呂入りに来たら？ え？ 店には自分の風呂なんかない？ 平気だから！ 裏から入つて百合乃さんの部屋に来てよね！」

そう言つて電話を切ると、黙つて見ていた百合乃に、みなみは、

「三人で入るうね」

と、二ツコリ笑つたのであつた。

続く

「みなみちゃん、いきなり……」

「いいでしょ？ まつたくお互いをしらないわけじゃないんだし、この際、お客様とお風呂に入った時の練習がしたいの！ だいたい、こそこれと言われたとおりに、百合乃さんの部屋に来たんだからー！ 期待してなかつたとは言わさないわよー！」

「まあ、充分な期待をしてきたよ……だいたい、二人と一緒にお風呂に入ろうと、言われて断る男がいるとは思えないけど」

小奇麗な店舗の百合乃の部屋。
バスタオル姿のみなみに、バツの悪そうに答える幸四郎。

「じゃあ、私達の練習相手になつてくれるわよね？」

「わかった、じゃあ、みなみちゃんと百合乃さんのお客さんになつたつもりで、素直になるよ……実は我慢できないしね」

素直に白状し、幸四郎が笑うと、

「ええ、よろしくね」

「幸四郎さん、お願ひしますね」

男子ならば、何も思わずにはいられない程に魅力的なバスタオル姿で、みなみと百合乃は幸四郎に微笑を返したのだった。

「はあ、はあ……幸四郎」

「幸四郎さん……」

「一人とも可愛過ぎるよつ……」

白い泡にまみれて、交わる三人。

みなみとも百合乃とも、何度もいたらめに交わる。

「ゆ、百合乃わんつー も、もひつ……やばいつー」

歯を食い縛る幸四郎。

「はふう……じゅあ、最後はみなみさんと私の……胸で……ふふつ

普段の清楚さを一瞬、忘れさせる妖艶な笑みを見せ、百合乃は幸四郎にキスをして、一旦離れる。

「じゃあ、幸四郎……最後、おもこつせりね

そして、みなみが入れ替わりに幸四郎にキスをし、百合乃と身体を寄せ合ひ、幸四郎を激しく攻め立てる

「うわああああつ、あ、気持ち良過ぎ、だめだつ……うつー」

あまりもの快感に幸四郎は声を上げて、果てた。

「帰らうかあ」

「そうだね……」

「ですよね？」

並んでベッドに寝転がる三人。

服なんて、もちろん着ていない。

時計の針は、午前一時。

「幸四郎がそのままベッドの方も、なんて言つから……」

「みなみさんじや、ありませんでしたつけ？」

「そうだよ、みなみちゃんだよ」

「……そうだつけ？ どうでもいい、したのは幸四郎だし」

「面白い、二人が相手なんて贅沢すぎてね、最高だよ」

幸四郎が、自分の左右で寄り添つてぐる、みなみと百合乃を優しく引き寄せる

「もう、じうじうシチューと滅多に無いからね」

「そうですよ、次の練習は一人つきりで……」

一人はそう笑みを浮かべながら、幸四郎の両頬にそれぞれキスをしてきたのだった。

「落とすんじゃねえぞ、もつとゆっくり慎重に運べー。高音ひやん、どの辺りだっけ?」

家電屋の親父の声がホールに響く、若い一人の従業員に怒鳴りつけながら、傍らで見守る高音に振り返る。

「そこにです、少し高めの場所、印をつけてます」

「ああ、あそこね、あいわかつた!」

高音が答えホールの壁を指差すと、家電屋の親父は額を、脚立を用意して、

「よおし、ゆづくつな、ゆづくつな!」

と、手招きながら、大型モニターを壁に掛ける作業を始めた。

「なるほどなのです、殺風景に空いた壁の、あの部分はモニターを置く事にしていたのですね!」

モニターに興味津々で、取り付けを見守っていた巫女服姿の天城佐久耶は、手の平を打つて妙に感心している。

「やうなんだ、ここにはオーケーションの時に女の子」と撮った映像を、ミュー・ジッククリップみたいにして流そうと思つてゐるんだ」「ミュー・ジッククリップ……ハイカラなのです!」

「ハイカラ……」

幸四郎は佐久耶の言葉に苦笑します。

「どこか不思議だが、それが和ませる可愛い娘だ。」

「あの、大型モニター高そうなのです、時価にして、数億円は下らないのです」

「んな、わけないだろ？ 新品では数百万の品の中古、閉鎖したコンサートホールのを頼んで、安くレンタルしてもらってるんだよ」

「冗談か、本気か解らない佐久耶のボケに突っ込む。

「でもボクはあそこまでのテレビは観た事ないので、島にあつたのは、せいぜいボクが両手を広げたくらいだったのです！」

「あそこに佐久耶ちゃんが映るんだからね、プレオープンには間に合わないけど、本オープンまではみんなの魅力を伝えられるような映像を撮らないとな」

「はいなのです！ ボクも頑張つて映るのです！」

「頼むね」

幸四郎は配線を繋ぎ、取り付けられていくモニターを見ながら、グッと拳を握る佐久耶の頭を軽く撫でたのだった。

「んん~、ありがとうなのです……あ、ボク、の人達にお茶と菓子を買つてくるのです、作業をしてもらつて悪いのです！」

しばらく嬉しそうに撫でられていた佐久耶だったが、作業が終わりに差しかかった所で、思い出したように幸四郎に告げて、いきなり表に走り出す。

「あ……佐久耶ちゃん、お茶菓子は高音さんが準備を……」

「美味しいのを買つてくるのです！」

やう呼び止めようとするが、テケテケと走り去る佐久耶。

「あ～、いつちやつた」

走り去る巫女服を見送りながら、幸四郎は頭を搔いて、

「高音さん、申し訳ありませんが、用意したお茶菓子は取つて置いて、佐久耶ちゃんが買つて来るお茶菓子を出して下さー」と、高音に申し入れるのであった。

続く

新大空町では、朝日が一日の終わりを告げる。

幸四郎が店の前を掃いていると、勤務の終わった女の子達が通り過ぎていく。普段は店にいる時間ではないが、昨夜は迫ったプレオープンの作業をしているつか、いつの間にか寝てしまい、朝になってしまったのである。

「坊っちゃん、元氣かい？ 開店近いね！」

「おはよひびわこます」

仕入れから帰ってきたのか、軽トラックに乗った八百屋の親父が車を止め、話しかけてきたので、挨拶を返す。

「そろそろ開店だろ？ そうしたら、果物贈らせてもらひよー。」

「ありがとうございます、お店でも、お待ちしますからね」

近所の氷配りに頭を下づけ、さつ氷ない営業トークをする幸四郎。

「母ちやんにバレたら殺されるな、この間、恋音ちやんに挨拶されたけど、可愛いよなあ、ああいつ娘を美少女って言つのかな

親父はニヤける。

「それを聞けば……恋音ちやんもきつと喜びます、親父さんが來たら、スゴいサービスしてくれるかもせんね？」

「セールストークと分かっていても、嬉しいし、期待しちゃうねえ、

志音ちゃんのタنسのヘンクリを持ち出すかあー。」

親父の「冗談。

周囲ではおじじ夫婦で通つてこる。

「家庭内不和になられたら、果物好きの志音ちゃんはを悲しますから、あくまでも」自分の楽しめる範囲で……」

「へへへっ、ちげえねえや……じや、坊っちゃん、またな」

「ええ、また」

幸四郎の返事に、親父は頭を搔き、軽トラックを発進させていく。朝焼けに照らされる、仕入れた野菜や果物を載せた軽トラックの走り去るのを見送り駄々。

「やうやう……」

「なんですね？ オープンするの」

女の子の綺麗で透き通つた声。

「えつーー？」

急に独り言に翻つ込まれてしまい、幸四郎はビックリして振り返る。

「ふふふつ」

そこには、一人の女の子が笑っていた。

白いパーカー、碧いロングパンツにスニーカー。

背中くらいまでの黒髪のストレート。

黄色いカチューシャで留め、前髪は上げており、そこからおでこに幾筋かの髪を垂らしている。

パツチリとした一重の瞳に聰明な印象を与える、細いフレームの眼鏡。

鼻筋から唇は、特に強い個性は無いが、綺麗にまとまっている。

それは輪郭にもいえ、細過ぎるでもなく、太くもない。

どこでなく、全体で高いレベルの顔立ちで、女の子と少女が混在した可愛らしさだ。

パークーの下のカジュアルシャツの三番目まで開けられたボタン。程よい膨らみの胸元。

脚もピツチリしたロングパンツをキチンと着こなせている。

「『J……『じめんつ』」

幸四郎は数秒間で、彼女を見定めた行為を素直に謝った。

開店準備に入つてから、一体何人の女の子を直接で、紹介所で、見定めた事だろう？

その中で、幸四郎はいつの間にか数秒間で、女の子の姿から雰囲気を見定めるようになつてしまつていてるのである。

職業病の一種と言つて間違いないが、ある程度觀られるのを許容する面接でもない限り、女の子にそれをしてしまうのはセクシャルハラスメントに取られても仕方がない。

「いいですよ、もつと観てもらつて」

「えつ？」

意外な答えに、幸四郎は一度は背けた視線を、彼女に引き戻す。彼女の笑顔を止んでいなかつた。

さつきも感じたが、その声は透き通り、まるで一流演劇女優のそれだ。

そして、彼女は一度、幸四郎をジッと、真顔で見つめた後、

「このお店で私を雇つてくれませんか？」

そう言つて微笑んだのである。

2

「近衛菜ノ花いのえ なのはなです」

事務所の応接ソファーに座つた彼女は頭を下げて、名乗る。

「俺は御神本幸四郎、この店のオーナーだよ」

「話は紹介所で聞いたので、さつきは何となくそうかな？ と、思つて声をかけましたが、やつぱりお若いですね……私と変わらないかもしれない」

菜ノ花はクスリと、控え目に笑いながらバックから履歴書、財布から免許証を出して応接机に置いた。

「ああ、近衛さんは俺より、一つ下だね？」

「近いですね、ほぼ同級生扱い」

幸四郎が年齢を確認すると、菜ノ花は肩を竦める。
みなみや恋音達よりも年上。

「みんながオーナーを同級生扱いだよ」

「フレンドリーなんですね、みんな若いんですか？」

「ははは……フレンドリーか」

その言葉に乾いた笑いを返してしまつと、

「苦労してみたんですね？」

菜ノ花は眼だけ笑わせて、口元を手で押さえる。

百合乃に感じるような世間知らずのお嬢様の風ではない、楓の様なプライドと自信が支える風でもない、気性からの落ち着きが彼女からは感じる。

ブルルルルルツ、ブルルルルルツ

採用の条件などを話していると、幸四郎の胸ポケットが震える。

「い」めんね、ちょっと出るね

幸四郎が携帯を取ると、それは高音だ。

菜ノ花の面接が急だったので、高音を呼出していたのだった。

「ああ、高音さん……メール見ました？ 急なんですが、面接希望の女の子が来ました」

「見ました、身分の照会をきちんととして、採用の判断はお任せします」

「え、来ないんですか、何か用事でも？」

意外な高音の返事に、幸四郎は理由を聞く。

「プレオープンのお客様の方々に会う約束なんです、グループの馴染みのお客様なので、予定の変更はなかなか出来ないので……」

「苦労をかけます、わかりました、採用の判断は僕がします」

高音を労うと、

「ええ、坊ちゃんなんぞ……」

電話の向こうで彼女が少しづらつた気がした。

「？ それじゃあ……」

僅かな違和感を感じて、幸四郎が電話を切ろうとしたが、高音は、

「採用と決めたなら、あちらの方も試して下さーね」

と、言い残し電話を切ったのだった。

「えっと……」

幸四郎が携帯をしまいながら、次の言葉に迷つと、菜ノ花はそのまま前の通りの可愛らしい笑顔を浮かべ、こう言った。

「受話音量高いですね、で？ 私は採用ですか？」

続く

... גַּם־בְּבִירְבִּשְׁתָּוּבָה וְבְבִירְבִּשְׁתָּוּבָה...

「か、可愛いよつ……な、菜ノ花ちゃん」

よく響く、情熱的な声を上げる菜ノ花、幸四郎は昂ぶりを増し、更に激しく彼女を求める。

「ふはああああつ、オ……オーナーああ
「な、いつ……こぐよひ、こぐよひ……ひひひー。」

汗だくの抱き合い。

菜ノ花の豊かな胸に顔を埋め、彼女から香る柑橘系の香りに包まれながら、幸四郎は幾度目かの絶頂を迎えたのだった。

「はあはあ……か、可愛かつた……わ、最高だよ」「ま、満足して貰えたなら……ふう、オーナーも……凄かつたです……んっ」「んんっ……」「んっ」

幸四郎と菜ノ花は、互いに荒い息を整えながら微笑み合つと、少し長めのキスを交わすのだった。

「蜜柑かな？」

「柚子ですよ……」

胸板に抱き付いた状態の菜ノ花に聞くと、それだけで質問の意味が解った様で、彼女は答えた。

「柚子かあ、柑橘系の香りだとは思つたんだけど」

「香水というより、手作りの美肌液みたいな物なんです、貰つたんですけど、気に入っちゃって……お嫌いですか？」

「いや……いい匂いだな～、って思いながら……ね、してたんだ」

「もう……」

幸四郎を胸元から、見上げ笑う菜ノ花。

「あ……菜ノ花ちゃんって、眼鏡に度が入つてないんだね？」
「ばれちゃいましたか」

ひょんな事に気が付いた幸四郎に、菜ノ花はペロッと舌を出して、細いフレームの眼鏡を外した。

「へえ～、眼鏡してると知的で可愛いかつたけど、してないと、またイメージ変わつていいよ」

「そうですか？ 気分転換になるんですけど、別の自分に変身できたみたいで」

「凄く可愛いよ、何だか、違う女の子みたい……ちょっと我慢できない」

幸四郎は菜ノ花の身体を抱き寄せる。

「え？ あんつ……」

「だから……もう一回だけ……ね」

「あ……も、もう一回したの……あつ、あああんつ、いきなり、そんな……ダメえ」

菜ノ花は抗議の声を出したが、幸四郎は再び菜ノ花の身体をむさぼり始めてしまひ。

「まだ菜ノ花ちゃんとしたい……いよね?」

「もう、これで不採用だったらキレますからね……なんちゃって……いいですよ、菜ノ花を満足いくまで抱いてください」

懇願する幸四郎、菜ノ花は、妖しさと純朴さの入り混じった笑顔で頷いた。

「あつー。」

幸四郎は起き上がる。
一人だ。

「夢……の訳ないよな」

全裸の自分が店の空き部屋で寝ているのに気がつくと、後ろ頭を搔く。

どれくらいの時間が経つたのだろうか?
同じベッドで、抱き合しながら、激しく果てた彼女の姿は無かつ

た。

「あの後、また一回もしつこくしゃったから……ですがに呆れて、帰っちゃったのかな……可愛いし、脱いだら凄かったし、声も色々くつ……ちょっと興奮しちゃったなあ」

反省しながら、幸四郎がベッドから立ち上がり、テーブルの上に、幸四郎の携帯を重しに乗せたメモが一枚。そこには……

『改めての採用のお知らせと説明にあつた寮への入寮手続きの説明の電話をお待ちしています 菜ノ花』

と、丁寧な文字で書かれていたのだが、ふと見た裏には……

『調子に乗り過ぎです、採用祝いにお寿司を奢つてくださいね!』

そう走り書きされていたのである。

それを見た幸四郎は一旦、フウと息を付き、

「……菜ノ花ちゃんだつて、あんなに可愛い声を上げてたじさん、でもお寿司奢るくらいは全然、オッケーですとも……ホント、最高だつたからね」

と、一人、口元を緩めるのだった。

続く

「何これ？」

「イノシシの赤ちゃん」

「可愛い」

「ここのかなあ？」

銭湯の入り口。

入店する客の邪魔にならない位置で、主人の帰りを待つウリ坊、タツノリはこの街で働く女性客の黄色い声を浴びていた。

騒がず、鳴かず、眼をつぶり、スフィンクスの様に泰然としたボーズで、彼はひたすらに行き交う女性客を無視し、自分の入浴を拒否した銭湯の娘を恨む事もせずに、ただ主人の帰りを待ちわびたのである。

「ふはあ～、いいお湯だねえ～、ずっと入っていいなあ！ ボク」

小寺まゆりは、沈めていた顔を湯船から一気に上げて、濡れた黒いショートカットの髪を搔き上げる。

一糸まとわぬ身体（風呂なんで当然だが……）は、スレンダーにキュッと全体が締まり、幼く明るい雰囲気で整った顔立ちも手伝い、彼女を健康的な美少女に見せている。

「タツノリが待ってるでしょ？」 可愛いから誰かに持ち去られるわよ

同じく湯船に浸かっていた、みなみが眉をしかめて注意をするが、

「平氣、タソノリは本氣になつたからベルマン並みに強いからー。」

と、まゆりは笑つた。

「といひで……」

突如、まゆりが瞳を細め、みなみの湯船に浸かつた身体を見つめながら、寄つてくる。

「な、何よ？」

みなみが訝しげに身体を少し引いて訊くと、まゆりは、

「みなみちゃん、いいプロポーションしてるよね？」

と、切り出してくる。

「どゆーとー？」

「どうせいつもないよ、オッパイもお尻も、腰周りもいい感じだね、つて言つてゐるんだよ」

まゆりはしげしげと見つめるなよ、と言わんばかりに頬を膨らませた。

「ああ、ありがと……でも、まゆりもこかにもスポーツ少女って感じが可愛い、と思つけどね」

誉められたお返しのお世辞のつもりはないが、まゆりは、

「胸だよ……ボクにはみんなみたいな胸がないつ」

と、嘆ぐ。

「でも、胸なら百合乃さんが今のメンバーなら……」

「あれは普通ではない、34歳ではない、ボクより一回り以上、歳をとつてるなんて信じられない」

まゆりは何か自分を納得させる様に頷く。

「百合乃さんは本当に可愛いわよね……私もあんな34歳になりたい」

みなみもほやいた。

織田百合乃。

切り揃えた前髪に、腰の辺りで伸ばした黒髪をそこで束ねた髪型。顔立ちは可愛らしく、ハツキリいつて34歳といつ年齢は、大半の人間に信じてもらえないだろ？。

身長は160?半ば、特に目を曳くのが、そのプロポーションだ。全体的に気にならない程度のふくよかさ、どうしても気になるくらいに大きなバスト。

「100以上?」

「惜しい99!」

「そこまでいったら三桁にいきたい」

「でも……ボクには羨ましい」

「ほら、恋音ちゃんとか、知世とか……仲間いるじゃない」

「噛み付くわっしー!」

みなみの慰めにならない言葉に、まゆりは怒りをあらわにする。

「『メン、『メン』

「むかつくつ、みなみちゃんは百合乃さんまでじゃないけど、十分に巨乳だからそんな事言えるんだつ、ボクは……ボクは……」

「ほらあ……立たない、立たない」

興奮して、湯槽から立ち上がり、みなみを指差すまゆり、みなみは苦笑して謝る。

「全く……」

周りの田もあるが、なりに騒がしい。

それほど注目された訳ではないが、まゆりは赤面しながら湯槽に浸かる。

「みなみちゃんはいいよ、楓ちゃんとか佐久耶ちゃんくらい、胸があるからわ……ぶつぶつ

「あの一人よりはないよ

みなみが首を振ると、

「んな、こない！ お店のホームページのデータみましたっ、バストサイズはみんな似たような感じ、カップも互角！」

まゆりは口を尖らせた。

「そうだったの？」

「ホームページのデータ見てないの？ ボクは全員チェック済み、

この間、高音さんに聞かれたデータが載ってるんだよ？」

「「メン、インターネットとか苦手で……携帯もろくに使えないから

恥ずかしそうにみなみが答えると、

「そうだったつけ？ ジャあ、教えて上げる！ バストサイズは、百合乃さん、楓ちゃん、佐久耶ちゃん、みなみちゃんの順かな？ 昨日、入った菜ノ花ちゃんはデータ無いけど、みなみちゃんより、やや小さそうだね……でも十分な巨乳だよ……そしてね……」

「そして？」

みなみが首をかしげると、まゆりはワナワナと震えだし……

「ここから、越えられない幾十の壁があつてえー！」

湯槽の湯面をまるで、机の様にビタンと叩き、

「恋音ちゃん……知世ちゃん……そしてつ……ボクがいるんだよつ！」

と、叫んだのだった。

「オーナーは田乳マニアなんだあ、いや……むじゅ」
「止めなさいて、世の中にはまだダメな事があるんだからね
！ まゆつけちゃん消されわわよ」

みなみは必死にまゆつけを止める。

「ね？ 帰りに、なんでもいい屋に行つて何か食べようか？ それ
とも、くるみがメニューの試作をするつて言つていたから、試食に
行つかけやつ？」
「やつ言えば……こたね……くるみちゃん……くるみちゃんはおつ
きいね……幼なじみまで、田乳……」

ナツ滋きながら、湯槽に沈んでいく健康系美少女まゆつけ。

「なんなのよ……まあ、言われてみれば、そんな気もしてた……
今度、趣味かどうかは聞いてみるわ」

みなみはため息をつきながら、まゆつけを見るのであった。

1

「エリちゃんもつとライトを絞ります、お客様同士は顔が見える必要あつませんからね……互にぶつからない程度で！」

「つよ～か～い！ いつかな？ いつすればいいのかな？」

「やうです、やうです」

指示に従い脚立に登つた、ぐるみが壁のライトを調整すると、高音は頷き、

「坊っちゃん、舞台はもつとライトを中央とキャットウォークに向けて集めて下せー」

と、幸四郎にも指示を出した。

プレホープンはいよいよ明田に近付いていた。

「幸四郎ちゃん、とりあえずはフライドポテトをたくさんの用意すればいいんだよね？」

「やうだよ、ホールではお酒は出せないけど、フライドポテトとオレンジジュークは無料で出すからね、そんなに食べる人も居ないだらうけど、足りなくなるのはよくないから」

「ジャガイモは、あとで八百屋さんに配達してもうまくよつに頼んであります」

ホールにやつてきた、ぐるみに幸四郎が答えると、高音が付け加える。

「ありがとう高音さん、でも結構大変だなあ、相当作らないと…」

「後で手伝うよ」

「幸四郎ちゃんは忙しいでしょ？」

「むう～、と唸つたくるみだが、幸四郎の申し出は断つた。
確かに幸四郎はてんてこ舞いだ、今の八百屋への手配のよう、
色々と慣れた高音がいるお陰で、何とかやつていてこる。

「オーナー、何か手伝える事ありますか？」

百合乃がホールを覗き込んだ。

今日はプリンセスと店では呼ぶ、女の子達の打ち合せがあるので、みんなが店に来ているのである。

「ああ、百合乃さん、助かります、くるみが……」

「いえ平気です、女の子は部屋のメイキングが終わつたなら休んで
いて下せー、最終打ち合せに私とオーナーがいきますから」

幸四郎の返事を高音が強引に遮つて、答える。

「え……ど？」

幸四郎と高音を交互に見て、迷つ百合乃。
だが、

「やつ、やつー、最終打ち合せがあるんだ、部屋で待つてて下せー」

幸四郎が何かを思って出したやつでござるね」と、

「やつですか、なにがお待ちしてますね」

笑顔を見せ、田舎乃はホールから出ていったのであった。

「すいませんでした」

「……よく解りました」

幸四郎が謝ると、高音はため息をつく。

「みんなは明日があるからねえ……やつへつと休んでもいいやつよ、
くるみが頑張るからや」

「やつだよな……じゃがいもの皮剥きなら、俺が手伝うよ」

高音が田舎乃を帰した意味を察したぐるみに、幸四郎は答えたの
だった。

準備の済んだホールには、通常の蛍光灯の明かりが付けられて、
舞台にプリンセス達が並ぶ。

崎原 みなみ。
斑鳩 恋音。

織田 百合乃。
小寺 まゆり。
御堂 楓。
天城 佐久耶。
遠藤 知世。
近衛 菜ノ花。

皆が厳しい眼で選んだ女の子達で、ルックスはもちろん、疲れた客を癒せるプリンセス達だと、幸四郎は信じていた。

正直、もう少し人数は欲しかったが、それで妥協する高音の提案はキツパリ拒否している。

新大空町風俗界の大物の父が倒れてから、幸四郎は自分の一つの答えを胸に、この世界に飛び込んだ。

未熟な素人なのは、言われなくても承知。

父が大王チーンとの争いで失った地位や店を取り戻したいとは思わない、まるつきり無いかと問われたら、自信は無いが、それが答えとは思わない。

ならば自分ではなく、もっと経営に明るい者に、最後の砦を託せば良かつたのである。

『田の前の殆ど素人の女の子達と……この店のやり方が俺の答え』

病に倒れた父親に、幸四郎はいまだ会っていない。会おうと思えば、会えるのだろう。

しかし、風俗業に関わるのを拒否して、当てもなく家を出で、夢

もなく毎日を過ぐしていた自分を敢えて、この店のオーナーに指名した相手に、血の答える正否を確かめる前に会おうとは、御神本幸四郎は思わなかつたのである。

「じゃあ、みんな……明日がいよいよ、プリンセスオーラクションの始動の日になる……」

幸四郎は並ぶプリンセス達に口を開いた。

夜が明ける。

店の開店時間まではまだ12時間ほどあるにもかかわらず、原高音は店舗の屋上から朝陽を見た。

さつきまで事務所で仕事を一緒にしていた幸四郎は一段落して、毎まで仮眠を取つてゐる。

「新店舗の開店なんて、何度でも関わってきたのに……それにまだプレオープンなのに……」

落ち着かない自分に気づきながらも、何か楽しみにしてゐる感情も持ち合わせてくる。

「会長、あなたと坊っちゃんの……いよいよ、始まりますね」

高音は手摺りに背をかけて、大きく息を吐いた。

続く

「こりゃしませ、プリンセスオーフショントヨウヤー。」

カジノディーラーを思わせる制服に身を包んだ高音がドアを開き、客を招き入れて頭を下げる。

「何着てもかわいいね、高音ちゃん」

「いよいよだね」

「宜しく、高音ちゃん」

「高音ちゃんがお店に出てくれたら、俺は貯金はたくさんだけだね」
招き入れられた客達は笑顔で入店しながら、それぞれ高音に声をかける、プレオープンの為、高音の知り合いが多いのだろう。
それらの客と想像よく何事か話を交わしてから、高音は舞台上に上がり、マイクを持つ。

「皆さん、本日はプリンセスオーフションのプレオープンにお越し頂き、本当に感謝いたします、この店はお客様が我が店が厳選し、契約した女の子と二人っきりでお部屋で過ごす権利をオーフションして頂くのがルールです」

「そして……お部屋では、お客様と女の子は決まったサービスなどはありません、あくまでもお部屋で過ごす権利……でも、女の子はそれを競り落としてくれた貴方をきっと精一杯もてなしてくれるで

しう、楽しい時間にしたいのは女子も一緒です……可愛がって上げてください」

更に、高音はルールを説明していく。

落札金額の支払いや料理の注文などについての説明である。落札価格は女子の子と部屋に入室前、料理等は部屋に入つてからの注文なので、部屋を出た後だ。

薄暗いホールに集まつた客達は立食パーティーの様に、山盛りに用意されたフライドポテトや唐揚げ等を食べながら、それを聞いている。

「それでは……みなさん、オーナー様を開始する前に、手短にこの店のオーナーより挨拶があります」

高音に促され、スース姿のオーナー、幸四郎が舞台上に上がつた。

「みなさん……はじめまして、本店のオーナーの御神本幸四郎です、プリンセスオーナー、プレオープンにお越し頂き、誠にありがとうございます」

幸四郎が頭を下げると、拍手が返つてくる。

「頑張れよ、坊っちゃん」

「親父さんを驚かせてやれよ」

「オレ達の高音ちゃんを泣かせんよー」

かけられる声は上品では無いが、温かい。

プレオープンで昔の常連客が中心で、高音が声をかけてきたのだから、好意的なのは当然であるが、新規店舗開店の不安と期待が入

り混じる緊張状態の幸四郎には何よりだ。

「あつがとつぱれこます、頑張ります」

幸四郎は再び頭を下げ、

「私の挨拶があまり長いのも、宜しくなこので……早速、オーケシヨーヤの高音嬢にマイクを返しましょつ、みなわざ……我が店が厳選した女の子と楽しくお過いりトセコー。」

と、高音にマイクを渡して、舞台袖に下がった。

「ふう……ホールのお客さんなコツチからモとんど見えないのこ、えらべ緊張したなあ」

はあー、と息をつき、慣れないネクタイを緩める幸四郎だが、

「これからですわよ

「え……!? ひ……あ……うん」

不意に背後から声をかけられ振り返り、思わず息を呑んでしまう。

そこには、ホームページのトップに飾られたお姫様姿の楓が、ニツココと微笑んでいたのである。

『か、可愛いつー? 『真館のあの時よりもー』
「一度目なら、更に着熟しますわ、さて……一番始めのわたくし
が最高落札価格を頂きましてよ

幸四郎の思いを見透かした様に答え、楓は舞台に向かって不敵に笑う。

「ああ、一番目はホームページや宣伝ポスターで見られたでしょう！あの美少女は一体誰？プリンセス御堂楓嬢の登場です」

高音の誇りしげな声がマイクを通して、ホールに響いた。

続く

第28話「ファースト・ハンマー・プライス！」

1

「ああっ……勢いをつけてこき出すわよ」

幸四郎に向かつて、強く頷き、暗い舞台袖から、光が充満して見える舞台上へ楓が歩き出す。

プリンセスらしく、厳かに、そして、あくまで淑やかに……

『楓ちゃん……本当になりきつて』

幸四郎はその姿に、今から風俗店のオープンである事を一瞬、忘れてしまったようになる。

舞台とこゝ演出がそう思わせる部分があるのは否定できないが、まるで本気で演劇に取り組む女優にも見えてしまつ。

「お客様、お待たせしました、わがプリンセスオーフクションのファーストプリンセス、御堂楓姫です！」

「宜しくお願ひしますわ、わたくしの初舞台を誰に捧げましょ？」

高音に紹介を受けて、楓はドレスの裾をツイッと両手で上げ、頭を下げて挨拶をする。

二十名くらいの客達の顔は見えないが、感嘆の声は聞こえた。素直に楓のルックスへの賞賛。

「可愛い、写真通りだ」

「かなり上のモデルより美少女だろ?」

彼女の顔立ちを讃め讃える声もすれば……

「胸あるよな」

「プロポーションが良すぎるよ、そそるね」

などと、ひそひそ囁く声もある。

「では……オークションに移らせて頂きますが、ルールは明解です、開始金額五千円からスタートする、プリンセス御堂楓と彼女の部屋で過ごす権利を欲する方々同士、この会場の皆様で競り落として頂きたいのです」

高音はルール説明を始める。

「単位は基本的に千円単位以上でお願いします、皆様の手元に渡した無線ブザーを押してください、その楓さんが映る大画面モニターに、お客様毎の番号が出ますので、落札金額を宣言して下さい」

すると、舞台から左手の大型モニターにアップの楓が映され、画面に37番という番号が現れる。

「これは少し暗いホールのお客様を判別する手段です、オークションの間は僭越ですが、お客様を番号で呼ばせて頂きます、あまり一度に付けず、時間を置きますので、紳士らしく、落ち着いて番号を点けられて金額を『』提示下さい」

客が入店時に受け取るのが、小さなブザー。

それぞれ番号が書かれており、押すとモニターに連動していく、

その番号が画面に表示される。

それがオークションで言えば、競りの意思を表す合図であるのだ。

そして、高音に向かい、金額を宣言するシステムである。

番号は先着順で常に一つしか、表示されない。

そこで落札金額を告げた者よりも、金額を上回って、権利をとりたくば、ブザーを押して自分の番号を表示して、より高い金額を宣言すれば良いのだ。

様々な問題はあるかもしれないが、落札者に何かの合図をさせるのも、金額だけ宣言させるのも、広くはないとはいえ、高音が暗いホール全体を気にしなければならず、宣言者を整理する為の手段である。

「さて……説明は以上です、オークションの開始といきますつ！
厳選された女の子と普段のしがらみや疲れを忘れて、至極の時間を
お過ごし下さい！」

2

「先ずは五千円ー。」
「八千円ー。」
「一万円」
「一万三千円」

「この間、数秒。
だが……当然、そこで終わらな」。

「一万六千円
「一万八千円」
「一万つ！」

五千円から一万円に達するまで、十数秒である。
ここで間が空く。

「ハイ……現在は26番様です、いざこませ……」
「一万五千！」
「一万七千！」

間を見計らい、マイクを入れた高音、だがその言葉が終わらないうちに一気に金額が上昇する。

番号は21番と30番であった。

「凄いねえ！ 楓ちゃん、アツという間に」

舞台袖で腕を組んで、様子を見守る幸四郎の横にくるみがひょいと顔を出す。

「くるみ、厨房居なくて、いいのかよ？」
「だつて……気になるじやん？ それにお密さんが部屋に入つてないんだから、注文あるわけないし……それに高音さんに来とけ、つて言われたんだもん」

「来とけ？ お前も出されるんじゃないだろ？」「かもね、幸四郎ちゃんなら、幾らつけん？」

高音がくるみを舞台袖に呼んだ理由はわからないが、冗談を振られた彼女がウインクを向けた時、

「三万八千！」

と、調度良く客の声が被つてくる。話している間に、また上がつていた。

「うわあ、凄い」

「まだまだ……」

「まだなの？ 幸四郎ちゃん、欲張りだねえ！」

「番号から見れば、まだ数人のお客様が争つているし、このお客様達は親父の店の常連客で、高音さんの知り合い……御祝儀の意味もあるからね」

くるみが金額と幸四郎の様子に驚くが、幸四郎は舞台上を見据えた。

「四万一千！」

一番。

今まで上がつてない番号が、楓の映つたモニターに現れた。

「それに、楓ちゃんは今の時点では、ウチのエース候補ナンバーワンなんだからね……初日、これくらいは頑張つてもらわないと」

「五万三千円つー」

「五万五千円！」

「五万六千」

幸四郎の言葉に後押しを受ける様に、落札金額は上がつていく。

そして、遂に……

「六万円」

一番の客の一回目のホールにホールはオオツと沸き上がり、他の客のホールが続かなくなる。

「ありませんか？ 六万円一千円ありませんか？ では……」

「六万一千円つ！」

「ハイ、21番の……」

「六万五千円」

ずっと競っていた21番の客が抵抗を見せるが、それを振り払う一番の高音の確認をも遮る即ホール。

「これで勝負あつた。」

「六万五千……これ以上ありませんか？ では、ファーストプリンセス御堂楓嬢のお部屋ご招待は一番のお客様が落札されました、ありがとうございます……では、お客様は楓嬢が迎えに参りますので、舞台下まで来られて下せこ」

楓は舞台を降りて、舞台下で一番のブザーを持った客を確認して、

「素敵な時間を過ごしましょつ

と、微笑む。

ノーネクタイだが、ピシッとスーツを着た中肉中背の青年だ。

「感激ですつ、ホームページで一目惚れしました、絶対に落札するつもりでいましたよ」

「画面よりも実物の方が貴男をもつと夢中」させで上げますわ

楓は少し興奮気味の青年の腕を取る。

「開店初の落札が成立した所で……お客様とプリンセスの時間を彩る、給仕を紹介致します、くるみちゃんです」

高音が田配せしていく。

「そういう事かあ、聞いてないよ」

「挨拶かあ」

「そうだね……よこしょ」「? それは……」

「メイドキヤップ」

「つて、お前……何なんだ、その格好? 全然、聞いてないって格好じやねえ」「行つてくるね、幸四郎ちゃん」

眉をしかめる幸四郎に、笑うくるみ。

暗い舞台袖で、楓のオーネックショーンに集中していたので気づかなかつたが、くるみは黒を基調に白エプロンのベーシックなメイドルックだったのだ。

「くるみで~す!」

「三万!」

「四万!」

くるみがピヨーンと舞台に上がり、客から拍手と冗談混じりの

「ホールがかかる。」

「」の辺りは、元常連客のノリの表現。

「いけませんっ、いけませんっ、くるみ嬢はプリンセスの給仕、すなわちメイドさんです……プリンセスとの素敵な時間を彩る料理を作っているのです、お部屋には彼女が届けますので、」注文の際には、宜しくお願ひします

「ホールしてくれたお客さん、ゴメンね！ でも美味しいフルーツスイーツやアイスもあるから、プリンセスと食べてね！」

高音の紹介に、くるみは笑顔で手を上げる。

「可愛いね」

「店に出てよ」

「バストイレツ？」

好意的な客の反応。

「てへへ……じゃあ、厨房でみんなの注文待ってるからね」

くるみは照れ笑いを浮かべ、短いツインテールの後ろ頭を搔いて、舞台袖に引き上げる。

「では、落札金額を精算してから、わたくしの部屋に参りましょう」「は……はいっ」

楓は緊張気味の青年の腕を取り、ホールを出て歩き出す。

一階への階段に向かう途中の小さな部屋にカウンターがあり、舞台袖を抜けた幸四郎が落札金額を受け取るのである。

領収書には、プリンセス御堂楓のお部屋にじい招待される権利と書く。

「では……素敵なお時間をお過ごしتوセ」

「ありがとうございますわ、オーナー、わつ……お部屋に入つてから一時間、一人の時間はたっぷりありますわ」

「は……はい」

頭を下げた幸四郎に声をかけ、楓と青年は揃つて階段を上がつていぐ。

ペペペペペペ

店内使用専用の携帯が鳴る。

まだ、高音と幸四郎しか所持していないので、相手は高音だ。

「はい?」

「坊っちゃん、落札金額は受け取りましたか?」

「ええ……平気ですよ、落札金額は事務所に戻つて金庫に入れます、このレジは千円札のお釣九枚しか入れなくていいですからね」

「そうですね、防犯上、それが面倒ですが好ましいですね……女の子の順番の変更は無しで、すぐに次のオーケーションについていいですか?」

ホールの高音からの進行の確認だ。

幸四郎は数秒の間だけ考え、

「はい、予定通りの順番でお願いします……お金をしまつたら、す

ぐに舞姫袖につづめや

と、答えて事務所に向かつて走る。

壁を隔てたホールから、マイクで拡声された高音の声が聞こえてきた、

「さあ…………皆さん、まだまだプリンセス達は控えています…………本日のセカンドプリンセスは…………」

続く

第29話「流石といつか」

1

「斑鳩恋音姫ですっ！」

「よ、宜しくお願ひしますっ！」

高音のホールに応え、緊張氣味に舞台に立つ恋音。格好は白を基調とした飾りの無いワンピース。

「カワイイイッ！」

「いいねえ！」

「口リつ娘だ、レベル高いよなあ」

観客の受けは上々。

ほわつとした肩にかかる位の茶髪、幼児体型の可愛らしい童顔の恋音は、楓の登場からガラリと舞台の雰囲気を変える。

「恋音ちゃんはこう見えて、『』奉仕上手、きつとお客様に可愛がられるプリンセスになる事でしょう、さて……それでは、斑鳩恋音姫のオーフションを開始いたします！」

「七千円！」

「一万円！」

ポンポンと値段が跳ね上がり、壁の大型モニターの恋音の画面には19番の番号がつく。

だが、それも長くは続かない。

「一万一千！」

「一万五千円」

「あんなに可愛い口りつ娘は譲れん……一万」

金額は一分足らずで一万円に達した。

そこで更に一息ついてから、

「一万一千」

「一万四千」

連續して声が上がる。

そして、千円単位の細かい応酬が続き……

「三万八千」

そこで場が静まった。

「三万八千……四万の一聲ありませんか、では斑鳩恋音姫との一時を過ごすのは14番のお客様です、さあ恋音姫、迎えに行って上げてくださいー」

「ありがとうございます、はじめまして」

恋音は舞台を降りて、14番のブザーを持った青年に駆け寄る。

「もうタイプだよー 予算ギリギリだったんだあ

「ありがとうございます、たくさん恋音と遊んでくださいね

喜びを隠さない青年に、恋音は朗らかな笑みを浮かべ、二人は手を握りホールを出していく。

一階への階段手前のレジで、オーバーコン代金の精算をし、幸四

郎はホールに戻り、高音の横に並ぶ。

「坊っちゃん、次はどうしますか？ 恋音さんは楓さんより、少し落札金額が下がりましたが……」

「上々だよ、楓ちゃんはエース候補ナンバーワンなんだからね、タップも恋音ちゃんとは違つしさ

「耳打ちしてくる高音に幸四郎は笑顔を浮かべ、

「次は……菜ノ花ちゃん、いってみましょう」

と、指示を出した。

2

「今度は近衛菜ノ花姫です、どうぞっ！」

黒髪のセミロング、前髪はカチューシャで留め、そこから額にいく筋か垂らし、細いフレームの眼鏡。

ぱつぱつした一重の瞳に、尖った所が無く、可愛らしくまとまつた顔立ち。

身長はわずかに160?に届かないが、しつかりとメリハリのある身体。

菜ノ花が恋音に続き、ワンピースで舞台上に姿を現すと一十名足らずの観客が湧いた。

「可愛い」

「今度もレベル高い」

「腰のライン細え」

「眼鏡つ娘萌える!」

反応は上々だ。

高音は幸四郎に向かつて笑顔で頷く。

「では……我が店のプリンセスの中でも、一番お淑やかで落ち着きがあると評判の近衛菜ノ花姫と……」

「一万五千円!」

「いけませんつ、紳士の皆様、キチンと私の開始の令団をお待ちください!」

フライングの客に高音が嗜めると、会場から笑いが起きた。

『いい空気だ、少なくとも楓ちゃんの落札金額まではお密さんは払つてもいいって、意志があるんだ……なら女の子の第一印象のルックスはこの店は質的には、風俗激戦区のこの街でもトップクラスなんだ!』

幸四郎は口を真一文字に結び、推移を見守つた。
菜ノ花のオークションが始まる。

「一万五千」
「一万」
「一万一千」
「一万五千」

ポンポン調子で上がつていいく落札金額。

「三万五千円!」

そこで一休止。

十秒程の沈黙の後で、

「三万八千」

と、声が出る。

「四万」

「四万一千」

「四万五千！」

そこで再び沈黙。

『恋音ちゃんの金額は越えたか、いろいろ所から少しだけど、お客さんの傾向も見えてくるな……』

幸四郎はそんな事を考えながら腕を組む。

今、主に争っていた客は四人、四万五千円を一一番の客が出した時点でピタリと止まった。

「四万五千……では」

高音が口を開きかけた時に、

「皆さん、無理しないで下さいね……今回でなくともまた、来て下されば私は嬉しいですから」

菜ノ花が誰に向けた訳でも無く、肩をすくめて微笑んだ。

「一」「五万！」

いかにも、思わず、といった風に上がる声。

「なるほど……だだ姿を観せて立つてのも勿体ないよね、菜ノ花
……流石といふか」

幸四郎は苦笑し、今日は色々と勉強しなければ、と襟を正すのだった。

続く

第30話「巫女と新米オーナー」

1

「小寺まゆり姫、三万三千……三万五千ありますか？　ハイ、
では小寺まゆり姫のお部屋、招待は6番のお客様です、やあ
まゆり姫」

「ハイ、ハイ！」

高音の声がホールに響き、カジュアルファッショソのまゆりは調
子よく階段を降りて行く。

「じゃ……よろしく、小寺さん」
「うん、まゆりでいいからね！」

落札者は小綺麗なスースの中肉中背の中年。
まゆりは笑顔で、彼の腕に甘える様に絡む。

「あの娘もすげえ可愛かったなあ
「もう少し競れば良かつたかな？」

競っていた客が舞台から降りてきた健康系美少女を見て、ぼやく。

「高音さん、ちょっと」

精算を済まし、幸四郎は舞台の高音を一旦、舞台袖に呼ぶ。

客はモニターの女の子の画像を観ながら、タダのフライドポテトをつまみ、これまた、タダのサイダーを口に運んでいる。

軽い打ち合せ程度の中斷は大して気にはしていない様子だ。

「どうしました？」

それでも、客が気になる様で、カジノディーラー姿の高音はホルを気にしながら、幸四郎の元にやつてくる。

「次は佐久耶ちゃん、いつてみましう」

「何か考えでも？ 予定と変わりますが……」

「まあ、まあ、少しお客様の様子が観たくて」

高音は怪訝な表情を見せるが、幸四郎はニッコリと笑った。

「失礼しました、今、画面では、当店自慢のプリンセス達の画像が流れていますが、現在、本オープンに向けて各人が気合いの入ったプロモーションビデオ撮影に入っています、本オープンの際には魅力一杯で、少しだけセクシーな♪が流れますのでお楽しみに！」

高音が舞台に戻り、モニターを見ていた客にナレーションする。

「高音ちゃんも撮るんでしょう？」

「いいなあ……高音さんが観たいなあ」

「高音さんのセクシーショット、キボンヌー！」

「待つてまーす」

ホールから声が上がり、他の客もドンドンそれに乗る。

「な、な……何をつ！？ そんなの必要ありませんつ、私はオーケ
ショニアなんですか？」「…」

高音は赤面して、声を荒ら上げたが、

「了解しました、オープニング特典♪として、高音さんにも参加し
てもらいましょうー！」

舞台袖から、幸四郎がマイク片手に顔を出す。

「こよひ、やすがに一代目、改革派！
「これで冥土に持っていく土産話が増えた」
「ヤターパー！」

客も元常連だけにノリが良い。
初めての客層には、そうはいかないが、今は様々な状況を経験し
て、尚且つ、田の前の客を満足させるのが目的だ。
だが、少しだけノリが良すぎたのか、ヤンヤの喝采を浴びながら
舞台袖を睨んだ高音に、

「坊っちゃん、引っ込んでて下せー！」「…」

と、一喝され、ホールの客に笑われてしまつのであった。

「さて、気を取り直し、続きますのは天城佐久耶姫です、東京遙か数百？の島、神洋島から来ました天然娘、癒されます」「ボクなのです！」

ぴょんと登場した佐久耶に歓声が上がる。

「巫女さんだ」「

「胸でけつ」「

「カワイイイッ！」「

巫女服での登場に客達が沸く。

「今日はコスプレイベントではありません、佐久耶さんは普段から巫女服で過ごしてます」「

「本当なのです」

司会もこなれてきた高音がマイクを向けると、佐久耶はピースサインをする。

「胸、おつきいね、バストいくつ？」

「それは自分で確かめるといいのです」

客からの言葉にも、佐久耶は前屈みになり、ペロッと舌を出す。巫女服の襟が少しだけ寄つて、見事な谷間が覗き、おお～っ、と感嘆の声が上がった。

「「」までっ！ それでは天城佐久耶姫のお部屋」招待のオーケションを開始いたしますっ」

「よししゃ、一万五千」

「一万円」

客の盛り上がりを見計らい、高音がオークションを始める。その開始の勢いは始めの楓すら上回るスピードで、金額はあつといつ間に一万円に跳ね上がる。

『うん……やつぱり、今日のお客さんは好みがあるな、それに菜ノ花ちゃんもそうだけど、佐久耶ちゃんにもお客さんを乗せちゃう上手さみたいな物があるんだな』

幸四郎は次々と上がっていく、金額を見ながら、舞台袖で腕を組む。

『……でも

ホールは薄暗く、舞台から離れた客の顔はほとんど見えないが、幸四郎はモニターを睨む。

『月刊トップガールの記者は高音さんが6番だつて、言つていたけど……まだ点いてない、佐久耶ちゃんで五人目……どうするつもりなんだ?』

今のところは順調な滑り出しだが、まだまだ安心とまではいかない新米オーナー幸四郎であった。

続
<

「五万一千円で、19番のお客様が天城佐久耶姫のお部屋にご招待される権利を落札されました！」

「ご招待なのですっ」

佐久耶は高音の「ホールと共に舞台から、階段を使わずピヨンと飛び降りて、19番の客の元へ向かい、満面の笑顔を見せ、腕を取りホールを後にした。

「佐久耶ちゃんもお客様をつまく乗せたね、男にはあの魅力的な谷間が効いたかな？」

笑いながら幸四郎は精算のレジにつきつつ、確かな手応えを感じていた。

「それでは……残るプリンセス登場の前に15分程の休憩を入れさせて頂きます、モニターではプリンセス達の新たな画像が表示されますので、お楽しみください！」

高音がオーケションを中断し休憩を告げて、舞台袖に帰つてくる。

先程は幸四郎から順番を変える為、中断を入れたのだが、今度は佐久耶のオーラクションが終わり、精算を終えたのを高音が見計らつてのタイミングで、予定にはない物だ。

「高音さん、何かあつたんですか？ みなみちゃんや知世ちゃん、百合乃さん達は準備オッケーみたいでけど……」

「まだです」

不思議に思つた幸四郎が声をかけると、高音はそれだけ答へ、タオルで襟元の汗を拭ぐ。

スポットライトの熱氣でよく見れば、高音はかなり汗をかいている。

オーラクションに出来る女の子達と違い、彼女はずつとライトの当たる舞台に立ちっぱなしだ。

しかし、休憩を入れた理由はそれではないだらつ、高音はまだだ、と返事をしたのである。

「まだ、つてどいつ事ですか？ お客様もだいぶ乗つてきました、ここは一気に……」

「お客様も私も少し乗りすぎました」

高音は舞台袖のテーブルの上にあつたペットボトルから、スポーツ飲料を紙コップに注ぎ、それを口に運んだ。

「どういつ事です？」

「確かに……みなみさん達は準備OKなんですが、お客様のノリがよかつたので進行が早くなり、楓さんはまだですね」

「あ……？」

高音の答えに、幸四郎は順調なオークション内容に自分の忘れていた事を思い出し、声を上げてしまつ。

「……！？」

携帯の時計を見る。

一番始めにオークションが終わつた楓が客と部屋に入つてから、1時間15分が経過していた。

「楓さんが一周目の舞台に立つのはどれくらいでしょうか、少なくともあと1時間15分か、30分は見て上げないと……」

「そうですね」

「その時間を三人のオークションで作つてあげないといけなくなつてしましました……ここで15分の休憩が入るとしても、少なくとも1時間、私も初めての司会の緊張もあつて、タイムテーブルは自分なりには決めたのですが……」

高音は申し訳なさそうに言つた。

あと、三人のオークションを終えたら、全員のプリンセスが入室してしまい、始めの楓が戻つてくるまで、空白時間が生じてしまうのである。

一周目が始まるまで、そう密を待たせる訳にもいかない。

「……いつ事がわかれれば、対策法はあります、毎日女の子も全員が出勤出来る訳ではありませんし、この店の女の子は真面目な娘が多いので、欠勤がそうそう出るとは思えませんが、8人では……今日のお客様が優しいプレオープンは乗り切れても、本オープンは苦しいです」

「対策法っていうのは、在籍する女の子をもう少し増やす……です
よね」

幸四郎が答えると、高音はコップを持ったまま、腕を組む。

高音の提案をすぐに却下すると、彼女はまるでそれが楽しかったかの様に笑つた。

何か試された様な気もするが、風俗のサービス時間としては長い2時間だが、素敵なプリンセスと過ごす時間としては長くはないだろ。う。

幸四郎はそう思つていゐるのである。

「料理と言えば…… みなさんは平気ですかね？」

高音から話題を変える。どうやら、女の子のローテーションを上手く回すには、本オープンまでに更に女の子を雇うしかないという結論だ。

「 そう言えば様子を見てないです、行つてきます……じゃ、女の子の件はまた募集広告を出すなり、スカウトにいきましょう」

幸四郎はそう高音に告げて、厨房に向かつて走りだした。

「風俗は数か……」

廊下を早足で歩きながら呟く。

前に面接で厳しく、採用希望者を切っていた時に高音が幸四郎を嗜め、言った言葉である。

確かにそういう部分もあるのは否めない。

理解しない訳ではない。だが、幸四郎が創つていきたい店はそうではなかつた。

手つ取り早く、男の欲求を果たしたいなら他にも格安で、簡単にそれを済ませる店はたくさんある、そういう勝負なら、素人の幸四郎は出る幕ではないし、十年以上、父の右腕を務めた高音が全てを取り仕切れば済む話だ。

『そうじゃない……』

前から決めていた決意を口に出さず、想いを再び繰り返す。

『俺はルックスもどびきり抜群で、優しく思いやりがある女の子達と、この大変な時期に疲れ切つた人に、何かしらを与えて上げられる店を作るんだ、効率が悪くても構わない、でも俺がやるなら、決意だけは変えないからな』

また何人も面接で厳しく希望者を切るだろつ。

心苦しい事もあるし、ついこの女の子なら、多少は我慢できるかな？と妥協してしまいそうにもなる。でも、自分の妥協は客にそれを押し付ける結果にもなるのだ。

『また、厳しくやるしかないな、高音をどこまでも出されられるけど』

幸四郎はため息をつきながらも、彼なりには強い決意を決めて、
厨房に入ったのだった。

続く

第32話「みなみオーパション!」

1

「幸四郎ちゃん!」

厨房といつても、レストランの様に広いわけではない、大きめの冷蔵庫にキッチンがあり、それらを置いて、余ったスペースでフライパンを振りながら、くるみがドアを開けた幸四郎に振り返る。切り揃えた前髪に、短めのツインテール。

ドングリ眼の可愛らしい幼なじみは汗を顔中に浮かべ、笑っていた。

「平氣か?」

「平氣、平氣! やつは楓ちゃんのお部屋にスペゲツティ届けて、まゆりちゃんの部屋に特製ハンバーガー届けたの、そして今から菜ノ花ちゃんの部屋にチキンライスを持っていく所だよ!」

「そうか……ご苦労様、あれ? お前、なんで割烹着着てんの?」

様子を聞くと、くるみは元気良く返事をするが、メイド姿の筈の彼女がいつの間にか、小学生の給食当番が着るような白い割烹着に頭巾をしていたのだ。

「えへ、だつてえ、料理で油が飛んだりしてメイド服汚れたら大変、お客様さんの所に行く時は脱ぐから平氣だよ」

くるみは割烹着を少し上げて見せる。

「下はメイド服。

上から割烹着を着ただけだ。」

「何だか……違つ氣がするなあ、まあ汚れたら、コズブレ婆さんこ頼むから氣にすんなよ、こちこち面倒くさいだろ?」

「平氣だよ。」

歯を見せ、ニカツとした笑顔を浮かべて、ピースサインをするぐるみ。

小さな頃から、今までその笑顔はとても良く似合つてこたのだった。

「じゃ、頼むな……伝票はレジにちやんと置いておへんだけや。」

「……あつ、一枚も書いてないよ!」

「おこおい、楓ちゃんがスペゲッティとか言つてたろ? 食べ物、飲み物は後で精算なんだから、お密さんが帰るまでにレジで把握しなきや、料金を貰えないだらつ、それを届けたらみんなの分をレジに書いて置いとけよ、注文の度に書いてちやんとレジに置くんだけ、溜めるなよ。」

料理の伝票の事を確認して、厨房を後にしようとしたら、ぐるみが素つ頼狂な声を上げたので、幸四郎は注意する。

「わかつた、でも……思つたんだけどさあ」

「なに?」

「飲物はどうしてるんだっけえ?」

「一応、旅館みたいに女の子の部屋に小さな冷蔵庫を置いてある、酒までお前が用意したらかなり面倒くさいだろ?」

ぐるみの質問に幸四郎は答えた。

すると、ぐるみはフライパンのチキンライスを皿に盛り付け、

「だったら、料理も部屋の女の子が伝票つけて、幸四郎ちゃんに渡した方が良くなのかな？ 飲み物と食べ物が別なのは訳がわからなくなるかも」

と、言い、割烹着を脱いで、メイド姿になるとチキンライスをおか持ちに入れた。

「……そうかあ、やつぱりかあ、女の子が部屋でんまり伝票つけるのは、お密さんすれば抵抗あるかと思つて……つて、くるみつ！ おか持ちやめろつ！ メイド服におか持ちつて、どんな層を狙つてんだよ！？ ラーメン屋か蕎麦屋かよ？ 少しは雰囲氣みたいなのを大切にしろよ」

一旦は考え込んだ幸四郎が、くるみの格好に気がつき突っ込む。メイドがラーメン屋の出前の様に、おか持ちを持つのは何かシユールだ。

「えへへ……実用重視つて事で……」
「ダメ、雰囲氣を大切にしろ、つて……」

くるみは笑つて誤魔化そうとするが、幸四郎は首を振つた。

「とにかく、お密さんはけつして安い金額を払つてるんだ、だから細かい所までこいつちが気にするのは当然なんだよ

「じゃあ……伝票は？」

おか持ちを諦めて、トレイにチキンライスをのせ、ラップをかけながら、訊いてくる幼なじみに幸四郎は少し間を置き、

「やっぱ、部屋にいる間は女の子には伝票はなるべく手にしてもら

いたくはないから、料理はくるみが責任持つて、伝票をちやんと付けるんだ、頼むな」

そう告げると、

「幸四郎ちゃんは昔つから、スゴくこだわる所は絶対に譲らないからねえ、わかつたよ、了解、了解」

くるみは笑顔を浮かべ、案外スンナリと、自分の提案を取り下げたのだった。

2

「皆さん、お待たせしました！ それではオークションを再開します！ 第六番目のプリンセスは崎原みなみちゃんです！」

「よ、宜しくつ！」

みなみが緊張気味に舞台上に上がる。
服は楓とお揃いの姫様衣裳だ。

「カワイイイッ」
「いいね」
「プロポーションも楓ちゃんに負けてねえ！」
「美少女だつ！」

この衣裳はみなみ本人の希望で、おやりく楓への対抗心からなのだろうが、客からの受けもいい。

「わ、私と楽しい時間を過ごしやうね……」

赤面しながら、みなみがホールに向かって言つと、客からはその初々しさに、ほおーと声が上がつた。

楓の堂に入った立ち振舞いとは、また別に客に対する素のみみなみのアピールになつたようだ。

「さあ、崎原みなみちゃんのお部屋」招待、オークション開始ですっ！」

「八千円！」
「一万円」
「一万五千円！」

ハイペースで競りあがる落札希望価格。
崎原みなみはそれを舞台上から見つめていた。

3

心臓が高鳴る。
もつと……もつと。
少しでも……高く。
みなみは祈つた。

「一万四千！」
「一万八千……」

たくさん……こつぱに良くしてあげるから……もつと……高く。

「三万一千円ー。」

「三万五千ー。」

そこで自分の映されたモニターの番号の競り合いが止まる。

三万五千ー？

まだまだでしょ？

唇を噛む。

『「こっちは覚悟決めてるの……だから」

「四万ー。」

少女の心に応える様に、声が上がる。

お願い……もつと。

願う。

私を待つている大切な子達がいるから。

「みなみさん、もつと落ち着いてください、それじゃお客様が気が
します」

「ゴメンね、楓と同じ服だからね、あれよりは上に行かないと……
なんてね」

高音に声をかけられると、みなみは今は思つてもいなかつた事を
返事して、舌を出したのだった。

続く

第33話「ファーストコール」

1

「五万一千円……五万三千あつませんか？　はい、ではプリンセスみなみとお部屋で過ごすのは、15番のお客様です」

「ホールする高音。

みなみは頷き、ドレスの裾を掴み、舞台を降りていくと、15番の客を見つけて、緊張気味に笑う。

「あつがとう、宜しくね」

相手は幸四郎とあまり年の変わらない青年だ。

「じゅあ、じゅあ……」

「じゅあ、じゅあ精算を済まして一階に行こ」

相手の青年もあまり風俗に行き慣れた様子でなく、みなみと互いにぎりぎりなく腕を組み、レジで待機していた幸四郎に支払いを済ませて、二人は一階に上がっていく。

『みなみちゃん、緊張するな、と云つのも難しいけど……頑張れ』

そんな事を思いながら、階段を昇るみなみを幸四郎が見つめると、それに気付いたのか彼女は幸四郎に明るい表情でウインクしてきたのだった。

「やつぱり、まだトップガールの記者は一回も『ホール』に入ってきたないですね、まさか気に入った女の子がいない、って訳じゃないですよね？」

幸四郎はレジから戻ると、舞台の端で次のオーケーションを始めよう、マイクを持っていた高音に小声で話しかける。

「さて……だんまりですね、一通り女の子を観ている可能性もありますね」

「なるほど……8人しかいないのはマイナスになりますかね？」
「記者の印象では、なるでしょ、風俗は数というのは決して嘘ではありませんから、数が揃えば下手な時間稼ぎで、お客様を待たせる必要もなくなりますし、女の子のローテーションにも余裕が出ます」

腕時計を見ながら答える高音。

一番最初にオーケーションが成立した楓が客と部屋に向かってから1時間45分が経過したが、時間を終えた楓もすぐに帰れる訳ではない、シャワーを浴びたり、身仕度を整える手間もあるから、あと45分は帰っては来ないだろう。

その45分を残る知世と百合乃のオーケーションで消化しないと、時間の空白が生じるのだ。

「もう、時間稼ぎの休憩は無理だし、あとは高音さんのトークテクニックしかないかな？」

「私も司会なんて初めてなんです、トークテクニックなんてある訳がありませんよ、とにかく女の子のスカウトは本オープンに向けての急務ですかね」

「」の状況を楽にするには女の子を増やすしか手段は無いが、今すぐには出来ない、幸四郎が首を傾げて見せると高音はまつたく、といった様子でため息をついた。

ローテーションの時間の余裕の無さが問題点として浮上した形だが、今はプレオープン。

本オープンに向けて、問題点を一つでも多く洗い出し、修正をするのが重要な目的なのである。

「わかりました、待たせる場合は素直にお客様に僕が謝らつかな？」
「謝るなら私がしますよ、もちろんそういうはならないよ」、せり気なく引き延ばす努力はしますが……」

「すいません」

「あなたには滅多に頭を下げさせられないですよ、それにここには可愛い女の子の園なんです、自分以外の殿方の登場なんてお客様は誰も待つてません」

「」
やう言つと、幸四郎に向かって肩をすくめ、高音は身を翻し、再びスポットライトの光が集まる舞台中央に立つのだった。

2

「さて……次はいよいよプリンセスオーラクション一番のグラマー美女の参上です、なんとエカツプのお姉さん、胸もおつきいですが思いやりもおつきいです、癒してもらつて下さい、織田百合乃姫の登場です！」

「ど……どうも」

高音の紹介と共に舞台に現れた百合乃、その姿に客達から感嘆の

声が漏れる。肩の露に出た赤いパーティードレスに、ピンクの大
きめなパレオ。

豊かなでは陳腐過ぎる表現であらう膨らみの胸元に、パレオから
覗かせる官能的な脚線美。

今までの少女達とは明らかに違う魅力。

『ゆ……百合乃さん、あまりにも可愛くて、あまりにもセクシー
過ぎる…』

極上の大人のオンナが醸し出すセクシーさに幸四郎までが、思わ
ず息を呑んでしまった。

「さて、こちらの百合乃さんは皆さん……何歳に見えますか？ 当
たつた方には百合乃さんのセクシープロマイド進呈…」

スポットライトを浴びて恥ずかしそうに立つ百合乃を指差し、高
音がすぐにはオーフショットを開始せずにクイズを出題する。
予定には全く無かつた行動だ。

「ええつと……22…」

「26…」

「案外……19…」

「24だろ…」

客達はノリがよく、何人かが答える。
それらの答えに高音は満足気に頷き、

「ハズレです……実は……34歳」

と、ウインクする。

ドツと沸く歓声。

絶対にそうは見えないといつ類の驚きだ。

「「「、」」のお店で一番のおばさんです……「「、」」めんなさい…」

赤面してペコリと頭を下げる百合乃。

……ホールにいた大半の男達がその謙虚な態度といじらしや、年齢とギャップのある容姿と魅惑的な身体に異性への保護欲をくすぐられる。

そして、続けての高音の言葉が百合乃を巡っての争いの弾砲となつたのだ。

「百合乃さんは風俗は今回がデビューです、貴方の色を初めての白紙に染めて上げてください！ それでは……織田百合乃姫のオーケション、五千円からスタートになります！」

「五万！」

スタートと同時にきた！ ホール一回田からの十倍アップだ。オーケション参加を決意した他の客は争いの相手の奇襲に声を上げ、高音は笑み、その対象である百合乃は口元に手を当て驚く。

『遂に点いた！』

舞台袖の幸四郎は高音と額き合ひ。

6番。

それは新大空町風俗情報を独占している、と言つても過言ではない月刊トップガールの記者の持つたブザーの番号であった。

続
<

第34話「メイド走り回る」

1

「来ましたっ！ いきなり6番さんの五万円のハイアップホール！ 続く方、五万二千いますか？ いきなりの決着ですか？」

「五万五千円！」

反撃は案外早く来た。

大型モニターに映された百合乃の画像の下に11番の番号が灯る。

「五万七千！」

次は23番。

6番からのホールでは無かつたが、舞台上では百合乃自身がビックリして目をキョロキョロさせている。その仕草もまた可愛らしい。

「六万！」

今度は14番。

遂に始めの楓しか達成してなかつた大台。

それも楓よりもはるかに短時間で達している。

『これは……楓ちゃんの金額を上回るかな？ 僕は嬉しいけど、楓ちゃんが知つたらどうなるかな？』

少なくともプライドの高い楓の事だ、上機嫌になる訳はない。そんな事を幸四郎が考へているうちに……

「六万五千！」

あつという間に楓についた落札価格に百合乃のそれが追い付いたのである。

「出ました六万五千、本日のプリンセスオーディション最高落札価格！ フアーストプリンセス楓の記録に百合乃姫が並ぶ……」

「六万八千！」

「ぬ、抜いたあ～！」

言葉が終わらないうちに、新記録のコールがかかり、高音は大仰にそれを言い直した。

「百合乃さん凄いな」

「そうだね……スゴいね、やつぱりあのミラクルナイスバディに、可愛い大人の魅力かな？」

舞台袖の独り言のつもりが、いつの間にか横でウンウンと相づちをうつメイド姿のくるみ。

「くるみつ！？ オイオイ、厨房は平氣かよ？」

「今、佐久耶ちゃんのところに特製ビック焼そばとシュークリームを届けた所だよ……幸四郎ちゃんに言つておきたい事があつて来たんだよ」

「なんかあつたか？」

ただ単に舞台をのぞき見に来た訳ではなさうなので、幸四郎はぐるみに振り返る。

『……メイド姿のくるみ、可愛いな』

真面目にやつていらない訳ではないが、幼なじみの可愛らしさを再確認する。

揃えた前髪、短めのツインテール。

ぱつちりした瞳が印象的な可愛い顔立ち。

そして、背は高くないが、案外と自己主張をした胸元にメイド姿が似合つづくらの体つき。

『もし……くるみが幼なじみじゃなくつて、この街で仕事を探している女の子だつたら、間違いなくスカウトしてるだろ? な』

「幸四郎ちゃん?」

「いや、いや、なんでもないつ、で? 言いたい事つて何だよ? 自分で作った物のつまみ食いは重罪だからな」

余計な事を考えてしまつた所に、首をかしげられた幸四郎は必死にそれを誤魔化した。

「ちがうよ……くるみにもそれ、欲しい

「それ?」

「内線用の携帯電話、ちょうど部屋に料理を配達に行つた時に厨房に連絡があつても分かんなこし、幸四郎ちゃんや高音わんに何か聞くきたい時もあるし……」

「なるほどな、それはそつだな、高音さんに相談して用意できるよう頼んでみるよ」

幸四郎は納得する。

「このフレオーブンで改善すべき問題点としては、至極妥当だろ? 幸四郎個人的にも賛成だし、くるみもスタッフであるからには、ま

持たせるのに高音が反対するとも思えなかつた。

「ありがとうね……幸四郎ちゃん、あつ、百合乃さん決まつたみたいだよ」

くるみは頷いてから、舞台を指差す。

「では……織田百合乃姫のお部屋」招待権は七万二千円で9番のお客様が落札されました！」

高音が興奮気味にナレーションする。

「うわあ……百合乃さん、七万円かあ」

「楓さん複雑～！ 一番高い金額を指してたのに、抜かれちゃつたよお」

「それでもなーいさ、楓ちゃんはそりやホームページのトップだつたり有利な所もあつたけど、オークションも一番始めだつたからね、始めはお客さんも空気が分からないし、楓ちゃんがいいスタートを切つてくれたからこそ、後が高い落札水準になつたんだからね」

苦笑するくるみに幸四郎は説明する。

「そういう事かあ……」

「それに今日のお客さんは常連さんでホームページも確認済み」「どういう事？..」

「だから、うちのプリンセスは今のところ88人、百合乃さんを入れてもあと2人つて、知つてるんだ」

「意味わかんない」

くるみは腕を組む。

「お姉さんにも好みがあるんだよ、今日の落札金額の傾向でいけば……高いお金をホールしてもらえたのは楓ちゃんやみなみちゃん、菜ノ花ちゃん、佐久耶ちゃん……田舎乃さん、対してあまり高い金額で伸びなかつたのは、恋音ちゃんとまゆりちゃん」

「口りが伸びない！」

「あのなあ……まあ、間違ちやいないよ、傾向として高音さんの連れてきてくれた常連さんは、恋音ちゃんとか、まゆりちゃんの幼い感じの女の子は好みが合つてないかも、つて推測できるんだよ」

くるみのストレートな反応に肩をすくめて、

「だからさ……田舎乃さんはナイスバディ好きからはじめっからマーケされていたんだろうね、それに楓ちゃんやみなみちゃん達のオーラシヨンで競り負けた人達がここで一 つと頑張ったんだと思うよ」

と、幸四郎は説明をし終えてレジに歩き出すのだった。

「そつかあ～、今日はナイスバディが人気があ

幸四郎を見送り、くるみは廊下を厨房に戻りながら呟く。

「……だとすると、アンカーの……知世ちゃんはかなりピンチ…？」

やつ顔を上げた時、厨房の中から内線の呼び出し音が聞こえた。

「はーはーーー！ あつ、楓ちゃん？」

内線の呼び出しはトップバッターの楓だ。

「くるみさん……もう私はお客様と部屋を出ますわ、ベッドメイクの直しをお願いしますわよ」

「ええっ！？ それって、くるみの仕事？」

「メイドでしょうに！ それともオーナーの仕事ですかの？」

「自分の部屋じゅん、自分でやれば……」

くるみはブシブシと反論するが、

「お客様をお送りするのもいかの仕事ですわよー。サポートはして下せりませーーー！」

と、怒鳴られ、

「わかったよおー、新しいシーツもつてこよおー」

そう渋々と答へ、内線電話の受話器を置く。

「忙しいー、まったく楓ちゃんも人使いが荒いなあ……大変だよ」

パタパタと廊下を走って一階隅の洗濯室からシーツを取り出しそやきながらも、くるみはそれを笑顔でするのだった。

続
<

第35話「光の森へ再び」

1

舞台袖から見るスポットライトの光は異様に明るかつた。まるで目が眩む。

『……あの時と同じだ、まったく同じだ』

数年前の記憶。

遠藤知世は瞳を細め、それを封じようとする。だが、それは更に鮮明に強く蘇ってきた。期待のアイドルデュオとして、一人の美少女とデビューしようとした自分がまさか……今、ここで出番を待つ身になるとは。

「……この歳で言つのもなんだけど……」

誰に言つ訳でもない一人言。

知世はセミロングの茶髪を首の後ろで指でき、後頭部の短いツインテールを軽く整える。

「さあ……皆さん、第一部はラストプリンセス知世ちゃんです！ その可愛さを後堪能ください！」

高音の声に客からの拍手が起る。

知世は数年前にそうした様にゆっくりと自分を落ち着かせる様に舞台へと歩みながら、先程中断した一人言を続けた。

「10の歳で言つのもなんだけど……人生って……わかんねえなあ

「どうぞ……知世ちゃんなんですか」

「ハイハイハイ！ どうも知世だよ～！」

高音の紹介に舞台に立った知世はフリルの付いた派手なピンクのドレス。

そのまるでコンサートのアイドルを思わせる衣装は知世の希望であつた。

「知世ちゃん！ かつわいいなあ

「下手なアイドルより遥かに上だよ～」

「この店、本当にレベル高いよな」

反応は上々だ。

知世は暗いホールに向けて投げキッスをする。

相手が顔が見えない程に暗いのはコンサートも一緒だ。

「はい、知世ちゃん、お客様に自己紹介をしてから挨拶してくださいね」

高音に促され、

「宜しく知世だよ～、身長は152?、スリーサイズは覗りや判るだろ～！ 今日のお客さんは巨乳党が多そうだけど、あたしは脱いだら凄いってタイプ……まあ凄い幼児体型つてオチなんだけどさ～、プリンセスオーフショーンのそつこうと一緒に担当つて説」

知世が明るく「冗談も交えて挨拶すると、ホールから好意的な笑い声と拍手が返ってくる。

『なんかファンイベントみたいだ……』

覚えのある気分。

だがそんな気分に包まれながらも、知世は自分の第一のステージはまだこれからが本番で事は忘れてはいなかつた。

「さあっ、みんなっ！　あたしと極上時間を過ごす権利、ドンドン参加してほしいぞ！　あたしも気合い入り過ぎて際限なく、メチヤクチャになるかも！　宣しくな」

アイドル時代の様に飛び跳ねるように身体を伸ばして声を出し、知世が再び暗闇に向かい投げキッスをすると、暗闇の向こうのホールの客達は少し大仰なくらいの大きな歓声を上げた。

2

「それでは……また、私と一緒に遊びして下さるかしら……」

沸き上がるホールの歓声が遠くに聞こえる裏口。

楓は先程まで一緒に部屋で過ごしていた青年の背中に持つていた彼のスースをかける。

「あ、ありがとうございます楓さん……スゴく、スゴく可愛くて綺麗で……」

「貴方も素敵でしたわ」

楓は人差し指で彼の頬に手を当て言葉を遮る。

「また……必ず、絶対に楓さんと部屋で過ごす権利を競り落とします」

「あまり無理はしなくて結構ですわ、初めてオーフンションしてくれた方はきちんと覚えてますわ……じゃあ、それでは」

楓が優しく手を振ると、青年は満足気な顔で手を何度も振りながら、夜の新大空町に消えていく。

「楓ちゃん……」

「そこを見計らって幸四郎が声をかけると、

「部屋を出る前にシャワーは浴びましたわ、お客様と一緒にですけど……次の舞台になりますわよ」

楓はアップにした赤茶色の髪を搔き上げて、幸四郎に歩み寄ってきた。

幸四郎の鼻に彼女の使っている高級ボディーソープの心地よい匂いが香る。

「休まないでいける?」

「次は問題ありませんわ、またその次と言われるのならば、少し間を入れて下さいまし」

「いや……今日は一巡までだよ」

幸四郎が答える。

8人の二巡は16。

今日呼んだ客は一二十数名だから、全員が女の子と過ごせる訳でないが、オークションといつ方式を探っている以上は当然に生じてしまう問題点だ。

「全員、お客様に廻らなかつたら不満出ません？ 風俗に来て、何も出来ないなんて、わたくしは殿方ではありませんので理解は出来ませんが、憤懣やるかたないんじゃありませんか？」

楓の問題提起は正論で、間違いはない。

勿論、それはオークション方式を取ると決め、打合せの時点で高音にも指摘されていた。

だが、この問題についての答えは幸四郎は既に決まっている。

「つひのお店はとびっきりの女の子と素敵な時間を過ごす権利を競り合お店なんだよ、競り合つ以上は何も得れないリスクはあるのが当然だよ……それでもオークションに参加したくなるよつな、可愛くて素敵な女の子をこちらが揃えれば良い事、うちの店はハッキリ言えば女の子を安売りはしないからね」

幸四郎が答えると、楓はなりには納得した様に笑つて、

「当然ですわ、安売りなんて冗談じゃありません」

そう肩を竦め、舞台袖に続く廊下を颯爽と歩いていく。

そんな彼女に幸四郎は百合乃に、オークション落札金額最高金額を更新されたとは何となく言いづらかったのだった。

続
<

1

「今日はここまで！ プレオープンの営業、お疲れ様でした！」

明かりを点けたホールで祐一が手を叩くと、プリンセスと呼ばれていた女子達はそれぞれリラックスした顔を見せ、隣の娘と話したり、ミーティングに使った各プリンセスの落札価格が書かれたキヤスター付きのホワイトボードを見たりし始めた。

「最終的に本日一番の招待落札価格は百合乃さんの一回目かあ

楓に対抗したプリンセスから、白いTシャツにジーンズの着慣れた格好に戻ったみなみが腕を組んで、むづつ、と唸る。

結局、プレオープンの最終落札価格の最高額は一回目の百合乃についた七万一千円。

それに次ぐのは六万五千円の一回目の楓。

更に一回目の楓が六万三千円が続き、トップは百合乃に譲つたが面目躍如といった所である。

「やっぱり百合乃さんはスゴい、可愛いし、お淑やかだし……プロポーションがもうたまんないし

「ですよね……一回目でも五万を越えてましたもんね」

みなみは、悔しがりながらも素直に百合乃の魅力を認め、恋音はとてもかなわないと言つた風に同意している。

「私は一回目は少し下がつちゃったからなあ……四万五千だつたか

な？」

「私の少し上がった一回目が四万四千ですから、凄いです……」

みなみが一回目が下がったのを悔やむと、恋音が首を振る。

「今日はそういう好みだったって事、たまたま、たまたまだって！
それに一回目は上がった子は少なかつたから、お客様は一回目で恋
音ちゃんの可愛さに気づいたって事じゃないの？」

落ち込み気味になる恋音を優しい先輩の様に、みなみは励ます。
結局、一巡回はみなみの言う通りに8人中で一回目よりも値段を
上げたのは、恋音とまゆりの2人だけであった。

その一人にしても一回目が周りに比べ、低めの三万円代だったの
が四万円代に乗せて来たという事なので全体的には下がったのは間
違いない。

いわゆる一回目は常連だけに「祝儀の意味もあるのだろう。

「まあまあ……みなみちゃん、今から金額ばかりに仏頂面しちゃあ
ダメだよ、さあ今日はプレオープン成功の打ち上げにみんなで御飯
と行こうか！」

ホワイトボードを見つめる一人に笑いかけてくる幸四郎。

「御飯？ そりや嬉しいけどさ、売り上げとかに仏頂面するのはオ
ーナーもそんなんじゃない？」

「そうだよ」

みなみが振り返つて訊くと幸四郎は頷く。

「だからせ……気にするな、とまでは言わないけど、売り上げに仏

頂面するのは止めてほしいんだ、それは俺や高音さんがする仕事だしね、プリンセス達はらしく、可愛く美しく居て欲しいんだ」

その言葉に8人のプリンセス達は幸四郎を見る。

「俺がね、このオークション形式の落とし穴の一つだと怖いのは、落札金額を気にするあまりに女の子がお客様を金額で判別してしまわないかなんだ……確かに高い落札金額を出してくれたお客様に特別にサービスしたい気持ちは出るだろうし、それはいい……でも、低めの金額を出してくれたお客様にも、君達の可愛くて素敵な所を十分に見せて上げてほしい」

「幸四郎……」

笑みを浮かべ、穏やかだが真剣な眼差し。

売り上げから収益が決まるプリンセスに、それを完璧に平等に出来るかどうかの難しさもキチンと理解した幸四郎の嘘を感じない言葉に、みなみは幸四郎を名前で呼んでしまう。「良い事をいつくれたね、オーナー！ ボクも今日は金額伸びなかつたけど、もう気にならないで本オープンは頑張るよっ！」

まゆりはそう言って幸四郎に駆け寄り、腕を取ると笑顔を見せる。

「期待してるよ、お客様にきちんと向かい合っていれば……成績は後から付いてくるから焦らなくても大丈夫」

まゆりに幸四郎は笑いかけた。

気にするなど言つても落札金額で女の子達に差は出てしまうのだ、競争は風俗業界では少なからずある事で、時には業績を伸ばす原動力となり、時には店を搖るがすトラブルの素にもなつてしまつ。

幸四郎は経営は素人であるが、幼い時から女の子達に気を使う父

親や高音の努力を知らない訳ではなく、自分も女の子同士の関係には気をつけるつもりでいたのである。

2

「どうでしたか？」

店の外。

裏口でメモをとっている男に高音は話しかけた。

「これは高音さん、御苦労様でした、あのカジノディーラーの格好、俺は萌えちゃいましたね」

男は書いていたメモから顔を上げる。

彼は今日の招待客の一人で月刊トップガールの記者の大西という青年だ。

年齢は三十代前半で高音と同じくらいだが、中肉中背で若々しく、高音の後輩に見える。

彼と高音はかなり前から面識があった、幸四郎の父親の秘書を本格的に始めた時、大西も風俗雑誌の取材をこの街で始め、御神本グループにも出入りをちょくちょくしていたからだ。

「どうでしたか？ つて、百合乃さん最高でしたよ……スゴく可愛らしくて優しくてね」

「それは、それは」

大西が返事をすると、高音は笑みを浮かべた。

彼は一度目の百合乃のオークションに参加したが、一度目の五万円をつけたが、その後はコールせずに見送り、二回目の百合乃のオークションに参加して、競り勝ったのである。

「一度田で貴方がコールした時は驚きました、よっぽど好みですか？」

「いやいや……見事なプロポーションについ、コールした時に、しまった！ 最後の娘まではとりあえず観ないと！ つて、黙つてましたよ」

「慌て者ですね、そんなに気に入つてくれたのならトップガールの表紙も近いですかね？」

高音は笑いかける。

勿論、冗談でそんな簡単ではない。

風俗規制解除の新大空町は激戦区であり、一日に回る金に比例して女の子に求められる物も当然、ハイレベルだ。

そして、新大空町の情報で成り立つていると言つても過言でない月刊トップガールの表紙やカラー特集ページに載るのは、ひょっとすれば芸能雑誌のそれと遜色の無い難易度かもしれない。

「表紙も特集もボクだけじゃなく、編集部で決める事ですけど……個人的には流石、御神本会長の息子さん、面白い方向から攻めてきたと思いますし、集めた女の子も素人が多いんですけど、それでも成り立つ形態だし、ルックスも非常に点数の高い娘ばかり集めてきたと感心してます……編集部も御神本グループの動向は気にしてますし、まったく記事にならない事は無いですよ」

大西は答える。

「……でも」

「でも？」

高音は眼鏡の向こうの瞳を細める。

「大王チヨーンも決して無視しない……この店が御神本グループの最後の砦という限り、この店が上手くいけばいくほどに彼らはこの店を見逃さないでしょ？」

大西の顔は百合乃の事を話した時と違い、引き締まつた物となつている。

「わかつてます」

頷き、高音は明け始めた空からの光を手で遮る。

「でも必ずや、必ずや、坊っちゃんにはこのお店を成功させて頂きます、そして……強引な手段で勢力を伸ばす彼等を駆逐する反撃の象徴として貰わなければいけません」

「……高音さん」

高音の視線には強く、そして悲壮にも見える使命感があつた。大西はそんな彼女を見つめ、

「やけにお喋りですね」

と、苦笑するのだった。

続く

第37話「色々な人がいますから」

「うわあ、スゲエ太陽が眩しいぜー」

商店街の道を照らす太陽の光に眩しそうに手で遮る知世。

「五時半かあ、少し眠いけど幸四郎ちゃんがお寿司を奢ってくれるなんてチャンスは無いからね！」

くるみは眠いと言つた割には皆の先頭を跳ねる様に歩く。
朝焼けの道。

幸四郎はくるみと店のプリンセス8人を連れて、プレオープンの打ち上げの場所の寿司屋に向かつて歩いていた。

「こんな朝からお寿司屋さんがやつてるなんて、ビックリだね」「なのです、ボクのいた神洋島では朝にお魚を食べなければ、朝市に行つて自分で捌くしかないのです」

「私も来た時は驚きましたけど、この街の飲食店には夜から朝に開いてて、昼に閉まつてる所が案外に多いんですよ」

「この朝に寿司屋が営業している事に驚いている菜ノ花と佐久耶に恋音が説明する。

風俗街ゆえの変則的な営業時間なのだろう、この街でお金を持っている働く女の子達の帰宅時間を考えれば不自然ではない。

朝方に疲れて家に帰る途中、食事を外食で済ませる女の子達が多く、需要はあるのである。

「まったく……朝から寿司なんて、わたくしは寝る前に食事は控えますのよ」「まあまあ、今日はプレオープンの打ち上げなんですね、せっかくオーナーが氣を使つてくださつてるんですから」

端整な眉をしかめる楓に百合乃が笑顔を向ける。

「そういう所も気にしなきゃいけないよね、昼夜逆転したからって素直に食べるのも良くないか……楓ちゃんみたいな見事な身体のラインを維持するのもすごく気をつかつてるんだね」

一人のやり取りを見ていた幸四郎が言つと、

「そうですね、まあ、でも今日は百合乃さんの言つ通りオーナーの気遣いもあるのですからお付き合いついたしますけどね」

そう答えながらも、身体への気遣いを讃められた楓はまんざりでもなもな口元を緩めたのだった。

やつてきたのは商店街の一角にある回転寿司店。

「いらっしゃいませ

威勢の良い挨拶をしてくる数名の男性店員。

朝の六時にもなつていないのだが、同業者であつた女の子がかなりいる。

「えつと……予約していた御神本ですが、11人の予定が10人

になつちやつたんですねけど」

「そうですか、どうぞどうぞ、いらっしゃく」

幸四郎が告げると、店員は笑顔で一行を席に案内する。高音が来ていなければ彼女が今日、来てくれた常連客に色々と感想を聞きたいからと、その内の数名と別に食事に行つたからだ。

「いらっしゃく」

案内されたのは向かい合わせで3人ずつ、計6人が座れる席が2つ。

寿司を回しているコンベアを横に見る良くあるタイプの席。

「どうも……じゃあ、適当に別れてよ」

幸四郎が言つと、

「恋音ちゃん、めぢやくぢや食べるからお寿司が直ぐに取れる奥ね」「恋音さん、めぢやくぢや食べるのですか？ それは意外なのです」「すいませんっ」

「くるみは手前がいい、ジユース取りにいくから」

「わたくしもそんなに食べないから手前で良いですわよ、それに奥に行つたら人様のを取らないといけなくて面倒ですわ」

などと各人が自由に座り始め、幸四郎は菜ノ花とくるみに挟まれ、向かいに佐久耶、知世、楓が並ぶ席にいつの間にやら座らされたのだった。

「じゃ遠慮なく食べてよ、朝じゃ入らないかもしれないけど」「そんな事は無いのです、ボクは特製大盛焼きそばをお客さんと平らげてから、シュークリームも食べましたが、お寿司ならまだまだ入るのです、さあああ知世さんに楓さんも佐久耶が取るのでドンドン言つてください」

「じゃあ……そこ、そこに流れてきた赤身マグロ」

幸四郎が勧めると、巫女服の袖をたくし上げる佐久耶、そこに知世がコンベアを指差す。

「お待ちつー！」

佐久耶は軽快に返事をするが、その行動は同じテーブルの皆を仰天させる。

なんと彼女は皿」とではなく、一貫あつた寿司をひょいとつまみ上げ、知世の前にポンと置いたのだ。

「な、な……何やつてんだあ！？」

「え？ 知世さんが赤身マグロを取れ、ってボクに言つたのです」

「お前……皿」と取るんだよ！ 何なんだ？ ギヤグやつてんのか？」

「あつ……そうなのですか？ 分からなかつたのです、お寿司は知つてるのですが、島では回転はしてなかつたのです」

驚く知世。

佐久耶はあっけらかんに舌を出し、苦笑する。

「か……変わつた娘ですわね」

「そ、そうだね」

弓張つの楓に、幸四郎が素直に同意すると、

「でも……お仕事だけじゃ、分からぬ顔がこれからみんな見えて
くるんじやないでしようか？ みんな色々な事情で様々な場所から
集まつているんでしようから……私はとても面白いと思ひます」

わづ隣の菜ノ花に微笑まれて、

「それもやうだ」

と、妙に納得してしまつのであつた。

続く

第38話「今、うるたえましたか？」

「いただきま～す」
「ボクもなのです、ちなみにこれはボクが直接つまんで、テーブルに置いてしまったお寿司なのです、無駄にせずにキチンと頂いていります」

知世はマグロの赤身を頬張つて嬉しそうな声を出し、佐久耶も誰得な説明口調でマグロの赤身に舌鼓を打つ。

「もう、朝からよく食べれますわね、それも箸も使わないで……」「ふふつ、楓さんはお寿司はお箸を使いますか？」

ため息を付きながら割り箸を割る楓に菜ノ花が笑いかける。

「ですわよ、素手は少し抵抗がありますわ……えと、菜ノ花さん、そこの鯛を取つてくださる？」「そ、うなんですか、はいはい……オーナー、前を失礼します、どうぞ」「

幸四郎の隣、コンベア側に座っていた菜ノ花は頷き、一貫の鯛の寿司が乗つた皿を取ると、丁寧に断つてから幸四郎の前を通して楓に渡す。

『何気ない事だけど、菜ノ花ちゃんは落ち着いて礼儀正しいなあ……それで可愛いんだから、男としては得点高いよ』

細かい気遣いの出来る菜ノ花に幸四郎がそんな事を感じると、

「一貫物だ……流石は楓ちゃん、鯛とかは一貫しかないのに値段が一緒、すなわち高いんだよ」

楓の頬んだ鯛の寿司に妙に感心するぐるみ。

「一貫で構いませんわ、わたくしはたべて食べるつもりはないですわ」

楓はそう答えるが、箸で鯛の寿司を皿の上で「ロロン」と横にしてから、ネタとシャリを挟むようにつまんで醤油につけ口に運ぶ。

「ほお～、変わった食べ方してる」

「別段、変わつてないですわ、こうすれば箸を使つても醤油をつける時に良くやるネタとご飯をバラバラにしないでしょ？」

「なるほど、くるみなんて箸を使うとネタが落ちちゃうから、醤油を下の」ご飯にしかつけらんない

「ご飯にお醤油を付けてしまつては無しですわ」

ぐるみは対面している楓に興味津々の様だし、楓の方も案外と邪険にしている様子は無い。

「手で食べれば関係ないじゃん」

「なのです……お寿司は職人さんの手から、ボクの手に直接触れる、ふれあいの料理なのです」

知世は箸を使うなんて面倒くさいと言つた感じ、佐久耶は何やらこだわりを述べて、パクパクと素手で食べる。

「『勝手に……ふれあい』と言われてもこんなお店の裏に職人さんなんていりでしょ？『ご飯を握る機械にアルバイトさんがネタを乗せてるだけですわ、オーナーはどう食べられますか？ 箸をお使いになりますか？』

楓は佐久耶のこだわりにチクリと釘を刺して、自分の箸を置くと、割箸の入った箱から幸四郎に割箸を差し出す。

「そうだね、ありがとう」

幸四郎自身にはその辺りのこだわりは特になく、箸でも素手でも意識なく食べていたので、楓の親切を素直に受ける。

「楓さん、私にも箸を」

「どうぞ」

「ありがとう」

菜ノ花も箸を使つよりで楓から割箸を受け取ると、綺麗にそれを割る。

くるみは楓のやつていた箸で寿司を横に転がしてからつまむのを真似はじめていた。

『女の子の仕草って、色々だな……どれが良いか、とかじゃなくて、それぞれの女の子の個性が出て来てるよな』

たかが寿司の食べ方一つなのだが、女の子の個性を感じてしまい、幸四郎は先ほど菜ノ花に言われた様に些細な所からお互いが見えてくる事に気がつきながら、何だかそれを楽しんでしまうのだった。

「おっ……そろそろ30皿だぞ、あたしは8皿だから結構だな、あと2、3皿で止めとくかあ」

皿を投入口に入れながらカウンターされる表示を見て、知世は言う。

「ボクと知世さんでかなり食べているのです……でもまだボクの挑戦は続くのです」

「くるみもまだまだイケるよ！」

「わたくしはもう遠慮しますわ」

「私はもう少し食べたいな、って感じです」

くるみや佐久耶はまだまだ食べれそう、楓は幸四郎の見た所、三皿しか食べていないので次の中は取っていない。

知世と菜ノ花はあと少し食べたそうだし、くるみと佐久耶はまだまだ入りそうだ。

「ところで菜ノ花さんってわあ……あつ、今来てるタコも取つてください」

くるみはモグモグと甘エビを頬張りながら、幸四郎越しに菜ノ花に視線を向ける。

「はいはい、ところでってなんですか？ オーナー、前失礼しますね

口元に笑みを浮かべながら、コンベアに流れてきた皿を取り、幸四郎の前を通そうとするが、

「えっとね……菜ノ花さんって、声がスゴくアーメ声だね」

「……えつー？」

突然のくるみの言葉に、菜ノ花は一瞬、息を呑むような声を上げて、タコの乗った皿をくるみの手に渡す前に幸四郎の皿の前に落としてしまうのだった。

続く

第39話「相手と石巻」

「うわー

「いーいめさんさー

皿の前で皿」と寿司を落とされた幸四郎が声を上げると、菜ノ花は慌てて謝りそれを取る。

「おーおー、大丈夫かよー!?

「うわあ、オーナーのお醤油皿にタコのお寿司が直接落下なのです、これは大惨事なのです」

驚く知世と佐久耶。

菜ノ花が皿を落とした場所にはちゅうひ幸四郎の醤油皿があり、醤油がテーブルにぶちまけられた形になってしまったのだ。

「平気、平気、大したことないよ……楓ちゃん、ちょっとかっこおしゃり取ってくれる?」

飛び跳ねた醤油がシャツを汚したが、幸四郎は努めて笑顔を浮かべ、楓におしゃりを取るよう頼む。

「ええ……ちよっと、へぬみさん、席を立つて下ります?」

「えー? う、うん」

おしゃりを手に取ると楓はぐるみを立たせ、

「へぬみさんは私の席で食べてくださいな」

そう告げると、くるみの今まで座っていた席、幸四郎の隣に座り、テーブルの上に飛び散った醤油を拭き始めたのである。

「楓ちゃん、ごめんなさい……使わせちゃって

楓に謝りながら、菜ノ花もハンカチを取り出して幸四郎のシャツを拭く。

「楓ちゃんも菜ノ花ちゃんも、いいよ、いいよ……自分でやるから

そう幸四郎は言つたが、

「オーナーは服に醤油がかかつてますわ、動いて拡がつたら、クリーニング代がかさみますわよ」

「私の不注意ですから、すいません……あの、楓さんの言つ通りあまり動かないでくださいね、醤油がしみこんじやいますから」

と、それぞれに答えられてしまい、結局は動けなくなつてしまつ。

「悪いね……あつ」

ふと、柚子と高級石鹼の香りが幸四郎に身体を近づけた二人から薰る。

良い匂いだ。

自分に身を寄せ、目の前のテーブルを楓が、シャツを菜ノ花が、それぞれ拭いている状態に顔を赤らめてしまう幸四郎。

それを誤魔化そうと顔を上げると、立つたままのくるみが頬をあからさまに膨らませ、つまらなそうな顔をしていたので、正面を向き直すが、そこには頬杖について、目を細める知世がいたのであつ

た。

＊＊＊

「本当にすいませんでした、シャツは明日にでも弁償をせなトセコ」「良いつて、どうせ安にシャツなんだから気にしなくていいよ」

頭を下げる菜ノ花に幸四郎は後ろ頭を搔きながら答える。

テーブルの上は楓が拭いてすっかり綺麗になつたが、幸四郎のシャツに付いた醤油はハンカチで拭いた位では落ちなかつたのだ。

「でも、やっぱり私の不注意だから弁償しないと」

「いいから、いいから、本当に気にしないで……くるみに渡す時に間にいた俺が中継してれば、良かつたんだからせ、菜ノ花ちゃんだけが悪いんじやないよ」

気にする菜ノ花に幸四郎が笑い、

「菜ノ花さん、不注意の責任をとりたい気持ちは解りますが、もうオーナーも許して下さつてるんだから良いんじやありませんか？」

それ以上はこの場の雰囲気が壊れてしまいましてよ」

そう楓に言わると、菜ノ花は少し複雑な表情を浮かべながらも、わかりました、本当にすいませんでした、と答えて頷いた。

それから20分程して一行は寿司屋を出る。
会計は予想以上にはならなかつた、寿司が好物で相当食べるだろ
うと覚悟していた恋音が遠慮をしたらしく。

「恋音ちゃん、遠慮は要らなかつたんだよ?」

「そんな、遠慮なんて……一十五皿食べちゃつたんですよ、本当に満足します」

幸四郎が声をかけると、恋音は赤面して首をフルフルと振つた。
すると、恋音と一緒にいたみなみが笑う。

「オーナー、滅多な事言わない方が良いわよ、恋音ちゃんが本気になれば百皿は食べれるんだから」

「酷いですぅ……せっかく、食べるの我慢したのに、みなみさんこそんな事言われるなんてえ」

不本意やつな声を上げる恋音。

「やっぱり我慢したんじやないか……お持ち帰り用のお寿司で良かつたら、すぐに出来るらしこし、買つてあげるよ? 部屋に帰つたら食べなよ、ほら何貫入りが良いか選んで?」

「あ? あ?」

みなみによつて思わず出てしまつた言葉を逃さず、幸四郎がツツ
「ミを入れて、お持ち帰り用の寿司の表示パネルを指差すと、変な
声を上げて、数秒間の間を置いた恋音は何かを観念した様にため息
をついて、

「…………はい、お願ひします。出来れば二十貫入りの方で、本当にすこませんです。」

と、素直な欲求を遠慮なく吐露した。

「良じよ……じゃあ、少し待つて」

それに笑顔で答え、レジの店員に持ち帰りの寿司を注文する幸四郎。

「すげえな、店で上手くやつてお客に奢らせたら、店の食べ物の売上が上がるんじゃね？ 恋音が食べたいって言えば、お客さんばかりの確率で奢ってくれるよ、さつと」

その様子を見ていた知世が言つて、軽くヒューヒュ笛を吹く。たが、何処か悟つた様な寂しい笑みを浮かべた恋音に、

「いえ……多分、次からオーケーションしてくれなくなるだけです、昔から食事に連れていくてくれた人は皆が遠慮しないで、つて言つてくれますけど……それから一度と私を誘つてはくれませんでしたから」

と、トーンの落ちた口調で答えられてしまい、知世は苦笑いしながら、

「「」、「めんな」

と、沈殿したあまりいゝ思い出ではない過去を浮き上がらせてしまつた事を、素直に謝る。

『みんな話してみると、可愛いだけじゃなくて本当に色々だなあ…
…きっと苦労もしてるんだよなあ』

幸四郎は持ち帰り用の寿司の代金を払いながら、そんな事を思つ
のだった。

続く

第40話「トップアイドル」

「ハイ、ハイ……「ツチはみんな帰つてきました、そちらはまだ？
なら俺も行きましょうか？ 大丈夫ですか……スタッフミーティ
ングは明日にしましょう、今日はみんな疲れているでしょ？ から、
ええ……ハイ、ではお疲れ様です」

幸四郎は携帯電話を閉じると自分の部屋のドアを開いた。
アパートの一階。

プリンセスオーネーションの寮であり、古い割には一部屋に小さな
キッチンの2Kのそれは小綺麗でしつかりしており、評判はそう悪
くない。

欠点と言えば、二ヶ所あることはあるのだが、トイレが女の子と共
同なのと風呂が無いので、話の通つていてる近くの銭湯に安く入らせ
てもらうか、店舗の女の子の部屋のお風呂を使うかになる所だ。
トイレは一階トイレを男子用という案もあるが、現在でも男女比
率を考えればそうはいかなかつた。

「高音さんもまだ常連さんといいるのかあ……大変だなあ」

欠伸をして幸四郎は畳の上に布団を敷き、スーツを脱ぐ。
先程の携帯の相手は高音だ。

彼女はこちらの打ち上げではなく、プレオープンに来てくれた常
連客に意見を聞く為に別に食事会をしたのだが、更に何故か二次会
に突入したらしく、もう少し遅くなるので、今日の夜に予定してい
た幸四郎と高音、くるみの3人で予定していたスタッフミーティン
グを明日に伸ばしたのである。

「どうあえず、ぐるみにメールして……寝よう」

素早くメールを打つと、幸四郎はスースを適当に壁に架けて、Tシャツでランクスで布団に倒れ込むのであった。

泥のように眠る。

そういう言葉があるが、今日の幸四郎はまさにそれであった。高音がいてくれたとはいえ、素人の起業。プレオープンまでの疲れがドッと身体にのしかかってきた様で布団の感触を意識する前に幸四郎は深い眠りに落ちていたのである。

＊＊＊

「1時半か……」

いつの間にか被っていた布団から顔を上げる。布団に入ったのは朝の七時くらいだったので、かなりの時間眠つた計算だ。

目を擦りながら立ち上がり、伸びをする。

「これからは昼夜逆転生活だもんなあ……慣れないといけないな

テレビをつける。

やっているのは昼のワイドショー。

別段、視たい訳でもないが、起きたばかりの意識がハツキリする

まで、ぼんやりと眺めている。

今日の特集は人気急上昇中の美少女シンガーソングライターの草^{くさ}薙^{なぎ}愛^{あいな}菜^なに一日密着という物だった。

「確かに可愛いよな……プロポーションも良さそうだし、この街に来てたら即座にスカウト……って、人気のアイドルに何を言つてんだよ？ オレ」

女の子を観る時に観察してしまつのが、職業病になつてしまつて事に苦笑しながら、後ろ頭を搔く。

「唇^{くちびる}過^{すぎ}れてるんだよな、何か食べるか」

部屋にはコンロと流しのある申し訳程度のキッチンと小さな冷蔵庫があり、幸四郎も一人暮らしの経験から自分が満足出来るだけの料理はこなす。

だが朝に寿司を食べたせいか、舌がお^じりてしまい買い物の力ツブヌードルがある事を思い出し、ヤカンに水を入れ、コンロにかけ、それを待つ間、壁に背をかけテレビを眺める。

「仕事にこだわりはある方だと思います、才能とか言われても解らないけど……どれだけ一生懸命やつたかは自分が自覚できますし、嘘も通用しないから」

栗色のセミロングに黄色いリボンで結んだツーテールの美少女、草薙愛菜が何かのインタビューにそう答えていた。

少女の丸みを残しながらも強い意志を感じる瞳。程よい鼻筋から薄い唇。整った輪郭。

一見細身に観せるが、豊かな胸元から見事なくびれのヒップライ
ン。

歌と音楽の才能溢れる紛れもない美少女。

草薙愛菜はそういう評価を大多数から受けている。

「言う事も大人びて、立派なもんだなあ……芸能オンチの俺でもこの娘は知ってるもんな、大した娘なんだろうな」

腕を組む幸四郎。

「いや、ホント……こんな娘がいたら」

勿論、草薙愛菜の美貌に対してプリンセスオーディションの女の子が一方的に劣るなんて思わないし、好みによっては楓の方がとか、知世の方が、という人間はいるだろうが、店のエースクラスになるのは確定だろう。

「……なんて、あり得ない事を言つてる場合じゃないよ、本オープ
ンまでに何とか女の子をスカウトしなきゃいけないんだ」

美少女アイドルに目移りしている場合じゃない。

今の8人の女の子達に劣らない娘をスカウトしなければならない
のだ。

草薙愛菜がギターを片手に歌う姿を見ながら、紹介所にまた直接、
顔を出して出そうか、などと考えていると……

玄関の方向から木製のドアを2回、軽くノックする音が聞こえて
きたのであった。

続
<

第41話「ヤキモチー？」

「え？ はあい……」

ノックに答えて幸四郎はドアを開ける。

「菜ノ花ですナゾ、こきなり来て、すいませんナゾ……さやああああっ！」

そこに立っていた菜ノ花は幸四郎を見るなり顔を手で隠して、背中を向けてしまつ。

「え……」

その理由はすぐに理解できた。

それは自分の格好。

上がTシャツに、下がトランクス。

寝て起きたばかりの格好でいたのである。

「な、菜ノ花ちやんー、ノメンシ、本当にノメンシ……今、何か着るからっ」「お願こしますっ」

幸四郎は慌ててドアを一旦閉めると、部屋の隅に置まっていた短パンを見つけると、素早く履き再びドアを開ける。

「ゴメンね……もう短パン履いたから平氣だよ」「は、はい……」

菜ノ花は顔を手で隠したまま振り返り、少しづつ閉じた指を開く。

「今まで寝てたからさ、でも女の子ばかりの『』で不注意だつたね」

「いえ……そんな、私こそまだ寝てたかもしれない時間に、ゴメンなさい」

顔に当てていた両手を謝るように合わせ、菜ノ花は赤面したまま苦笑する。

『カワイイ……』

自分の不注意で菜ノ花を赤面させたのだが、その仕草に幸四郎はそんな事を思つてしまつ。

「えつと……オーナーはお昼ご飯はまだですか？」

「まだだよ……一応、料理中かな？」

菜ノ花の問いに、幸四郎はドアのすぐ横にあるキッチンのコンロを指差す。

「ヤカン……カツラーメンですか？」

「まあね」

幸四郎が肩をすくめて見せると、

「オーナー、朝のシャツのお詫びにお昼のカツラーメンを諦めて、奢りますから一緒にお昼に行きませんか？」

菜ノ花はそう言って幸四郎を覗き込んでくる。

「え？ シャツの事なら気にしてないよ、本当に安い物だから」

「私の奢りだつて大したこと無いです」

「いや……でも」

「嫌ですか？ 2人でお食事いくの」

「イヤイヤイヤ、菜ノ花ちゃんみたいな女の子とご飯行くの嫌な訳
ない……ほら、たいした事ないのに気を使わせたみたいで」

「使いたいんだから良いじゃないですか？ 使われたくないなら、
ハツキリ言つてくれて構いません」

「いやいや……そんな事無いってば」

わずかに不機嫌な様子を見せた菜ノ花の問答、それに幸四郎は慌
てて手を振つてしまつ。

「じゃあ、私の奢りを受けてくれますよね？」

「だから菜ノ花ちゃんに誘われて嬉しくない奴なんていないよ、あ
りがたく」口にになります

厚意に変な気を使い過ぎるのも逆効果だと判断し、ペコリと頭を
下げると、菜ノ花は、

「はい、じゃあ、あと30分したら、また着ますから……ね」

そう告げてから、小首を傾げて肩をすくめ、微笑みを浮かべてド
アを閉めたのであった。

「せつかの厚意なんだから、すぐ受け取るべきだったかな、でも
ちょっとキレてなかつた？ ああいうとこもあるんだな」

落ち着いた印象の菜ノ花が一言、一言のやり取りで少し不機嫌な表情を見せたのは意外だった。

女性の微妙な心理といつ奴だろうか……
幸四郎が頭を搔きながら、ドアの鍵を閉めようとすると、閉まつていたドアがスッと開き、

「別にキレてませんよ、そんなに気が短くはありませんから……それにキレたら普通じゃ済みません」

そこには意味深な笑みを浮かべた菜ノ花が立っていたのだった。

＊＊＊

「オーナー」「ああ……うん、それじゃ行こうか」

ちょうど30分が経つたのを見計らった様にドアがノックされたので、カジュアルシャツにジーパン姿に着替えた幸四郎はドアを開ける。

「一時過ぎか……お昼にはちょっと遅いですね

黒髪のセミロング。

留めた黄色いカチューシャから、額に幾筋か垂らした前髪。
パツチリとした一重の瞳に細いフレームの眼鏡。 黒の長袖シャツにショートジーンズパンツルックは菜ノ花のバランスのとれたボディーラインを引き立たせる。

何度か見ているが、菜ノ花はスカート系はあまり履かない様だし、足元もスニーカーが多く、案外にボーグ・イッシュだ。

「そうだね、歩く？ それとも」

「とりあえず駅前まで歩きましょう」

「わかった」

とりあえずと言つたからには、駅前から電車に乗るのかもしけないが、あえて聞かずに幸四郎は彼女と歩き出すが……

「ありや？」

アパートの一階に並んだ部屋のドアが開き、パジャマを着た知世が田を擦りながら出てきたのである。

普段は茶髪セミロングに両側頭部からテールを伸ばす知世だが、寝起きなのでただのセミロングだ。

「知世ちゃん、今起きたばかりですか？」

「まあ、そつちはなんだよ、オーナーを連れてテート？」

笑顔を浮かべる菜ノ花に知世は頷いて尋ねる。

「まあ、そうですよ」

「へえ～」

菜ノ花の答えに知世は幸四郎の方を見て、つまらなそうな声を上げながら瞳を細める。

「あ、その……」

菜ノ花がデートと問われて、否定しなかった事は嬉しくもあるが、明らかに不機嫌な瞳を向けてきた、知世にはどう答えていいかは迷つてしまつ。

「じゃあ、あんまり遅くなれないから……行きましょう、オーナー

菜ノ花は知世に軽く手を上げて、再び歩き出す。

「ああ……いらっしゃい」

菜ノ花に手を振り返す知世。

「それじゃあ……行つてくるね」

後ろ姿の菜ノ花に続き、知世の横を幸四郎も通り過ぎ去りするが、

「ああ、オーナーもいって……いらっしゃい！」

と、知世に逆水平チョップをお見舞いされてしまつのであつた。

駅前への道のり。

菜ノ花と並んで商店街を歩く。

『知世ちゃんもキツいなあ、でもヤキモチだつたら、知世ちゃんみ

たいなカワイイ娘にそう思われるのは悪い気はしないけど

幸四郎がそんな事を思つていると、歩きながら菜ノ花が後ろ手を組み、覗き込んでくる。

「知世ちゃんも随分、子供さんですね、ヤキモチ焼いてハツ当たりなんて、今度オーナーから誘つてあげたひづですか？」

「そ、そうかなあ？」

「でも、その時は私に見つからなことひづ……」

「ははは……」

笑顔の菜ノ花。

幸四郎は乾いた笑いを浮かべるしか出来なかつたのだった。

続く

第42話「突撃、昼下がり寝起毛「一ナ」」

「やつほう、知世ちゃん！ 幸四郎ちゃんは？」
「ああん？」

知世は幸四郎と菜ノ花を見送った後、アパートの前で日向ぼっこをしていたウリ坊のタツノリを見つけ、座り込んでシンシンと突いていたのだが、いきなり声をかけられ、不機嫌な声を廳せず顔を上げた。

「タツノリとパジャマ知世ちゃんのツーショットだね、二人とも可愛いね」

そこに立っていたのはタンクトップにショートパンツ姿のくるみだ。

座り込んだ知世に向かってハンディカメラを構えてくる。

「くるみかあ……幸四郎なら菜ノ花のヤツとデートだつてさ、ところで何だよ、そのカメラは？」

「菜ノ花ちゃんとデート？ そつかあ……ちなみにこのカメラはみんなの紹介画像を撮っちゃうハンディカメラでえーす、知世ちゃん、スマイルスマイル」

「お前、アイツがデート行つても平気なのかよ？ 昨日の寿司屋で楓に立たされて、席に座らされた時に膨れてたつ？」

「知世ちゃんは？ スゴい怖い目してたじyan」

「あ……あたしはアイツが楓とか、菜ノ花とかに『アレアレ』過ぎるのが気に入らないだけだよ」

質問返しに知世が赤面すると、

「お～、知世ちゃんの照れるのカワイイ……撮つてますよー。」

「へみは笑う。

「お～っ……こひつ、話をいまかすなつ、昨日酔れたのは何なんだよ」

「どうだらうね、まあこんなお店をやるのなら、幸四郎ちゃんが全く知らないよりはもてる方がマシかもしないね……でも、知世ちゃんの気持ちもぐるみは解るよ」

「答えになつてねえ」

「あはははは……カワイイ知世ちゃんを撮るよ～」

「パジャマだつーつたく……もつ、お前もアイツもよくわからんねーよ」

答えをばぐらかされた知世だが、それ以上は追求しようとはせぬ、タツノリの頭をポンポン叩き、ため息をつくのだった。

「はあ～い、撮影会ですよー。」

「はあい？」

ぐぬみの奇襲を受けた百合乃は既ちつな田を擦りながら、布団から身体をゆっくり起こす。

ピンク色のパジャマ。

「お～、百合乃さんネグリジェかと思いきやパジャマかあ～？ 胸元のボタン2つも外して、デッカイ胸が見えちゃうぞお～」

くるみに付いてきた知世が声を上げる。

「99? エカップの胸チラ、これは朝から、『じつあん』です
「ん……? なんですか、なんなんですかあ?」

くるみがボタンが開けられ覗かせる、魅惑的な深い谷間にカメラを近付けるが、当の本人の百合乃は事態が飲み込めていない様に首をかしげ、まだ眠そうな声を出した。

「お宝映像です、百合乃さんの寝起きアーング、パジャマからはみ出ちゃう位のエカップのバースト!」「そりにサービス!」

何だかんだでこうこうお騒ぎが好きな知世が、百合乃の胸元に手を伸ばす。

「はい?」
「それつ……もう一つボタン外しい!」
「つねおおおおつ、すつすつげえええ!」

ボケる百合乃のパジャマのボタンを知世が一つ外すと、百合乃の白い肌より更に色白の胸元の隆起が露になり、くるみがカメラを近づけて叫ぶ。

「これは何ですかあ、止めてください!」

ようやく意識が覚醒したのか、百合乃は胸元に毛布をかけてしまう。

「あ~、もう少しで百合パイが全部、見えそつだつたのこ……いや、それとも見えた?」

「チラツと見えたかも、見えたかも！」

「一体、お一人は何しにきたんですかあ！？」

妙なやり取りをする一人に、百合乃はいかにも迫力のない怒鳴り声を出す。

「撮影だよ、ほら……昨日の会場は『テツカイモーター』に静止画だつたでしょ？ だから動画を撮りに来たんだよ」

「や、そつなんですか？ で……あの幸四郎さん、いえオーナーは？」

百合乃がそつまつて、キラロキラ口ずると、

「幸四郎さんなら……菜ノ花さんとトークだよ！」

知世が百合乃の後ろに素早く周り、背後から胸を鷲掴みする。

「あ……あんつ、や、やめてください！」

「色つぺえ声を上げるじやねえか、おばちやん！ ほらほら、うわあ……手に収まんねえ！」

「お、おばちやん！？ ひ、ひどいです……止めてください……あ、あふう！」

「ほらほらほら、この『ドカパイ』で幸四郎を誘惑しないと、菜ノ花に持つていかれちゃうぞお！」

「や、やつこいつもりは……あんつ、あつませえへんつ……んんっ」

知世に背後から胸をまたぐられ、抗議の声の中にも声を上げる百合乃。

「しゅ……しゅ」すゑゐる、頑張れ知世ちゃん！ 禁断のパジャマ格闘技！ エカツプと△カツプの格差おっぱい絡み！」

「つむせえ！」

「おはあつ……」

くるみはそんな状態を興奮気味にカメラに収めるが、余計な煽り言葉が知世から蹴りを呼んでしまい、絡む二人にカメラを持ったまま倒れこんでしまう。

「ぐ、くるみちゃん……平氣ですか？」

田舎乃は倒れてきたくるみを慌てて、胸元に抱き留めながら、

「菜ノ花さんですかあ」

と、ポツリと呟くのだった。

続く

第43話「デパートに来ました」

「神女デパートかあ……久しぶりにきたかも」

新大空町駅より各駅停車でふたつ目の駅前。
そこに立つ十階建てのデパートを幸四郎は見上げて言った。
関東で有数の老舗百貨店グループのデパートで、古くからあり、
学生時代から幸四郎も知っているが足繁く通った訳でもなく、ここ
数年は家を出ていたので行つた覚えはない。

「はい……ここならお食事もグルメフロアに結構、お店が入つて
し……色々な階を観てても飽きないんですよ」

「デカいもんな」

菜ノ花の言葉に頷く。

最近の不況で百貨店の苦戦は良く語られる所だが、神女デパート
には新大空町よりも大きく、利用者も多い駅があり、そこから人が
流れる様に入つている。

「直接行ける通路も出来てるんだ」

「オーナーの知つている頃は無かつたですか？」

「ああ……本当に久しぶりなんだ、学生時代から来てないかも」

「ふふつ、オーナーの学生時代かあ」

笑う菜ノ花。

「な、なに？」
「い、え、別に学生服着たオーナー、見てみたい……なんて」
「いやあ、今とたいして変わつてないよ、それより制服姿の菜ノ花

ちゃんの方が見たいなあ

幸四郎が意識しておどけると、

「じゃあ……今度、実家に行つて取つてきますね、ブレザーですよ、二人つきりの時に着ますから」

菜ノ花は冗談か、本気が判別しかねる事を言いながら笑った。

「まずはお食事から」

エレベーターの前に立つた菜ノ花はフロア表を見上げる。最上階の十階だ。

一人は並んだエレベーターで、一階に降りていたうちの一つに乗る。

買い物客などがかなりいるが、一緒に乗ってきた客はない。

「十階と……」

幸四郎がフロアボタンを押すと、菜ノ花はエレベーター内の壁に貼られたポスターを見た。

「あつ……」れ、草薙愛菜ですね

「そうだね」

そこに貼られていたポスターには、

『草薙愛菜ライブ、当デパート前特設広場で開催決定……』

と、書かれ、セミロングヘアをツーテールにした美少女がギターを手に歌っている姿が大きく写真になっている。

「今朝、テレビでも見たんだよ、流行ってるね」

「ええ……可愛いし歌も上手いし、今度は主題歌を歌つて映画の主演もするやつですよ」

オーナー

そう感心しながら呟く幸四郎に、ため息をつく菜花。

「『メン』『メン』……つい仕事柄、可愛い女の子は観察したりやうんだ、そりこえ、菜花ちゃんの時もそりだつたでしょ？」

「…………オーラーたら攻いですね」

幸四郎が初めて出会つた時の事を例えに出すと、菜ノ花はその意図を解つねがうら歎笑い。

「本当だつて……でも大丈夫なのかな？ こここの駅前広場にこんな
アイドルが来たらファンで一杯になつちやわないのでかな？」

馬前広場は最近拡張されてイヘントボリ川になつてお

「それでも一枚はなるでしょ。」
「彼女はストリート時代はこの辺りで歌つていたらしいから思い入れもあるんじやないですかね？」

話しているうちにエレベーターは最上階に着く。

「結構、店の数があるな……スゴいね」

神女ヶ淵パート最上階のグルメフロア。

ここまでは学生時代には来た事がない。

「中華やイタリアン、和食からラーメン屋さんやカレー屋さんまであるんですよ、どれにします?」

「初めて来たからね、ちょっと迷うなあ」

「ですよね?」

「来た事あるんだつたら、菜ノ花けやんのお薦めはあるかな?」

初めてで迷つた幸四郎が振ると、

「じゃあ……とびっきり美味しいお店があるんですけど、でも食べる前に一人でショッピングしないといけなくなります……お腹はまだ我慢できます?」

菜ノ花はそんな事を言いながら頬笑んだのだった。

続く

第44話「唐突アプローチ」

「へえ……」の時計いいなあ、光るんだ、ホールに置こうかな
「カワイイですけど、少し小さいです、お密さんがみえますかね」
「そうかあ、ところでまだかな?」

「もう少しですかね、今頃は焼きに入ってるかもしませんね」

雑貨コーナーを見ながら菜ノ花と幸四郎はそんな会話を交わす。
一人で見上げる蛍光時計は午後三時五十分を差している。
カツブラーーメンを断念しての昼食はいまだに幸四郎の胃には入つ
ていない。

それには一時間ほど前のやり取りがあつた。

菜ノ花お薦めの食事を食べよつといつ事になり、入つたのは鰻の
専門店。

だが、菜ノ花は席にもつかずに入口で店員と一、二話すと幸四郎
に振り返り、

「そこの生け簀で生きてる鰻を出して、きちんと捌く所から始める
ので、時間かかるらしいですから、席は予約したので四時くらいま
で他の階を見てから戻りましょ」

と、告げてきたのだ。

「あ……そつなんだ、そりや凄いね、本格的だ」

待つといつても一十分くらいと勝手に踏んでいた幸四郎は、店の
店員が小さな生け簀の鰻を捕まえようとしているのを見て苦笑しな

がら頷き、この数十分は空腹は最高の調味料という言葉を実感しつつ、菜ノ花と神女デパートの中をブラブラしていたのであった。

「いただきます！」

手を含ませる幸四郎の前で湯気を上げる鰻丼。
匂いもかぐわしい。

「炭火で焼いてるらしいですよ、いい匂いですね」

「そうだよね、コンビニ弁当とかで食べるのとは見かけから違うよ

……「うーん、美味しい！」

正直言えば、ここ最近まで家を出て、暮らしていた幸四郎はアパートにバイト暮らしで、少しでも食費を浮かす為に自炊をしていたので、手軽だがコスト的にはキツいコンビニ弁当等は滅多に食べた記憶がなく、その中でも割高な土用の丑の日に店頭に並ぶ、鰻蒲焼き弁当など食べた覚えは無かつたが、目の前のそれは鰻が大きく見た目が違うのは判った。

そして、味も氣のせいかも知れないし、お預けをくらつたせいもあるのだろうが格別に感じる。

「いやあ……美味しい

「オーナーったら、そんなに早く食べなくても、『飯粒ついてます

菜ノ花は丼を置き、幸四郎の頬に付いた米粒を人差し指の先に取ると、

「あ～ん、マニキュアはしないから平氣ですよ」

そう言つて、指先を幸四郎の口の中に入れた。

「あ、ありがと……」

赤面する幸四郎。

店はこのグルメフロアでも高級店に位置するらしく、午後四時といふ中途半端な時間もあるので客が沢山いる訳ではないのだが、照れてしまつ。

「ふふつ、何、赤くなつてるんですか？」

菜ノ花は口元に手を当てて笑う。

「いやあ……ほら菜ノ花ちゃんみたいな美人にそんな事されたら、照れるのが普通だよ」

「上手いですね」

「上手くないよ、菜ノ花ちゃんの方がどうだかは知らないけど、俺はハッキリ言つて経験不足なんだからさ、そういう弄り方されたら勘違いしちゃうよ」

幸四郎は眉をしかめながら笑う。

異性を退屈させない会話も上手くも何とも無いのは自分が一番解るので、気の聞いた台詞がすぐには出来ない。

年下の菜ノ花の方が異性への対応と経験が遙かに上手に違いないのだ。

彼女みたいな容姿に性格の女の子を放つておく程、この世の男は草食ばかりでは無いのだから。

「あつ……オーナー、私が経験豊富つて言いたいんですか？」

「いや、少なくとも俺よりはあるよね？ 菜ノ花ちゃんを周りの男が放つておく訳ないでしょ？ 付き合つて、つて男の子がいなかつた筈がないよ」

「まあ……結構、付き合つてくれとは言われた事はありますし、実際に付き合つた事もあつますけど」

菜ノ花は素直にそれは認めつつも、

「結構、私つて性格が強いんですね……だから長続きしなくて、最近は独りぼっちです」

と、罰の悪そうな顔をして笑つた。

「そつなんだ、いやあ菜ノ花ちゃんがフリーなのは世の男性には朗報だよ、もちろん俺にもね……それにしてもこの鰻は柔らかくって美味しいよ」

幸四郎は軽口を混じえ、返事をすると、おもむろに鰻丼をかきこむ。

だが、そんな態度をとりながらも少し反省する。

『失敗したな、あんまり男女関係は深く聞いちゃダメだよな』

風俗関係の女の子には店や周りの女の子に迷惑がかからない限りは、あまり突っ込んだ人間関係や家庭事情を聞くのは良くないとされているのを思い出し、この話題を変えようとわざと素つ気ない返事をしたのであった。

「朗報ですか……」

明るい表情で菜ノ花は顔を上げた。

「え……まあ」

その表情の意図が掴めず、幸四郎が丼を持ったまま頷くと、菜ノ花は身を乗り出し、幸四郎の耳元に口を近づけた。

「な、菜ノ花ちゃん?」

「オーナー……今日はお店には誰もいませんよね?」

「え……うん、高畠さんもいないと想ひ」

問い合わせの意図はまたもや解らないまま、返事をする幸四郎。菜ノ花はポツリとよかつた、と呟いてから言った。

「実は昨日、お密さんに下手だつて言われた事があつて、本オープンまでに練習したい事があるんです……身体を貸してくださいますか?」

「そ、それって……」

「聞くんですか? やつた方がよくわかりますよ」

「いや……でも」

突然の申し出に驚き、躊躇する幸四郎に、

「饅丼……早く食べちゃつて下さいね、私の分も食べちゃつて下さい、たっぷり栄養つけて頑張つてもらいますから……」

菜ノ花は今まで彼女から聞いた事も無いような、まるでもう少し若い別の美少女の様な声で囁いたのである。

「うふ……わかつた」

いきなりの菜ノ花からのアプローチ。

躊躇はしたが、結局は拒む理由もなく、そのつまづきにもならない。

当然の男の性。

幸四郎は山椒の効いたタレのよく染みたご飯を素早くかきいり込んだのだった。

続く

「お腹すいた……」

「何だお前、まだ居たのかよ？ 帰ったのかと思つたぜ、勝手に部屋を開けるんじゃねえつ」

突如、部屋に現れたぐるみに知世は怒鳴る。

「まゆりちゃんの部屋でタツノリと遊んで、恋音ちゃんの部屋でパソコン弄らせて貰つてたんだ、そしたらお腹すいた」

「随分遊んでたんだな、もう6時半かあ……あたしもお腹すいたぞ」

知世も自分のお腹を擦つた。

「やつと言えば、お前はアタシ達の動画を撮りに来たんじゃないのか？ 百合乃おばちゃんのオッパイ動画以外に何か撮れたのか？」

「えつとね……タツノリは結構撮つた、後はあんまり撮つてないや」

「あんな……眞面目にやつてんのか？」

あつらからんに返事をするカメラマンに知世は呆れるが、

「だつて……幸四郎ちゃんは居ないしさ、楓ちゃんには撮影拒否されるし、百合乃おばちゃんは恥ずかしがつてもう撮らせてくれないしさ、恋音ちゃんはパソコンながら食べるだけだし、みなみちゃんとか佐久耶ちゃんは出かけてるみたいだしさ」

ぐるみはそつと聞いて膨れつて面で反論する。

「それで、もう撮影は止めて、まゆりちゃんや恋音ちゃんと遊んで

た

「そうですか……次はちゃんとモニター用の動画を撮ると嬉しいぜ、みんなも協力してくれると思うわ」

「そうだね、幸四郎ちゃんに言つてみるけど、今日はもうヤツメ、お腹すいた」

予め連絡もしないでプレオープンの翌日になつてきた大胆な田口をつぶりながら知世はため息をつく。

楓の撮影拒否などは知世には何となく解る。

プライベートの無防備な所を撮られるのを嫌つたに違いない。

その辺りの注意をしたのだが、くるみはもう撮影モードではなく、食事モードのようだ。

「じゃあさ、プレイルームに皿を集めながらお前が作れよ、そうすれば撮影の事を話せるし、材料はみんなが持つてくるのを調理すれば相伴にあずかるんじゃないかな?」

「え~

知世は提案するが、くるみはまるで子供の様な不満そうな声を出す。

「私が作るの? 知世ちゃんなら作つてくれると思つて恋音ちゃんの部屋から出て来たのに」

「お前は仮にも店で厨房はこいつだろー」

くるみの台詞に知世は思わずツッコミを入れてしまつたのだった。

「うーん、しょうがないなあ……くるみが作るのせ戻いけど、ところでフレイルームって何?」

くるみが不思議そうに首をかしげると、後頭部の短めのツインテールもそれに倣う。

「ああ…… そうか、くるみはここに住んでないんだよな、プレイルームっていうのは共通の居間代わりに管理人用の広めの部屋をフスマなしにぶち抜いた部屋だよ、エアコンもテレビもあるし、DVDとかも共通で使っていいって、幸四郎が作ったんだよ」

「へえ～ スゴい！ そこはキッチンと料理もできるのですか？」

くるみは知世の説明に妙に感心して、まるで小学生の様に手を上げて、更に質問してくる。

なぜか敬語。

「ああ…… それぞれの部屋にあるような小さなコンロじゃなくて、結構高そうなコンロがあるよ、料理はそこの方が美味くできるよ」

「そうかあ……」

「まったく、広めの管理人用の部屋だつたらそのまま自分で使えればいいのに、近くの業者入れてプレイルームにしたらしいよ、アイツも変わってるよな」

知世が両手を後ろ頭に回す。

ちなみに知世はセミロング、くるみはミディアムの髪の長さの違いはあるが、2人は後頭部の髪をチアガールのボンボンを小さくした様な短いツインテールにしている。

「バカツ！」

「バシーン！」

ぐるみの手の平が唐突に知世の頬を捉えた。

「な、な、な……」

頬を押されて、知世は睡然としてしまつ。

「知世ちゃんは幸四郎ちゃんの事を解つてない、幸四郎ちゃんは別個に籠もりがちになる毎に集まってもらいたくて、このプレイルームを作つたんだよ！ よし来た、幸四郎ちゃんの気持ちを受け入れたつ！ 今日はぐるみが皆にご飯を振るまつ！」

「いや……だから、あたしはやつしろつて言つたじやんか、え～とか言つたのお前だし、それと……なんで叩いた？ 叩かれなきやいけない程かい？」

頬を押さえながら、ジト目を向ける知世。

「それほど悪くはない、『メンツ、ノリだよ』

ぐるみはビシッと手を立て謝罪すると、拳を力を込め振り上げた。

「みんな呼べつ！ 幸四郎ちゃんと菜ノ花の奴も、百合乃おばちゃんも、楓ちゃんもみなみちゃんも、引きこもりパソコンで食い溜めの恋音ちゃんも、みんなみんな呼ぶんだよ！」

プレイルームの話で何かに火の付いた様子の幸四郎の幼なじみを見つつ、携帯電話を取り出し、

「さりげなく、菜ノ花の奴つて、怒りを表すなよ……幸四郎と菜ノ花には電話するか、まあモニター用の動画についての食事会議つて言えば、断れないだろ？ しな……た、菜ノ花ちゃん、楽しいティー

トの時間は終わつ……だ、ぜー。」

知世は幸四郎の携帯の番号に表示を合わせると、発信ボタンを押す。

「あー、ぐるみ……あとなあ

呼び出し音が鳴り続ける携帯。

「どしたの？ 幸四郎ちゃん出ない？」

「今、呼んでる、この電話には関係ないけど、お母さん百合乃おばさやんつての、もつ止めよつた、泣こしちゃうから……」

「ラジヤです」

ぐるみせじとしした敬礼をした。
その会話中もホールは続いている。

「おーい、早く出へー、緊急リーディングだぞお、無視しても無駄
だぞお」

知世は不敵にもとれる笑みを浮かべて、十数度の呼び出し音を
聞く、もつと出るまで続けるつもつであつた。

続く

第46話「知世▽S菜ノ花!-?」

「はあはあはあ……」
「ん……はあ……ふう、可愛いですね」

胸元に顔を埋めて、荒い息を吐く幸四郎に菜ノ花は自らも息を整えつつ、笑顔を見せる。

プリンセスオーフショソの店舗内、菜ノ花用の部屋のベッドで一人は生まれたままの姿でした。

「可愛いって言われるのは珍しいよ……でも菜ノ花ちゃん、柚子の匂い……いい香りだ」「ふふつ……あんつ、くすぐつたいですよ」「もう少し特訓しようか……菜ノ花ちゃん」「いいですよ……んむ」

ピコリコリ……

「あむ……んむ、オーナーキス上手く……んむ」「菜ノ花ちゃん……」

ピコリコリ……

「あんつ……くづく」

「菜ノ花ちゃんの高い声って、スゴく可愛い」

ピコリコリ……

「誰からですか?」

菜ノ花は胸元の幸四郎の顔を肩から上げる。

「わかんないよ……でも、放つておけば……」「名前見てください」

「いいよ……そのうち切れるからね」

再び胸元に顔を埋めようとする幸四郎だが、菜ノ花は肩を離さない。

「いいから見てください」

「うん……菜ノ花ちゃんの低い声って怖いね」

幸四郎は苦笑を浮かべて、菜ノ花から離ると、ベッドに座り、下に脱ぎ捨てられたポケットの上着から呼び出し音を鳴らし続ける携帯電話を取り出す。

「誰ですか？」

田を細める菜ノ花。

呼び出し音はまだ続いている。

「…………」

「…………」

幸四郎に携帯の画面を見せられた菜ノ花は明らかに不快な表情で唇を噛む。

「「」のまま置いて……」「出でてください」

「いや、そ……」

「出でください」

「はい……」

鋭い声と視線に幸四郎は怒られた子供の様に頷くと、携帯を耳に付けようとするとが菜ノ花は裸のまま、幸四郎の肩に両手をかけて後ろから、しなだれかかってくる。

「な、菜ノ花ちゃん！？」

「いいですよ、早く取って下さい」

背中に伝わる肌の感触に赤面する幸四郎だが、耳元で囁く声になだれかかってきた理由が何となく判つてしまい、後ろの菜ノ花には解らないように複雑な表情で電話を取つた。

「はあい……幸四郎、知世だよ～！」

「ああ……どうしたの？ 知世ちゃん？」

知世の明るい声。

対する幸四郎は背中の菜ノ花が気になつて、声がわずかに引きつる。

「菜ノ花も聞いてるか～、聞こえますか～」

「一緒にいるけど聞こえる訳ないだろ？」

知世の声に菜ノ花がピクリと動いたのがわかつたが、幸四郎が気にしない事にして答えると、

「じゃあさ、今日ね～、くるみが来てモニターに映す動画の事でさ、みんなで集まつての会議が行なわれる事となつた……集合場所はプ

レインーム、時間は7時からだ、早く来い、みんな来るからなつ
！ じゃ～ね～、菜ノ花ちゃん」

知世はわざと言い放ち、返答も聞かずに電話を切ってしまったのである。

ツーシーツー。

何を言こ返さうとももわづ電話は切れていた。

「菜ノ花ちゃん？ …… ひひひ …… つあひ」

菜ノ花に振り返りわづとした幸四郎は思わず、声を上げてしまつ。

「七時ですか…… まだまだ！」 せばく元氣ですからね、ちょっとと遅刻しちゃ いましょ うね」

後ろから幸四郎のそれをいじり、菜ノ花は呟いていた。

「た、 ただいま……」
「遅いよ」

七時半。

プレインームに顔を出した幸四郎をジト目で知世が睨む。

「「」ぬ……」

「こわなり呼ばれても困るから、いつかだつて急ぎました」

謝ひうどする幸四郎の言葉を制して、菜ノ花は髪型を整えながら答えた。

「へイへイ……お熱い所に呼び出してすいません」

「まつたく、みなみちやんや高音さんがまだいないですけど」

二タ二タ笑う知世の横に菜ノ花は座り、周りを見渡す。

机を2つ繋げた卓にそれとなく決まった席順で座るのだが、みんなの場所と上座の幸四郎の横に座布団が置いただけになつている。普段は上座は幸四郎だけだが、今日は撮影についての会議という事で高音の場所も用意されていた。

「少し遅れるつて、それにくるみの料理ももう少しかかるから待とうぜ」

「な……じゃあ、なんで七時こつて……」

菜ノ花が言葉に詰まるが知世は気にせずに頭の後ろに手を回します。

「だつて、始めはそういう予定だつたんだもん……お昼美味しかつたあ？」

横田の知世。

菜ノ花は女の子がいやらしい田をしないで下をこ、と呟か、

「まあ……お気遣いなくともきつちつ一人で堪能しました」

と、返事をする。

「……」

意味深な返事に卓を囲んだ他の女子の視線を浴び、幸四郎は辛うじて愛想笑いを浮かべるのが精一杯であった。

続く

第47話「めつ」

「みんなで集まつたならコレだね、くるみの特製お好み焼きのタネ！ 具は豚とミックスを作つたんだよ、ホットプレートは二つあるからみんなで仲良く焼こうね」

みんなと高音が到着しプリンセスオーラクションの関係者が全員揃つた形になると、くるみはホットプレートの前にボールに入つたお好み焼きのタネを置く。

「お好み焼きだね、ボクは大好き、さつそく焼いちゃうからね」「私もやります」

まゆりと恋音が喜び勇み、くるみお手製のお好み焼きのタネを油をしいたホットプレートにオタマで垂らすと、タネはいかにもとう音を立てて、焼かれはじめる。

「もう適当にやつてくださいな、わたくしはお好み焼きなんてなかなか食べないので任せますわ」

「あたしはブタ～、ブタにして～、ミックスつてそんなに好きじゃないだ」

「ボクはミックスを焼きたいのです」

「私はどちらでも良いですよ」

「誰かの部屋の冷蔵庫に余つてる食材ないかな？ お好み焼きは何でも出来るからね、イカとかない？」

「イカかあ……イカの塩辛ならあつた気が」

三人よれば何とやらとはよく言つが、十人の女性がお好み焼きを焼き始めてしまつと、何の話題もないのにプレイルームは狭く騒が

しくなる。

ただ一人の男子である幸四郎はホットプレート一つでは自分の焼くスペースもなく、上座に鎮座して見つめ、あわよくばお好み焼きにありつける事を期待して待っていると……

「はい、幸四郎さん……ミックスですよ」

百合乃が焼き上がったお好み焼きを皿に乗せて差し出してくれる。

「あっ、ありがとうございます、気にせずに先に食べちゃってもいいですよ」

「いえいえ……幸四郎さんが先にじうや、ちょっと大きくなっちゃつたし……上手く焼けてなかつたら『ゴメンなさい』」

皿を持ちながら、肩をすくめて百合乃は微笑む。

「いやいや、百合乃さんが焼いたのならボクは生でも美味しく頂きます」

「まあ……」

下手な言葉にも百合乃は頬を赤らめる。

『やつぱつ百合乃さんは可愛く……優しいなあ』

とても一回り近く上の女性とは思えない可愛らしさ百合乃の仕草に鼻を伸ばす幸四郎。

「百合乃さん、オーナーと同じでもやかしちゃいけないよ、自分の分は自分で作らなきゃ」

「え……でも、やつぱつこののは男の子から食べてもらわない

と

「そうです、がさつな貴女と違つて百合乃さんは男性をキチンと立ててゐる事が出来るのですわよ、下手な忠告はお里が知れますわよ」

みなみが鼻を伸ばした幸四郎を横目で見ながら百合乃に告げるが、百合乃の返答に楓が同意して、みなみに呆れ顔を見せる。

「な……何であんたにそんな事言われなきゃいけないのよ、ウチの実家は兄弟多かつたから食事は戦争で男子優先なんて悠長な事を言つてたら、食べらんなかつたんだから！」

「あら？ わたくしは貴女のがさつな性格を形成した家庭環境には興味は無くてよ、貴女の主義をお淑やかな百合乃さんに薦めるのはどうかと忠告しただけですわ」

「な……ななつ、がさつな性格を形成した家庭環境つて何よー？」

「そのままの意味ですわ」

「まあまあ……みなみさんにも、楓さんにもミックスを焼きますから、男の子の前での女の子同士のケンカは……めつ、ですよ」

些細な事で一触即発になる一人に百合乃が笑顔を見せ、まるで悪戯をした小学生を叱る優しいお姉さんの様に言つた。

「あ、いや、別にミックスを欲しかつた訳じゃないんだけど……まあ、百合乃さんをダシに口ケンカしても良くないか……」

「ま、まあまあ、百合乃さんの言つ通り、殿方の前でケンカをするのは確かに淑女とはいえませんわ」

百合乃の言葉に素直に戦を收める一人の様子と、ちょっと世間づれしているが、百合乃がその性格で年齢の違つ女の子の輪の中でもうまくやつていけている事に幸四郎は少し安心し、

『女の子は男の子の前でケンカしちゃ、ダメか……みんな気に入つてスカウトしているだけに見たくないもんな……でも、女の子つて難しいよな』

やう真面目に思つのであつた。

続く

第48話「PVを撮りましょー！」

「はい、じゃあ……みんな食べながらで良いから店内の大型モニターで流すPVの撮影について希望や意見があれば出して」
「はい」

みんながいくらかお好み焼きを食べたのを見計らい、幸四郎が切り出すと知世がすぐに手を上げる。

「早いね、知世ちゃん、じゃあどうぞ」

知世を差す幸四郎。

「グアム」「はい、ご苦労様、次の意見ある方……」「おいつー、なんであたしの意見を、グアムなら水着とか、海とか美味しい場面が撮れるぞ！」
「予算も時間もないよ、その辺りも考慮して」「ぐうううう」

当たり前と言えば、当たり前の対応を幸四郎に受けて唸る知世。

「ならばー。」

すかさず手を擧げる佐久耶。

「はい、佐久耶ちゃん」「水着と海は良いのです、PVの定番なのです……撮影するなら國內ですが、まだまだ寒い」

「そうだよね」

まゆりが頷く。

そういう意見は承知とばかりに、佐久耶は得意げに笑つた。

「ならば……国内でボクの故郷、神洋島ならば気候は南洋で、島の人達も優しく綺麗なビーチに豊かな自然が出迎えるのです、東京都で南洋気分なのです！」

「で？ その島にはどうやっていくの？」

力説する佐久耶に頬杖をついて知世が訊く。

「それにはフェリーなのです、イーグレット号が港湾都市横浜から28時間の快適な旅を……」

「グアムよりかかつちまつだらうが！ コッチは飛行機出でんだよ、国際空港があんだよ！」

「国内なのです」

「だだの孤島だらうが！」

「うぬぬ……よく言ったのです、米軍基地のあるグアムを勧めるなど知世さんはとんだ売国奴なのです、南洋諸島は元はといえば我が国の……」

「ヤメヤメヤメ！ 二人とも止めつ、どつちも却下だよつ」

ヤバイ事を言い始める二人を止める幸四郎。

「何だよ、グアムいいだらうが、PVならグアムかサイパンだつて！」

「いや……神洋島には日本一可愛い海女さんとか実在するのです」「あ……あの、良いでしょうか？」

不満をいつ一人、それを気にしたように遠慮がちに手を挙げたのは恋音だ。

「はい、恋音ちゃん！」

幸四郎は建設的な意見が聞けそうな恋音を指名し、前の二人は却下という事で流す事にする。

「えつと…… いつの撮影をしていいかは解らないんですけど、隣町の三原町にウォーターパークっていうお天気に関係なく遊べる屋内アミューズメント施設が出来たんですよ、そこなら色々なプールがあるし水着の撮影も出来るかも……」

恋音はいつの間にか口元を向つ様に、自信無げに周囲を見回す。

「面白そつだね、私は田舎に住んでいたの無かつたから行つてみたい！」

「私も出来たのは聞いていたんですけど、行く機会が無くて……撮影できるならいいと思います」

みなみと菜ノ花が早速賛成すると、恋音は安心した様子で笑みを浮かべる。

『 いつの意見一つづつのも恋音ちゃんにはドキドキ物なんだろうな、ホント気弱な美少女の王道って感じだね……まあ、これは美少女の王道とは言えないかもしないけど』

幸四郎はそんな恋音を微笑ましく思いながらも、彼女の前に置かれた大判のお好み焼きを見て、口元を緩めてしまうのだった。

「じゃあ、PVの撮影はそのウォーターパークつて所で撮ります、各自は水着を用意するよつこ、高音さんはそちらに撮影が許可されるか聞いてもらいたいんですけど……」

「良いんですけど、店で使うPV、それも高性能とはいえるのはハンドディですよ、そこまで気を使う必要がありますか？ 見咎められるとは思いませんが……」

一応、撮影場所は暫定で決まり、許可を撮つてもうひとつ高音に頼むと、彼女は承諾しながらもそう答えた。

「いえ、PVはホームページにも未公開集とか観れる様にしたいし、問題があるといけませんから」

「それもそうですね、問題が起きてからでは遅いですからね、わからりました」

店だけなら問題ないかもしれないが、ホームページにもアップするとなると、一応の許可を取つておくに越した事はないだろう、幸四郎の意見に高音はすぐに従い頷く。

許可が下りれば、すぐにも撮影に行くから、とみんなに説明して、集まりはお開きになつた。

「では、坊っちゃん、明日の午前中にでも先方に連絡を取つて聞いてみます、ダメだったら他を探してみましょつ

「ええ……お願ひします」

アパートの前に止めた軽自動車に乗り込む高音を幸四郎は見送る。くるみはまだ遊んでいくらしく、誰かの部屋に入ってしまった。

「まあ、PVの撮影はそれで良いとして、本オープンまで最重要事項がまだありますよ」

「高音の顔はいかにも、わかっていますよね？」とでも言いたそ�だ。

「ええ……でも妥協はしませんから、俺も明日は紹介所に行きます

幸四郎は真顔で頷く。

もちろん、高音の言っている事は解っている。

新たなプリンセスを最低でも一人、スカウト出来なければ、本オーブン開店時の女の子のローテーションが苦しくなるのは明白。明日はみなみや恋音をスカウトした様に、協会の紹介所に行ってみようと思つていたのだ。

「わかつてているのなら結構です、では明日また電話しますから」「ええ……お休みなさい、高音さん」

挨拶を交わして、高音が運転して走り去る軽自動車を見送る。時間はもう午後10時を回っていた。

「さて、本オープンまでに女の子を探さないといけないな……」

幸四郎は伸びをして、呴きながら、街の喧騒に耳を傾ける。アパートは風俗店が集中する場所からは離れていたが、この街がこれからが本番とばかりに騒つく音が聞こえてきた。

あと僅かでプリンセスオーケーションもその喧騒の中に本格的に乗り出していくのである。

そう思つと武者震いか怖気づいたのか、幸四郎は背中を震わせる自分に気付いたのだった。

続く

第49話「市営プールが五十円なら……」

「いやあ……快晴、快晴、絶好のPV撮り田和だよ、君達いー。」

三原町。

電車に乗つてやつてきた新大空町の隣町の駅前で、知世は調子のいい声を上げて腰に手を当てた。

「田和つて、そこは屋内なんでしょ？」

「まあ……でもやつは気分つてヤツでさ」

みなみのツッчи「」に知世は歯を見せて笑つ。

「水着のサイズ頑張っちゃつたからキツいかもしないですね……」「百合乃さんはワンサイズ小さいくらいがムチムチ感が出るかもなのです」

「水着のままで御飯も食べられるらしいよ、ボクは遠慮したいなあ……水着でポツ「」りお腹になるから、恋音ちゃんは食べたらお腹膨れる？」

「け、結構、大きくなりまーす……ああ、あの……したらこんな感じかな、つてくらいに」

「ならば恋音さんは午前中に撮影を終えないといけないですわね」

駅前から田的池ウォーターパークまではそんな距離ではないので歩く事になり、女の子達は色々な話をしながら歩を進める。

「ともかく、撮影許可が下りたのは良かつたです……他のお客さんは迷惑が掛からない様に、とは言われましたが今日は平日ですし、それほど周りは気にしなくて良いでしょう」

「……ですね、カメラは岡林写真館で防水ハンディカメラを借りられましたから、くるみと俺の二人で撮れるし高音さんは昨日立てた撮影スケジュールの管理をお願いします」

「ええ……わかりました、このスケジュール表通りに撮れれば、きっと会心の出来になります」

幸四郎と高音は一行の後ろを歩きながら、そんな会話を交わす。

カメラマンは幸四郎とくるみ。

撮影スケジュールを管理するのは高音だ。

少し仰々しいかも知れないが、万事に几帳面な高音は遊びに行く訳ではないのだからと、PV撮りのスケジュールを昨日の夜に完成させていたのである。

「みんなが勝手にどこか遊びに行かない様にしないといけないけど、特に知世ちゃんとか、佐久耶ちゃんとか……」

「大丈夫です、仕事放棄はさせません」

幸四郎が起こりえる事態を憂いた苦笑いを浮かべると、高音はそれは分かつてますと言つた様子で頷くのであった。

＊＊＊

「想像してたよりおつきい……けどホールにこんなお金かかるのよ！？」

ウォーターパークの入口に着いた途端、みなみは信じられないと言わんばかりの声を上げる。

「おっきいですね……でもこの入場料がそんなに高いですか?」「ええっ、高くない? 泳ぐだけだよ……私の田舎では市営プールとか五十円とかだったんだけどな、やっぱ比べるのがおかしいのかな?」

恋音が首を傾げると、みなみはその反応に驚いてから、そのギャップにショックを受けた様に咳く。

「それって、プールが一つですよね、ここはいくつも種類はあるし、水着のまま入れる温泉なんかもあるんですよ、その分高いんじゃないでしょ?」

「そっか~、そうだよね、25mプールが五十円で換算すれば、たくさん種類があれば高いよねえ」

みなみも新大空町に住み始めて間もないだけに、物価を始め色々とショックを受ける所があるかもしねないが、そんな彼女に物を知らないとは笑わず、気を使って話をする恋音。

さり気ない気遣いにみなみも納得した様子だったのだが……

「そんな田舎の尺度で話をするなんて、実に貴女らしいですね」

その会話を聞いていた楓が小馬鹿にしたよつた笑みを見せてしまい、彼女の努力は水泡に帰す。

「な、なんであんたなんかに言われなきゃ、いけないのよつ!?」「あら? お気にならさずにわたくしは貴女らしいと褒めたつもりですのよ、五十円のプールがあなたにはらしいんじゃありませんか

しり？」

その言葉に対し、みなみの頬が一瞬、明らかに怒りに吊り上がる。

「余計なお世話よ！ その五十円だつて……五十円だつて……」

「…………！？」 みなみちゃん、楓ちゃん！」「

みなみと楓のいつもの口喧嘩かと、思いため息をつきかけた幸四郎だが、ワナワナと震えるみなみに異常を感じ、二人に向かつて踏み出そうとするが……

「料金なんて一切、関係ありません！」

唐突に高音が一人を分けたのである。

「高音さん！？」

みなみと楓は驚いてハモつてしまい、互いに顔を合わせた後、フンとそっぽを向き合ひ。

「どういう事ですか？」

「入場料は私達が払うから気にするな、つて意味で言いました」

不思議そうに尋ねる菜ノ花に高音は笑顔を見せて言った。

「店のPVの撮影だから、つて事ですね？ 入場料は必要経費と「そういう事です、同時にこの撮影が遊びではないといつ意味です「じゃ……時給が出るつてこと？」

高音と菜ノ花のやり取りに、知世が混じる。

言つてこる事に間違いはない、仕事とこう拘束があるのならば、PV撮りに時給が発生するのほ然だらう。

「流石にそれは勘弁願います、まだプレオープンしかこなしてない店にそれは辛いですから……」

高音は眼鏡をツイと上げて、

「時給までは出せませんがお手当は出しますし、お皿ご飯代金もある程度は出しますよ。……撮影スケジュール外の時は自由に楽しんでいて構いませんから、みなさんそれでいいでしょうか?」

やつ全員を見回して提案する。

「お手当でいるなんて、思つてなかつたから……私もいいけど」「まあ、構いませんわ」「さんせーい!」「あ、あの、お皿も食べちゃつていいんですか?」「お手当でなんて、ありがとうございます」「ボクも賛成」

高音の提案にみなみと楓がにらみ合つてを中断し、賛成すると皆がそれに続く。

その様子にホッと胸を撫で下さしながらも、幸四郎は、

『『みなみちゃん……ちよつと怒り方が普段と違つたよな、平氣かな?』』

と視線をみなみに向けたのだった。

?

続
<

第50話「撮影前にとびきりの笑顔をー」

「更衣室も綺麗ですね」

ロッカーの鍵をリストバンドに巻き付けた恋音は広々とした更衣室を見渡す。

「ですわね、流石にあんな高い入場料を取るだけありますわ」

楓が隣のロッカーを開けながら呟く。
ロッカーの場所はみんなまちまちで、恋音と楓が隣同士なのも偶然である。

「入場料……楓さんは高いとおもいましたか？」

恋音は楓に言った。

「ええ……少し、どういう意味ですか？」
「意味なんてないです、みなみさんも高い、って書いてましたね」「恋音さんは何が仰りたいのかしら?」
「いや……高いと思ったのはお一人とも一緒だったのになんで……ケンカになっちゃつ……てるのかと」

楓が訝しげに手を細めると、恋音はビクッとわずかに身体を振るわせながらおずおずと答える。

「もう……恋音さんはおじおじした態度を取りながらも『いつ事は言うタイプですかね?』

「え、いや、そのお一人は……私は『よくない』『やめ』になれそう

「気が……」

「わたくしとあの田舎の山猿さんが！？」

「あ～、『じめんなさこ、『じめんなさこ……』で、でも、みなさんは楓さんの事を嫌いとこ『より……』何か田舎すとこ『うか、田舎とこ』か、あこがれとこ『うか……』何とこ『うか』」

楓に言葉を遮られると、ペコペコと頭を下げながらも小さな声になつていく恋音。

「フン……あの娘が田舎にしても、わたくしには追いつかせなくてよ」

楓はそう言いながら、上着を脱ぐ。

高級ブランドの黒い下着が包むのは、色白できめ細やかな肌。無駄な肉付きは無く、それでいてグラマーな身体。

「綺麗……」

恋音は羨望の眼差しと呟きを漏らしてしまつ。

「あの娘がわたくしを田舎にこしようが、憧れようが無駄よ、わたくしに追いつくわけがありませんわ」

「楓さん……」

「あの娘とわたくしでは女の性質が違いますもの、お互いに真似も追いつくも不可能ですわ」

楓はそう言い放つと下着を脱いだ。

「アイドルグループ?」

「モデルかな?」

「カツワイイ!」

「プロポーションがヤバいくつて!」

平日の中間だというにも関わらずブールサイドには客がいくらかいて、水着姿の女子高生らしき集団が歩いてきた店の面々を見て黄色い声を上げた。

カメラを持つ幸四郎やくるみも水着は着ているが、傍らの高音はスース姿のままである。

この様子を一般の人間が見れば、マネージャーとカメラマンにアイドルグループといった所だ。

「あのカメラを持つてる娘もレベル高いし、プロポーションいい!」「あの娘はよくグループの一人が撮影係とかの企画じゃないの?」

話し合つ女子高生。

くるみはそんな風に見える様である。

「な、なんか勘違いされてない? アイドルグループとか言つてるよ、緊張してきちゃつたぞ、ボク」

「それならそれでいいさ、あながち間違いでもないんだしさ」

まゆりが罰の悪そうな顔を見せるが、幸四郎はカメラを向けながら笑う。

「えつ?」

「みんながアイドル並みにかわいいって事」

「……もつ、ボクなんかみんなと比べたらプロポーションなんて悪いし……小さいし幼いし」

まゆりは赤面してモジモジする。

水着は紺色のスポーツタイプの上下。

健康的に引き締まった身体つきは、確かに百合乃や楓達に比べたら女性的な凹凸はない。

「俺は好きだけどね、まゆりちゃんって、確かに背も小さこし、幼いとは思うけど、すごく元気なスポーツ美少女だと思つよ」「あつ

「び、び、美少女つて、違う違う……小さな美少女つてのは恋音ちゃんみたいな子を言うんだよ」

幸四郎の言葉にさらに赤面し慌てるまゆり。

「確かに恋音ちゃんも美少女だよ、でもタイプが変わるだけで、まゆつちやんも恋音ちゃんに負けない美少女だよ、俺の基準だけど正直いえば、店にまだびきりの美少女しか入れてないつもりなんだ」「どね」

幸四郎は構えたカメラを下ろした。

「オーナー……」

「でも、そのせいで直接で落とし過ぎだつて高音さんにはかなり怒られるし、人が少なくて、みんなには苦労をかけちゃつてるんだけどね」

そして、少し恥ずかしさを隠すように後ろ頭を搔きながら、

「上手くは言えないけどさ、俺のお墨付きじゃ不安かもしれないけど、まゆつちやんは自信もつていこよ、わあ……こつもの元気なま

ゆつむちゃんを見せて…」

幸四郎はまゆりに不器用な笑みを見せる。

「オーナー、ボク……」

「じゃ……美少女まゆりちゃんを撮るよ～！　え？　何か言った？」

ハンディカメラを再び構える幸四郎にまゆりは赤面したまま、

「んんっ、なんでもないよ……オーナーったら……でも、ありがと」

と、とびきりの笑顔を見せたのであった。

続く

第51話「素材だけじゃいけません」

「あらら……何だか、結構な人が来てしましたよ？　これはどうこう事なんでしょうか？」

百合乃はプールサイドでキヨロキヨロする。
白いビキニ。

腰に巻いたピンクのパレオ。

見事としか言いようのない豊かな胸元、きちんとくびれた腰、大きめなお尻から程よい太さの腿。

「すげえ胸……」

「美人だよね～」

「かわいい」

「たまんないプロポーションしてるなあ」

いつの間にか十数名はいるギャラリーの視線に百合乃はパタパタとカメラマンのくるみに駆け寄る。

「んにゃ？　どうかしたのかな？」

「ちょっと恥ずかしいです、カメラを……カメラを止めて、あの方達にどちらかに行つてもらえるように言ってください」

「それは無理です」

返事をしたのは、くるみではなく高音だ。

「撮影許可をもらつ時の約束でフレームワークに割り入る等の極端な場合を除いては、他のお客様の行動の制限はしない様にしてくれ

との事です、フレームインするぐらい近くなければ、観られるのくらいは我慢して下さい」

そう答えると、スッと眼鏡を左手の中指で上げる高音。

「ダメですか？」

「プロでしょ？ カメラの前でそんな顔をしないで下を）」

「私達はカメラの前で見せちゃいけないプロだと想つんですけど……モデルさんじゃないんで」

「御託は聞きたくありませんよ」

「……わかりました」

百合乃が弱々しい抗議をするが、かなつ箒もなくテクテクとペルサイドに戻ると、

「では……百合乃さん、カメラをお客様……いや、恋人と思つてペルサイドを笑顔で歩く

高音は撮影スケジュール管理表を手に撮影監督の様に指示を出し始めた。

「じゃあ……コツチも撮影開始とこきますか」

ぐるみのカメラが百合乃を撮り始めたのを見ながら、幸四郎は近くにいたメンバーを振り返る。

「誰から？」

みなみが訊く。

水着は肩紐のない赤いビキニだ。

プロポーションも良く、背丈も160?半ばある彼女にはよく似合っている。

「えっと……コッチのグループはみなみちゃん、知世ちゃん、楓ちゃんだね」

「恋音ちゃんとかは百合乃さん達と高音さんの方なんだ？」

撮影は二つのグループに別れている。

高音がカメラのぐるみを連れて撮るのは百合乃、菜ノ花、恋音、佐久耶、まゆりの五人。

一方の幸四郎が撮るのは、みなみ、楓、知世の三人である。みなみの口調は抗議まではいかないが、仲の良い恋音や百合乃、まゆりといった辺りと一緒でない多少の不満が混じっていた。

「まあまあ、こつ撮つた方が効率的だし、夕方になつたら、みんなで一緒に撮る予定だからさ」

「ん……まあ、別に構わないよ、撮るなら撮るで高音さんみたいな指示が欲しいんだけど」

幸四郎が気を使ったのを感じた様子のみなみはそう答えて、手持ちぶたさに後ろ手を組み、周りをいるギャラリーを少しだけ恥ずかしそうに見た。

「コッチにもギャラリーはいるが、まあ、この絶世美女知世ちゃんがいるから仕方ないよな?」

黄色いワンピース水着の知世が笑う。

みなみと楓よりも10?以上、背が低く、幼児体型の彼女だが、そんな事は気にしていない様子だ。

実際、絶世美女という表現が適當であるかは判らないが、知世は非常に高いレベルの可愛らしさを持つていて、それは楓やみなみとはまた違ったべクトルに特化している。

プロポーションや身長で張り合つ必要はない。

そう幸四郎は思つ。

「誰からでもいいよ」

「じゃ……知世さんが始めを切つて下さる? みなさんはギャラリーさんが気になるみたいで、落ち着きがありませんし」

「なつ……何を勝手な事を言つてくれてんのよ! ? 別に平氣、どいてよ、私が始めにやるから! 」

「出来ますの? NGは時間の無駄ですわよ」

幸四郎がカメラを構えると、楓が知世に言つた言葉にみなみが反応し、二人は睨み合つが、

「まあ、いいから……」

知世はそれを手で制してから、

「モデルをしてた楓なら、カメラで撮られる難しさは知つてんだろ? みなみはルックスの素質はアンタと互角だけど素人なんだから、お手柔らかにやれよ……始めはあたしがやる」

そう楓に向かつて、瞳を細めて注意する。

「な……わたくしとみなみさんのルックスの素質が! 、互角う! ?」

「違つかよ？ もちろん今は差はあるよ、あくまで素材だけの話を
してるぜ」

楓は聞き逃せないとばかりに声を上げる、しかし、知世は全く退
かず真面目な表情で聞き返した。

「言つに事欠いて…… よくもそんな出鱈口を…」

「そう？ 私はそつは思わないな、身長は似たようなもんだし、顔
立ちだつてプロポーションだつてかなり良いから、丹念に磨けば必
ずイケるね、それが判別できぬ訳じやないんだろ？ もつともそ
の努力が辛いのもアンタも分かってるだろうけどさ」

□元に笑みを浮かべる知世。

「自分に必要な磨き方を判断して、努力する…… それはある意味素
材よりも大切ですわ」

一度は怒鳴つた楓。

だが知世の言葉を聞くと、ため息を付き、それだけを答えるに留
まつた。

「あの……」

そこで話のダシにされていたみなみが困惑気味に口を開く。

「聞いてた？」

クルリと知世は彼女に振り返る。

「まあ……」

みなみが頷くと、

「楓はみなみにとっちゃ、いい先生になるよ……意地ばつか張つて
ないで盗む所は盗んで、聞ける事は聞くんだな……まあ、真似ばか
りも何だけど、素人同然の今は真似が一番やりやすいからさ」

知世はニンマリと笑つてから、

「まずは自分の魅せ方……カメラ編つてトコか？ この辺りは簡単
じゃないけど、プロポーションの造り上げ方と違つて、私も共通出
来るから良く見とくんだね、魅せる仕事は素材だけじゃ出来ないよ、
女の魅力は努力と根性……そしてコンプレックスに泣いた涙に支え
られてんだからさ」

と、カメラを構える幸四郎に向かつて歩き出したのであった。

続く

第52話「知世、魅せる」

「……巧い」
「な、何が？」

撮影開始から数十秒で咳く楓。
みなみはその意味が解らずに彼女に振り返る。

「撮られ方……歩き方……間の取り方……笑顔の魅せ方……巧いですわ」
「知世が！？」
「それ以外に誰がいますのよ？」

幸四郎に撮られながらプールサイドを歩く知世を指差し驚くみなみに、腰に手を当てため息をついて、

「あの娘……ただの素人娘じゃありませんわね、まあ良いですわ、
周りが素人ばかりで少し呆れていた所でしたから」

楓は口元を緩めた。

「こつち！」
「えつ！？」

知世はニッコリ笑顔を見せ、幸四郎の手を引く。
当然、画面には引かれる幸四郎の手がフレームインしてしまった。
注意したいが、目の前の知世の笑みはそれをさせない何かがあつ

た。

『「ほんな感じ……どこかであつた事が……思い出した！　プレオーブンの一番始め、楓ちゃんがあのプリンセスファッショングで舞台に上がる前だ』

全く違うシチュエーションだが、二人に共通する物は……

『なりきつてる？　いや演じてるんだ』

あの時の楓はプリンセスを、今の知世は恋人の手を引き、プールサイドではしゃぐ少女、遠藤知世を。

手を引かれながら、幸四郎はまるで本当にヒートしている錯覚に陥つてしまいそうになる。

カメラを構えてなければ、田の前の知世と一人つきりでヒートに来た気になつてしまいそうだ。

「足元、気をつけなよ」

知世に言われて、カメラを下に向けてしまつ。

見えるのは知世の下半身、少しだけの凹凸のヒップからの細い脚。

『あつ……いけない、知世ちゃんに言わせてカメラまで下を向けちゃつた』

幸四郎はカメラを上げようとするが、手を伸ばしてきた知世に力メラードと頭をグッと抑えつけられる。

「……！？」

何とか声を出さない様にする幸四郎のカメラの視界は、見上げてくる知世のアップ。

「おーい……ドサクサに紛れてどこ見てんだよ

細目の知世。

カメラが相手ではない、彼女の前には実際に恋人がいるかのようだ。

『す、すっげえ……かつ、かわいーっ！』

カメラ越しの知世の視線に間違いなく自分は赤面している。幸四郎はそんな自分が恥ずかしく、思わず身を引き気味になってしまつ。

「今度、ジロジロ見たら……責任とつてもうひつからなあ～」

意地悪い笑みを浮かべて再び手を引いて歩き出し、ピッと指を立てて、

「はい、ここでカット！ カメラ止めて」

知世は言った。

幸四郎は反射的にカメラの録画ボタンを離す。

「幸四郎が光源無視して歩くから、即興で手を引いたけどさ、とつあえずはこんなもんでどう！？」

得意気に腰に手を当てる知世。

「あつ…… そうだったんだ? いや、でもスゴく可愛かった、良かつたよ」

「そうだろ? そうだろ? あたしの可愛さは北半球を駆け巡るからな

幸四郎が笑顔で答えると知世はウンウンと自画自賛して頷く。

「流石だね知世ちゃん」

小型とはいえ、本格的な撮影機器に慣れていない幸四郎をエスコートして、自らの可愛い表情をキチンと魅せる。

元アイドル知世のプロとしての凄さを見た気がして、オーナーとしては彼女が非常に頼もしく思えた。

「可愛かった」

「良かつたよ」

いつの間にか増えたギャラリーからも拍手が起ると、知世は調子よく投げキッスをして、それに答えるのであった。

「一カット目、いい絵でしたわね」

「まあ~ね、お次はあんただろ? 幸四郎が待ってるぜ」

楓が声をかけると、知世は伸びをしながら、少し離れた所で慣れないカメラの調整に苦戦している幸四郎に視線を向けて近くのベンチに座る。

「ええ……でもその前に知世さん、少しだけ訊いてもいいかしら?」「なに?」

「ここの店で働く前は何か芸能関係のお仕事をされていたのかしら?少なくともカメラに映されるのが素人に見えませんでしたわ」「……」

その質問に対し知世はベンチに座つたまま無言で楓を見上げた。

「あら? 訊いてはいけなかつた?」

「前なんてどうでもいいじゃない、やめなさいよ」

みなみが楓と知世の間に割りいる。

「いいよ……別に」

知世は首を振り、立ち上がつて楓を正面から見据えて言つた。

「あたしは……元々、アイドルだからさ」

「アイドルー?」

その答えに声を上げたのはみなみ。

「なるほど……それでキチンとしたルックスも振る舞いも納得がいきました、ありがとうございました」

楓は踵を返して、水着の上に着ていた白いパーカーを脱いで幸四郎に向かって歩き出す。

肩紐の無い紺色の水着。

見事なバランスのプロポーションに白い肌。

ギャラリーから漏れる感嘆のため息。

「ひらりも始めますわよ、わたくしにも指示は無用です、自分の△のイメージは自分の中にきちんとありますわ！」

楓は口元に薄い笑みをつかべ幸四郎に言った。

「知世！？ アイドルってのは……
嘘じゃないよ」

楓を見送つて振り返るみなみに知世は再びベンチに座り頷く。

「アイドル業界なんて、毎年星の数ほどテレビで、星の数ほど辞めさせられたり、辞めたりしてるんだよ、珍しくも無い」
「やうなんだ……」
「まあ、幸四郎も高音さんも知ってるし、バレるのは構わないけど言い触らす気はないから」
「うん……」
「と」りやわあ～

知世はベンチに両腕を広げて脚を組む。

「なに？」

「アイドルらしくないボーッズだが、知世らしきとは思い、みなみは敢えて注意はしなかった。

「楓とお前の水着、色違いたいに似てるな？ お前もいい身体してるけど、まだ楓と比べるのは手入れが足りないよ、まさかプレオ

ー^ンの時のプリンセスファッショ^ンみたいに張り合つた訳?
「こ、これは偶然だもん! たまたま良いのがあってね、だいたい
楓の着てくる水着なんて知る訳ないでしょ^うが!?

張り合つたと言わ^れ、赤面^しし、みなみが睨むと、

「悪かつた、悪かつた……じゃあ、偶然の一致と言つ事か、張り合
う相手がいて結構な事だよ」

知世はハハハツと笑つてから、

「あたしの場合は張り合つ間も無かつたからな……」

と、ポツリと呟いたのであつた。

続く

第53話「アイドルと女優と素人娘」

「じゃあ、いきますわよ、オーナー、録画を開始して下さー」
「うん」

楓は波の流れるプールの隅に立つ。

波も緩やかで小さく、水の深さも足首より少し深い位の場所だ。両手でアップにした赤茶色の髪を掻き上げ、笑みを浮かべる楓。あくまでも笑み。

先程の知世のような明るさは無いが、美しさへの自負が感じられる。

綺麗でしょ？

そう問われているかの様だ。

足元に流れてくる波。

楓はそれに逆らい歩を進め始める。

『泳ぐのかな？』

カメラを構えてついていく幸四郎だが、足首より少し深い場所に来ると、楓は足を止めて眼をつぶった。

真横からのアングル。

楓のバランスが良く、それでいて豊満な肢体が良く判つてしまつ。彼女は瞳を閉じ動きを止めている、動くのは波だけである。

『楓ちゃんつて、お姫さまの高貴な清楚さと妖しい色気が同居するんだよな……不思議だよな』

そんな事を思いながらカメラを回していくと、瞳を開け、幸四郎に向かって流し目をする楓。

『色っぽい……』

そして、楓は軽い波を受けながらゆっくりと脚を崩して座った。波があるが浅い場所なので座つても水は楓の腰ぐらいまでだ。紺のビキニに濡れた楓の身体。

クスリとだけ微笑み、彼女は水を手の平ですくいつとカメラに向かつてそれを放つた。

撮影場所が場所なのでカメラは防水であるし、それほどかかった訳でもない。

まるで楓とプライベートビーチで戯れているような感覚だ。

「……」

まるでここにいるだけで楽しい、とでもいつのような笑みを浮かべる楓。

ほんの数瞬の間。

『楓ちゃん……何かを待つてる？ アングルの切り替え？ 違うな、もしかしたらこれが？』

幸四郎はカメラを構えたまま、中腰になり空いた手で楓に向かつて足元の水を飛ばした。

「もう……入る前に濡れちゃいましたわ」

座つた状態で水を浴びた楓は言つ、

「フフッ……」

と、意味深な笑みを浮かべて、スッと身体を横に倒した。

横になり、体全体を見せる水着撮影では良くあるポーズだ。

水が伝う豊かな胸元。

くびれた腰回り。

張りのあるヒップ。

綺麗な線を描く太もも。濡れたアップにした赤茶色の髪。

妖しげな瞳。

『か……楓ちゃんはヤツパリスゴイ色っぽい……楓ちゃんと一度でいいから……い、いかん、いかん』

見事な身体がわずかな波が来ると半分ほど隠れ、引くと露になる。幸四郎はカメラを構えているにもかかわらず、思わず興奮してしまいそうになるがどうにか自制した。

『大物芸能人が眼も眩む様な大金を払つても自分の愛人にしたい、つて思う気持ちが改めて解るよな』

『はい……こんな物ですわね、カットですわ』

『あつ……ああ』

楓にカメラに人差し指を向けられ、幸四郎は我に帰り、慌てて録画スイッチを離した。

『まあ、ファーストショットにしては表情を見せ過ぎた気がしますが、悪くはなかつたでしょ?』

『あつ……うん、良かつた、綺麗だつたよ』

『嬉しいですわ』

笑顔で立ち上がる楓。

水が身体を滴り落ちていく。

「……イケてるよな」

「見た事ない娘だけど、ファンになりそつ」

「プロポーションも顔も文句なしじゃん」

「そのうち売れてくるんじゃないかな、こまのうしあサイン貰いたいな」

そんな事を語り合つギャラリーの高校生らしき男子達。

バスタオルを幸四郎から受け取り、髪を拭きながらそれに気がついた楓がワインクすると、彼等は声を上げたり赤面したりとそれぞれに反応を見せる。

「楓ちゃん……あの子達にアピールするのさうと早こと細つよ幸四郎が何やら話し込む男子達を横目で見ると、

「やうですか？ 年下の男子を引き付けるのはなかなか難しいんですけど、いい子してれば引っ掛かる年上のオジサマと違つて……」

バスタオルを頭にかけたままの楓の余裕の笑み。

濡れた髪の間から覗く美女と美少女の微妙な比率を持つ強気そうな瞳。

わずかに緩んだピンク色の薄い唇。

決まつている。

まるでワンショットの為にポーズをとつたような彼女に幸四郎は暫し見惚れてしまつが、

「ふふふ……オーナーも高校生さんと大して変わらない顔してます

わ

と、告げられ、否定できず赤面してしまつのであった。

＊＊＊

「やるなあ、やるなあ……一人とも、あたしも頑張んなきや」

最後の撮影の順番であるみなみは楓を睨み付けながら咳き、

「見ててよ、知世……あれ？ 知世！？」

一緒に楓の撮影を観ていた知世を呼ぶが、彼女の姿は隣にはない。

「ん~、なに？」

いつの間にか知世は少し離れた所で見学していた数人の男子に囲まれて、何やらやつていた様で、みなみの声に答えて走つて戻つてくる。

「何やつてたの？」

「ファンになつたからサインくれつて、後は写メでの撮影会」

知世は歯を見せて笑い、ピースサインをみなみに向けてきた。

「撮影会とかサインつて、アイドルじゃないんだからさあ……

みなみが呆れると、

「カメラも小さいけど、結構本格的な奴だし、大方グラビア撮影にでも間違えられたんだろう？」

知世はそう答えて、みなみに顔を近づける。

「な、何よ？」

「さあて、楓も受けてるみたいだぜ、みなみも観ている男を惹き付けるショットが出来るかな？」

「う……男子を惹き付けるショット……」

「自信ある?」

知世の問いに、みなみは嘘がつけなかつた。
ほんの数分後に結果が出るのに嘘をついても仕方がない。

「無理……悔しいけど、知世や楓みたいにカメラの前で上手く演じらんないよ」

素直に不安を吐露してしまう。

相手が楓なら強がりも出たが、知世ではそんな気にはならなかつた。

「なら……」

「なら?」

「演じるなんて、あたし達みたいな不器用な真似すんなよ……みなみの素でやれよっ! 目の前の幸四郎を恋人に見立てるんじゃなく恋人にしてさ!」

知世はそう言つて、みなみを見据え、不敵な笑みを浮かべるのであつた。

続
<

第53話「アイドルと女優と素人娘」（後書き）

感想や日常シーンで見てみたい話があれば、「気軽にリクエスト下さい。

第54話「奮い立たせる笑顔は美少女の必殺技の一つです」

「はい、菜ノ花ちゃんにまゆりちゃん、ここまでオッケー！」

人ともスゴく可愛かつたよ、今のはピンナップでもいける…」

「オーナー、ありがとうございました」

「ホントに？ ボクもスゴく嬉しい！」

カメラを構えた幸四郎が空いた手で親指を立てる、水着姿で仲良く抱き合つポーズでカメラに向き合つていた菜ノ花とまゆりは声を弾ませた。

周りのギャラリーからは拍手が起る。

「もう……オーナーが堂に入り過ぎてるから、周りの方が本当に何かのPVの撮影かと勘違いしているみたいですよ」

「そうそう、ボクなんかサイン書いてって言われて困ったよ」

菜ノ花とまゆりは幸四郎に近づき、ギャラリーには聞こえない様に言つ。

「オレがどういひじやなくて、みんなが可愛いから周りの人人がそう思つんだよ、」苦労様、少しフリーでくるみと撮つてもいいし、休んでても構わないよ、さあ次は佐久耶ちゃんと百合乃さんのコンビでいきましょうか？」

「もう……オーナーったら上手いですね、じゃあ、くるみちゃんにフリーで撮られてますね」

「ボクは少し休むね、オーナーになら、もっと撮つてもらいたいけどね」

「次はボク達ですか？ こよによ、プリンセスオーディションの

モストテンジヤラスコンビの破壊力をみせつけるのです！」

「モスト……？ テンジヤラスですか？」

幸四郎の返事に菜ノ花とまゆりは幸四郎にそれぞれ上機嫌で答え、出番を促された佐久耶と百合乃がカメラの前に立つ。

「さあさあ、オーナー！ ボク達合計バストサイズ180?を越えるテンジヤラスコンビの迫力をきつちにカメラに収めるのです、さああ……さあ！」

巫女の色合いをイメージしたのだろうか、赤いラインの入った白のワンピースを着た佐久耶は腰に手を当て胸を張った。

形のいい大きな隆起。

その佐久耶の姿にギャラリーの男子からは息を呑む音が聞こえる。

「あの……佐久耶ちゃん、女の子がそんなに胸の事ばかり言わない方がいいんじゃないですか……」

胸を張る佐久耶に対し、意識してしまったのだろう、Hカップを包むジキニの胸元を隠し恥ずかしがる百合乃の仕草はカメラマンを含め、彼女の半分の年齢くらいの高校生男子達に逆に視線を集中させてしまう効果を發揮していたのであった。

＊＊＊

「も……ダメ……私、全然ダメ……」

プールサイドのベンチに水着に白いパークーを羽織り寝転がるの

はみなみ。

「みなみさん、平氣ですよ、私も全然ダメでしたです、カメラを向けられたら表情が固まっちゃって、高音さん」に怒られました」

明らかにへこんでいるみなみを膝枕しているのは、ピンクで可愛いフリルの付いたワンピース水着姿の恋音である。

「だつてえ……」

「みなみさんはあのお二人と一緒に撮つたから、そう思っちゃうんですけど、「コッチのグループもビシッ」と決まつたのは、菜ノ花さんくらいですよ」

「そつかあ……菜ノ花かあ、あの娘も器用そつだもんなあ」

恋音の励ましに膝枕の上で口口リと横になり、みなみはプールを見つめた。

「みなみさん……」

みなみの視線の先では佐久耶と百合乃が撮影をしている。
だが、ギャラリー やカメラに照れてしまつた百合乃に、照れはまったく無いが走り過ぎ感のある佐久耶の撮影は素人の域だ。

「……だつたら知世や楓とは菜ノ花が撮れば良かつたんだよ、私は恋音ちゃん達と撮れば良かつた」

「みなみさんはそれで良かつたんですか？」

「え？」

恋音に訊かれ、みなみは視線を上げる。

「みなみさんは楓さんや知世さんになら負けちゃつても仕方ない、つて諦めてるんですか？」

「や、そうじやないけど」

膝の上のみなみを見下ろす恋音の視線。

その視線は厳しくはないが美少女特有の憂いがあり、みなみは罰の悪そうにその視線から逃げる様に目を逸らしてしまつ。

「みなみさん、プレオープンの時、楓さんと同じプリンセスファッショントしたくら」に負けず嫌いじゃないですか？ ホームページとかでも、あの姿でお客さんにも知れていた楓さんに対して同じ姿でなんて中々出来ませんよ」

「……ま、その……あれは楓が一番扱いみたいなのに少し逆らつて……」

「セ」がみなみさんの良いところだと思います

微笑む恋音。

「恋音ちゃん……」

「上手くは言えませんが、負けず嫌いな所、みなみさんの魅力だと思います、恋音なら一流芸能人にも気に入られちゃう楓さんにつて尻込みしちゃいます」

「いや、いや……正直言えば楓は可愛いし、プロポーションも抜群だし……今日の撮影なら知世なんか、ひょっとしたら楓よりもスゴいかもつて驚いた」

「でも……負けたくないんじゃないですか？」

「……うん、無理かも知れないんだけど、やるなら一番やりたい

みなみは頷く。

「じゃ……諦めないで下さい、オーナーだつて無意味に楓さんや知世さんとみなみさんを一緒にグループにして個人撮影した訳じゃないと思いますよ、きっと一人といたら、みなみさんが何かを掴めると思つたんじゃないでしょ？ 魅せる事……今は差があつても、きっとそれに負けないで伸びる……そう思つからみなみさんを一人撮影させたんだと思います」

「……」

恋音の言葉にみなみは個人撮影の前に知世に言われた言葉を思い出す。

女の魅力は努力と根性……そしてコンプレックスに泣いた涙に支えられてなんだからさ。

考えてみれば、知世はこの年齢で夢破れている少女なのだ。自分で断つたのか、断たれたのかはわからないがアイドルを辞めているのである。

「よし……」れぐらこのコンプレックスには負けでらんない

みなみは恋音の膝枕から立ち上がり、

「次、行こうよ……一人で撮つてもらおう、とびきり可愛く

そう言つてパーカーを脱ぐと、

「ハイ……良かつた、やつと私の大好きなみなみさんに戻つてくれました」

恋音はまさに美少女の微笑みと/orに相応しい顔を見せたのだつた。

続く

第55話「スカウト空振り！？」

「これと……このカット……あつ、コレもスクレブ可愛いな」

パソコンの冷気が心地よい事務所で幸四郎はブツブツと咳きながらパソコンを操作する。

端から見ればかなり危ない奴だが、今はれつきとした仕事中。昨日撮影した動画の編集作業に勤しんでいた。

「楓ちゃんはこんなものかな？ 決まってるのが多くて迷うけど、一人一人の時間もあるからな……今度は佐久耶ちゃんかあ、うわ……このアングルはグッときちゃうなあ、うわあ、菜ノ花ちゃんもメチャクチャ可愛いよ」

力チカチとマウスを動かし続ける姿は念を押すが仕事中なので、決して只の危ない奴ではないのである。

＊＊＊

「終わつたあ！ 疲れたけど何だかアイドルロボの製作者になつた感じで面白かつたなあ」

数時間後。

すっかり登つた朝陽の光が事務所に差し込む中で伸びをする幸四郎。

作業自体はそれ程難しい物ではないが、数時間分の女の子の動画を編集するのには徹夜だった。

後はくるみや高音にも細かい編集に参加してもらい音楽でもつけ
れば、素人作品だがPVの完成だ。

「でも……自分が可愛いと思う女の子を見てるのは飽きないよな

一人妙な満足感に浸つてしまつ。

趣味と仕事が上手く合致したので嬉しくもあり、ここにで今日一日
休みともなれば幸せなのが、オーナーとしては、まだしなければ
いけない事があるのだ。

「……少し寝たら紹介所に顔を出すか、とにかく本オープンまでに
二人はなんとかしないと」

幸四郎は楽しい仕事を終えた満足感に長くは浸れずに応接用ソフ
ァーにゴロリと寝転がるのだった。

午後一時。

ほんの僅かな暑さを感じる日差し。

幸四郎は紹介所に向かう途中で、商店街の小さな電気店にクーラ
ーの設置予約ののぼりが立っているのに目を止める。

「あと一月もすればクーラー全開かあ、店内の電気代もうなぎ登り
だよ、でもクーラーはいれないと、お客様さんやうちのお姫様達がう
だつちゃうよな」

そんな事を思いながら紹介所に入る。

「「これは、「これは幸四郎さんじゃないですか？」

声をかけてきたのは何度か顔を出しているうちに知り合いになつた紹介所の職員で相川という中肉中背の三十代半ばの男だ。

「こんにちわ」

「お世話になつてます、今日は直接に来てスカウトですか？ 何人か紹介で面接に行つてもらいましたがそつちはどうですか？」

「いやあ……なかなか条件が合わなくて、せっかくたくさん紹介してもらつたのに申し訳ないです」

幸四郎は相川と申し訳なさげに挨拶を交わした。

高音が知り合いという事もあり、紹介所からは今まで面接に何人も紹介されているのだが、採用確率はかなり低いからだ。

「いえいえ……流石は御神本さんの二代目、女の子に妥協が無いと、それに仕事ですからね、雇う側にも基準は当然ありますよ」

相川は気にしていない様に笑顔を見せる。

「そりなんですが、高音さんにも切り過ぎだ、って叱られますからね、自分の場合はやり過ぎなのかも知れません」

「そうですか……あの高音さんがそう言つなら本物ですねえ、ところで坊っちゃん、この間のプレオープンの様子がネットに出ていてちょっとした話題になつてているみたいですよ」

「そりなんですか？」

相川の切り出してきた話に幸四郎は声を上げる。

「プレオープンの規模は小さく、まだ口数も経っていないのでネット上で話題にはなっているなどとは思つてもなかつたのだ。

「ええ……この街の風俗関係ルポでは有名な方のホームページで女子のルックスのレベルの高さと対応が誉められていました、本当に美少女と至福の時間だったとあり、そこからお店のホームページを見た人の間で話が盛り上がつてゐるらしいです」

「ネット上の風俗ルポの有名人がプレオープンに来てたつて訳がありがたい事ですね……どの女の子となんでしょう？」

ネットで話題の理由を納得した幸四郎が尋ねると、

「恋音ちゃんみたいですよ、一緒に写メ撮つた写真がアップされてたみたいで、室内では撮影禁止つて本人に断られたから、終わりに裏の出口から見送られた時に撮つてもらつたつていう写真が大きく載つてました」

「見送りの時があ、厳密に言えば注意したいけど室内では一応断りをいれているから大目にみようかな」

「それがいいですよ、今はネット全盛ですから上手く利用すれば、広告費をかけずに店の知名度アップに繋がりますよ」

相川の返事に幸四郎は後ろ頭を搔くと、彼も同意して頷く。

厳密に言えば室内ではなく、店内では撮影禁止なので出口も含まれるのだが、女の子に許可を得ているのなら、そこまでひるむやく言わなくても良いだろうと思つたのだ。

それに相川の言う通り店の良い評判を広めてくれるならば、怖い部分もあるのは承知だがネットを利用しない手はないのである。

「では、いい娘が見つかるといいですね」

「ええ……じゃ、相川さん、しばらくここに座つてますけど通報し

なこで下せこよ、」」でスカウトした娘はちやんといいを通します
から」

「お願ひしますね」

幸四郎は相川とそんな会話を交わし、室内が見渡せる場所にある
ソファーに座るのだった。

＊＊＊

西口が窓から差し込む。

女性職員が窓のカーテンを閉めるのを合図にした様に立ち上がる
幸四郎。

「坊っちゃん、今日はスカウト無しですか？」

そこには手に書類を持った相川が立っていた。

「いえいえ、声をかけた女の子がいなかつた訳じゃないんですけど、
話してみたらしつくり来なかつたりとかで結局はゼロでした」

「なるほど……で、今日はお帰りですか？」

「ええ……明日も今日ほど時間が取れませんけど来ると思います、
大丈夫ですかね？」

「もちろんです、」」けりいそ何も出来ませんで」

「いやいや……じゃあまた明日迷惑をかけます」

何か申し訳なさげに見送る相川に幸四郎は愛想笑いを浮かべ紹介
所を出ていくのだった。

午後五時を知らせる音楽を商店街で聞きながら幸四郎はアパートではなく、店舗の事務所に帰る。
本オープンが迫り、早く出来る仕事は早く片付けてしまいたいからだ。

「さて……まずは腹揃えだな」

途中、商店街の肉屋で買つてきたメンチカツにコロッケを応接机に出す。

これが夕食だ。

「しまつたな、ご飯欲しいな……」

ソファーアに座る前にポツリと呟き、厨房に歩いていく。
開店に向け、くるみも色々とやつているのでもしかしたら「飯く
らい残つていいかも知れないと思つたのである。

厨房の電気をつける。

それほど広くはないので何があるかは一目瞭然。

「ないな……」

案外、くるみは料理に関しては几帳面な所があるのか厨房はきちんと片付き、電子ジャーの中にも何も残つていない。

冷蔵庫を開けるが、そこにも残念ながら大した物は無かつたので、

「仕方ない……まあ、『J飯は諦めるか』

幸四郎は後ろ頭を搔いて中濃ソースを片手に事務所に戻り、口ロツケとメンチカツの夕食をとる事にしたのである。

「では……」

ソファーに座り、中濃ソースをメンチカツとコロロツケに回しかけ、それを少し行儀が悪いが手で掘もうとした時である。

ジリリリリリ……

事務所の電話が鳴った。

「なんだよ?」

基本的欲求を遮られるのは誰も怒る事だ。
ディスプレイを見ると覚えない番号。

しかし、募集広告を見た女の子の可能性は否定できないので、受話器を取り店名を答えるとつい先ほど聞いたばかりの男性の弾んだ、といつか多少興奮混じりの声が聞こえてきたのである。

「あつ……その声は坊っちゃんですか？ 相川です、当たりです、当たり！ もうナンバーワン候補です、店に居られるんですよね？ 自分はこれから帰るんで、車でナンバーワンを連れていきますからね！」

「あ……相川さん？」

「では！」

相川のイメージに合わないテンションと説明不足の話に困惑する四郎。

だが、それをよそに電話は勢い良くガチャンと切れ幸四郎は暫し啞然としてから、悪い事は起きないだろうと思いつつも直しメンチカツをつまみ上げ、口に運ぶのであった。

続く

第56話「9人目のプリンセス」

薄い茶色のセミロング、適当に切り揃えられた前髪は太い眉毛にかかる。

左側側頭部にだけ付けたピンク色のリボン。

瞳は少々つり目の形良く整った一重。

綺麗に通った鼻筋にちょうど良くあつらえた様な薄くもなく、太くもないピンク色の脣。

輪郭は柔らかさを感じさせる丸みがあるが、それはあくまでも適度な物で肥満を感じさせない。

『か、かわいい』

紹介所の職員、相川に連れられてきた美少女に幸四郎はそう思わざるを得なかつた。

太い眉毛に好みがある知れないが、この少女を美少女と思わない男は、ごく少数に違いない。

そして、男として注視してしまつのは彼女の顔立ちだけではなかつた。

『スゴい身体……』

幸四郎は息を呑む。

身長は150?をやつと越えるくらい。

店のプリンセスで一番小さな知世と変わりないが、気にならない位のふつくらとした体を彼女は藍色のTシャツにジーンズといつうラフな格好で包んでいた。

田のやり所に迷う程にアンバランスな大きな胸の膨らみ。

『胸……『エカイ』としかいによつないよな……それだけじゃない』

抜群というより、異性を意識させてしまつプロポーション。

ルックスもプリンセスの中でも、一番に上げる者がいても何ら異存のない文句なしの美少女。

相川が終業直前、紹介所に現れた彼女を一目見て、この娘なら!と連れてきたのも十二分に説得力を持つ。

「えつと……じゃあ、相川さんも帰つたけど、面接を始めようか? ソファーに座つて楽にして」

相川から受け取つた履歴書やその他の書類を手にした幸四郎が言うと、彼女はスッと床に座り、幸四郎に向かつて頭を下げた。

「私は久川愛日ひさかわ まなびと申します、紹介所の相川様に話を聞き是非とも、このお店で働きたいと思い連れてきて頂いた次第にござります、どうかご奉公させて頂きたく存じます」

土下座。

「え……あ、ま……まなびちゃんね」

プロポーション、ルックスの高いレベルにも驚いたが、幸四郎はいきなりの愛日の行動に声が裏返つてしまつのだつた。

「はい……その時間を希望いたします
「じゃ……開店から閉店時間迄でいいね
「お願い申し上げます」

久川愛田との面接。

彼女のまるで時代劇の登場人物の様な口調は気になつたが、それはスムーズに進む。

変わつてそうな娘だが、店の営業形態等の説明にもきちんと理解を示したので幸四郎はとりあえずは安心する。

「でさ……愛田ちゃん」

「なんで『じや』いますか」

「ちょっと聞きにくいから嫌だつたら答えなくとも良いけど、今まで風俗店で仕事した事あるかな？あと男性経験とか……」

「風俗店でお仕事した事はありませぬが、男性経験の方は……」

愛田は幸四郎を見る。

その目は今までどちらかと言えば、朗らかにも感じられた彼女の瞳ではなかつた。

色艶のある細めた瞳。

「……！？」

その瞳に男の部分が強く刺激される。

「愛田ちゃん？」

「ふふつ」

思わず名前を呼んでしまつた幸四郎に、愛田は妖艶やかを感じさせる様な笑みを浮かべ言つた。

「お試しなられたらお分かりになるのでは？」
「……いいの？」

幸四郎の確認に愛田は口元を緩めた。

「いい大人が男女の事に確認なんてするものではござりませぬよ」「そうだね……」

幸四郎は歓喜ともに鎌が切れた猛獸になる。立ち上がると、田の前の美少女を無言でソファーに押し倒し、たわわに膨らんだ胸を両手で強く鷲掴みにしたのだった。

「つ……あつ！ も……もつつ……くあつ！」

「ふはあ」

幸四郎の絶頂。

全裸で抱き合って愛田はそれを抱き止めた。

もう何度もそれを互いに迎えていた。

「ふう……ふう……スゴい、スゴいよ、めちゃくちゃ気持ち良い……もつとしたい、全然治まんない」

激しい息を整えながら、全裸で仰向けになれる愛田の田の前にそのまま証拠を曝け出す幸四郎。

「はあ……はあ……ゅう！」おこ……幸四郎様は……女子を廬間に出来ますな

愛田はそのまま証拠に手を伸ばして握ると、激しくそれをじいじも田で舐めた。

「…………」
「じいじですか？」
「うー、うめんつ……手と舌もスゴく奥こねだ……オレッ、うつむで
ハイニッシュコしたい」

幸四郎は謝るよつて叫ぶと、愛田の胸をグッと両手で掴み、それを沈み込ませる。

「あつ、あつ……つ」
「や、柔かいつ……スゴいよつーーお……愛田ちゃん、何カッパあるの？ 教えてつー？」
「ふう……くつ……そんな強く掴んで……こすりつけあ……あつあつ……はあ、はあ、じ、一カッパだと、おもこまする」
「うー、なるほどね……う、これはや……最強だよおつー、あつー」

愛田の答えに叫びながら、幸四郎は全てを吐き出して黙った。

翌日。

結局、幸四郎は愛日と店の空き部屋で朝まで過ごして、事務仕事にやつてきた高音に彼女を紹介する。

ルックス、プロポーション共に文句はない愛日に幾つかの簡単な事項を確認して、高音は異論なく愛日の雇用に賛成し、プリンセスオーフショーン9人目のプリンセス久川愛日が誕生したのである。

続く

第57話「なえちやんだぞー！」

「本オープンまで10日があ……」

9人目のプリンセスである久川愛田を迎えた翌日、事務所で幸四郎はカレンダーを睨み呟く。

最低でもあと1人のプリンセスを雇い入れなければいけないし、その他にもやらなければいけない事、決めなければいけない事はたくさんあるのだ。

「やるしかないよな……昨日は愛田ちゃんの事もあって結局は顔を出さなかつたけど、今日は事務仕事を早く終わらせて紹介所にもいかないとな、待ってても可愛い女の子が向こうから雇われに来てくれるなんていうのは超の付く一流店くらいだし……」

幸四郎は午前中にはいくつかの事務仕事を終えてしまおうと決めて、事務机に向かった。

クーラーの稼働音のみが聞こえる事務所、黙々と事務仕事を処理していく。

高音は食品などの仕入れ先の店に行つて細かな打合せの後、街の商店街組合の会合にも出るらしく、朝には事務所には顔を出さない様子だった。

店の仕入れなどは店を通すよりも業者を通した方が安くなるかもしれないが、やはり近所の付き合いもあるし、新大空町に根付いて上手く周りとやってきた父親の店の食材の仕入れは周りの付き合いのある店に頼む事で地域に利益を回し合つやうの方を幸四郎も踏襲し

た形だ。

しかし、馴れ合いではない双方の商売。

その互いの譲り合い、引っ張り合いは父親の右腕の高音は慣れた物なので、幸四郎は彼女に任せっきりになつていてる。

やはり経営のかなりの部分が高音の手腕だ。

その分、働く女の子探しと出来る限りの事務仕事はオーナー自らこなさなければならぬ、と幸四郎は自覚しているのである。

「よし、終わった！ どうやら少しば紹介所に顔を出せそうだ！」

事務仕事を一段落つけ、椅子の背もたれに身体を預けて伸びをする。

時間は午後一時。

案外に時間がかかってしまったが、まだ平気な時間だらう。

「じゃ、いくか

机から立ち上がり、身仕度を整えようとすると、

「邪魔してるぞ～」

「おわあつー？」

やや低めの間延びした女の子の声が背後から聞こえ、振り返りながら声を上げてしまつ幸四郎。

「 よつ？」

「君は 何で君がここにいるんだよ？」

そこにはいつの間にか一人の女の子が立っていたのである。
黒髪のショートボブカット、白いシャツに紺色のスカートの可愛
らしい娘。

幸四郎はこの女の子を知っていた、いや知っていたでは済まない
女の子だ。

「 募集広告を見た」

「 募集広告ー？」

あからさまに狼狽える幸四郎。

「 そうだ、私は募集要項を満たしてるだろ？」
「 まさか、まさか君は この店で働くつもりなんじやないだろ？
な？」

うわすり、震える幸四郎にショートボブカットの女は含み笑いを
して答えた。

「 その通り さあオーナー、早く面接しろ」
「 な なえちゃん 本当に堪忍してくれよ、俺が君をこの店に
雇える訳がないよ、勘弁してくれ」

思わずソファーにズリズリと身を沈め困惑の表情を見せる幸四郎
に、なえと呼ばれた女は単純明快に即答した。

「ダメだ、せつせつ、なえちゃんを面接しろ」

「小早川なえ……なえちゃんといひ」

「なるほど」

黒いショートボブカットの女が名乗ると高音は履歴書を見ながら頷く。

「かわいいですね」

高音は小早川なえのルックスを見る。

黒髪のショートボブカット。

やや横長の瞳。

鼻筋から唇もレベルが高く整い、輪郭も細くもなく、太くもない。プリンセス達に混じっても突出はしないが、十分に可愛らしい。体付きはグラマーでもスレンダーでもなく、平均的に見えるがキチンと女性らしい膨らみがあり、身長も160前後。

全体的に見て、幸四郎と同じ年齢の割りに十代の匂いが強く可愛らしさが田立つ良いレベルの美女だと、高音は判断する。

「……あつ、なえさんは坊っちゃんと同じ年ですか？　学校も同じ？」

「ちなみに高校三年間クラスも同じだぞ～」

履歴書の卒業学校欄をみて高音が声を上げると、なえはピースサインを彼女に向ける。

「坊っちゃん！？ 同級生ですか？ なら何で自分で面接せずに？」

「私は今日は忙しかったんで……」

「ごめんなさい、高音さん、まさかこの娘がうちの店の求人につくるなんて……俺ではなえちゃんの面接は出来ません、だから高音さんを無理を承知で呼んだんですよ」

心底困り果てた様に頭に手を当てる幸四郎。

「……？ それは一体どういう事ですか？」

「……それは」

田を細める高音から、視線を逸らす幸四郎。

一見すると気の強くない幸四郎だが、案外にハツキリとしている事は濁さない所を知つていて彼女からすれば違和感のある行動である。

「坊っちゃんが言いにくいのなら……」

高音が視線を応接机の向かいにいるショートボブカットのもう一人の当事者に送ると、彼女は両手で高音にペースサインを向け、こう言い放つたのである。

「まあ、なえちゃんは簡単に言えば、幸四郎坊っちゃんの元カノだ、簡単に言わなければ高校時代に付き合つてた異性となる」

「な、な……な」

履歴書を手から落とす高音。

「驚いたか、坊っちゃんはこんな超絶美少女と高校時代に付きあつ

てたいう衝撃の真実に？」

「ほ、坊っちゃんの『元カノ』……で、ですか」

なえの言葉に高音は震えている。

「た……高音さん？」

驚くとは思つたが、まさかここまでとは思わなかつた幸四郎が声をかけると、高音は、

「大丈夫です、」いつのトラブルはこの業界には珍しくありません、対処方法も解つてます」

と、顔を上げて、ピースサインを続けるなえにフルプルと震える人差し指を向け、こう一言、告げたのだった。

「不採用」

続く

「いらっしゃいませ！」

元気の良い店員の声に迎えられ、カウンター席に座った幸四郎は新鮮ネギ牛丼の大盛りを注文すると、差し出されていたコップの水を飲む。

今日は思ったよりも暑かった、喉を通る水の一口は下手な清涼飲料を上回るだろう。

「なえちゃんを雇え」

渴きを癒した幸四郎はもうすでに出来上がり、店員が運んできた新鮮ネギ牛丼大盛りに視線を落として、箸立てから割り箸を取り出して割る。

「なえちゃん可愛いだろ？が？」

辛めの味付けのされた油のかかつたネギと牛肉、そして白米のトリオを口に運ぶ。

「陰謀だ、これは謀略だ、なえちゃんを雇え」

口に広がる脂の多めの肉に、ネギの爽やかさと食感が混ざり込む。何とも言えない味だ。

この店では幸四郎は最近はこのメニューばかり頼む常連になつてある……これからも度々利用するつもりなので……

「なえちゃん、いらっしゃるのは迷惑だよ」

横の席に座り、注文もせずに呪咀の様な言葉を投げかけてくる小早川なえに幸四郎はそう告げる。

なえの不採用を高音が告げた翌日、幸四郎はなえのあからさまなストーカー行為にあつていたのである。

「なんである女がなえちゃんの採用を決めるんだよ？　お前がなえちゃんを採用すればいいだろうが？」

新鮮ネギ牛丼を挿き込もうとする幸四郎をなえは覗き込む。

「別にウチは俺のワシマン経営じゃないの、どちらかと言えば高音さんに頼つてている所が大きいんだから、彼女がダメと言つたら雇うのは難しいし、俺が私情で決められないから高音さんを呼んだんだよ」

「ふ～ん」

牛丼の入った器を置いて幸四郎が説明すると、隣のカウンター席に座ったなえはいかにも納得していないような声を上げ、頬杖をついて見つめてくる。

「な、なに？」

「あの高音さんとやらも私情いっぱいで私を不採用にしたみたいだけど？」

「……う」

反論が出来なかった。

なえが幸四郎の元カノと聞いた時の高音は明らかに何かにショック

クを受けた様子だったからである。

「そ、そりや、俺の元カノが突然、現れて店に雇われたいと来たら驚くに決まってるさ、オーナーの元カノとかいう女の子が来れば他の女の子だつてどう思うかわからんないしさ」

「それだけかねえ、それだけで絶世の美少女小早川なえちゃんを店に雇えるチャンスを逃す手はないと思つけどなあ」

なえは訝しげな細田の瞳を見せる。

言葉の後半は「冗談混じり」だ。

なえは高校時代からこつこつ「冗談めかした事をいう女の子だつた。

「なえちゃん……」

「なに?」

「なえちゃんは俺の同級生だつたんだろう?」

「おひ、私と過ごした至極の三年間を忘れたか? この恩知らず「至極がたまに地獄になる事もあつたけど……だつたらさ、もう美少女はいい加減に卒業しようね」

「……やだ、なえちゃんは永遠の少女だ」

「……まったく、変わらないなあ」

幸四郎は苦笑する。

思えば、なえと付き合っていた時は、こんなやり取りばかりしていた。

あまりベタベタとしていた記憶はない。

「話を戻す……とにかくあの女は私情で私を不採用にした可能性が高い、お前が採用面接をやり直せ」

「あのねえ……多少、狼狽えたのは確かにあの人らしくなかつたけど、なんで高音さんがなえちゃんを私情で不採用にしたかの理由が

わかんないよ

そう答えてから、牛丼を搔き込む幸四郎。

「わからんか？あの女はお前の彼女だつた私に嫉妬してんだぞ」「ふうつ！な……な、なえちゃんつ！？な、そんな訳ないだろ！あの人は親父の秘書なの、幾つ年上だと思つてんの！？」

幸四郎は思わず牛丼を豪快に吹いてしまったが、

「年齢が関係あるか

なえはため息をつきながら、備え付けの紙ナップキンを取り、幸四郎が汚してしまったテーブルの上をサッと拭ぐ。

「ありがと……まあ、年齢は関係ないよね」

なえに礼を言いながら、幸四郎は同意する、高音のそれを肯定するつもりはないが、高音よりも年上の百合乃が自分にまんざらでもない接し方をしてくれていいのを思い出したからだ。

「だろ？ だつたら……」

「でもダメ、俺はなえちゃんには店では働いてもらいたくはないよ、わかるだろ？俺が面接しても私情で落としちやうよ……それになえちゃんは知らないだろつけど、大問題が一つあるからね」

幸四郎は丼を置いて、なえを見つめた。

「……」

何も言わず見つめ返してくる小早川なえ。

黒髪のショートボブカットに少し細目の瞳。

均整の取れた体つき。

元々、学年でもトップレベルの可愛らしい娘であったが、今でもその頃の雰囲気を十分に残しつつ、綺麗になっている。

ユニークで変わった雰囲気の娘だった。

話していく退屈しない、そして、たまにこちらを焦りせる様な悪戯っぽい事を平気でいう所も変わっていない。

付き合っていた時は本当に愉しかった。

でも……彼女とは別れの時が来た。

別れたのには、幾つかの原因はあるかも知れないが、その大きな要因となつた事が今回、なえが元カノという以外で彼女を雇うのを幸四郎に躊躇させているのである。

「店には……くるみがいるんだ」

幸四郎は白状した。

「う言えば彼女は諦めてくれるだろ?」

「知ってるぞ、ホームページに出てた、お料理役メイドとか……気にしないから、お前が面接しろ、それで落ちたなら納得する」なえは平然と答える。

その視線はいたつて真面目で遊びがなかつた。

「知つてた? だつたら何で?」

「くるみは関係ない……後は面接しなきゃ話すつもりはない」

驚く幸四郎の問いになえはキッパリと言い放つ。

「……なえちゃん、相変わらずだなあ、なんだかんだで結局は言い出したワガママは通しちゃうんだもんな、じゃあダメ元かも知れないけど、俺が面接する」

後ろ頭を搔きながら苦笑する幸四郎。

「うん……今回のワガママは絶対通す」

そう言つて、微笑んでくる彼女に、

「ワガママが通用するのは面接するまでだよ」

幸四郎はそう釘を刺しつつも、普段は斜に構えているクセに、たまに見せる素直な微笑みがたまらなく好きだった高校時代を思い出していたのだった。

* * *

「じゃあ、面接するよ」

午後七時。

誰もいない事務所。

応接机を挟んで、なえと向かい合つ。

「……うん」

「じゃあさ……風俗店で働いた経験は？　あと男性経験とかはある程度ないと辛いかも」

幸四郎がなえの履歴書を手にしながら質問する。

「風俗店で働いた経験はない、男性経験は……高校時代付き合つた彼氏の後、2人、すぐに別れたけど、それで人数も判るだろ？」

「……そう」

なえの返答になるべく平静であるうと努める幸四郎、なえとは高校の終わりとともに別れてからは一切、会つてなかつた。

『2人の男と付き合つたのか……俺以外に2人の男がなえちゃんを……いやいや、いかん』

乱れそうになる心を落ち着かせ、手元にある履歴書を見つめる。何となくだつた。

小学、中学がどこであるか等はどうでもいいし、高校は同じ、その後は短大に進んだとは共通の友人から聞いていたので見なくてもいい所なのだ。

しかし、ふと職歴に目を止めるときを上げ、

「なえちゃん……！」を辞めてきたの？」

幸四郎は思わず尋ねてしまう。

そこにはある超の付く一流のIT企業の名前が書いてあつたのである。

「うん」

なえの返事はそれだけだつた。
次の職が決まるまで前職を辞めないで就職活動をするのは普通だが、履歴書には既に退職とある。

「こんな時勢に……」

「お前が帰ってきて、風俗店を始めるつて聞いて……辞めてきた……我慢できなかつた」

なえの真つ直ぐな視線。

いつもどこかふざけていて、何を考えているか判らない娘である。でも、たまに見せる素直な微笑みと同じくらい幸四郎が好きだつたのは彼女の真剣な眼差しだつた。

やると決めた時、なえは必ずやる娘だつた。

「あの時の事……後悔してゐる、あなたの傍にいるのを諦めた事を本当に後悔している」

なえは言つた。

「もう元には戻らない、でもどんな形でも、幸四郎の近くで……そう思つた」

「でも、ここは風俗で雇われるつて事は……」

「それでいい」

「なら、くるみみみたいに何かしらサポートの……」

「やだ……」

「なえちやん……」

幸四郎は言葉に口惑つてしまつ。

「でも俺はなえちゃんが風俗嬢として……」

「……プリンセスなんでしょう？」

「……えつ」

「プリンセス……！」この女の子はプリンセス、ホームページに書いてあつた」

なえは微笑む。

全てが吹き飛ぶ。

もう何を確認するつもりも無くなつた。

「なえちゃん……わかつた、もう余計な事は聞かないよ、じゃあ最終試験だから……おいで！」

幸四郎は我慢できずに立ち上がり、なえの手をグッと握りしめ、ソファーから立たせた。

* * *

「なえつ……なえつ」

「あつ……幸四郎、幸四郎つ」

二人は激しく身体を重ね、声を上げる。

「ん……んんつ」

「んぐう」

そして、何度も互いの口を塞ぐ。

「なん
だい?
歴史か
ーー?

いいよ……幸四郎、幸四郎がいっぱい……幸四郎がいいつ

強く抱き合ひ。

その重ね合いは全てが強く情熱的だつた。既にお互いに何度も絶頂を迎えていた。

「なえ、なえ、さうへいこいつ……もひ俺、我慢できない、またいへつ
「あつ……あつ……私もつ、幸四郎……もひつ、何回も感じつけいつ
「うつ

なえの甘い声。

それが更に幸四郎を興奮させ、なえを激しく求めてしまう。

「ああつ…………もうだめだ…………なええええつ！ 最後いくよ、沢山い
くよ！」

抱きしめ合ひ。

何度もかの絶頂を迎へ、幸四郎は悦楽の声を上げて、なえの中に強く熱くそれを大量に吐き出し、果てたのであった。

翌朝。

激しさを越えた脱力感を感じながらも幸四郎が身体をベッドから起こすと、なえはまだ隣でスヤスヤ寝ている。

「かわいい……」

乱れたショートボブカットを指で触り、

「参ったね」

と、ため息をつく。

「結局は君のワガママを聞いちゃいそうだ……プリンセス採用だよ
そう呟き、なえにそっとキスをすると、

「参ったか？」

彼女は戸田を開け、ニヤリと笑つてきたのだった。

こうして、十人目のプリンセス小早川なえがプリンセスオーラクションに誕生したのである。

第59話「それはおでいへのキス」

「変わった奴だつたなあ……年上にこんな事を言つのも何だけど」

オレンジジュースを飲み干し、氷をガリガリと噉む知世。

午後一時、駅近くのファミレス。

混雑時を過ぎて客の姿はまばらだ。

強めのクーラーの効いた店内は外の強い日差しを避けブラインドが閉められ、電気はちゃんと付いているがどこか薄暗い。

「小早川なえ……せんでしたつけ？ オーナーと同じ歳なんですよね？」

「なえちゃんだぞ、幸四郎坊つちやんの最終兵器、店のナンバー1ワン候補なんだぞ、ちなみに幸四郎坊つちやんの元カノにあたるぞー！ ……変な奴」

テーブルの上の300㌘ステーキを口に運ぶ志音の横で、みなみはそう言つて肩をすくめる。

「そう、そう……結構似てんじやん！」

「似てる？ ありがと、これで幸四郎に電話かけちゃおうか？」

「面白いな……やるか」

笑い合う知世とみなみ。

「イタズラ電話は良くないですよおー、オーナー困りますよ」

そんな一人を注意しつつも志音はフォークに刺した肉を口に運ぶ。

「だつてさ……急に昔の彼女つて、しゃしゃり出て来られたもわあ
、納得できると思うかよ！？ 少しは反省してもらわんと、元力
ノがいるなんて聞いてないしさ」

「そうそう」

口を尖らせる知世に、腕を組んで頷くみなみのだが、

「だつて……オーナーだつて高校時代もあつたんですから、付き合
つてた異性くらいいるんぢやないですか、知世さんやみなみさんも
そのルックで放つて置かれた訳でも無いでしょう？ そういう人
は得てして順を負わずにいきなり出て来るか、一度と会わないかど
ちらかでしょう？ それに……」

恋音はナイフとフォークを置いて顔を上げた。

「それに……？」

次の言葉を待つ知世とみなみ。

愚痴に対しても案外、恋音が食事を中断し真剣に対応したので、そ
の場の雰囲気は僅かに緊迫する。

「お二人はまだ、オーナーの過去に向き合つて程のじ関係ではないん
じやないですか？ 私ももちろんそうですが……」

恋音はそのため息をついたのだった。

「恋音ちゃん……」

「アツハツハ……所詮は元カノ、合わないから別れたんだろ？ ま

あ、私は気にしないぜ、トラブルは勘弁って事でさー。でも菜ノ花の奴見た？ なえにあからさまに嫌悪感バリバリの顔をしてんの、思いつきり睨んでたぜ

何か違和感のある空氣を振り払う様に、知世が豪快に笑う。

「悪口はダメですか、仲間なんですから~」

「悪口は言つてない、事実だつて！ ホントにオオテロから湯氣出でた」

恋音の注意に手を振る知世。

どうにも菜ノ花とはあまり相性が合わない様子のは、みなみと恋音も知つている。

「悪口になつちゃつてゐるじやないのよ~」

みなみは苦笑した後、

「私は菜ノ花ちゃんは見てなかつたけど……別にかなづり口ワイ顔してた娘を見ちやつた」

と、まるで秘密の怪談話をするよつてテーブルから身を乗り出す。

「ウチの番長のみなみが恐れるような口ワイ顔してたつて、誰だよ？」

「茶化さないでよ、誰が番長よ」

茶々をいれた知世にため息をつき、

「それが……くるみだつたんだよ、スゴい目して、なえちゃんを睨

んでた「

ヒソヒソ声でみなみは告げた。

「睨む？ あのホエホエくるみがあ？」
「ホントに睨んでたんですか？」

睨み付ける。

普段のくるみからは想像しがたい行為に、知世と恋音はそれぞれ
訝しげに疑問を投げかけたのだった。

＊＊＊

「入るね……」

早いノックの後、くるみは返事も聞かずに事務所のドアを開けて
きた。

夕方の事務所には幸四郎が一人。

おそらくそれが分かっているのだろう、幸四郎はそう感じた。

「どうした？」

事務仕事の手を休めて顔を上げた幸四郎。

「仕事中「ゴメン」ね」

短いツインテールの幼なじみは笑みを見せて、デスクトップパソコンの椅子に座った。

「よこっしょ！」

明るい声を上げて、回転式の椅子を何周かさせた後で、回転の惰性でゆっくりと幸四郎に向いたくるみは田を細めた。

「意地悪、またくるみの嫌な所、幸四郎ちゃんに見せなきゃいけないの？」

「くるみ……」

「どうなの？」

威圧感。

似つかわしくない服をくるみは田にまとつ。だが……幸四郎は立ち上がり、

「違ひと違ひ

くるみの頭に手を当てて笑った。

「あのわ、あの頃とはオレとなえりやんはもつ違つんだが」「幸四郎ちゃん……でも、そんな事言つて、またなえりやんと」

「付き合ひよ」

「幸四郎ちゃん……」

「くるみともな……」

「えー？」

くるみは意外な答えにさうこ顔を上げる。

「確かにあの時はオレはなえりやんと付き合つていたよ、でも今は

なえちゃんも元気ノつて言つてるだろ? これから付き合い方がどうなつてくるかはわからないけど……今は仲間、くるみやみんなと同じ仲間だと思つ

「なえちゃんはそつは思つてない……あの時別れたのは私のせいだつて、きつと思つてる」

「実際、そだろ? くるみのなえちゃんへの突っかかり方は尋常じゃなかつたんだぞ? もう覚えてないか?」

「覚えてるつ、そこまで子供じやないつ」

□元にわざかな笑みを見せた幸四郎に、くるみは頬を膨らませた。

「でもつ……あの時は、くるみも子供で、4つ上の2人が……もう私の追いつかない所まで行つちゃつたんじやないかと、もう仲良くできないつて……」

「俺となえちゃんがハツキリ付き合つまでは、くるみとなえちゃんも仲良かつたもんな……懐かしいよ」

幸四郎は背もたれに身体を預け、伸びをする。

そうである。

高校時代、なえと幸四郎が知り合つて、くるみはすぐに幸四郎を通してなえと仲良くなつたのだ。

3人で遊びに行つたり、幸四郎を抜いて、女の子同士の買い物に行つたりもしていた2人。

しかし、幸四郎となえが友人から彼氏、彼女の交際になるとくるみは次第に離れていき、ある日を境に激しい拒否反応すら見せるようになつたのだ。

幸四郎は2人の関係を上手く取り持とうとしたが無駄だった。顔を合わせると、くるみはまるで別人の様になえに牙を剥くのだ。

幸四郎はなえと恋人の付き合いをし、くるみとは幼なじみの付き合いを続けた、いつか3人でまた一緒に……と思い続けたのであるが、それは長くは続かなかつた。

ギクシャクするなえとの恋人関係。

そして、高校卒業間際。

なえから幸四郎に別れを告げてきたのだった。

「……なえちゃんが怖かった」

椅子に座つたくるみはポツリと呟いた。

「くるみ……」

「幸四郎ちゃんが誰かとどこかにこつちやうのが怖くて仕方なかつた」

くるみの瞳には大粒の涙が伝つ。

「そんな私のワガママで……幸四郎ちゃんを……なえちゃんと……だから……くるみは幸四郎ちゃんに必要にされたくて、これからは……これからはなるべく我慢しようつつて……でも、またなえちゃんと見てたら、不安になつちやつて」

「……」

幸四郎は泣きじゃくる幼なじみの女の子を抱き締める。

「幸四郎ちゃん……」

「くるみはオレの大切な女の子だ、もちろんえりちゃんと別の別れが辛かったのは確かだし、くるみに原因がないとは言わないよ、でもくるみがいつまでも傷ついてちゃダメだ」

抱き締めた幼なじみの身体は柔らかい。

見飽きた位に会っているのに初めての感触。

「いや……くるみが傷つくのは俺が嫌だ」

その丸めの可愛らしい瞳を見つめる。

「わかった

くるみは笑った。

「わかったよ、幸四郎ちゃん、なえちゃんもさつと幸四郎ちゃんの為に来たんだね、だから……くるみも前みたいにじやなくて、もつと頑張るね

「くるみ……」

明りかに無理はしている、してはいるがそれが幸四郎の望んだ態度。

くるみはそれを叶えようとしているのだ。

「初めはきっと上手くいかない、でもなえちゃんも」のお店のプリンセスだから、幸四郎ちゃんの夢だから……くるみはプリンセスの世話をするのが役目だから！」

くるみはまるで子供の様に泣き出した。

何も解決していない。

元力ノのなえとくるみの遣り切れない過去。

これからどうするのか？

何も解決はしていないが、幸四郎はくるみを抱き締めながら、

「いいんだ、俺はくるみがくるみらしくしてほしいんだよ」

と、ソッと幼なじみの額にキスをするのだった。

続く

第59話「それはおでいへのキス」（後書き）

次回からは第一部。
開店編となります。

ひとまず、ここまで御覧頂き感謝感謝です。

何かご要望、ご意見、ご批判あればお気軽に感想を頂けると幸いで
す。
活力になります。

第60話「主要登場人物紹介」

御神本幸四郎。
みかもとこうしろう

23歳

176?、70?

・本編の主人公で見かけ草食系男子。

かつて新大空町風俗界でトップの経営者であつた父を持つが、それを嫌い家を出てアルバイト生活を送っていたが、大王チーンの強引な経営に父親が倒れたと聞くと、原高音の召喚に応じて新大空町に帰り、父の意志を継ぎながらもオーネクション方式による自分独自の店舗経営を実行しようと、プリンセスオーネクションを開店する。

原高音。
はらたかね

33歳。

166?、54?

80・60・84

後頭部に団子に纏め、揉み上げを長く伸ばした黒髪、つり目切れ長の瞳に眼鏡に細身の身体。

・父の秘書、現在は幸四郎の経営の手助けをしている、風俗経営の経験豊かで手腕は周りから評価され、プリンセスオーネクションの実質的な経営の殆どは彼女の仕事の割合が大きい。

入来くるみ。
いりき

19歳。

154?、50?

89・59・86

黒髪に短めのツインテール、切り揃えた前髪、人懐っこい丸目の童顔だが、案外にグラマーナ身体。

・幸四郎の幼なじみ、プリンセスオーフショーンの調理兼雑用係。

普段からあまり物事を気にしないホエホエ娘と知世に言われていて、その通りの人格だが、幸四郎の元カノのなえには異様な拒否反応を示していた。

崎原みなみ。
さきばら
みなみ。

163?、56?

88-58-88

黒髪を首を隠すくらいまで伸ばしたショートカット、大きめのどんぐり目に可愛らしさと微妙な美しさが出始めた顔立ち。

・幸四郎が一番始めにスカウトした少女。

田舎育ちでケータイの扱いにも慣れていないが、姐御気質で面倒見が良く、斑鳩恋音と仲が良い、ある理由から店でナンバーワンを目指しており、目下ファーストプリンセス候補筆頭の御堂楓をライバル視している。

斑鳩恋音。
いかるが
れいん。

153?、41?

78-56-79

ほわつとした肩までかかる茶髪、二重の丸目に全体的に柔らかさを与える幼げな美少女。・みなみと同時に入店した少女、控え目な性格で守つて下さいオーラが出た美少女だが、たまにキツめの言葉が出来る。

身体は小さいが、無類の大食で普通の女の子が食べるようなスピードでモクモクと大量の食事を摂るが太らない。

男性経験は意外と豊富。

織田百合乃。

34歳。

165?、60?

99-63-90

黒髪のロングヘアを腰の辺りで巫女さん風に束ねている、瞳は切れ長だが柔和な表情が多く、美人というより可愛らしい。

・プリンセスオーラクション最年長のお姉さんキャラ、推定エカツプのバストに年齢からは考えられない可愛らしさと若さでフレオーブンではナンバーワンの座に輝く、性格は極めて温厚で幸四郎に対しうはほのかな気持ちを持っている様子。

小寺まゆり。

154?、43?

76-58-78

黒髪のショートカット、パツチリした一重の瞳に明るい表情。

・一人称が僕の健康系少女、ハキハキした性格で気が強い面もあり、喜怒哀楽に感情表現がストレートである、タツノリというウリ坊を飼っている。

斑鳩恋音とはあまり気が合わない様子だが、みなみとは合づらしい。

御堂楓。

166?、54?

90-57-87

後頭部で大きくアップにした茶髪、瞳は大きめの一重瞼、高いレベルのパツツの揃った顔立ちにナイスボディーの美少女。

・高音が連れてきた店のナンバー1ワン候補。

元々、モデルをしながら有名芸能人を相手にして多額の報酬を得ていたが、彼女から高音にプリンセスオーラクション入りを志願したらしい。

プライドは高いが、意外と庶民的で親しみやすい一面も持つ。
仕事には厳しい。

遠藤知世。
えんどう ちせ

152?、42?

77-54-76

茶髪のセミロングに側頭部からリボンで縛ったツインテールを横に伸ばしている、丸い瞳に幼い顔立ちの美少女。

・元アイドル、パートナーの才能に負け放蕩しクビになつた経歴を持つ。

お調子者的一面もあるが、基本的には頭も回り面倒見もいい。
人に自分を魅せる技術は楓をも驚かせる。

幸四郎にもズバズバ物を言つが、案外に気に入つてゐようだ。

天城 佐久耶。
あまき さくや

159?、55?

92-59-89

黒髪にミニティアムヘア、ドングリ眼のカワイイ系、巫女服が好き。
・神洋島という離島から出稼ぎに来た少女、あらう事かまゆりを危機に陥れる二人目のボクつ娘。

基本的には温厚ないい娘だが、たまに暴走気味になる。

自分のプロポーションには自信があり、巫女服の胸元を開けての罰当たりなアピールもする。

近衛菜ノ花。このえ なのはな

22歳。

162?、52?

86-56-88

カチューシャで髪を上げて、額にさり気なく数筋垂らした黒髪セミロング、全体的にレベルの高い容姿にプロポーション。

・基本的には落ち着いたお淑やかな性格だが、時折気が強い面も見せ、知世と気が合わない、綺麗な高低の声色を持つ。

幸四郎にもかなりの好意を寄せ、個人的な関係を持つた事もある。

久川愛日。ひさかわ まなび

151?、48?

95-55-87

薄い茶色のセミロング、適当に切り揃えられた前髪は太い眉毛、左側側頭部にだけ付けたピンク色のリボン、瞳は少々つり目の形良く整つた二重。

綺麗に通つた鼻筋にちょうど良くあつらえた様な薄くもなく、太くもないピンク色の唇。

・紹介所の職員相川が一目見て直ぐさま幸四郎に推薦してきた程の美少女、時代掛かった喋り方をする優しい性格とノカップの爆乳の持ち主。

小早川なえ

23歳

160?、53?

84-59-85

黒髪のショートボブカット、強気そうなやや切れ長の瞳、突出し

た所は無いが非常に整つた容姿。

・幸四郎の高校時代の彼女、くるみとの強い確執もあり卒業時に別れたが、プリンセスオーフショウ開店を聞きつけ、再び幸四郎に会う為にプリンセスになる。

普段はかなりの変わり者で飄々とした性格。

大西

・新大空町風俗情報誌「トップガール」の記者、高音の古くからの知り合い。

相川

・新大空町風俗店組合紹介所の職員、幸四郎と仲が良い。

第61話「出勤するよー」

「よくねたあー、いよこよ今日かあー

パジャマ姿の彼女はベッドにあぐらをかき、両手を上に伸びをする。

午後2時。

部屋は心地よいクーラーの涼しさ。

それなしではそろそろ毎晩の寝苦しい季節になつてきていた。

「確かに6時に寝たよね、よし、あつあつ8時間寝、11の時間サイクルにもなれないと……」

彼女はそう言いながら、一階の自分の部屋から一階に降り、シャワールームに入った。

「ふう~

ぬるめのシャワーを浴びて、脱衣場で白の下着姿で歯磨きを済まし、髪型を整える。

前髪をすいてから揃え、セミロングヘアの黒髪を後頭部左右にそれぞれ小さめのツインテールにピンクのゴムの髪留めで結ぶ。

「ん~、よしー。」

左右のバランスを見て、何度かの修正をしてニッコリ笑顔を浮か

べる。

そして、彼女は短めのキャミソールにショートジーンズに着替え居間に向かった。

「おはよー、つて……もう3時近くなんだけどね、くぬみ

「これからはこれくらいの時間が基本ですよ、5時までに店に行くつもりなんで、あなたの娘にしてはえらい早起きなんですよ」

夕食の準備までの間、ひと休みをしていたのだろう、ソファーに座つてテレビを観ていた母親の入来紫月が振り返ってきたので、くぬみはそう答えて、ピースサイン。

「調子のいい、遅刻とかして幸四郎ちゃんを困らせたしあやダメよ

紫月はクスリと笑う。

薄く縁がかったミニディアムヘヤーが似合つ落ち着いた美人。くぬみはバフツとお尻から、母親の隣に向かってソファーに座り込む。

「頑張るッ

「ご飯いいの？ 今から簡単で良ければ……」

「平気、たくさん、ポテトとかを仕込まないといけないし、味加減みるのでパクつていっちゃうから、食べていくと入らない

「口う口う……」

「へへ、少しだよ、少しくらいこなら幸四郎ちゃんもこいつで……

舌を出すへるみ。

「もつ……くるみが役に立たなかつたら、お母さんが幸四郎ちゃんに頼んで雇つてもらひちやうから！ メイド服着るんでしょ？」

「ヤメレ、ヤメレ……おばけやんヤメレ」

「だ、誰がおばちゃんよつ……これでもお母さんはまだ四十よつ……」

「の生意氣娘つ」

紫月はソファーの隣に座る娘にゲシゲシと蹴りを放つ。

「やつたな、年増……脚を出すとは無謀な、若い脚と比べるつもつ
かつ」

「やりいでか、そのボヨボヨ大根脚には負けんわ、これでもお母さんは胸から脚への曲線は自信があんのよ、あんたがお母さんにかかるのは脚の太さだけでしょ！」

「残念でした、胸のカップも追いついています！ カップ一緒なら、張りがちゅいますよ、張りが！」

「何を～、生意氣娘！」

調子よく言い合つて、ソファーの上でゲシゲシと蹴り合ひの紫月とくるみ。

紫月は美人系で顔立ちはくるみとは親子でも普段は似ていながら、その互いを見合つ笑顔はソックリであった。

「行つて来ま～す」
「幸四郎ちゃんに宜しくね、くるみで足りなかつたらすぐこ紫月お

姉さんが助けに行く、って伝えて

「うん、紫月オバチャンがそう言つてたって伝えておくねー。」

「さつさとこけつ！」

「あはははは……」

午後5時。

くるみは母に送り出されて、家の玄関を走り出る。プリンセスオーラクションまでは歩いて30分位、開店時間の午後8時前に料理の準備やミーティングなどもあるが、大分余裕を見た出勤だ。

「幸四郎ちゃんとか、高音さんはもつと早く来てるだろ? うなあ」

そんな事を呟きながら繁華街に出る。

新大空町に適用される特別風営法では、風俗店の営業時間には基本的な制限は無い。

プリンセスオーラクションでは午後8時から午前4時までの8時間が営業時間であり、他の店も多くが似たような時間なので……

「スゴい、周りが綺麗なお姉さんだらけだ」

周りを歩く女の子達をキヨロキヨロと見渡してしまひぐるみ。

「新大空町名物、綺麗なお姉さん達の大行列！ 雑誌やテレビにも出た事があるんだよね」

地元なのだから知らない訳では無かつたが、実際にそんな時間に風俗街のメインストリートに来る事などなかつたのだ。

「スゴい……スゴいよ」

興奮して、ギャラリー状態のくるみだが、ふと何かに気付いた様に、

「あつ……もう私もその中の一人じゃん

と、咳くとそのお姉さん達に何となく付いて歩き始めたのだった。

「モタモタしちゃったかな？　でも、まだ平氣か

6時10分前。

お姉さん達の流れに乗つて店舗の近くまでやつて来て、携帯電話で時間を確認する。

開店前のミーティングは7時半からだが、調理担当のくるみには副次的な物で量は大したことないとしても、簡単な料理の仕込みの仕事があるのだ。

「早く行つて揃はしないよね、仕込みはパツと済ましちゃつて、みんなのルームメイキングの手伝いでもしよう！」

そんな独り言を言いながら、店の見える通りに入ったのだが……

「ん～！？　な、な、な……なあ～？」

くるみは目の前の予想外の異変に、ツインテール童顔案外巨乳美少女といつ自称？　にあるまじき声を上げてしまったのだ。

そこには……明らかに開いていない店の前に立っている十数名の男性の列があつたのである。

続く

第62話「フレゼンファンプロマイド」

「うわあ、すでにお客様が待ってるとはー。」

くるみはそう咳き、一回近くの路地にサッと身を隠して、様子を伺う。

並んでいるのは十数人。

スーツに身を包んだサラリーマン風の者もいれば、私服の者もいる、全体的に年齢は二十代から三十代といった感じだ。

「……思わず隠れちゃったけど、でも何でオーフショット形式のウチにお客さんが並ぶんだろ?」

「先着順にプレゼントと書いてありました、おそらくそれでありますね」

「うわあつー?」

路地裏から覗き込み行列を不思議がるが、独り言に背後から答えられ、くるみは驚き振り返る。

そこに立っていたのは久川愛口。

フレオーブン後に入店したプリンセスだ。

薄い茶色の髪のセミロング、切り揃えた前髪に左側頭部に付けたピンクのリボン。

太い眉毛にややつり眼の瞳に綺麗に通つた鼻筋から薄めの唇。

一見、田舎の純朴娘の雰囲気を感じるが、その顔立ちのレベルは高く、美女、美少女揃いが自慢のプリンセスオーフショットでも、ホームページで彼女を掲載するやいなや彼女のルックスを絶賛し、中には、

「フレオーブンでは隠されていた最終美少女秘密兵器キター」などと、書き込む者もいた程だ。

彼女が異性を引き付けるのはアイドル並みの顔立ちもそうだが、150?少しの間に巨乳グラビアモデルも真っ青なノカップのバストを持つプロポーションも大きな一因だ。

「ああ、愛日ちゃんかあ、おどろいたなあ……行列だよ、行列……先着順プレゼントって何だっけ?」

「プレゼントは確か高音殿もくるみ殿も入れた十一人の生写真セットだったかと……それがあるにせよ、この暑い中、開店のこんな前に待ついてくれるのはうれしいかぎりです、隠れてもかえつて失礼、きちんと挨拶をしながら入店いたしませぬか?」

愛日が笑顔でそう提案してくる。

「写真セツト……ああ、この間、幸四郎ちゃんがみんなの所を『デジカメ持つて回つてたな、後で恋音ちゃんにデジカメプリントしてもらうつて言つてた、くるみはそれだけの為にメイド服に着替えたんだよね」

愛日の答えに、くるみはブーツと頬を膨らませた微妙な顔をしてみせる。

正直、愛日とはあまり絡みがまだないのだが、そういう顔をみせてしまうのがくるみの人懐っこいのだ。

「サービス精神に溢れたオーナーらしい仕事ですか」「そうだね」

膨れつ面をすぐに笑顔に変えるくるみ。

愛田の言ひ通りである。

「じゃ……！」と隠れでこらのも何だし、愛田ちゃんが言ひ通りに
ちゃんと挨拶してこりつー。」「御意ー。」

くぬみが歩き出すと、愛田ちゃんに続いた。

「あれ？ あの娘」「ええつと……ホームページにいたよね？」「メイドのくぬみ嬢に、新しく加わった愛田嬢だ、勉強不足だぞ、貴様」「今から出勤かあ」

くぬみと愛田に気が付くと行列の男子達は口々に話す。

「ええつと…… ほんばんわあ」「ほんばんわ、 本日はこのような時間からかたじかのいざこまする」

少しギクシャクしてしまつくるみこ、スッと頭を下げる愛田。

「かわいい！ 断然、実物の方がイケてる」「二人ともかわいい」「くぬみちゃんもプロポーションいいけど、愛田ちゃんがすげえ」

行列が沸く。

「またね~」

「中で待つておつまする」「お仕事頑張ってね、くるみちゃんのお料理も頼むからね!」

「愛田ちゃん、絶対に競り落とすよ、ボクと楽しい時間過ごさう」

「愛田ちゃんはオレだよ、今日はもう決めてきたんだからー。」

手を振りながら、店の裏に回つていいく愛田とくるみは声援を受けながら店に入る。

「ふう~、な、なんか……くるみの事まで知つてるし、すごい熱気だつたね」

「そうですね、でも良さそうなお客様でござりましたね」

店内に入り息をつき、笑い合つ一人。

「おっ、くるみに愛田ちゃん、早いな、お早う」

そこに声をかけてきたのは幸四郎だ、手には小さな段ボールを持つている。

「こん……つて、お早う、幸四郎ちゃん! お外見た? 見たあ?」

「お外?」

「そうでござります、お客様が行列をつくつておられまますよ」

くるみの言葉に首を傾げた幸四郎に、外を指で差す愛田。

「そりなんだ、じつちの準備で氣が付かなかつたよ、これが効いてるかな?」

「これ？」

「ああ……恋愛小説のプリントアウトしてもいいつもりだったけど、枚数があるから結局は写真館の岡林さんに頼んだんだよ、そしたら凄くサービスしてくれたから十一枚一組が数えきれないくらいあるんだ」

「ああ……それがプレゼントのプロマイドなんだ、それだけあれば先着順とか関係ないよね」

「そうだなあ」

「ううむ。幸四郎。

「なにばオーナー、そのプロマイドなのですが……」

そんな様子のぐぬみと幸四郎に、田舎町を離れていた様に手を叩いた。

続く

「じゃあ……みんな、いよいよだよ」

午後7時45分。

幸四郎は高音と並び、ホールに並んだ女の子達を見渡した。
幸四郎は舞台から皆に檄を飛ばせば? と、くるみから提案を受けていたがそれはせずに皆と同じホールに立っている。

「伝えてある登場順番はハッキリ言つて始めだし、オレは皆がメインだと思うから始めはくじ引きに近い形で決めたんだ、これからは色々見て変わっていくだろ? けどね」

「プレオープンがあつたじゃありませんか、それは参考にならいいの?」

幸四郎の言葉に赤いガウンにスリッパといつかなりラフな格好の楓が質問をしてくる。

いつもならアップにしている茶髪もストレートに下ろし、それはそれで魅力的だ。

だがもちろん、その姿で舞台に立つ訳ではない、登場順が後半の彼女は登場までのタイムテーブルを計算して、これから入浴をするのだろう。

10人のオーケションの後半のプリンセスはまだ舞台で魅せる服に着替えるには早いのだ。

「ああ……もちろん、全く無視するつもりはないけど、君達はこれからが勝負なんだ、高音さんが好意的な常連さんを集めてきたプレオープンと今日のお客様は同じじゃない、それを覚えていてほしい

し、今日からが本当のスタートだとおもつてほしいからね
「なるほど……まあ、そのうち盛り上がるメインはわたくしが連續
で努めさせて頂きますわ」

楓は笑みを浮かべる。

「頼もしいね、で……登場順番が4番より後ろの頼みがあるんだ」

足元に置いたプロマイドが入った段ボールを出しながら、
「先着順20人に配る君達のプロマイドセット……実は後の順番の
女の子に開店何日か限定で入店してきたお客様に手渡してほしいん
だよ」

と、幸四郎はプリンセス達に告げたのである。

「え！？ それは困りますわよ……こつちは準備にはかなり時間が
かかるんですわよ！？」

「良いんじゃない？ 入店してきたお客様に渡すだけなら何分も
かかる事じゃないんだし」

楓は抗議するが、ピンクのワンピース姿の知世は後ろ頭に両手を
回しながら言つ。

彼女もまだ舞台上に上がる服は着ていない、登場順が遅い組だ。

「ち……知世さん？ わたくし達はキッチンと魅せる時に魅せれば良
いんじやありませんか？ 何でもかんでも出ればいいという物では
ありませんわ、店ではプリンセスなんですよ」

「何でもかんでもなんて言つてねえよ」

反論する楓に知世は答える。

「プリンセスだって言つたつて、そういう付加価値はお客が決めてくれる物だ、ちゃんと出るとこ出で、アピールしなきやな、近い存在を好む客は多いよ」

「普段、近くない物を求めるから安いお金を払う方もいますわ」

楓と知世。

仕事への意識の高い2人の意見はどちらも頷ける部分があり、周囲の者は簡単には口出しできない雰囲気があった。

静まるホール。

「そうだな……いいよ」

幸四郎は顎に手を当けて頷く。

「頼んでおいてなんだけどさ、楓ちゃんの言つ事も知世ちゃんが言う事も理解できる、プリンセスというだけあるからね、普段には手の届かない部分があつてこそお客様が大切なお金を出すのだし、知世ちゃんが言つように親近感を感じるプリンセスに会いたいと思って、常連になつてくれる人もいるだらうからね」

そこまで言つと幸四郎はみんなを見渡して、

「4番より前のプリンセスには準備の関係で辞退してもいいんだ……」

…4番より後のプリンセスは自由参加で入店してきたお客様先着20名にプロマイドプレゼントをして欲しい、ここはみんなに任せるよ、してもしなくてオッケーって事、もちろん俺や高音さんは自由参加にした以上はこの活動でみんなを評価したりはしないから

と、続けたのである。

「いらっしゃいませ！」

ホールに入ってきた客に頭を下げるタキシード姿の幸四郎。胸には店長のバッジを付けている。

それに倣うのはカジノディーラーを思わせる格好の高音に、メイド服のくるみだ。

そして……

「いらっしゃいませ！」

黄色い声を合わせて、客達を出迎えるのは知世、愛日、佐久耶、みなみの4人である。

「かわいいな！」

「はい、早くから並んでくれてありがとうございます、ボクたちがかなりエロチックに頑張ったプロマイドをプレゼントするのです！」

普段着のラフな格好のニーヤける三十代の密に笑顔を見せて、プロマイドを差し出す巫女服の佐久耶。

「コレがほしかったんだよ、君達はそこのアイドルグループ真っ青のルックスだからね、マジうれしいよお、価値あるよー。」

「ネットで売り払つたら叩き殺すのです」

「あははは……売る訳がないよお」

佐久耶と楽しげに会話を交わし、密は嬉しそうにホールに入った。

「君、カワイイね」

「ありがとう」さつます、これは先着順の方に差し上げておりますプロマイドになります、どうかお納め下さー」

若い密に愛田は笑顔で両手でプロマイドを手に差し出す。

「かわいいしゃ、フレポーション……めむやくむやスゲー！ オレは君に持ち金全部いくよ」

「ありがとう」さつます、さああ、プロマイドをもらひの方もどうぞ」

別の密に声をかけられ、そつちに愛田はプロマイドを差し出す。

また、知世は手慣れた感じで密にスマイルを見せてプロマイドを渡し、慣れない様子だが、みなみと恋音もそれぞれに密とハイハイケーションを取りながらプロマイドをプレゼントして、好評を得ている様子である。

「坊っちゃん……自由参加、構わないんですか？ 女の子同士は何か溝になるか分かりませんよ」

プリンセス達に迎えられてホールに入つていく客を見ながら呟く高音。

「多少は覚悟してますよ、競争してくれないと困る部分はありますしね」

幸四郎は答える。

「それに、プリンセスにはどう魅せれば良いかを自分で摸索してほしいです、楓ちゃんみたいなやり方もあると思います、その正解は個々で違いますからね」

「自分のプロデュースは自分でしろと？」

高音の問に幸四郎は頷く。

「ええ……もちろん出来る限りの手助けはしますが、そうなります……どにしろ最後はお客様と一対一、お客様と2時間過ぐすのは自分なんですから」

「素人娘達に坊っちゃんは案外厳しい」

「その素人娘が本物のプリンセスになれるなら、採用面接もそうでしたが、俺は案外、彼女達に厳しいかもしません」

そう言って複雑な笑みを浮かべる幸四郎。

少しの間、だけ幸四郎を見つめた後、

「あなたはやはり会長に似ています」

高音は口元を緩めながら告げたのだった。

続く

第64話「予想してましたよ」

「高音さん…… 本日はよつ」そプリンセスオーラクションオープニングのめでたい日にお越し下さいました、これから登場する美姫達の登場前にむさ苦しい男の挨拶は済ませておきます、私はオーナーの御神本と申します」

幸四郎が舞台上から照明の暗いホールに挨拶を始める。

「本店の田指すのはお客様に至福の2時間を過ぐ」していただく事のみです、そして……その時間を一緒に共有する為、プリンセスはきっと素敵な笑顔を皆様に見せてくれると信じています、とうぞ存分に楽ししまれて下さい！ それでは」

そう緊張気味に早口を抑えながら言つと、大きめの拍手が起こり、幸四郎はそれに対し、一礼して舞台を去ると入れ代わりに高音が現れた。

「高音さん！」
「かわいいつ」
「百万だよ！」

オーラクションの登場でオーラクションの開始を察した客が沸く。ホームページで知ったのか高音の名前を呼ぶ声も聞こえる。

「声援ありがとうございます、初めてまして私は当オーラクションのオーラクションに務めます高音といいます、それでは早速ですが、プ

「プリンセスオーラクションの説明をさせていただきます、それぞれのお客様にお配りした番号の付いたブザーを確認ください、……」

マイクを片手にオーラクションの説明を始める高音。
システム 자체はブレオープンから変わらないシステムで、落札金額を告げてボタンを押し、それを高音が大型モニターを見ながら確認するのである。

客にもボタンを押してもらい、自分の番号がちゃんと表示されると試す時間も取り、支払いのシステムも説明する。

「それでは……プリンセスオーラクション開店です、選りすぐりのプリンセスと素敵な時間を過ごされるお客様はどなたでしょうか？
いよいよ開店ファーストプリンセスの登場です！」

高音の声が響く。

「（）登場願いましょう！ プリンセスオーラクション、最初のプリンセスは……近衛菜ノ花姫ですっ！」

高音のゴール。

舞台には白を基調にしたドレスに身を包んだ菜ノ花が現れる。
前髪を上げた銀のカチューシャには頭冠を模した飾りが付く。
手袋から靴も白のプリンセスルック、ダテ眼鏡も今日は外している。

「オオツ、という歓声がホールに響く。

「それでは……皆さん、初登場なのでプリンセス菜ノ花ちゃんのマ
ル秘データ付きプロフィールをモニターでご確認下さい！」

高音が大型モニターを指差す。

客の視点がそれを追う。

モニターには菜ノ花を撮った動画と共にスリーサイズ等、年齢そ
の他もちろんのデータが表示される、マル秘データと言つには物足
りないがアイドルの紹介／みみたいな物だ。

「皆さん……菜ノ花ちゃんのデータは観てもらいましたか？ 本デ
ータはプリンセスオーディションが自信を持って送り出すプリンセス、
一切の誇張、捏造はありません、見て下さい、このベストプロポー
ション！」

高音の派手な紹介と共にライトを浴びせられた菜ノ花は照れ笑い。

「菜ノ花ちゃん、巨乳で可愛いぞっ」

その仕草が妙に可愛らしく、客が拍手する。

「皆様、私みたいな素人にご声援、ありがとうございます……」

ペ「リと頭を下げる菜ノ花。

実際に聞いてもマイクを通して響く良い声だ。

「菜ノ花といいます、自分でも大好きな名前です、ぜひ皆様に名前
だけでも覚えてもらいたいですね……素敵な時間を一緒に過ごせま
すように、楽しみにしています」

白い手袋でマイクを持ち上品に挨拶する菜ノ花にやんやの喝采が浴びせられる、いい空気だ。

「あ……では、プリンセスオーディション開店、ファーストプリンセス菜ノ花ちゃんとお部屋で過ごす権利は誰の手に? オーディション開始です、まずは五千円からスタート!」

高音は高らかにオーディションの開始を告げたのだった。

「では……3人目のプリンセス、まゆり姫と過ごす権利は2番のお客様が一万三千円で落札されました、どうぞ!」

「えっと……どのお客さんかな? 僕の方から行くからねえ」

高音がホールすると、赤のドレスのまゆりは舞台上から自分を落札してくれた客を探す。

「ダレ? 誰?」

暗めのホールだ。

キヨロキヨロするまゆり、元気

「僕だよ!」

スース姿の青年が舞台の近くまでまゆりに向かい、手を降ると、

「わあ……ありがとう! じゃあ、僕をしっかり受けとめて!」

まゆりは舞台上で赤いヒールを脱ぎ、彼に向かつて身を躍らせたのだ。

「まゆりちゃん、元氣いいなあ……じゃじゃ馬姫って感じだな」「坊っちゃん……」

そんな様子を舞台袖から見ている幸四郎。そこに高音が神妙な様子で声をかけてくる。

「どうしました？」

「菜ノ花さん、百合乃さん、まゆりさんの三人まで終わりましたが……落札金額がふるいません」

田を細める高音。

オーディションが始まり、ここまで3人のプリンセスが登場しているが、落札金額が三万円を越えてこないのである。

ムードは悪くない、客も楽しそうであるし、ここまで3人のプリンセスの評判は上々だ。

金額だけが低迷しているのである。

「高音さん……」

心配を隠さない高音の幸四郎は微笑む。

「予想しました

「えつ？」

予想外の答えに声を上げてしまつた高音は慌てて舞台を振り返るが、まだ舞台下でまゆりと客が騒いでいるのを確認して、幸四郎に振り返る。

「まさか……順番？　あの3人が伸びないのは織り込み済みと？」
「違う、違う……菜ノ花ちゃん達に随分と失礼だな、順番はミーティングで言つた通り勘みたいなもんですよ」

幸四郎は苦笑してから、高音を見据えた。

「こ」の間は高音さんの連れてきたお客様がグループの新しい門出を祝つての高音さんの知り合い、常連のお客様だったでしょ？　今日は違います、ホームページや情報誌、口コミなどのまだ少ない情報で来てるお客様なんですから……一人つきりの部屋で女の子が何をしてくれるか、自分が何が出来るかが解らないんですよ、それに大切なお金を競り合つんです」

「ええ……」

「それでこの金額を出させる決心をさせているここまでの3人は第一印象で男子にお金を出させているといつ点で十分な合格点なんです、御祝儀の落札金額は要りません……これから先にリピーターのお客様や評判を聞いた客に落札金額を伸ばしてもらえる店を目指してます」

「そうですね、坊っちゃん……私とした事が開店始めに焦りました」

幸四郎の答えには頷く高音。
そこには……

「まだ？」

少しどぽけた声が割り入つてくる。

黒髪のショートボブカットの彼女、小早川なえだ。幸四郎は彼女の顔を見つめてしまつ。

「なえちゃん……本当に……」

「それ以上は言わない方がいいぞ、せつかくオーナーらしい事、言つたばかりなんだからさ」

複雑な表情を隠さない幸四郎。

だが、なえは特に感慨もない声で、そう叫び、

「まあ……高音さん、いいホール頼むわ、あと早くして……この格好はかなりあちいからね……まあ、コレもプリンセスと言えばプリンセスか、それとも何かの罰ゲームかい？」

と、口元を緩めるのであつた。

続く

第65話「気にした事もない」

「プリンセスなえちゃんの登場です、本オープンに先立ちプリンセスオーラクションに新しく加わってくれたプリンセスです」

「おまたせ皆の衆」

高音のマイクに心え、しゃしづとなえが舞台上に軽く右手を上げながら姿を現すと客達は声を上げる。

なえの格好は煌びやかな着物。

黒髪ショートボブカットの美しい彼女はその着物が驚く程に似合っていたのである。

「今日のなえちゃんは和のプリンセス、どうしちゃうか？見事でしゃつ、似合つてしまでしゃつ~」

「似合つと似え」

「じゅうり、お客様にプリンセスが何ですか」

「なえ姫はじゅうりキャラだ……でもベッドの上でまめやまめやや従順……」

「じゅうり、じゅうりー。」

マイクの高音と少し飄々として惚けたなえとの掛け合いで客が笑う。

「いかん？ なえちゃんは物事をコンドームで包むのが苦手で……」

「それを言つならオブラーーー。それにコンドームは大切です、ちゃんと包んでトセーー。」

「なにを？」

「えつ？」

「だからわ……なにをコンドームで包むんだい？」

「えつとお……や、それはですねえ」

赤面する高音。

客からは笑こと高音にカワイイと呟ぶ声が飛ぶ。

「とひ、ともかく……コンドームは大切ですっ！」

「わかったよ、年頃のオバサンがコンドーム呟ぶんじ
やないよ」

「うぐうううう」

歯を食い縛る高音に再び起る笑い。

「わい……高音ちやんのN女チックを見せるのは終わっこして……
者ども、なえちやんと素敵な時間を過ごす権利を争え」

なえは高音のマイクを取りホールを指差す。

「な……なえちやん」

複雑な気持ちにならざるを得ない状況なのは否定できないが、舞台袖の幸四郎は以前と変わらぬ彼女の性格に苦笑を禁じ得ないのであつた。

「じやあ」

なえと一緒に過ごす権利を競り落としたビジネスマン風の男から、

落札金額の精算を終えると彼女はレジの幸四郎に手を上げた。

「ああ……うん」

なんと答えていいか解らない。
元カノが自分のオーナーの店で密と一入つきりで2時間を過します
のだ。

「な……」

「三万五千、今のところ最高落札金額だな」

名前を呼びかけた所になえが幸四郎に耳打ちをしてくる。

「……まあ

確かにそりだが、迷いを見せる幸四郎。

「……だつたら少しば嬉しがれ、せつかくお金を出してくれたお客様
に感謝してみせる、私は店の大切なプリンセスじゃないのか？ こ
れが知世とかでもそんなしょぼくれんのか？」

「なえ……ちゃん？」

あくまでも耳打ち。

後ろで幸四郎となえのやり取りを待つ密には聞こえない声だが、
そのなえの声には力があった。

「……その程度でおわづへ覚悟なり……」

「なえちゃん！」

それを遮つて、なえを見つめ、

「さあ……なえ姫、素敵な時間を過ごしてきてください、お客様をお待たせしたいけないですよ……お客様も失礼しました」

幸四郎は後ろに立つ姫に頭を下げる。

そして、ほんの刹那、皿を合わせた二人。

なえは満足気な笑みを浮かべてから、

「ああ……なえちゃんワールドへようこそ、ハマると抜けられんぞお」

そう言いながら客の腕を取り幸四郎にウインクしてから一階への階段を上がっていくのであった。

＊＊＊

「初々しくて可愛かったよ……顔もプロポーションも抜群だし最高、また落札しなきやね」「お世辞上手いんだあ」

ベッドの上。

名前も知らない相手との激しい交わりの後。

そう声をかけられた崎原みなみは全裸で寝転がる青年に、自分も

同じ状態で身体を預ける。

「お世辞じゃないよ、みなみちゃんの常連になるからさあ」

「ホント?」

頭を胸元に抱き寄せられると、みなみはわざといらしゃべりでみせた。

「ホントだつて……」

「ありがと」

みなみは一ツコリ笑うが部屋の置き時計がピピッと軽く鳴ると、何かを思い出した様に顔を上げた。

「お姫さん……時間、そろそろ服着ないと」

「延長つて……?」

「ウチは無いんだ、始めからキッカリ2時間」

「そつかあ」

青年は名残惜しそうにベッドに座り、財布から一万円をみなみに出す。

「えつ?」

「チップだよ、予想以上に可愛かつたからね」

「チップかあ……う~ん、ちゃんとオーフショーンしてもらつたのに

……貰つちゃつていいのかなあ

「どつときなよ、これは俺の気持ちなんだから」

悩むみなみに青年は苦笑した。

「普通、悩まないぜ」

「いやあ……じゃあむりっとくね」

シーツで胸元を隠しながら、みなみは出された札を受け取った。

「じゃ……プリンセスルックはすぐに着れないけど……お見送り、バスタオル姿でいい?」

頬を赤らめるみなみ。

「もちろん! それの方が好みだよ」

「もうっ、それじゃプリンセスルックの意味が無くなっちゃうよー。」

名も知らぬ客の笑顔にみなみはそう赤らめた頬をふくらませるのだった。

部屋から手を振り客を見送ると、みなみはTシャツにショートパンツ姿に着替えて衣裳を脇に抱え、一階に降りていく。

「みなみちゃんが見送ったお客様が本日の最後のお客様だよ」

一階に降りたレジに居たのは幸四郎。

さつきの客の青年の追加注文の精算を終えた所で待っていたのだ

ら。

「そつか……もう朝方なんだ……」

「そうだよ、今日はみなみちゃんは頑張ったね、みなみちゃんのお

客様、後の精算の時、みんな満足そうだったよ

「……そつか」

幸四郎の言葉に、みなみは息をもらしながら笑みを浮かべた。

「相手名前も知らないけどね」

少しの間。

「シンデレラ……」

幸四郎はポツリと呟く。

「なに？ いきなり」

「いや……みなみちゃんはシンデレラの王子様の名前知ってる？」

「……ふ~ん」

幸四郎の問いにみなみは口元を緩め肩をすくめる。

「知らないよ、気にした事もない」

窓の暗闇が少しづつ明るみ始めていた。

続く

第66話「チーズケーキの種類は豊富です」

「開店して一週間、来店客数はかなりの物で好評です、お客様の反応も悪くないです……ホームページにも各プリンセスにファンがいるみたいです」

「良い事ですね」

高音の言葉に幸四郎は満足気に頷く。

「しかし……」

優秀な秘書でもあり、現在マネージャーの立場でもある彼女の表情には冴えがなく重い。

「しかし……？」

「坊っちゃんも気付いているでしょう、お店の売上の事です」

「売り上げ？」

「早い話が……このプリンセスと部屋で過ごす権利の落札金額が期待ほどではないです」

「期待ほどではない？」

「そうでしょう」

高音はそう言いながらファイルを手に取った。

「マメな彼女はそれぞれのプリンセスの落札金額を細かに把握している。

「ほぼ全員がプレオープンから3割から4割減といった感じです、期待の楓さんや知世ちゃんにしてもプレオープンからすれば低調と言つてもいいでしょ」

眼鏡を右手の中指で直し深刻まではいかないが表情を曇らせる高音。

だが、それを受けた幸四郎の顔は打って変わっての笑顔。

「平気です、今は皆が初めての事をしてゐるんです、もちろん俺や高音さんも含めてね……」

軽くウインクをして、幸四郎は立ち上がる。

「坊っちゃん……お店というものは開店からひと月が勝負なんです、ここで売り上げを伸ばせないよつだと先が心配になります」

「高音さん……」

「違いますか?」

高音はファイルから眼鏡越しの細い視線を幸四郎に向ける。だが一代目の坊っちゃんは、

「高音さんも平気つて根拠は見ていますよ、本当に大丈夫です、まずはオレ達がプリンセスを信じないと始まりませんよ」

そう答えると、コンビニにお匂いを買いにいつてきます、と彼女に手を振りながら事務所を軽い足取りで出て行ってしまいます。

「……たまに全然、訳が解らなくして相手を煙に巻く所も似てるんですから」

一人残された事務所で高音は咳き、応接用のソファーに背中から

身を委ねるのであつた。

「百合乃さんの部屋、チーズケーキだつてさ、一つでいいらしいよ」

「一つはいいけど、どれ？ チーズケーキには種類あるんだよ」

「あんのかよつ？」

厨房に向かつて受けた注文を告げる知世だったが、メイド姿のくるみに聞き返されると声を上げる。

「あるよ、まずはベイクドチーズケーキ、あとはレアチーズケーキでブルーベリー、ピーチ、パイン……案外に美味しいのがパッション！」

「なんでそんなに種類あるんだよ、チーズケーキなんか1つだらうが！？」

「世の中は知世ちゃんみたく単純ではない、くるみとしては更にスマートチーズケーキもメニューに載せたいとか思つてる」

くるみのまるで一流のパーティションの様に演技がかつた表情。

「どうでもいいよ、どうせメイド喫茶宜しく百合乃さんにあ～ん、とかしてもららうんだよ……私だったら、私にも奢つてえ、とおねだりして店の売り上げに貢献するけどね」

「お密さん全員におねだりしてたら太らない？ プリンセスなんだから体型には気をつけないと」

「それもそうか……あたしとくるみお密さんはあんまり料理とらない

なあ、開店してここまで一番お料理の注文をお客さんさせてる

営業ガールは誰だ？」

「恋音ちゃん」

「ああ……」

くぬみの即答。

知世はやつぱりかあ、とでも言ひたげな顔をした。

「ダントツだよ、恋音ちゃんはお客様さんが来る度に毎回夕飯食べてんの？ ってレベル、もちろんやんなに派手に一回では食べないけど毎回だからね」

「まさかお客様さんも次の客とも同じように食べるとほおもわないのでつなか、アイツちやつかり食費浮かして悪女だな」

「ヤ一ヤしながら腕を組む知世。

「でも楓ちゃんもよく高いお酒も入れてるみたい、くぬみはお酒は関わってないからよく知らないけど」

「あいつも実益兼ねてんだろ？ でもちやつかりやつてもお客様さんが納得して出してるなら良いんだし」

「そういう物なんだよね」

「多分、そういう物だよ、私だつて始めたばかりなんだぞ」

「ふーん」

見合づ二人。

「あつ……チーズケーキだよ！？」

「そりだよ、早く出せよ……丘乃とお客様さん待つててるだろー。」

「だから何のチーズケーキなのー？」

「何でもいいだろー めんどくさいから…… そのキュアベリーチー

ズケーキとかいうのでいいよ。」

「そんなのない！」

ボケか何だか解らない知世にくるみは苦笑した。

「はい、はい、百合乃さんの部屋にチーズケーキの注文だよ、道を開ける〜」

「知世ちゃん、何してんのさ？」

プラスチックケースを被せたチーズケーキを乗せた皿を持つ知世と階段で通り過ぎた幸四郎は彼女を呼び止める。

「ああ……くるみが色々と忙しいみたいでさ、私は出番がまだ先だからちょっと手伝ってたんだ」

「……そうか、俺や高音さんも立て込んでるからね、ありがとう」

幸四郎は微笑む。

本来なら彼女の仕事ではない、高音なら何というか分からないが、素直に知世に感謝する。

「いいつて……落札金額が思つより低いんだろ？ 高音がぼやいてる、つてみんな気にしてた、人を雇うのもお金かかるし、やれる事は皆がやる……売れてない時代はあたしもアイツと何でもやつたよ、ミニコンサーの準備とか、会場設営の手伝いとか……つて、売れてない今まであたしはアイドル辞めたから売れてない時代という言い方はおかしいな」

知世の笑顔。

「知世ちゃん……」

プリンセスである彼女にそういう『氣』を回させてしまっているのが『氣』が引けるが、それ以上に知世の気遣いが嬉しい。

彼女はアイドル時代に解雇になる過ちは犯したが、苦労もたくさんしたのだ、アイツと言うのは当時のアイドルユニットのパートナーだらう。

「知世ちゃん……」

階段の途中で止まり、知世を見つめ、もう一度名前を呼ぶ。

「行つていい？ 遅れてるんだ、百合乃が文句いわれるかも」「うん……」

そうは答えながらも幸四郎は彼女の頭にポンと手を置く。

「え……？」

驚く知世。

「大丈夫……君達は絶対にこの街で一番愛される女の子達になれる……いや、俺がしてみせる」

幸四郎が告げると、

「……そつやいいや」

知世は驚いた顔を落ち着いた笑みに変えるのだった。

続く

第67話「泣かしちゃつたあー!？」

「参りました……まさか、こんなになるとは」

スポットライトを浴びる舞台を袖から見て、そう呟いた高音。

「でしょ？ でも言いましたよね？ きっと大丈夫だつて……」

高音と一緒に舞台を覗く幸四郎は口元を緩めた。

プリンセスオーディション開店一ヶ月を迎えた週末……ホールは明かりを強くしなければすぐにぶつかってしまつ程に客で埋まり、一種特殊な雰囲気が漂つていたのである。

もちろん、開店以来の最高客数。

「これなら……」

「そうです、自ずとオーディションは盛り上がり、盛り上がりは落札金額に直結します」

頷く幸四郎。

「確かに……確かに前兆がまったく無かつたとは言いませんが……」

高音は綺麗な形の顎に手を当てる。

前兆はあつた。

開店から一ヶ月の店の売上げは期待程では無かつたが、ホールの客数はわずかずつだが増加をたどり、オーディション自体の熱もオーケショニアを務める高音は感じてはいたのだ。

「確かに、確かにホールとお客様の雰囲気は悪くなかったです、で

も……」

「高音さんくらいならここまで感じていたのなら十分なんじゃないですか？」

幸四郎は自信に溢れた顔を見せた。

「ウチの女の子はまた一人きりで会いたい、また一人で時間を過ごしたい、って思わせるのに十分な魅力があるんですよ」

「リピーターという事ですか！」

「当りです」

リピーター、繰り返し店に来てくれる客。

風俗店ではそれを掴むのが生き残りを分ける鍵。

決して安くない風俗店では一人の客は月に何度も来てはくれないが、月に一度だけでも繰り返し来てくれる客が強い経営の味方になるのである。

その為の必須な事はサービスと女の子の質だ。

「何よりも大切なのはですね……またこの娘に会いたい、って思える女の子が居るって事ですよ……そうすれば……」

幸四郎はそう言つてウインクする。

「ですね、そうすれば何もしなくても……」

敢えて幸四郎が言わなかつた先の言葉。

それは解つてゐる高音も言わずに口を緩める。

そう、プリンセス達と時間を過ごしたい者達が集まれば……

自ずと高音が問題としていた落札金額の問題は解決する。

それがオークションというシステムの最大の長所なのだから。

「予定通りスタートいきます……うわあつ！」

舞台の裏の小さな控え室を覗き込んだ幸四郎は声を上げそうになるが、それを自分の手で抑えた。

別に控えていたプリンセスの着替え中だった訳でもない、彼女は大人しく座っているだけだつた。

そして、上げてしまつた声は驚愕ではなく感嘆。

「わかりました、こちらは準備出来てますよ」

椅子に座つたままで微笑む一人の美女。

そこには男なら感嘆を禁じ得ない程に美しいプリンセスがいた。まるで古代ローマ時代の王妃を思わせる白の布を使ったドレス。頭には草の冠。

丶の字に開けられた首筋から胸元のデザインが豊かなでは陳腐な表現と言つていい胸の見事な谷間を魅せている。

「スプレ婆からの物なのだろう、足元もそれらしいサンダルだ。

「ゆ、百合乃さん……すゞく似合つてゐつ、か、かわいい
「もつ……」

素直な感想を漏らしてしまつ幸四郎に百合乃是苦笑する。

「これは今日の最高金額、最初の百合乃さんで決まりやつかも」

「うふふつ、幸四郎さんはお世辞上手いです」

「こやこや……お世辞抜き、お世辞抜きで……本当に可愛っこですよ」

笑顔を浮かべる幸四郎。

「嬉しいです」

百合乃は立ち上がり、寄つてみると幸四郎の頬に軽くキスをしてきた。

「ゆ……百合乃さん？」

「幸四郎さん……」

赤面する百合乃。

数秒モジモジする仕草の後、彼女は顔を上げて幸四郎を見つめ、「ええっと……もし、もしですよ、私が今日のお店落札金額のトップになつたら……そうしたら今度の日曜日……私と、私と『デート』してくれますか?」

と、切り出す。

「『デート』?」

「はい……お願いします、そのどちらか今日のプリンセスのお仕事は手を抜いたりしません! あくまでも『デート』はプライベートの事で……その」

瞳を逸らし赤面したまま少しまづく百合乃。

だが、幸四郎は少しの間の後……ん~、と唸つてから答える。

「凄く嬉しいんですけど……百合乃さんはこれからプリンセスとしての大切な仕事がありますからね、お客様が待つてますから、そちらに集中して下さい、それに落札金額の事を何か賭ける対象みたいには……出来ないですよ」

「え……！？」

「百合乃さん……後で俺から話があります、そろそろ出番ですよ？」「え……す、すいませんでした」

意外な返事。

百合乃は声を詰まらせたが、すでに舞台上に出ていた高音からの呼び出しがかかり、幸四郎から促されたのでうわの空ではあるが、舞台に進み出るのだった。

「またいらしてください、待つてますから」

「うんっ、百合乃さん可愛くてサイコーだったよ、今度は一週間ほどイギリストに出張するから何かお土産買つてくるよー」

夜明け前の店の裏口。

両手を下げて前で組み、丁寧にお辞儀して帰りを見送る百合乃に、三十代のスース姿の青年は上機嫌で彼女に笑う。

「いいですよ、お仕事上手くいかれて、無事にお帰りくださいれば……」

「……」

そう言つて小首を傾げて微笑む百合乃。

「ゆ……百合乃さん、わ、わかりましたあ、頑張つてきてまた必ず百合乃さんと過ごす権利を絶対に競り落としますっ」

何かの感情に震える青年は奇妙な言葉遣いをして、百合乃に手を振りながら、薄い闇の街に飲み込まれていく。

「ふう……」

振り返す手を上げたままのため息。

「どうしたのよ？　本田のナンバーワンがため息をつこちやつて？　えつ？」

そこに立っていたのは崎原みなみだ。

首を隠すくらいの黒髪のショートカット、ドングリ目のかわいらしい印象の強い同僚である。

「みなみさん……」

「今日のトップは自信があつたのに！　って、楓も悔しがつてたわよ、でも今日はみんなスゴかったね……で、その中でもトップの百合乃さんが一体どうしたのよ？」

みなみもこの裏口まで客を見送ったのだろう。

別段、決まりではないからプリンセスによるが、裏口までの見送りは結構行われていて、その中でもみなみは高い確率でそれをしているらしい。

「表情暗いし、お客様さんと何かあった？」

人懐っこい瞳を向けてくるみなみ。

みなみは百合乃より一回り以上年下のだが、こういう姐御肌であり、それがなければ百合乃自体、ここで働いてないかもしれなかつた。

「いえ……大丈夫です」

「大丈夫じゃない、百合乃さんはすぐに顔に出るから解るのっ！」

うつむく百合乃の肩をみなみは両手で掴む。

「何か嫌な事があつたら相談に乗るって！ 遠慮しないで言つてよ

真顔のみなみが細めた瞳を合わせると、

「私が……私がいけなかつたんです」

百合乃は少しづつ唇を噛み締め、涙を流してすすり泣き始めた。

続く

第68話 「また泣かしちゃつたあーーー？」

「幸四郎ーーー」

「えつ？」

夜明けの陽射しが差し込む事務所。
仕事終わりのミーティングに行こうと椅子から腰を上げた幸四郎
は突如、名前を呼ばれ棒立つになる。

「みなみちゃん？」

「なあにが……みなみちゃんよ、百合乃さんによく酷い事を言つたくせ
につーーー」

ただ事ではないと、今日の売り上げを計算していた高音が立ち上
がるが遅かった、事務所には乾いた音が響く。

「あんたね！ 田舎乃さんがアンタの為に頑張つてゐるのに何考えて
んのよー！」

みなみは高音を無視して怒鳴り散らす。

「えつ……あつ」

「あつ……じやないわよ、信じりやんない！ なんのその態度ーーー？」

丂び手を上げるみなみ。

「止めなさいーーー。百合乃さんがビリでかしたんですか、みなみさ
ん、訳を話なさい、訳をーーー！」

高音が幸四郎とみなみの間に立つ。

「どうしたあ？ スゴい声聞こえたぞ？ ハーティング無いなら帰つてもいいのかよ？」

睨み合ひ高音とみなみ、そこに顔を出してきたのは知世だ。

「良いといひにきた、聞いてよ知世、幸四郎がね！」

素直に高音に話すのがばかられたのか、みなみは知世に向かって振り返るのであった。

「ん~、なるほど……幸四郎がねえ~」

みなみの話を聞いた知世は腕を組む。

高音も机に手を付き、それを聞いていた。

「百合乃さんがせっかく頑張つたんだから、デートの申し出ぐらい受けたあればいいのよ~」

「いや……だからさ」

「その意見には納得行きませんね」

熱くなるみなみに返答しようとする幸四郎、だが高音が細い眼鏡のフレームを直しながら、彼女に向かつて冷たい視線を送る。

「坊つちやんのプライベートです、仕事を頑張つたんだから、デー

トに連れていくてくれなんていう条件は間尺に合いませんね、矛盾しています」

「なるほどな……わかるよ、わかる、仕事とプライベートが混同すると面倒臭いぜ、ファンにプライベートで声かけられるのは困る時あるからなあ」

高音の言葉に対し知世は頷く。

「何が矛盾しているよ、女の子はねえ、頑張ったご褒美が欲しい事もあるのよ、仕事を頑張って、仕事面でしかお返しが無かつたらやる気なくなるわよ！」

「そもそも、頑張ったご褒美欲しい時もある、女の子は男の子とは違うんだなあ、これが！」

強く反抗するのみ。

うんうん、知世は首を縦に振る。

「な……知世さん！？」

「一体、どっちの味方なのよっ！」

知世の不可解な態度に高音とみなみはまるで示し合わせた様に彼女を睨む。

だが、知世はそれを待つていましたとも言わんばかりにニヤつ

く。

「別にどっちがどうでもいいだろ？ そんな話
「知世！」

みなみはぶつかりぽつに言い放つ知世を思いつきり睨むが、

「だつてなあ、百合乃と幸四郎がそれで喧嘩しているのならともかく、みなみと高音が言い合つてゐるのには意味がないしな……」
「うのは当人同士の認識の問題で他の人間がどうこういつつ事じやねえ、と思つんだけだな」

「ぐつー!?

知世の反論に思わず詰まつてしまつ。

「……た、たしかに」

高音も複雑な表情ながら納得の態度で、ずれてもいなあうつ眼鏡を右手の中指で上げている。

「で……でも、データ断られて、それで仕事の後で呼び出されてるなんて言つたら、氣の弱い百合乃さんじや不安にもなるわよ、公私混同を叱られるんじやないかと思つわよ」

詰まつた状態から、どうにか口を開くみなみだが、

「で? それで幸四郎に文句を言つてきてくれ、つて百合乃に頼まれた訳? みなみが何とかして、つて言われたのかよ?」

すかさず知世に突つ込まれると、

「や、やうじやないよ、結構無理無理に聞きました、始めは言いたく無やうだつたし……」

みなみは罵の悪そうに顔を逸らす。

「ならこれは……百合乃と幸四郎の問題だな、高音もみなみもいわ

ゆる横槍つて奴、男と女に横槍が入つて口クな事にならないのは常識だな」

知世が腕を組みながら、高音とみなみを見た。

「……ですね、店の事に直接に影響が出ないのであれば、坊っちゃんのプライベートを私は尊重します」

「ま、まあ、でも……百合乃さん、スッゴく落ち込んでるんだからね」

知世の言葉に、高音は無理矢理に冷静さを保ち、みなみはまだ半分納得はいかなそうな、互いに複雑ながらも、口論の鞘は収めた様子だ。

「と、言つて……」

知世は視線を幸四郎に向ける。

「ありがとう、知世ちゃん……」

みなみと高音に黙りきってしまった様子の幸四郎は案外に明るい笑みを知世に見せ、

「みなみちゃん、後で来るよに百合乃さんを呼び出したのは叱る為じゃない、でも誤解させる様な言い方をしたのは俺が悪かつたからね、百合乃さんの誤解を解いてくる」

と、みなみに告げ事務所のドアを開けた。

「坊っちゃん、ミーティングは、今日は止めておきますか?」

「そんなにかかるないです、みんなにはいつもより一、二分遅れるつて伝えておいてください」

声をかけた高音にそう返事をすると、幸四郎は廊下に駆け出していくのであった。

「あの様子じゃ、百合乃には悪いよ。はなうないんじゃねえかな？」

「多分ね、どうやら私の暴走だったかな？『ごめんね、高音さん』」

「まったくです、でも貴女が謝る相手は坊っちゃんですよ」

「そうだね、後で謝らなきや……」「

幸四郎が立ち去った後の事務室。

三人はそれぞれ言葉を交わす。

「しかし、百合乃も大人しい振りしてやるよな、幸四郎と幾つ離れてると思つてんだよ？ 頑張るなあ

腰に手を当て、ほほえましく笑う知世。

「百合乃さんに年齢なんて関係ないんじゃない？ スッゴく可愛いもん」

みなみはそう答えてから、意味深な笑みで知世を見据える。

「それより知世は幸四郎と気が合つみたいだけ、いいの？ 百合

乃さんとトークをしかやつて？」

「……なつ？ あたしが幸四郎とー？」

みなみの思わず奇襲に知世は赤面する。

「そう言えば、知世さんは坊っちゃんが個人的にスカウトしてきたんですね、随分と一人で仲良くされたみたいですが、ボヤボヤしてたら、百合乃さんに取られちゃいますよ」

「ば、ばかっ！ あたしが百合乃に負ける訳……ち、ちがつ」

「あーっ、そうなんだあ！？ 知世は幸四郎を信じてるんだあ、健気、健気」

畳み掛けた高音に、思わず答えてしまった知世、みなみは拍手する。

「みなみーい、アタシだつて知つてんだぞ、幸四郎との秘密の営業練習、とやら結構頻繁らしいじゃねえかよ！ 最近は恋音を誘わずに昼間つから一人つきりでしつぽりと……」

「あー、あー、あー、あれ、あれはねえ……まだ経験があ……」

真っ赤になりながらの知世の逆襲。
みなみも耳まで真っ赤になる。

「まつたく……坊っちゃんにも困つたものです」

真っ赤になりながら、喧々囂々に言い合いを始めた知世とみなみを見ながら、高音は右手で顔を覆いながらため息を付いたのであった。

「百合乃さん」

ミーティングの終わった後、みなみは百合乃に声をかける。

「はい」

振り返った百合乃。

彼女の頬には涙の跡が見えるが、先ほどまでは違う安堵が感じられる。

「幸四郎……あれから何か言つてきた?」

「ええ……」

みなみの問いに對して、百合乃は嬉しそうに「クリと頷く。

「プリンセスとプライベートはキチンと分けてほしいから、売り上げナンバーワンの」褒美で「デートは出来ないけど……」

「出来ないけど……?」

説明が止まる百合乃。

みなみが反芻して先を訊くと、百合乃は涙声になりながら、

「出来ないけど……プライベートで私とのデートはしたいから、つてデートに誘つてくれました」

と、數十年前とはまったく違つ涙を浮かべた感情を見せた。

「そりかあ、良かつた……デート楽しんでね」

そう百合乃を祝福しながらも、みなみは高音に言われた時はそのまま
しなければ、と思ったのだが、暴走し頬を叩いた事を謝るのは止め
ようと決めたのだった。

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3591p/>

プリンセスオーケーション！

2011年10月7日03時39分発行